天草市文化財調査報告書　第２集

棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡

２００９年

熊本県天草市教育委員会

序　文

本書は、天草を代表する中世城跡「棚底城跡」の調査について、主な成果をまとめた報告書です。

戦国時代の天草地方は、俗に天草五人衆と呼ばれる領主たちが、島内を分割して治めていました。宣教師ルイス＝フロイスによる『日本史』には、16世紀後半頃の天草について「その地は五人の殿に分割され、彼らがそれを所有している」と記されており、五人の殿とは、天草・志岐・上津浦・栖本・大矢野の五氏のことを指します。彼らは大きな軍事・生産基盤を持たない島の領主であるため、菊池・相良・大友・島津等の大勢力との友好関係をその時々に柔軟に選択し、戦国時代を生き抜きました。この柔軟性は、信仰にもあらわれ、戦国時代の終わりごろには、五氏全てがキリシタンに改宗します。このため、海に隔てられた天草の島でキリシタンの思想と文化が領民に深く浸透し、後に発生する天草島原の乱の下地となりました。

棚底城跡は、五氏のうち、上島に勢力を持っていた上津浦氏と栖本氏がさかんに取り合った要の城として、相良氏家老が残した文書『八代日記』に記録が残っています。1544年から1565年頃まで繰り返された、棚底城をめぐる一連の抗争は中世文献が少ない天草の中世史上で重要な出来事です。両氏とも、肥後南部に勢力を持つ相良氏との緊密な連絡関係を維持しようとし、棚底城跡はそのために不可欠な存在でした。

平成14年度から天草郡倉岳町が3年間かけて行なった発掘調査の結果、城跡を形作る8つの曲輪全郭で岩盤を掘り込む多数の柱穴群が見つかり、熊本県下に類を見ない貴重な城郭であるとの評価を受けました。中世の茶の湯道具や碁石など生き生きとした城内での生活を物語る遺物が発見され、特に数多く出土している中国産陶磁器や14、15世紀頃の稀少なベトナム産陶磁器は、海上交易を積極的に推進した城主の存在を浮かび上がらせてくれます。

天草市教育委員会では、平成18年3月の市町合併後から、旧倉岳町で行なわれてきた城跡の調査事業を引き継ぎ、菩提寺とされる大権寺遺跡の発掘調査等さらなる研究を進めてまいりました。今回の報告書には、大権寺遺跡の調査報告や各分野の専門家による考察編を盛り込み、棚底城跡が持つ歴史的価値の新たな一面を明らかにできたと確信しております。

今後、棚底城跡を市民にとっての重要な地域財産として長く後世に継承するために保存を図り、また将来は地域の大事な歴史を現地で実感的に学習できる空間として整備していきたいと考えております。本書がその第一弾として、学術研究などの資料として活用され、また広く文化財に対する理解の一助となることを願います。

おわりに、調査の実施、指導、また本書の刊行につきまして多大のご協力をいただいた関係者、関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

天草市教育委員会 教育長　　岡部　紀夫

例　言

1．本書は、熊本県天草市倉岳町に所在する棚底城跡及びその関連史跡の主な調査成果を総括した報告書である。
2．棚底城跡の発掘調査については、平成 14 年度～16 年度まで旧倉岳町教育委員会により実施している。本報告書においてもその概要を掲載したが、報告内容の詳細については既刊の『棚底城跡』（2005 年）『棚底城跡Ⅱ』（2006 年）を参照願いたい。大権寺遺跡は棚底城跡の関連遺跡として平成 18 年度～20 年度にかけて天草市教育委員会で発掘調査を実施した。その報告は本書に所収している。
3．執筆分担については、第Ⅲ章第１～３節及び第５節を歳川喜三生（文化課切支丹館管理係）が、第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章第７、８節、第Ⅳ章・第Ⅴ章・第Ⅶ章を中山圭（文化課文化財保護係）が執筆した。第Ⅵ章考察編については学術検討委員及び専門調査員にご執筆いただいた。第Ⅲ章第４、６節については『棚底城跡』『棚底城跡Ⅱ』における西島眞理子氏の玉稿を再掲させていただいた。
4．第Ⅲ章第７節掲載の石積実測は、C1-2、C3-4 を除き、㈱九州文化財研究所に委託した。
5．大権寺周辺・浦地区家久栄周辺の航空写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
6．石塔墨書の赤外線撮影は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7．棚底城跡の報告に係る図版・写真は、原則として既刊報告書のものを再利用したが、必要に応じて遺物写真等は一部新規に作成・撮影した。大権寺遺跡における遺構実測図作成・写真撮影は中山が主に行い、文化課文化財保護係主査松本博幸の助力を得た。大権寺遺跡出土遺物の実測及び遺物写真撮影は中山が行なった。図版のトレースは Illustrator CS を用い、泉あかね、吉田さおり、中山が主に行なった。
8．陶磁器の分類は、青磁について上田秀夫「14～16 世紀の青磁碗の分類について」、白磁について森田勉「14～16 世紀の白磁の分類と編年」、青花について小野正敏「15・16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」（いずれも『貿易陶磁研究№２』1982　貿易陶磁研究会）を参照した。
9．編集は天草市教育委員会文化課において中山が行なった。

目　次

第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(１)
第２節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(２)

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　棚底城跡・大権寺遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・(５)
第２節　中世天草の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(７)
第３節　天草の中世城跡の分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(９)

第Ⅲ章　棚底城跡発掘調査の成果
第１節　縄張りについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(12)
第２節　測量調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(12)
第３節　Ⅰ郭発掘調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(22)
第４節　Ⅰ郭検出の掘立柱建物について　西島眞理子・・・・・・・・・・・・・・・・・(33)
第５節　Ⅱ郭～Ⅷ郭発掘調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(40)
第６節　Ⅱ郭～Ⅷ郭の柱穴群について　西島眞理子・・・・・・・・・・・・・・・・・・(42)
第７節　城跡の石積について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(49)
第８節　出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(53)

第Ⅳ章　大権寺遺跡発掘調査の成果
第１節　発掘調査成果について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(83)
第２節　出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(96)
第３節　石塔群の特徴について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(103)

第Ⅴ章　棚底城周辺関連史跡について
第１節　「城山」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(109)
第２節　藤河栫について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(109)

第Ⅵ章　考察編
『棚底城跡の構造』　鶴嶋　俊彦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(113)
『出土陶磁器と棚底城』　小野　正敏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(127)
『戦国期棚底城の歴史的位置』　稲葉　継陽・・・・・・・・・・・・・・・・・(131)
『大権寺の石塔について』　前川　清一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(139)
『大権寺石塔の紀年銘』　服部　英雄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(149)

第Ⅶ章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(152)

写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(159)

挿図目次

第１図　天草市位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（6）
第２図　棚底城跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（6）
第３図　周辺遺跡配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（7）
第４図　天草の中世城跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（11）
第５図　棚底城跡周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（13）
第６図　棚底城跡周辺地形図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（14）
第７図　棚底城跡全体測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（15）
第８図　棚底城跡測量図①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（16）
第９図　棚底城跡測量図②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（18）
第10図　棚底城跡測量図③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（19）
第11図　棚底城跡測量図④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（21）
第12図　Ⅰ郭測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（24）
第13図　〔Ⅰa〕〔Ⅰc〕遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（25）
第14図　〔Ⅰc〕検出の構造物跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（26）
第15図　〔Ⅰa〕柱穴側壁の拓影①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（27）
第16図　〔Ⅰa〕柱穴側壁の拓影②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（28）
第17図　〔Ⅰa〕柱穴側壁の拓影③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（29）
第18図　Ⅰ郭直下三重横堀測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（31）
第19図　横堀トレンチ実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（32）
第20図　〔Ⅰa〕検出の掘立柱建物Ａ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（34）
第21図　〔Ⅰa〕検出の掘立柱建物Ｂ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（35）
第22図　〔Ⅰa〕検出の掘立柱建物Ｂ’・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（37）
第23図　『匠明』昔六間七間ノ主殿之図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（38）
第24図　熊本城加藤平左衛門屋敷御広間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（38）
第25図　Ⅱ～Ⅷ郭トレンチ・石積実測ポイント配置図・・・・・・・・・・・・・・（39）
第26図　Ⅱ郭トレンチ設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（41）
第27図　Ⅱ郭－aトレンチ　建物復元ライン（推定）・・・・・・・・・・・・・・（42）
第28図　Ⅱ郭－bトレンチ　建物復元ライン（推定）・・・・・・・・・・・・・・（43）
第29図　Ⅱ郭－a・bトレンチ柱穴検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・（44）
第30図　Ⅲ郭トレンチ設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（45）
第31図　Ⅳ郭トレンチ設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（46）
第32図　Ⅴ～Ⅶ郭トレンチ設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（47）
第33図　Ⅷ郭トレンチ設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（48）
第34図　石積実測図①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（51）
第35図　石積実測図②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（52）
第36図　石積実測図③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（53）
第37図　棚底城跡出土遺物実測図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（54）
第38図　棚底城跡出土遺物実測図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（55）
第39図　棚底城跡出土遺物実測図（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（56）
第40図　棚底城跡出土遺物実測図（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（58）
第41図　棚底城跡出土遺物実測図（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（59）

第 42 図　棚底城跡出土遺物実測図（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(61)
第 43 図　棚底城跡出土遺物実測図（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(62)
第 44 図　棚底城跡出土遺物実測図（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(63)
第 45 図　棚底城跡出土遺物実測図（９）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(63)
第 46 図　棚底城跡出土遺物実測図（10）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(63)
第 47 図　棚底城跡出土遺物実測図（11）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(64)
第 48 図　棚底城跡出土遺物実測図（12）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(65)
第 49 図　棚底城跡出土遺物実測図　風炉（13）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(66)
第 50 図　棚底城跡出土遺物実測図（14）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(67)
第 51 図　棚底城跡出土遺物実測図（15）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(68)
第 52 図　棚底城跡出土遺物実測図（16）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(70)
第 53 図　棚底城跡出土遺物実測図（17）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(70)
第 54 図　棚底城跡出土遺物実測図（18）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(72)
第 55 図　棚底城跡出土遺物実測図（19）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(73)
第 56 図　棚底城跡出土遺物実測図（20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(74)
第 57 図　棚底城跡出土遺物実測図（21）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(74)
第 58 図　棚底城跡出土遺物実測図（22）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(74)
第 59 図　棚底城跡出土遺物実測図（23）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(75)
第 60 図　棚底城跡出土遺物実測図　ひき臼（24）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(76)
第 61 図　棚底城跡出土遺物実測図　ひき臼（25）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(77)
第 62 図　棚底城跡出土遺物実測図　砥石（26）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(77)
第 63 図　棚底城跡出土遺物実測図（27）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(79)
第 64 図　出土遺物組成グラフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(81)
第 65 図　大権寺遺跡周辺地形図（第１次調査トレンチ配置図）・地形断面図・・・・・・・(84)
第 66 図　Ａ１・Ａ３・Ａ４トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(85)
第 67 図　Ａ２トレンチ平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(86)
第 68 図　Ａ５トレンチ平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(87)
第 69 図　大権寺遺跡第２次調査トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(89)
第 70 図　Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３トレンチ平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(90)
第 71 図　Ｂ４-５トレンチ平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(91)
第 72 図　Ｂ４-５トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(92)
第 73 図　SS01 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(94)
第 74 図　Ｂ６トレンチ平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(95)
第 75 図　大権寺遺跡Ａ１、Ａ２tr 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(97)
第 76 図　大権寺遺跡Ａ３～５、Ｂ１～３tr 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・(98)
第 77 図　(大権寺遺跡) Ｂ４-５tr出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(100)
第 78 図　(大権寺遺跡) Ｂ４-５、Ｂ６tr出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・(102)
第 79 図　大権寺古塔群主要石造物拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(104)
第 80 図　『道海禅』銘基礎座拓影・『金』銘火輪拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・(105)
第 81 図　雲文猪目文宝塔拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(108)
第 82 図　棚底城跡関連地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(110)
第 83 図　旧倉岳町字界図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(110)

第84図　藤河栫比定地周辺地形図（字　家久栄）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(111)
第85図　棚底城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(119)
第86図　宮田城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(120)
第87図　名桐城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(121)
第88図　教良木城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(122)
第89図　内野河内城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(123)
第90図　上津浦城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(124)
第91図　湯浦新城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(125)
第92図　久米新城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(125)
第93図　岩野城跡縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(126)
第94図　永里城跡中腹部縄張り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(126)
第95図　陶磁器変遷と棚底城模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(130)
第96図　年号入り石塔拓図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(146)
第97図　「年」の部分拓図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(148)
第98図　関連遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(154)
第99図　『海東諸国記』日本国西海道九州之図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(154)

表目次

表A　A建物跡　柱穴計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(36)
表B　B建物跡　柱穴計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(36)
表C　B'建物跡　柱穴計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(36)
表D　土師質土器法量数値表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(57)
表E　被熱遺物点数表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(80)
表F　棚底城跡・大権寺遺跡出土遺物点数表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(82)
表G　大権寺石塔　部材別点数表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(103)
表H　戦国期天草郡関係史料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(137)

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

旧天草郡倉岳町では、町史編纂事業の一環として、平成14年度から中世城跡・棚底城の測量調査と発掘調査に取り組んできた。当初は縄張り把握のための測量調査を中心に事業を実施し、遺構の残存状況を確認するために、主郭（Ⅰ郭）の一部でトレンチ調査を行った。この際に、岩盤を鑿状工具で掘り込んで成形した柱穴・杭穴が多数検出され、遺構の存在が確認された。

岩盤を掘り込む柱穴遺構について、調査指導にあたられた熊本県教育庁の大田幸博氏により「熊本県下の中世城跡で極めて珍しい貴重な例」と評価された。これにより、倉岳町では調査体制を見直し、測量調査と並行して本格的な発掘調査を行って、城跡の全容解明に取り組むことになった。発掘調査は平成16年度まで実施し、Ⅰ郭を全域調査、Ⅱ～Ⅷ郭をトレンチによる確認調査としている。

調査の結果、すべての曲輪において岩盤を掘削した遺構が検出された。全域にわたって軟質の岩盤を有効的に加工利用した城郭として固有の特徴を備えている。曲輪全体が調査されたⅠ郭では、数多くの柱穴が見られ、繰り返し掘立柱建物が営まれたことが調査結果から判明した。また調査区南側には、20本前後の杭穴が５列に配列された遺構が検出され舞台状の建造物があったと想定されている。

出土遺物は概ね14世紀から16世紀に及ぶが、一般の中世城跡に比べ青磁・白磁・青花の貿易陶磁の比率が多く、土師器の比率が低い。これも本城跡の特徴として捉えられよう。天草の土では良質な土器焼成は困難であったと思われ、土師器は全般的に脆い。特筆すべき遺物として石製風炉とベトナム産陶磁器が発見されている。前者は、茶の湯に利用する移動式カマドの類であるが、通常瓦質土器で作るところを、あえて天草産の砂岩で製作している。他の発掘調査例によってもあまり知られない遺物である。後者は東南アジア系の貿易陶磁で海を媒介とした交流がうかがいしれる資料といえる。以上のように、熊本県下の調査例としては、あまり類のない特徴をもった中世城郭として位置づけられる。

平成16年度末にはⅠ郭の調査状況を報告した『棚底城跡』を刊行した。

平成17年度には、棚底城跡の菩提寺としての伝承がある字「大権寺」地区の石塔群調査を行っている。大権寺の石塔群には完基のものはないが、五輪塔・宝篋印塔・宝塔などの石塔部材が多数残存しており、その部材数は天草で最も多い。また紀年銘資料が６点あり延文三年（1358）が上限、永享十二年（1440）が下限である。永享十二年銘を持つ資料以外の５点は、すべて北朝年号である。

平成18年２月には、住民への周知を目的に、「棚底城跡歴史フォーラム」を実施し、倉岳町内外から200名の参加があった。

平成18年３月24日にⅡ郭以降の調査内容、石塔群調査の成果及び棚底城跡歴史フォーラムの講演録を盛り込んだ報告書『棚底城跡Ⅱ』を刊行。倉岳町として棚底城跡調査に区切りをつけた。３月27日に倉岳町を含む天草２市８町が合併し、天草市が発足した。棚底城跡に係る事業も「棚底城跡調査整備事業」として天草市教育委員会文化課が事業を引き継いで実施することとなった。引継ぎ後、有識者による棚底城跡学術検討委員会を組織し、その指導をうけて事業をすすめることとなった。また棚底城跡の周辺関連遺跡の調査を実施することとなり、「棚底城跡の菩提寺」としての伝承が伝わり、既に石塔群調査を実施していた大権寺地区において中世寺院遺跡があるか否か、国庫補助事業として確認調査に着手することになった。調査は字「大権寺」地区のうちで、石塔群付近を中心に任意にトレンチを設定して実施した。平成18年度は平成18年11月から19

年２月にかけて、平成19年度は平成19年11、12月及び平成20年３月に各々発掘調査を行っている。また、平成20年度は本来調査予定がなかったが、学術検討委員会の指導を受け10月に若干の追加調査を行った。同年度は棚底城跡の調査成果、大権寺遺跡の調査成果及び各専門家による論考を収載した考察編を盛り込んだ本書の作成を実施した。

第２節　調査組織

平成14年度発掘調査

調査主体	倉 岳 町
調査責任者	倉岳町長　稲津俊徳
調査総括	企画開発課長　浜崎誠士
調査担当	企画開発課企画開発係長　歳川喜三生、日本考古学協会会員　森田洋介
調査補助	石工みゆき、溝口真由美
調査指導	[熊本県立鞠智城温故創生館]大田幸博、[熊本県文化財保護審議会委員]阿蘇品保夫、[熊本県文化財保護審議会委員] 今村克彦、[熊本県建築士調査研究委員会]西島眞理子、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳
調査協力	株式会社くらたけ
発掘作業員	稲田豊人、稲津啓一、梅戸吉伸、高田暉尚、田中孝一、田中政敏、徳田忠、葉山勝人、平畑政勝、藤本慈秀、藤本雄二、古野一政、山並美智子、山本誠

平成15年度発掘調査

調査主体	倉 岳 町
調査責任者	倉岳町長　稲津俊徳
調査総括	企画開発課長　橋詰孝一
調査担当	企画開発課町史編纂係長　歳川喜三生、日本考古学協会会員　森田洋介
調査補助	石工みゆき、溝口真由美
調査指導	[熊本県立鞠智城温故創生館]大田幸博、[熊本県文化財保護審議会委員]阿蘇品保夫、[熊本県文化財保護審議会委員] 今村克彦、[佐賀県立九州陶磁文化館]大橋康二、[熊本県建築士調査研究委員会]西島眞理子、[本渡市立瀬戸小学校長]益田悦郎、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳
調査協力	有限会社大迫工業、株式会社くらたけ
発掘作業員	稲田豊人、稲津啓一、梅戸吉伸、田中孝一、田中政敏、徳田忠、葉山勝人、平井利和、平畑政勝、藤本雄二、古野一政、山並美智子、山本誠

平成16年度発掘調査

調査主体	倉岳町教育委員会
調査責任者	倉岳町教育長　蓮田陽之助
調査総括	教育課長　森田敏朗
調査担当	教育委員会文化財係長　歳川喜三生、日本考古学協会会員　森田　洋介
調査補助	石工みゆき、溝口真由美
調査指導	[熊本県立鞠智城温故創生館]大田幸博、[熊本県文化財保護審議会委員]阿蘇品保夫、[熊本県文化財保護審議会委員] 今村克彦、[佐賀県立九州陶磁文化館]大橋康二、[熊本県建築士調査研究委員会]西島眞理子、[本渡市立瀬戸小学校長]

益田悦郎、[岡山市教育委員会]出宮徳尚、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳

調査協力　有限会社中村建設工業、株式会社くらたけ

発掘作業員　稲田豊人、稲津啓一、梅戸吉伸、高田暉尚、田中孝一、田中政敏、徳田忠、葉山勝人、平井謙二、平畑政勝、藤本慈秀、藤本雄二、古野一政、山並美智子、山本誠

平成17年度石造物調査

調査主体　倉岳町教育委員会

調査責任者　倉岳町教育長　蓮田陽之助

調査総括　教育課長　森田敏朗

調査担当　教育委員会文化財係長　歳川喜三生、日本考古学協会員　森田洋介

調査補助　石工みゆき、溝口真由美、山並美智子

調査指導　[熊本県立鞠智城温故創生館]大田幸博、[熊本県文化財保護審議会委員]阿蘇品保夫、[熊本県文化財保護審議会委員] 今村克彦、[佐賀県立九州陶磁文化館]大橋康二、[熊本県建築士調査研究委員会]西島眞理子、[本渡市立瀬戸小学校長]益田悦郎、[岡山市教育委員会]出宮徳尚、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳、[国立歴史民俗博物館]小野正敏

発掘作業員　稲田豊人、稲津啓一、梅戸吉伸、高田暉尚、田中孝一、田中政敏、徳田忠、橋本彰則、葉山勝人、平井利和、平畑政勝、藤本慈秀、藤本雄二、古野一政、松本喜和、山本誠

平成18年度発掘調査

調査主体　天草市教育委員会

調査責任者　教育長　岡部紀夫

調査総括　文化課長　長山一幸

調査事務　文化課文化財保護係長　平田豊弘

文化課文化財保護係主事　川邉翔平

調査担当　文化課文化財保護係学芸員　中山　圭

調査指導　[棚底城跡学術検討委員会]

甲元眞之（熊本大学・委員長）、山崎純男（福岡市教育委員会・副委員長）、服部英雄（九州大学）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、稲葉継陽（熊本大学）、千田嘉博（奈良大学）

[文化庁]山下信一郎、[熊本県教育庁文化課]江本　直、西住欣一郎、帆足俊文、[人吉市教育委員会]鶴嶋俊彦、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳

発掘作業員　稲田八千代、稲津啓一、高田暉尚、田中孝一、段下千秋、丸田明美、山本誠

調査協力　株式会社九州文化財研究所、株式会社山並実業

平成19年度発掘調査

調査主体　天草市教育委員会

調査責任者　教育長　岡部紀夫

調査総括　文化課長　長山一幸

調査事務　文化課文化財保護係長　尾上和人

	文化課文化財保護係主事　川邉翔平
調査担当	文化課文化財保護係学芸員　中山　圭
調査指導	[棚底城跡学術検討委員会] 甲元眞之（熊本大学・委員長）、山崎純男（福岡市教育委員会・副委員長）、服部英雄（九州大学）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、稲葉継陽（熊本大学）、千田嘉博（奈良大学） [文化庁記念物課]山下信一郎、[熊本県教育庁文化課]江本　直、西住欣一郎、帆足俊文、[熊本県教育センター]前川清一、[人吉市教育委員会]鶴嶋俊彦、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳
発掘作業員	稲田八千代、稲津啓一、坂元元八、高田暉尚、田中孝一、段下千秋、丸田明美、山本　誠
整理作業員	泉あかね、釜崎常子、吉田さおり
調査協力	九州航空株式会社、株式会社山並実業、有限会社大迫工業

平成20年度報告書作成作業

調査主体	天草市教育委員会
調査責任者	教育長　岡部紀夫
調査総括	文化課長　長山一幸
調査事務	文化課文化財保護係長　尾上和人 文化課文化財保護係主事　川邉翔平
調査担当	文化課文化財保護係学芸員　中山　圭
調査指導	[棚底城跡学術検討委員会] 甲元眞之（熊本大学・委員長）、山崎純男（福岡市教育委員会・副委員長）、服部英雄（九州大学）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、稲葉継陽（熊本大学）、千田嘉博（奈良大学） [文化庁]山下信一郎、[熊本県教育庁文化課]江本　直、前川清一、西住欣一郎、帆足俊文、[多良木町教育委員会]鶴嶋俊彦、[熊本県文化財保護指導員]高田尊徳
整理作業員	泉あかね、釜崎常子、吉田さおり
調査協力	株式会社埋蔵文化財サポートシステム、有限会社大迫工業

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　棚底城跡・大権寺遺跡の位置と地理的環境

天草は熊本県南西部に位置し、大小120余りの島々で構成される諸島である。そのうち東から順に大矢野島、天草上島、天草下島の３島が主要な島で、生活の中心を成している。東シナ海・有明海・不知火海に囲まれており風光明媚な環境であるが、平地面積は狭く山岳丘陵が島の面積のほとんどをしめる。丘陵部は海近くまで迫り、入り組んだリアス式海岸地形を形成している場所が多く、複雑な海岸線となっている。天草下島の西海岸のように東シナ海の荒い波濤により岩盤が侵食され、断崖絶壁が続く場所もあれば、一方で穏やかな内海である有明海に面する上島北海岸や不知火海に面する上島南海岸などは比較的緩やかなカーブで遠浅の海岸線が続く。このような地勢的特徴から、集落は小河川に沿って営まれ、特に河川が海に注ぐ沿岸部でまとまった単位の集落となり、概ねこの単位が江戸時代の各村を成し、時を経てそのいくつかが集合して近年の市街地を形成した。しかし、熊本の白川流域や菊池川流域にみられるような大きな河川、広域の平野は存在せず、したがって農業には適していない。

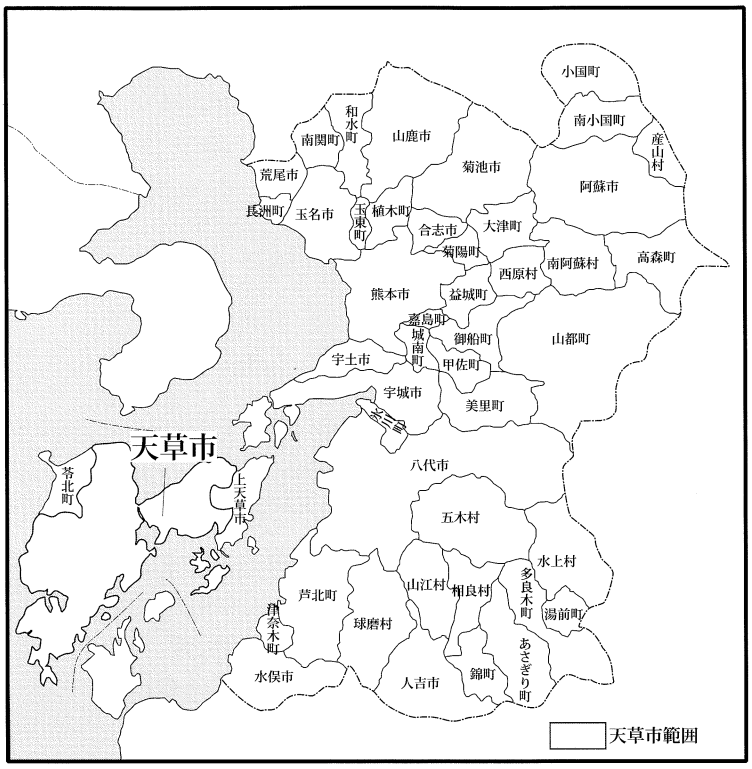
天草上島の倉岳は標高約 682mを誇る天草地方で最も高い山である。山頂からは不知火海全体の動きが手に取るようにわかり、佐敷・水俣地方からの出船も確認できるほどの眺望を誇る。海上安全を司る倉岳神社が山頂にあり、船型石製品が奉納されている。その南西に隣接する矢筈嶽は標高約 626mで、天草第二の高山である。双峰による谷合いは東南海岸部へ向かって降る。その開析谷は平野に降るに従って裾野となって開け、やがて扇状地となり、そこに棚底の集落が沿岸部付近まで営まれている。扇状地は耕地として利用され、段々に水田や畑地が連なるが、地質的には相当の厚さを持つ礫層が堆積し、肥沃とは言い難い。

倉岳周辺は教良木層と呼称される頁岩層が主要地質を成すが、層中には安山岩質火成岩が貫入しており、倉岳中腹の急傾斜崖面はこの安山岩層の卓越により形成されている。ここで産出した安山岩は幾度も繰り返された水流によって開析谷沿いに運ばれ、扇状地に厚い礫層を作った。この礫層は安山岩を無尽蔵に包含しており、運ばれる過程で角が取れ概ね扁平となっている。棚底地区の集落は現在でも、この扁平安山岩を利用して宅地の周囲に石積を構築している民家が数多く見られる。石積は倉岳から吹き降ろす強風から住宅を防御するための生活の知恵から始まったとされる構築物であるが、現在では棚底集落独自の石の景観を醸し出し、自然環境と生活風土が密接に結びついた文化的景観が良好に残る区域として内外の耳目が注がれている場所である。

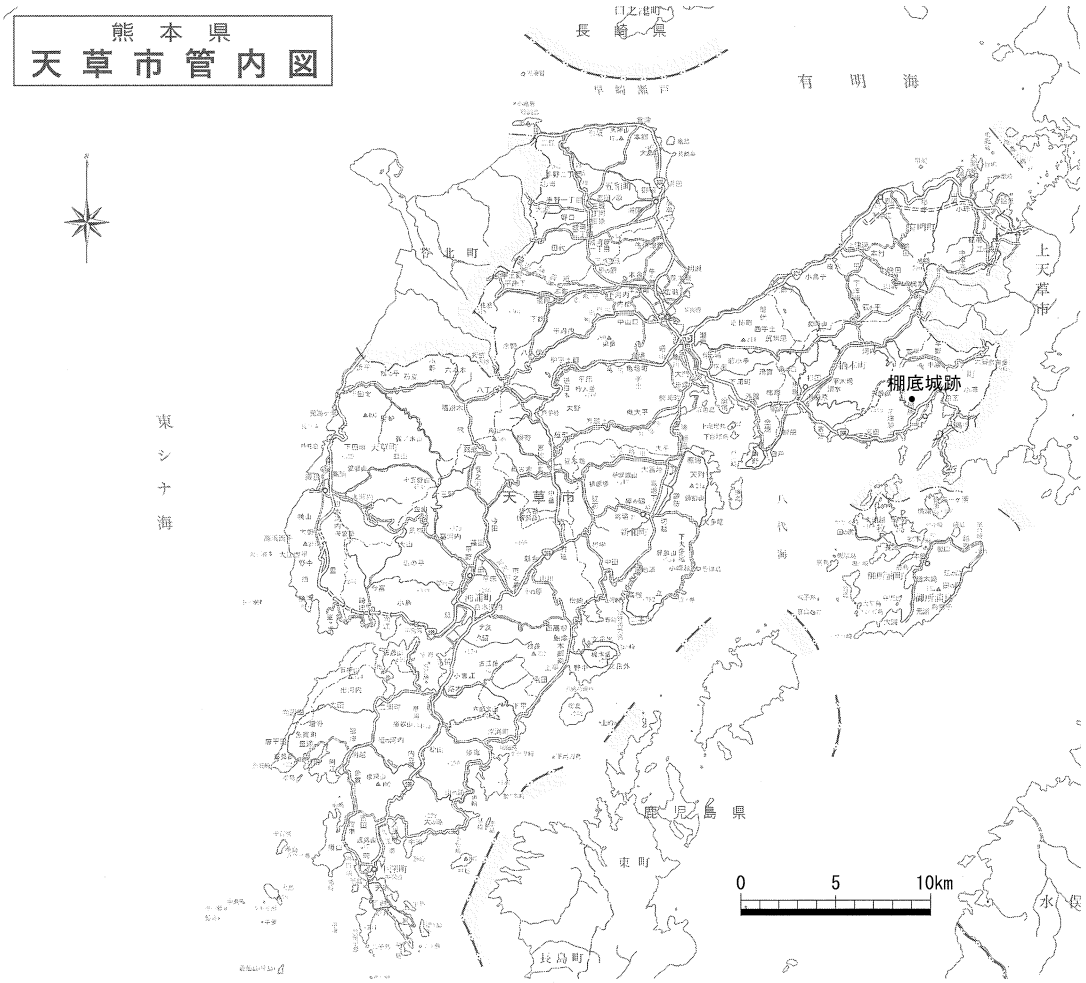
棚底城跡は、倉岳から棚底湾に向かって東に延伸する派生尾根の末端部に位置する。同様の派生尾根は周辺に幾つかあるが、頁岩を主体とする教良木層において、比較的浸食に強い特性を持つ砂岩層が部分的に存在し、それが尾根として残った結果と評価される。その中で特に幅広な帯状尾根と麓に広域な平野部を持つ尾根を選択し、城郭地として利用している。尾根筋の標高約90m地点を頂部として東へ向かって尾根筋を段状に切り盛りして平場を成形している。概ね尾根と麓の比高差は約 20m、城跡面積は約 37,000 ㎡である。主たる曲輪である頂部をⅠ郭として順にⅧ郭まで曲輪を連ね、殊にⅠ・Ⅱ・Ⅳ郭は切岸加工を施し、他の曲輪よりも比高差が目立つ重要な曲輪である。Ⅰ郭北西の鞍部は堀切によって遮断され、ここを以って城郭として完結していると考えられる。北側斜面はほぼ全域が急傾斜な断崖で、自然地形により要害化している。南側斜面は棚底集落に面することから、人工の段地形が連続しており、以前は耕作地として利用されていた。麓より南には、尾根筋と平行して棚底川が流れており、棚底城の水源と水堀の両者の役目を担っていたものと考えられる。

棚底城跡から西へ約 400mほど離れた標高約 100mの扇状地最奥部に宝篋印塔、宝塔、五輪塔などの中世石造物が集中している箇所がある。ここを小字名で「大権寺」と呼び、旧来から棚底城跡の菩提寺としての伝承が残っている。

また、棚底城跡と扇状地を挟んで相対する位置にも、緩傾斜の丘陵が伸びている。その最頂部



第１図　天草市位置図



第２図　棚底城跡位置図

1 七曲遺跡　2 浦城(名桐城)跡　3 名桐石棺墓群　4 中原A遺跡　5 中原B遺跡　6 棚底城跡　7 大権寺遺跡　8 山仁田遺跡　9 房崎遺跡
10 宮崎石棺墓群　11 宮崎遺跡　12 八竜遺跡　13 歳川遺跡　14 毛首遺跡　15 塔尾遺跡　16 曙遺跡　17 小崎遺跡　18 下塔尾遺跡
19 小崎遺跡　20 宮田城跡　21 境目古墳　22 沖ノ瀬古墳群　23 浜ノ洲遺跡　24 下平古墳　25 古江城跡　26 河内城跡

第３図　周辺遺跡配置図

標高約 112mの周辺一帯は「城山」と呼ばれ、小字名は「城の平」、棚底城跡と関連する城郭があったとされる。地形は自然緩斜面であり、人工の地形造作は行なわれていないようである。

第２節　中世天草の歴史的環境

離島である天草諸島では先史時代から豊かな海洋文化を培ってきた。旧石器時代にさかのぼる石器が久玉町内の原遺跡や倉岳町下塔尾遺跡で採集されている。しかし、その実態は詳らかではない。

縄文時代には有明海及び不知火海に面した沿岸部を中心に漁労生活が営まれており、多数の縄文遺跡が分布している。特に有明海沿岸の五和町沖ノ原貝塚、同一尾貝塚、広瀬町大矢遺跡、不知火海沿岸の栖本町浜ノ洲遺跡、深海町椎ノ木崎遺跡などで発掘調査が行なわれ、いずれの遺跡でもさほど広大な発掘面積でないわりに膨大な量と多彩な性質の遺物が出土している。土器類・石器類・骨角器類などの特徴から西九州から朝鮮半島南部まで広がる漁労文化圏の一隅を担っていたことが解明されつつある。旧倉岳町内においても曙遺跡で磨製石斧や阿高式・南福式土器片などが発見されており、塔尾台地の各遺跡からは石鏃片やチップが採集されている。発掘調査が行なわれた遺跡が少ないため、遺構や遺跡範囲が判明している例は少ないが、豊富な遺物を包含していると考えられる。

反面、平野部が少ないことから農業生産には適さず、弥生時代の農耕集落遺跡は数少ない。わずかに天草町上木原遺跡などの集落が発掘されたにとどまっており、全体的な様相は判明していない。あるいは弥生時代になっても、当地方では漁労文化を継続していた可能性も考えられる。

弥生時代末頃から古墳時代にかけては、沿岸部に箱式石棺墓、地下式板石積石室墓群、横穴式

石室構造の円墳などが点在している。倉岳町では宮崎石棺墓群が熊本大学によって発掘され、22基の石棺墓の構造が判明した。免田式土器や古式土師器片の出土から3～4世紀頃の石棺墓群と位置づけられている。同様の石棺墓は浦地区名桐にも存在しているが、破壊され原形が失われている。また西側の宮田地区、栖本町と接するあたりには南に開口する横穴式石室を持つ境目古墳があるが、墳丘は失われ、石室の残存状況も良くない。古墳時代の初期は箱式石棺、中期から後期にかけては、地下式板石積石室墓群、横穴式石室構造の円墳、また凝灰岩が卓越する場所では横穴墓が存在するなど多様な埋葬形態が見られ、複雑な文化様態であったことを示している。集落遺跡の状況はあまり詳しくわかっていないが、五和町沖ノ原遺跡や苓北町出来町遺跡では、5～6世紀にかけての製塩土器が大量に出土し、古墳時代の大規模な製塩業が行われていたことが明らかになっている。

飛鳥時代から平安時代にかけては、現状では完全に空白の時代で、官衙等に比定できそうな遺跡の発見は未だない。わずかに本渡北小学校プール遺跡で古代の水田が発見されている程度である。

中世の天草は地域毎に地頭職として土着した在地豪族が分立し、全島を統一する勢力が現れないままの状態が戦国時代末まで続く。これらの在地豪族を天草一揆衆あるいは天草五人衆と呼ぶ。

まず最初に歴史上の表舞台に現れるのが志岐氏である。「志岐文書」によれば菊池一族であった藤原光弘が元久二年（1205年）に佐伊津澤張、鬼池、蒲牟田、大浦、須志浦、志木浦の6ヶ浦の地頭に補任されている。苓北町から有明町にかけての有明海沿岸部分である。

貞永二年（1233年）の「天草種有譲状案」には天草種有が本砥嶋の地頭職にあり、その領地を庶子に分割して相続させる旨が記されており、「河内浦」「大江」「高浜」「産島」などの地名が見られるので、現在の本渡から河浦、大江あたりまで下島南部一帯を領していたことがわかる。旧本渡市中心部に位置し、平成2年に区画整理事業に伴い調査された浜崎遺跡からは13世紀の白磁・青磁を中心とする貿易陶磁が大量に出土した。他に滑石製石鍋・肥後型瓦器碗・東播系須恵器など多彩な国内流通品や五輪塔部材なども出土していることから、単なる中世集落とは考えにくく、天草氏との関わりが指摘されている。

続き弘安四年（1274年）の弘安の役において大矢野種保・種村兄弟の活躍が蒙古襲来絵詞に描かれている。大矢野島を中心に勢力を持っていたと考えられる。現在の大矢野中学校裏手に残る五輪塔火輪は天草最大のものである。

「吉川文書」には永和四年（1378年）藤崎城を舞台に栖本氏が、大矢野・久玉氏らとともに戦っている記録があり、「志岐文書」至徳元年（1384年）の「犬追物手組覚書」に上津浦上総介の名が出てくることで、天草五人衆は14世紀代には史料上に出揃うこととなる。

15世紀においては史料が少なく天草領主層の動向は不分明な点が多いが、人吉市観音寺に文安五年（1448年）の銘を持つ鰐口が残り、「上津浦庄妙楽寺」「上総介種和」などの文字が確認できる。妙楽寺は上津浦城跡に隣接した地名で、上津浦氏菩提寺の伝承が残る場所である。上津浦種和が妙楽寺に奉じた鰐口がなんらかの契機に相良に移されたものと考えられる。

この時期、天草の領主達はおそらく肥後国守護の菊池氏に服属しているものと考えられ、15世紀末頃には志岐氏が菊池氏から知行安堵や加冠を受けている文書が残る。

明応十年（1501年）、菊池武運から「天草御一揆中」に向けて、小野・豊福の知行を宛がう書状が発せられ、これを受けて天草の領主層が蒲牟田に参集し談合している。このことから、15～16世紀初頭にかけては、天草国人領主は横並びの一揆衆としてある種の連合体を形成したと見られる。一揆衆としては、倭寇的性格が強い肥前松浦党などが著名であり、土地柄天草一揆衆も類似した性質を持っていた可能性も考えられる。

16世紀に入ると菊池氏の弱体化が顕著となり、天草衆も足並みが乱れ始め、相互に諍いを繰り返すようになる状況が「八代日記」に描写されている。相良氏家老による日記である性質上、天草にかかる記述は上島の上津浦氏と栖本氏の恒常的な対立が中心となるが、おそらく下島の志岐

氏・天草氏・久玉氏等も頻繁に争っていたと考えられる。

八代日記によれば、天文元年（1532年）に天草・志岐・栖本・大矢野・長島の五氏が連合して上津浦を攻めており、相良氏は上津浦を援助している。この段階から天草島内での争いが史上に現れてくる。まだ、棚底城に関しては記述がないが、上津浦城に相良氏が四回在番衆を派遣していることから考えても、上津浦－相良間の通交は行き届いており、棚底周辺も上津浦方に保有されていた可能性が高い。

天文十三年（1544年）二月二日に「上津浦親類中、棚底下城」とあり、棚底城の存在が初めて文献上に見られ、この時点まで上津浦氏一族が在城していた。同四日に「上津浦親類中、上津浦下城」、同六日に「（上津浦）種教上津浦下城」とあり、上津浦一族が城から離れる事件が行っている。棚底城は上津浦領にあって一族を配置する重要な拠点城郭であったと見做せよう。

これ以降は棚底城及び周辺一帯は栖本氏が支配し、弘治二年には激しく上津浦氏が攻勢に出ている。この年だけで、棚底藤河栫、栖本馬場、棚底さかたぬきなどの周辺施設が上津浦に破られている。一方、相良氏は栖本に合力し、田浦・二見一瀬・湯浦・津奈木の各衆が栖本に在番として交互に派遣されており、天文十三年とは逆の図式が見られる。

永禄三年（1560年）九月には上津浦氏の栖本攻めに大村・有馬の肥前勢力が参戦し、周辺海域を巻き込んだ大きな抗争に発展した。特に有馬氏は二百艘以上を率い、大矢野領と思われる二間戸を焼き討ちしている。この件が原因となり、相良氏が栖本氏に働きかけ、棚底城を上津浦氏へ返還させ、再び棚底は上津浦領となるのである。

しかし、棚底割譲によっても抗争は収まらず、永禄八年頃から長島を版図に加えた出水の島津家も参じて有明海・不知火海全体を巻き込んだ争いとなり、志柿・本渡などが戦場となっている。棚底でも永禄九年まで争いが続いており、ここで八代日記の記述が途切れるため、その後の状況は不明であるが、島津氏が天草を支配に組み込む天正七年頃まで争いが続いていたとみられる。

永禄九年に志岐氏当主鎮経はキリシタンとなり、ドン・ジョアンとなる（すぐに棄教）。元亀二年（1571年）天草鎮尚・久種親子が受洗し、それぞれドン・ミゲル、ドン・ジョアンと名乗っている。大矢野種基は島津幕下として豊後に転戦した折に、大友家臣ドン・パウロ志賀親次の博愛に触れ、天正十五年（1587年）に天草に戻ってから受洗。ドン・ジャコベを名乗る。次いで、栖本鎮通、親高親子も天正十七年（1589年）に受洗し、各々ドン・バルトロメウ、ドン・ジョアンとなる。同年、天草諸豪は小西行長の宇土城普請合力を拒絶したことから、加藤・小西の連合軍と戦い破れ、小西氏の配下に入る。ここに及び、天正十八年には上津浦種直も最後に洗礼を受け、ドン・ホクロンとなった。天草五人衆はいずれもキリシタンとなり（既に志岐氏は滅亡）、宣教師を手厚く保護したため中世末～近世初頭にかけ、天草は敬虔なキリシタンを多数かかえる国内有数の信仰地帯となった。

第３節　天草における中世城跡の分布

県内500を超える中世城館遺跡のうち、天草はその約１割にあたる57城跡が知られる（註１）。県内の中でもかなり密度高く城郭が分布しているといえ、第４図にはそのうち50城跡を図示した。総じて沿岸部に分布しているケースが多く、特に御領から楠甫にかけての有明海沿岸部と上島の不知火海沿岸に多く存在が確認される。逆に下島中央の山間部などでは分布状況がかなり粗であり、効率的な城郭網を成しているとはいいがたい。

天草では他地域の大名クラス城館に見られるような巨大な縄張りを持つ城は少なく、棚底城跡他一部の城を除き、その多くは２、３の曲輪と若干の堀切が見られる程度の普請例である。地形的な制約が多く、また中小領主が分立しそれぞれの動員兵力が少ないため、巨大な縄張りが発展しなかったものと思われる。

発掘調査は合併前の市町史編纂事業や公園化事業を中心に実施されているケースが多く、現状は開発による破壊は免れ、記録保存に至ることは少ない。しかし、天草では農地不足から戦前戦

中に少々標高が高い丘陵ですら、ほとんどが芋畑として開墾され、曲輪造成との厳密な峻別に困難をきたしている。発掘調査が行なわれた城は、棚底城跡以外に1 留（富）岡城跡、2 志岐城跡、3 下内野城跡、4 三川城跡、5 城木場城跡、6 鬼池城跡、7 御領城跡、11 河内浦城跡、12 下田城跡、14 久玉城跡、19 本渡城跡、47 柳城跡、48 亀ノ迫城跡、49 大矢野城跡等である。

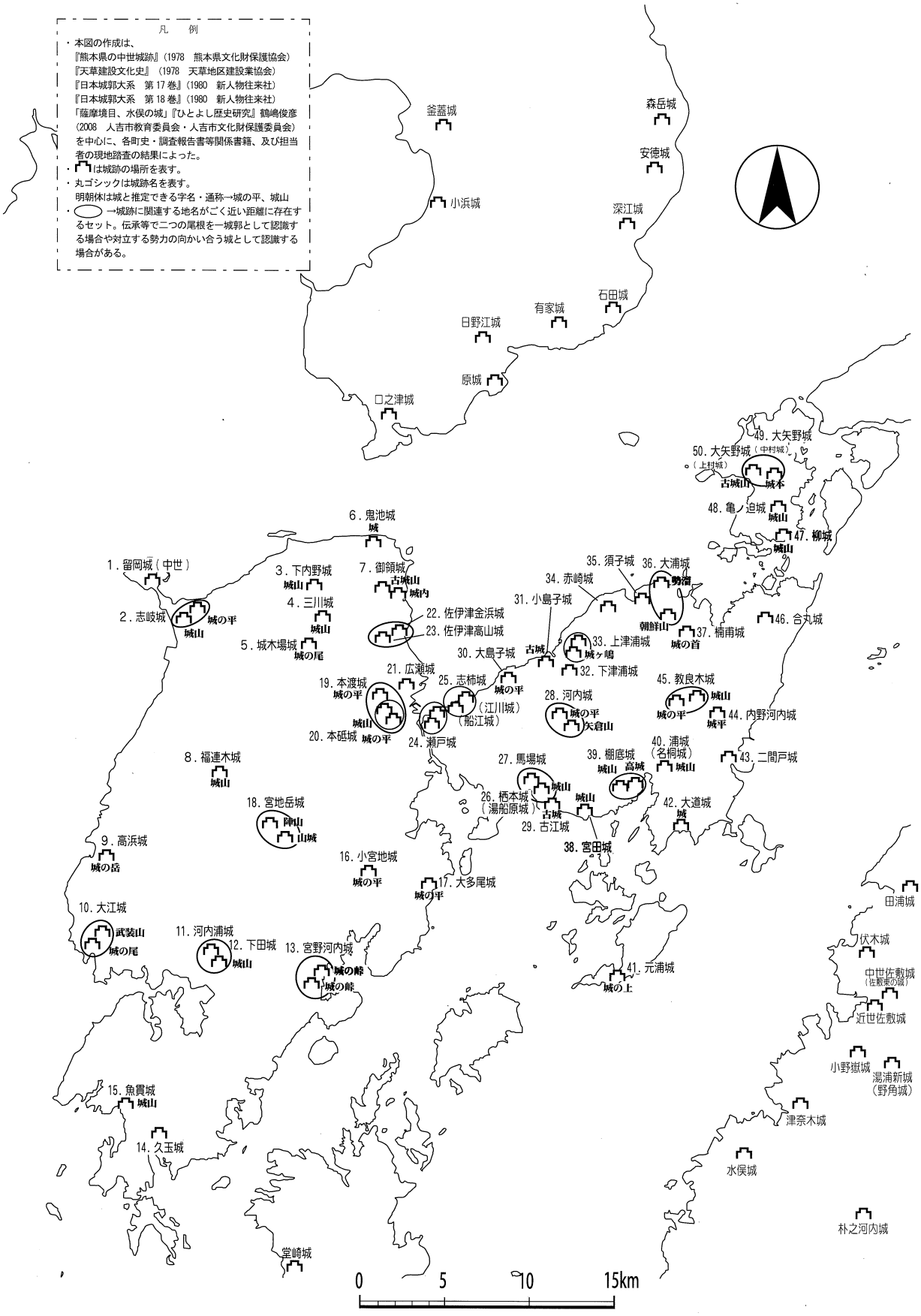
天草氏の本拠地である河内浦城跡と一町田川を挟んでその対岸にある下田城跡はごく近距離にあり、共に河浦町教育委員会により発掘調査が実施されたが、いずれも16世紀後半の遺物を中心に出土し、同時期に並存していたことが立証されている。ルイス＝フロイスは「日本史」において、「本渡の城はドン・ジョアンの城（河内浦城）に次いで天草領では最も堅固な主要な城で・・・」と述べているが、河内浦城跡は本渡城跡よりも単純な構造を呈していると考えられる。これについて河内浦城と下田城を同一の城郭遺構と考えることもでき、城地不足を近接する別の山塊・丘陵に離れて遺構を普請することで補い、複雑で広域に亘る縄張りを構築した可能性もある。

河内浦・下田のように同時代性が明らかになっているケースはほとんどないが、天草では「城」に関わる地名を持つ丘陵が隣接・近接している場所が少なくない。4図の○で囲んである城郭がそれを示しており、城山・城の平などの地名が隣接して存在しているものである。その多くが地域で「同一の城」と伝わっており、今後の調査の進展によっては、効果的な縄張りが可能な城地選定に苦慮した天草地域における特徴的な城郭のあり方となる可能性を秘めている。

調査が行なわれた城跡で特別な遺構が検出された例は少ないが、出土遺物に関しては棚底城跡始め貿易陶磁の出土が卓越している例が多く、河内浦城跡では棚底城跡出土例と同時期程度と考えられるベトナム大皿、下田城跡では象嵌を持つ朝鮮青磁の瓶子、五和町三川城跡では漳州窯系と思われる色絵大皿、青花大皿、本渡城跡では酒海壷片（未報告）等、地方中小領主らしからぬ貴重な遺物も見られる。このような傾向は、天草中世城跡が沿岸に分布していることと密接に関わっていると考えられ、各領主が海上交易に力を注いで獲得した結果であろうと推察される。

また、14 久玉城跡、22 佐伊津金浜城跡、36 大浦城跡などでは織豊的技術による高石垣が見られ、中世城の縄張りを近世寺澤氏時代に石垣で強化して、天草の支配を行ったと考えられる。

註1　大田幸博「第15節　五和町の中世城跡」『五和町史』　五和町史編纂委員会　2002



第４図　天草の中世城跡分布図

第Ⅲ章　棚底城跡発掘調査の成果

第１節　縄張りについて

城地の地形からは、丘陵地に築かれた「平山城」である。棚底地区は、北西側背後に倉岳（標高 682.2m）の高山を荷なっており、これより南方向の海岸方面に下る低山に城が築かれている。周囲の類似地形の中で、特に城跡地は、北西側の鞍部から東側への帯状・緩傾斜地を利用したものである。南西下で集落に隣接し、海岸線との間に小平野が広がるので、絶妙な選地と言える。この地域の水田や畑地からは、縄文時代の石器や土器などが数多く表採され、宮崎石棺墓も存在しており、古い時代から現在の地形が形成されていた事が分かる(注 1)。巨視的には、背後に高山、前面に小平野と、八代海を望んでおり、城地選定の条件とされる「風水説」の地理的配置に見合っている(注 2)。

基本的な縄張りについてはまず城跡の北西限に山付きの鞍部を断ち切る堀切がある。この箇所は、地形の一大変化点で、それまで緩やかに下ってきた本体尾根筋は、ここで大きく括れて、窪地の「野首」状態となる。しかし、直ぐに小山状の高台に復活して、城の中心部のⅠ郭を形成するが、Ⅱ郭からは、再び、緩傾斜状態に戻り、東端部のⅧ郭まで下っている。尾根の斜面部は、特に北側が急斜面をなして、絶壁の様相を呈する。この地形に加えて北側裾部には、帯状谷が城地に併走する様に下り、空堀の役目を果たしている。

城跡は、これらの地形を最大限に活用したもので、尾根筋は大きく削平され、小段の法面に削り落とされている。平場は、Ⅰ郭～Ⅷ郭まであり、各法面に野面積みの残存石積を見る。典型的な連郭式の縄張りで、全長 335mに及ぶ。麓集落の棚底地区との関わりから、城郭の向きは南と考えられる。以下、縄張りの主要箇所は、図中に記した番号と記号によって説明を行う。

（注 1）棚底地区は後世の干拓地で無く、海進によって陸地の一部が海中に没していると推定している。現に、この地では、縄文時代の遺跡が海底に存在する。

（注 2）城地の選定理由には、「山容」も考えられる。多くの場合、形の整った端麗な山や丘に築城されている。美的な要素も求められものと思われる。

第２節　測量調査の成果

Ⅰ郭北西側の堀切

山付きの鞍部を利用した堀切で、主軸尾根線の北西側にあたる。地形の大きな括れ部で凹地をなす箇所に手を加えている。谷底は押し広げられて、法面は整形されて堀壁が形成されている(注 3)。尾根筋の中央部を若干、掘り残して土橋とし、両側の山腹を竪堀とする工法で、東側部分の底幅は 2.0 ～3.0m。中央部で、南側対岸との比高差 2.50m。この堀切から上位の本体尾根筋に、堀切や平場の遺構は無い。本体側へ登る 2.0m幅前後の踏み分け道は、非常時に城からの逃げ道になったと思われる(注 4)。

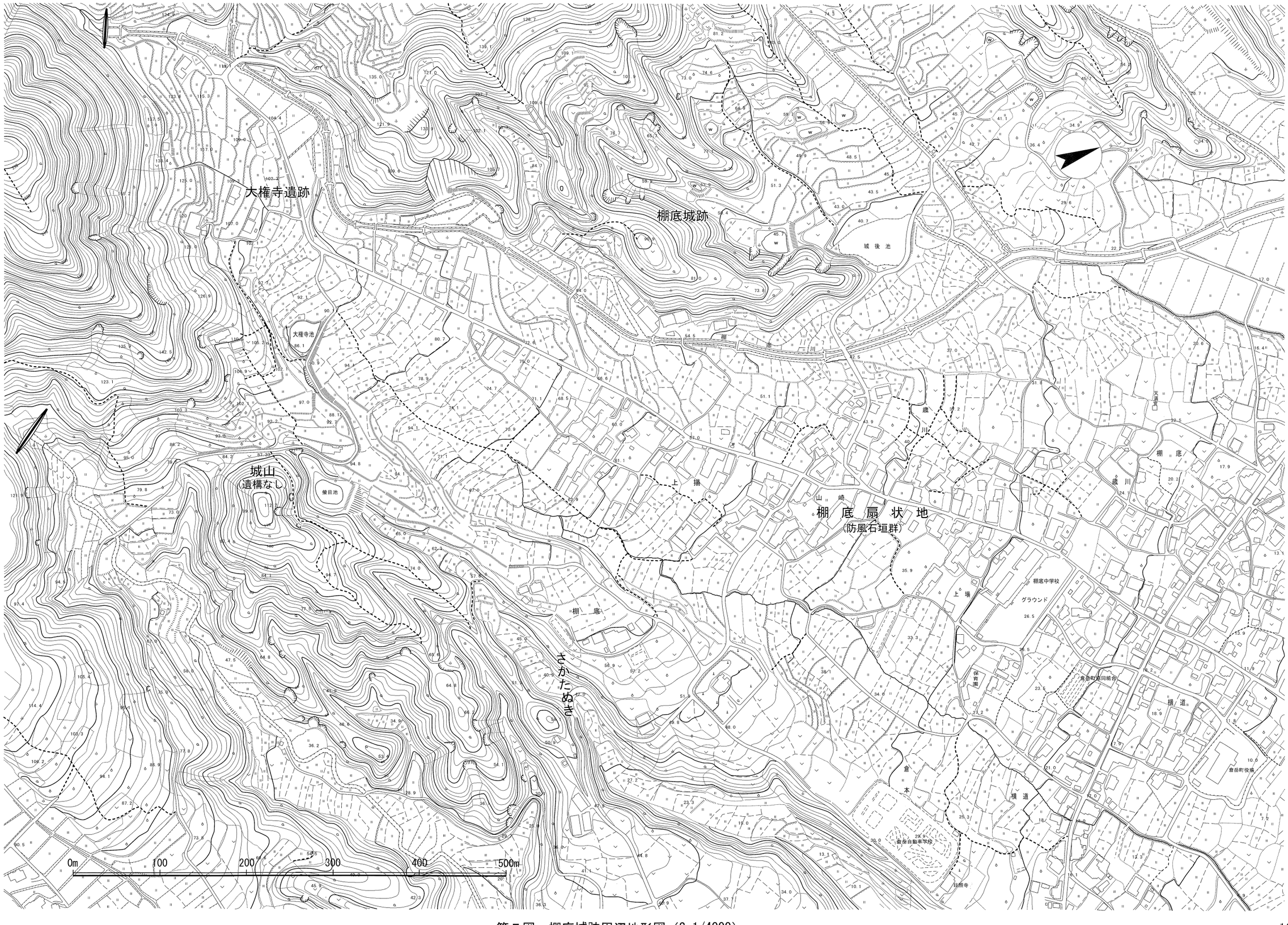
（注 3）帯状尾根筋の堀切は、大方、この造りである。

（注 4）天草郡河浦町の河内浦城跡に、類似の逃げ道が残る。この城跡は天草氏の居城である。
『河内浦城跡』平成元年度　『河内浦城跡Ⅱ』平成３年度　『河内浦城跡Ⅲ』平成 12 年度　河浦町教育委員会

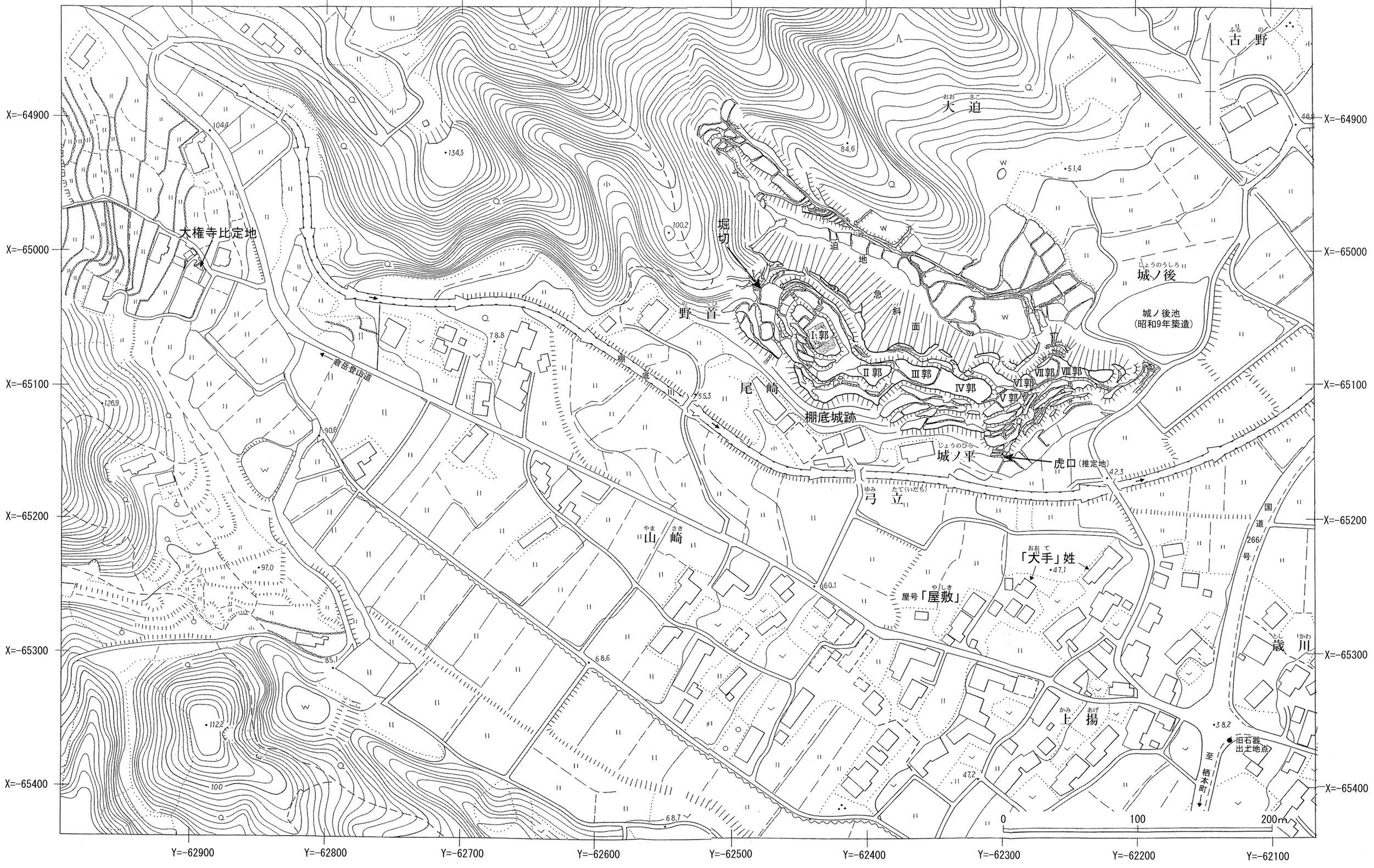
堀切直下の迫

堀切の北東直下には、空堀の役目を果たした可能性がある帯状谷が城跡地に並行する形で下っている。小谷の東側対岸は、帯状の別小尾根が自然の堀壁を形成しており、城地裏側の重要な防禦ラインになっていたものだろう。この谷は、後世に水田(今は廃田)として利用された事もあって、底部は棚田の形状を呈している。全長 225m、中央部の幅は第７図の〔ア〕で 12m。城地側の山腹は、絶壁に近い状況を呈する。元来の急傾斜地にさらなる削り落としの手が加わっているものと思われる。棚田の段差面には、野面積み石積が築かれている。特に、谷頭にあたる矢印〔イ〕における段差面の石積は、高さ 3.19mを測る。切り石が整然と積まれており、その積み方から、近世城の石積を見るかのようである(注 5)。

（注 5）水田は江戸時代の開田と思われる。この時期、地元の石工集団も、この様な高度な石組みの技術を有していたことの証明である。



第５図　棚底城跡周辺地形図（S=1/4000）



第６図　棚底城跡周辺地形図２

第７図　棚底城跡全体測量図

第８図　棚底城跡測量図①

Ⅰ郭北西側の堀切

〔Ⅰd〕帯曲輪

〔Ⅰf〕横堀３と土塁

Ⅰ郭

城内の最高所にあたり、主軸方位はN30° E、長軸48m×最大短軸18.5m。城跡で最も重要な郭で、4ブロックに細分される。区画の周縁法面は、急峻な削り落とし箇所が見られ、小段群も重なる。

〔Ⅰa〕は、主郭の中央部で、標高89.50m。長軸19m×短軸18.5mの方形状の平場をなす。〔Ⅰb〕は Ⅰ郭の北西端に位置して、Ⅰ郭での最高所にあたる。形状的に土壇状をなし、〔Ⅰa〕との比高差2.15m、長軸15.4m、短軸4.6m、上面は平らに整形されている。意図的な尾根筋の削り残しと思われる(注6)。

〔Ⅰc〕はⅠ郭南側の平場で、〔Ⅰa〕よりも段下がりで、比高差1.68m。やや勾配のある高台の先端部をカットした結果、段差が生じたのであろう。東西の長さは北側で19m、最大幅は12m、南側寄りで緩傾斜地となる。

(注6) 類似の遺構は下益城郡美里町の堅志田城跡にある。Ⅰ郭の北端部に土壇状の高台が残っている。尾根筋の削り残しで、発掘調査によって上面域から柱穴が検出されている。 『堅志田城跡ⅩⅡ』美里町教育委員会 平成16年度

Ⅰ郭直下の裾部

〔Ⅰd〕は〔Ⅰa〕の東下にあり、比高差4.70m。大方、帯曲輪の形状をなして全長56m。幅は北端で7.6m、南端で2.2m幅に括れている。さらに、この区画の東直下にも細長の帯状地形〔Ⅰe〕が並列する。〔Ⅰe〕は、幅4.0m×1.5m、全長50m。北西端の〔Ⅰd-1〕と〔Ⅰe-1〕には、縁に土塁の一部が残存しているので空堀箇所と分かる。残存土塁は、〔Ⅰd-1〕で弧状を描き、上場幅2.0m～1.0m、全長24m。底部幅6.0m～5.0m、底部と土塁との比高差1.78m。この下位に並列する〔Ⅰe-1〕は、上場幅2.0m～1.0m、全長27m。底部幅1.0m～1.4m、土塁との比高差0.6m。

〔Ⅰf〕は竪堀で、〔Ⅰe〕よりも、さらに東下の標高80m～73mラインにある。底部は全長54m、底部幅1.2m～2.0m、土塁との比高差は最大で0.81m。端部は、ラッパ状に開き幅8.0 m。付随する土塁は、全長30.5m。〔Ⅰg〕は、斜面部に小段が連なる。〔Ⅰa〕の南西直下にあって、一部、南下にかかっている。小段群の形状は不定形で、標高90m～80mの間に計11段を数える。大きさにもバラツキがあり各段差面は、急峻に削り落されている。〔Ⅰh〕は、Ⅰ郭の北西下にあって、広めの面積を有する削平地群である。標高85m～73mの間に7段を数え、形状は一定しない。段差面には、上部を失した野面積み石積が残っている。この中で、北端の〔Ⅰh-1〕は、長さ・幅共に16.0m。Ⅰ郭形状に沿って屈曲する空堀〔Ⅰe-1〕と土塁を途絶させる形で形成されている。このことから、〔Ⅰh-1〕は近世以降の開墾による平坦地と考えられる。上面の堀底〔Ⅰd-1〕との比高差1.7 m。

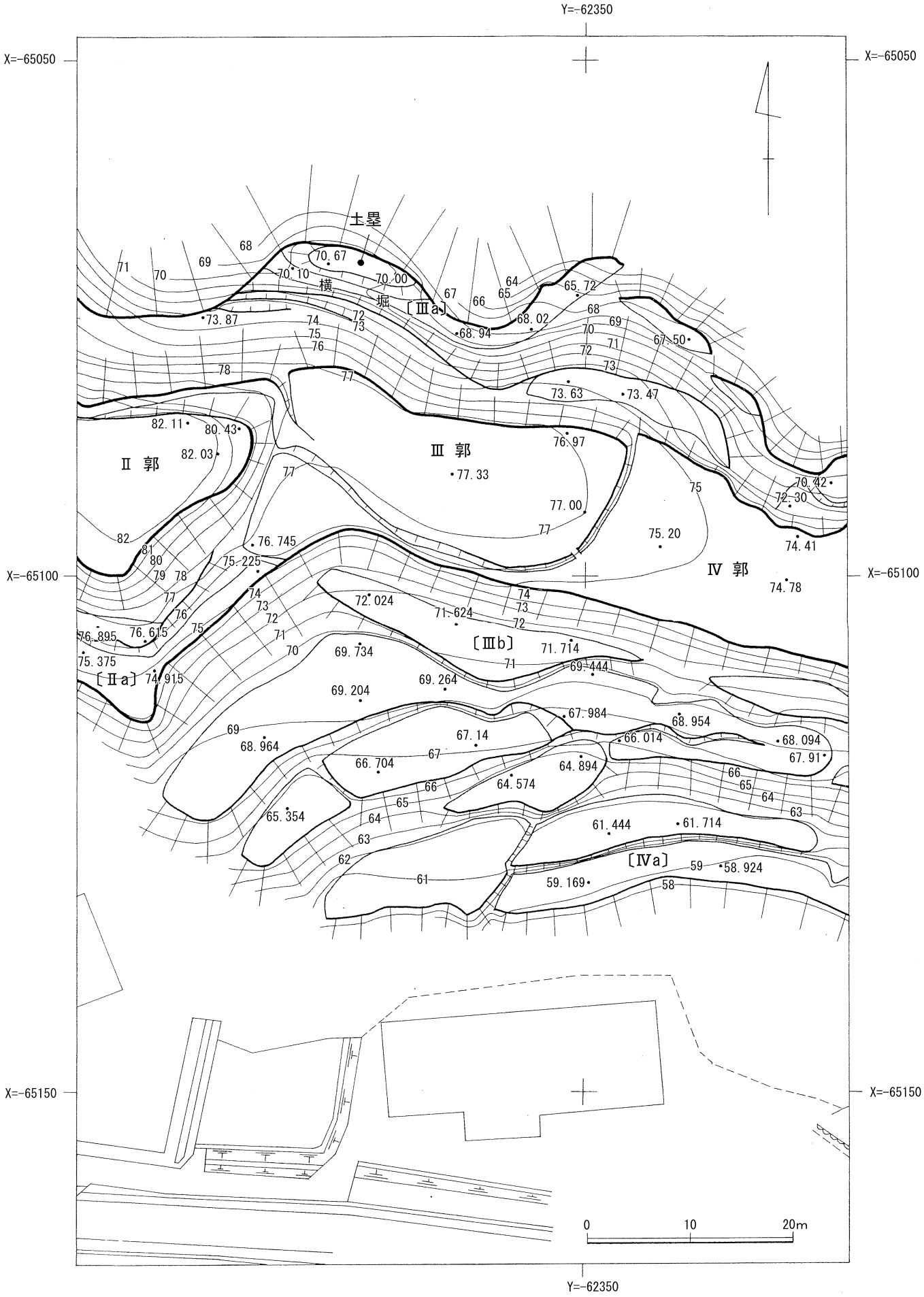
Ⅱ郭

地形的には〔Ⅰd〕と繋がっているが、尾根筋の主軸ラインに沿っており、曲輪としての様相を呈する。主軸方位N72° E、全長42m、幅はⅠ郭側で32m、東端で21m、中央部は、やや括れて11m。標高82mラインにあり、Ⅰ郭の中央部との比高差7.5m。南下には、間に4箇所の小段を挟んで、帯曲輪〔Ⅱa〕が並列する。この箇所は全長51m、幅は西端で10m、東端で7.0m。標高75mラインにあり、Ⅱ郭との比高差7.0m。Ⅱ郭までが棚底城跡の山頂域で、下位のⅢ郭から眺めると、法面は、そそり立つ感じで、かなりのインパクトがある。

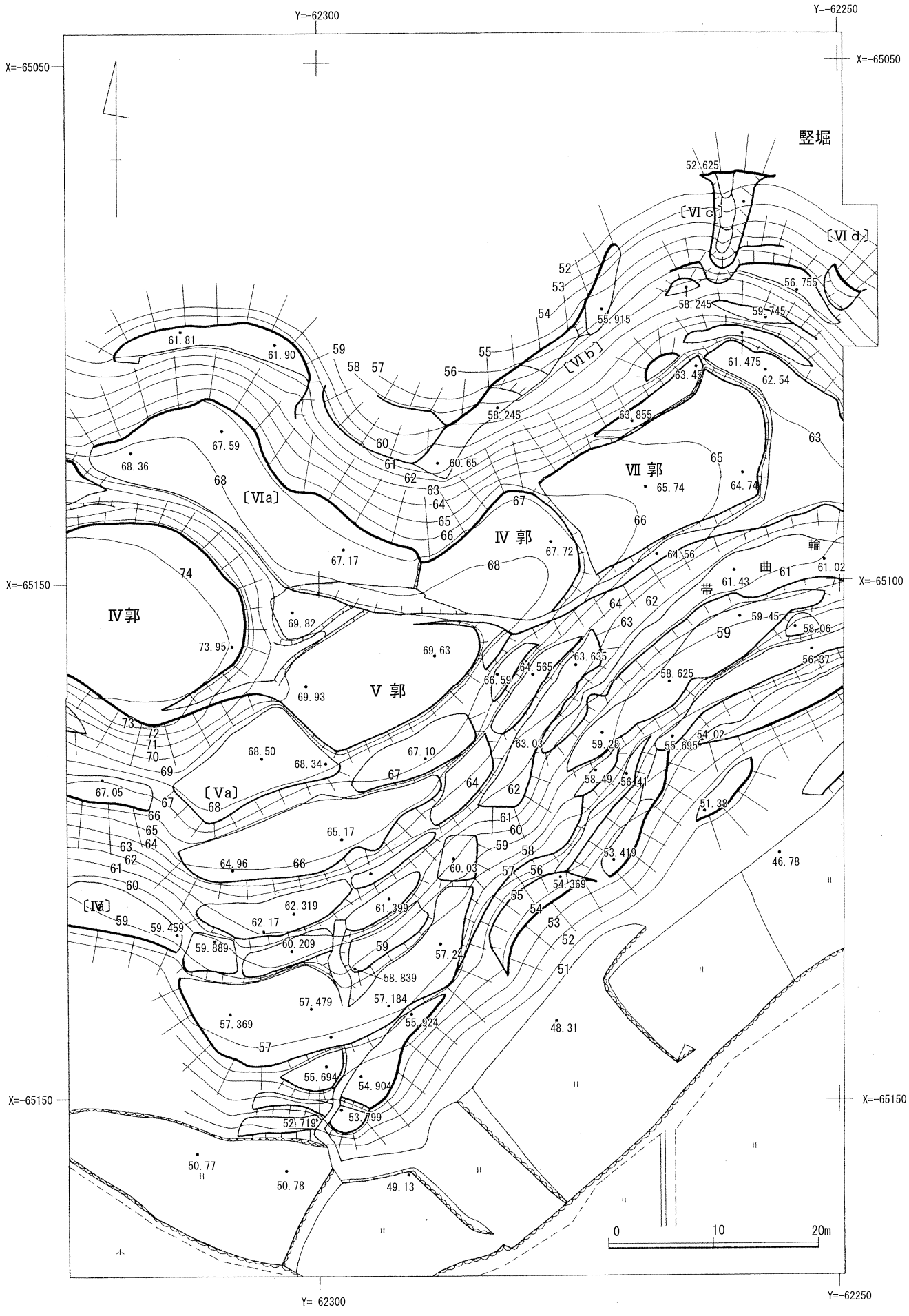
Ⅲ郭

標高77mラインにあり、Ⅱ郭との比高差4.80m。主軸方位N74° W、全長44m、幅は東端で14m、西側で窄まる。この状況は、西端箇所が尾根筋の変化点にあたり、小さな括れ部である事に関連する。そのため北西端下は、窪地（比高差0.6 m)となっており、ここに堀切の埋没も推定される。西端には、岩盤をブリッジ状に整形したⅡ郭への登城道がある。

〔Ⅲ-a〕は、北下の斜面を走行する横堀で、肩部に土塁が残存する。横堀の底部は、標高69



第９図　棚底城跡測量図②



第10図　棚底城跡測量図③

mラインにあり、Ⅲ郭との比高差8.0m。東側は弧状を描き、端部が竪堀の様相を呈する。土塁の長さ15m、堀底の全長37m、土塁と横堀との比高差0.57m。一方、Ⅲ郭の南下には、標高72mから標高61mのラインの間に、Ⅳ郭を跨ぐ格好で、やや大きめの小段が並列している。この中で、標高71m～72mのラインにある〔Ⅲｂ〕は、三日月形を呈し、全長31m、幅は中央部で5.5m、東端で完全に窄まる。

Ⅳ郭

標高75m～74mラインにあり、Ⅲ郭との比高差1.8m。段差面には上部が崩れているが、地山産の割石を積み上げた野面積みの石積が残る(注7)。Ⅳ郭の主軸方位は、Ⅲ郭と同一で全長52m。平場は、中央部がやや窪んでいる。幅は西端で17m、東端で16m、中央部で11.5m。南下には、小段と標高62m～59mラインに2箇所の帯曲輪が並列する。この中で標高58m～59mラインの〔Ⅳａ〕は、全長46m、幅3.0m。

（注7）地山産の頁岩の割石を積み上げた状況は、天草郡苓北町の富岡城跡から検出された最も古い石積に酷似する。富岡城は近世城であるが、発掘調査によって中世城時代と推定される野面積み石積が検出された。『富岡城跡Ⅴ』苓北町教育委員会　平成13年度

Ⅴ郭

この郭から主軸方位が変化して、Ⅶ郭までN55°Eとなる。Ⅴ郭は標高69m、Ⅳ郭との比高差4.0m。全長18m、幅11m、東端が窄まる。西端からⅣ郭への登城道が上っている。〔Ⅴａ〕は、段差下の張り出し区画で、Ⅴ郭との比高差1.5m、長さ8.0m、幅は西端で5.0m、東端で8.0m。

Ⅵ郭

標高67m～68mラインにあり、Ⅴ郭との比高差1.9m。全長17m、幅11m、西端は6.0mに窄まりⅤ郭へ上がっている。〔Ⅵａ〕は、段下がりの帯状地形で、Ⅵ郭との比高差0.55m。Ⅳ郭下まで延びて、長さ33m、幅6.0 ～10m。

Ⅶ郭

標高66m～64mラインにあり、Ⅵ郭との比高差1.72m。全長21m、幅11m。Ⅵ郭に接する西縁ラインは、ほぼ直線に整形されている。南縁と東縁には、野面積みの石積が積まれているが、崩壊が目立つ(注8)。

（注8）この箇所の石積は、安山岩系の積み石で、Ⅱ郭やⅣ郭の石積と同様に上位部分が欠損している。

Ⅳ郭～Ⅶ郭の両斜面

〔北側斜面〕〔Ⅵａ〕の下位には、標高52mまでの間に細長の小段や竪堀が残っている。この内、〔Ⅵｂ〕は犬走りの様で、全長29m、幅2.0～3.0 m、標高62mから52mラインを下っている。大方、北側斜面は急傾斜であるため遺構は少ない。二条の竪堀〔Ⅵｃ・ｄ〕は、この地点に限って山腹がやや張り出すための防禦施設と考えられる。地形を挟み込む様に掘り割られているが、〔Ⅵｄ〕はほとんど崩壊している。

〔南側斜面〕一帯が緩斜面であるために、数多くの小段が重なる。特にⅤ郭下は、斜面部が舌状形に突き出しているために、〔Ⅵｃ・ｄ〕と同様な対処がなされている。一方で、この地形を利用して、小段群の間を登城道と推定される小道が上がっている。棚底川の対岸に居を構える世帯の中に「大手」姓も残っている事もあって、この小道の入り口が「虎口」と見なされている(注9)。

（注9）「大手」姓は、屋号もしくは土地の呼び名に由来していると推定している。近くに棚底城の「大手」が存在したという考えが地元にある。

Ⅷ郭

棚底城跡の東端部に該当し、ここから主軸の方位はS86°Eに変化する。全長41m、幅は西端で16m、中央部でやや括れて7m、東端で8.6m。西側寄りでⅦ郭との比高差1.74m。西端では、二又に分かれてＹ字形をなす。段差面に野面積み石積が残存する。東端は一段高く上面が円形を呈する。長さ18.5m、Ⅷ郭中央部との比高差0.4m、中央部で最大幅8.5m。位置的に物見の区画の様相をなす。なお、丘陵東端下からの小道は、後世に造られた農道である。

〔Ⅷａ〕は、主軸ラインに沿った斜面部にあり、弧状をなすものであるが、農道によって二分されている。元来、南北25.5m、東西11m幅の削平地である。ただし、この箇所と丘陵裾部を走る道路とは、比高差が僅か14.12mに留まり、防禦の面で大いに不安を感じる。有事の際、ここ

第11図　棚底城跡測量図④

から敵勢が駆け登れば一溜りもないであろう。対応策として、裾部の(現)水田地には柵などを巡らす必要も出て来るが。そうでなければ、丸腰状態で、かなりのリスクを伴う箇所である。

北側谷部の東側

城跡の東端部に溜め池(通称： 城後池) があり、池の西端から農道が山中へ続いている。城跡の北側下には、先述のように帯状の谷部が下る。

第３節　Ｉ郭発掘調査の成果

足の踏み場も無い程に繁茂していた孟宗竹や雑木を伐採した後で、樹根を山鍬で丁寧に除去すると、すぐに岩盤面が露呈した。竹木の根が混じる褐灰色土の表土は軟らかく極めて薄かった。表土を除去した後の岩盤の上面は、箇所によって細かな薄い亀裂がビッシリと入り、移植ゴテを当てると、バラバラになって剥離した。そこで、これを削り取ると、固い岩盤面が現れた。この段階になって初めて柱穴の掘り込みラインが確認できた。柱穴の内部には、剥離した多量の頁岩と砂岩と褐灰色土が詰まっていた。柱痕は確認できず、切り合っている柱穴の埋土色にも差異はなかった。恐らく、建築柱は、掘形に差し込む方法で据えられたのであろう。廃城に際しては全て抜き取られたと考えられる。柱穴の埋土には、白磁・青磁・青花などの輸入陶磁器をはじめとして、日用雑器の土師器などが混入していた。

柱穴の検出状況から、〔Ｉａ〕は築城に際して、一旦、表土を全部除去して岩盤を露呈させた上で工事に着手したものと思われる。表土を残したままの岩盤掘削には、無理がある。柱穴の側壁には、多くのノミ痕が残っていた。拓影を P27～29 に掲載したが、丁寧で細かな作業がなされていることが分かる。柱穴自体は、建築柱を建て込んだ後、外部に晒される事も無いので、柱径の大きさと深さだけを確保できれば、側壁の多少粗い掘削も許されるであろうが、そうでないのは、棚底城に携わった石工集団のこだわりであろうか。

柱穴は、数多く検出されたものの、掘立柱建物の復元ラインから外れるものが多く、疑問を残した。概して、岩盤に掘り込まれているために、樹根痕と柱穴を誤認するような事もなく、全てが意味を持つ掘削である。その為に現場で幾度となく推論し、建築専門家を交えて詳細な検討を繰り返した。結果として、西島眞理子氏は、建物の構造について３パターンを推察した。復元ラインは、P34、P35、P37 に示した通りであるが、かなりの柱穴が建物の復元線引きから漏れている事が分かる。それらの中には、大きさや深さからして、無視出来ないものも幾つかある。これらの柱穴は如何なる役目を荷なったのであろうか。

疑問視されるのは他にもある。皿状の浅い掘り込み穴は、単に支え柱の受け皿なのか、それとも硬い岩質部分に遭遇して、掘削を断念した掘り残し穴なのか。底部に根石を有するものさえある。常識的に考えて土中に掘り込まれた柱穴と違い、底部が安定しているので全くの不用物と思える。もし、柱高を揃えるためならば、根石で調整するより、柱の上部で切り揃えればよい。この事に加えて、根石もそれ程、大きくなく、厚みも無いことから尚更という気がする。根石の有無は、ほとんど影響を及ぼさない事は確かである。

Ｉｃ

段下がり区画の地山から杭列跡が検出された。地山は、岩盤の所と土質の二カ所があった。杭列跡は、地形に沿う形で４列が整然と並んでいた。５列目の存在も伺われるが、この列は長さ 10.3 mに留まり、並びにも多少のバラツキが見られた。〔Ｉａ〕の掘立柱建物跡とセットをなす構築物と推定されるが、両者の並びにズレが生じている。B'の建物跡の南北側主軸方位はＮ18° Ｗ、杭列跡の方位はＮ63° Ｅ。杭列の並びが地形に制約された結果との見方も出来るが、はっきりしない。

杭列跡群は、東西幅 15m、南北４mに収まり、個々の掘り込みは、深さ 10 ㎝前後に留まる。そこで、現場では、縁台跡や舞台跡ではないかと推論した。そうとしか考えられない状況にあったことも事実である。最終的に「数多くの支柱と床板の重みによって、上物の構造物が安定した」

とする推論に至った。

岩盤に掘られた柱穴とノミ痕

※柱穴写真の●印は、ノミ痕拓影を採取した側壁面。

No. 8 ：地山の岩盤は凹凸が目立つ。柱穴は凸箇所に掘り込まれて、浅い掘削に終わっている。
〔長径 28 cm×短径 24 cm×深さ 6 cm〕

No.25 ：柱穴の切り込み面は角張る。ノミ痕からも分かる様に側壁が直状態に削り取られている。角柱を埋め込んだのであろうか。
〔長径 18 cm×短径 14 cm×深さ 22 cm〕。

No.27 ：柱穴は、丁寧に掘削されている。側壁は、凹凸を除去するために整形されている。ノミ痕は浅い。
〔長径 46 cm×短径 34 cm×深さ 49 cm〕

No.34 ：柱穴は浅い掘り込みで、底部は隅丸の方形をなす。深く掘られた柱穴に切られている。
〔長径 30 cm×短径 26 cm×深さ 6 cm〕

No.37 ：直径 60 cmの大きな柱穴で、半裁状態にある。片面は底部まで掘削され、残りは掘り残されている。
〔長径 60 cm×短径 48 cm×深さ 39 cm〕

No.44 ：非常に浅い皿状の柱穴。掘削を中止したのか、支柱の受け皿なのか不明。
〔長径 34 cm×短径 26 cm×深さ 15 cm〕

No.60 ：やや浅いが、丁寧に掘削された柱穴。
〔長径 20 cm×短径 20 cm×深さ 10 cm〕

No.106：深く掘削された柱穴。側壁は整形されて、ノミ痕が余り残っていない。
〔長径 42 cm×短径 30 cm×深さ 49 cm〕

No.109：側面は、やや粗い仕上げの柱穴。岩質が硬いためか、やや歪な形状に終わっている。
〔長径 22 cm×短径 14 cm×深さ 21 cm〕

No.122：柱穴の切り込み面は、方形と円形に分かれる。
〔長径 20 cm×短径 18 cm×深さ 14 cm〕

No.127：柱穴の側面に、細かな縦位のノミ痕が残る。
〔長径 22 cm×短径 20 cm×深さ 32 cm〕

No.142：柱穴の底部は方形で、角柱を埋め込んだと推定される。側壁に、縦位のノミ痕がくっきり残る。
〔長径 30 cm×短径 24 cm×深さ 29 cm〕

No.168：柱穴の側面には、上下二段に分かれたノミ痕がある。
〔長径 30 cm×短径 18 cm×深さ 18 cm〕

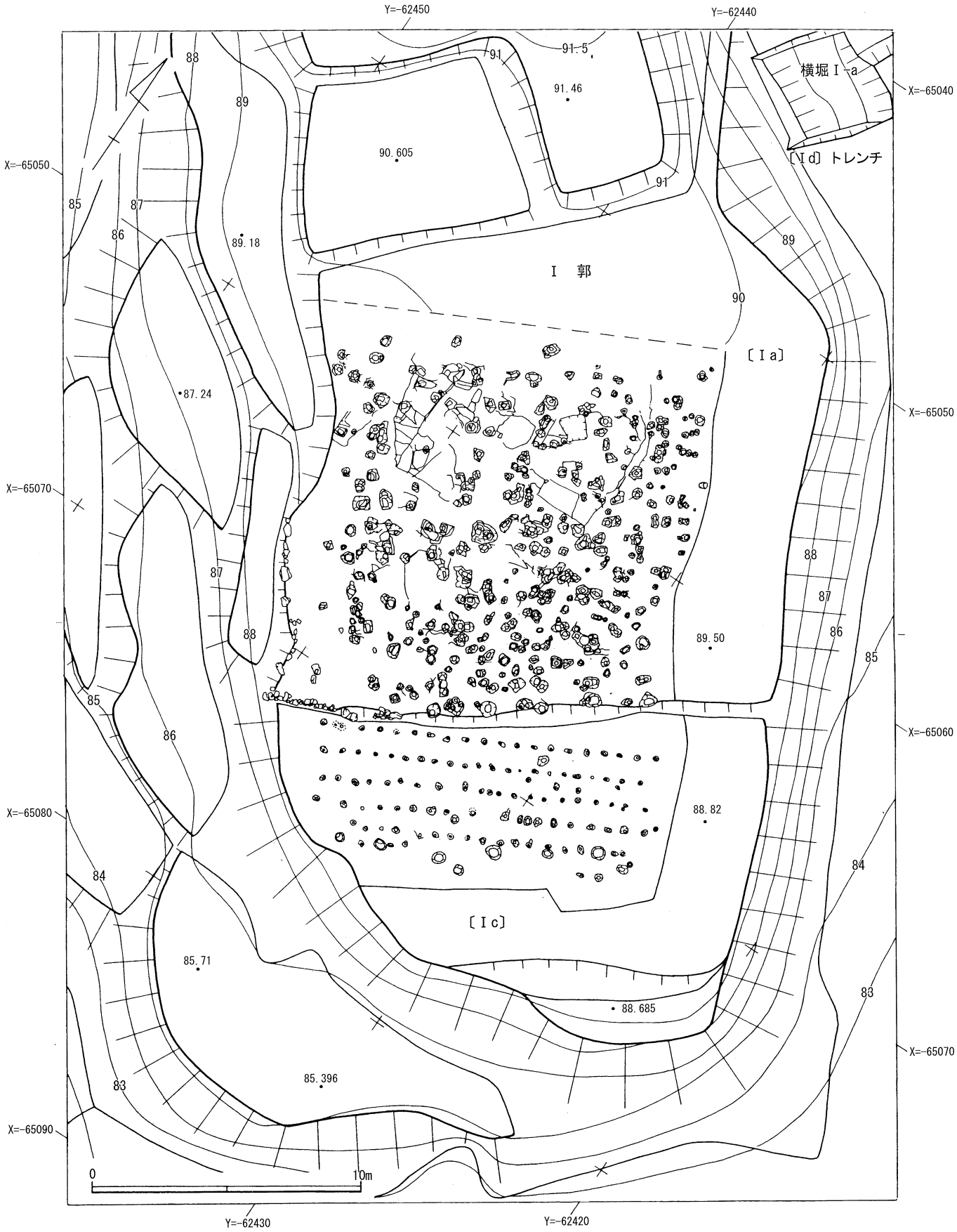
No.182：柱穴の側壁には、太線で縦位のノミ痕が残っている。太めの工具が使用されている。
〔長径 44 cm×短径 34 cm×深さ 46 cm〕

No.201：柱穴の側壁には、極細の縦位のノミ痕が残る。小さな工具で仕上げされている。
〔長径 40 cm×短径 32 cm×深さ 35 cm〕

No.210：柱穴の側面に、混然としたノミ痕が残る。
〔長径 24 cm×短径 20 cm×深さ 27 cm〕

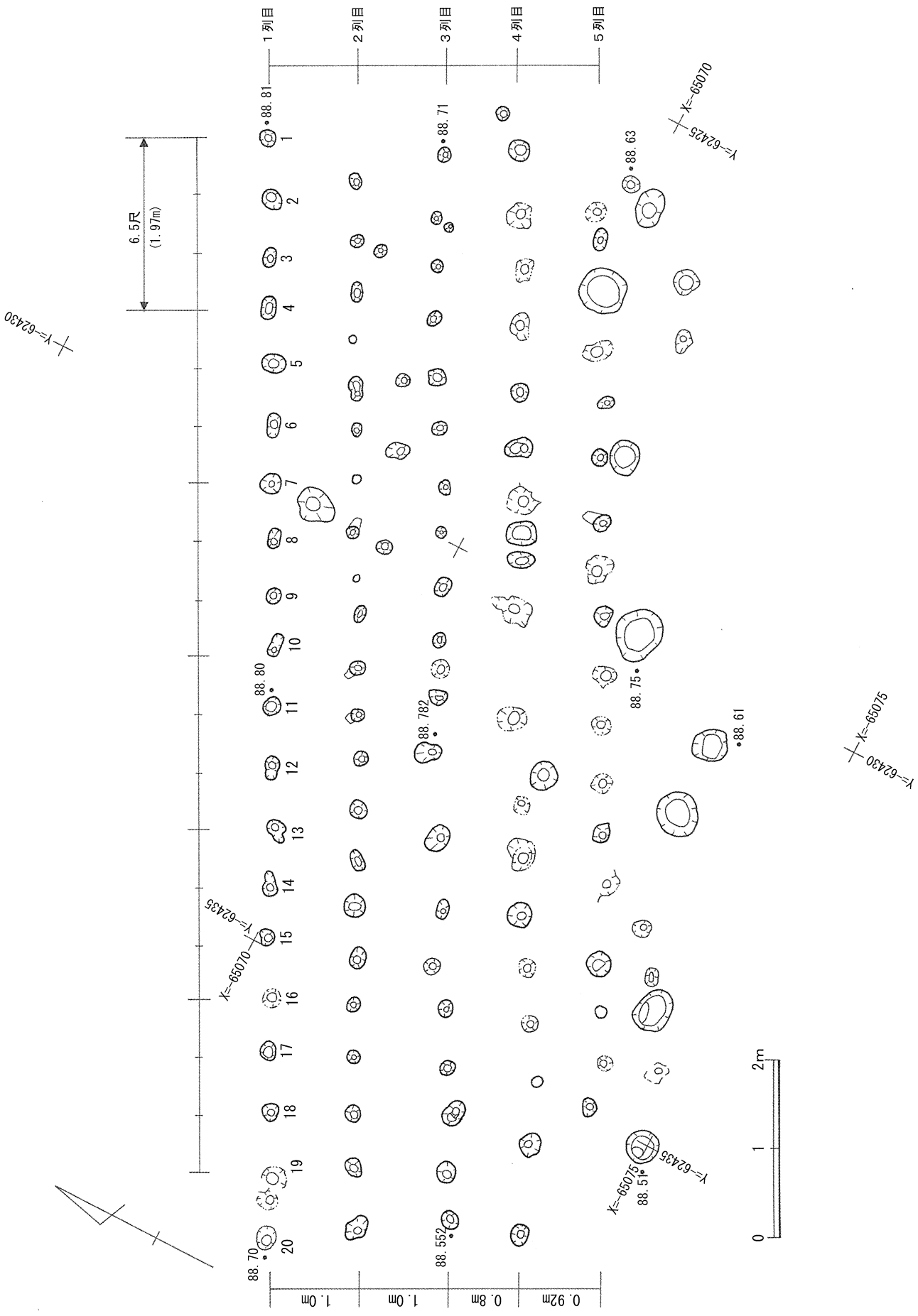
No.251：柱穴の側面は、丁寧な仕上げがなされ、ノミ痕も線自体が薄くなっている。
〔長径 32 cm×短径 30 cm×深さ 48 cm〕

No.263：丁寧に掘削された柱穴。
側面には、縦位の細かなノミ痕が残っている。
〔長径 34 cm×短径 30 cm×深さ 71 cm〕


Y=-62450
Y=-62440
X=-65040
X=-65050
X=-65070
X=-65060
X=-65080
X=-65090
Y=-62430
Y=-62420
横堀Ⅰ-a
〔Id〕トレンチ
Ⅰ 郭
〔Ia〕
〔Ic〕
91.5
91
91.46
90.605
89.18
87.24
89.50
88.82
88.685
85.71
85.396
0
10m

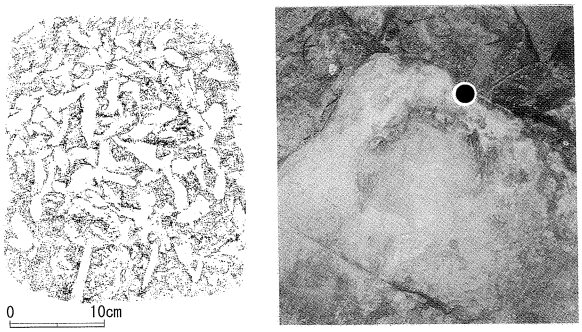
第12図　Ⅰ郭測量図

第13図　〔Ia〕・〔Ic〕遺構実測図

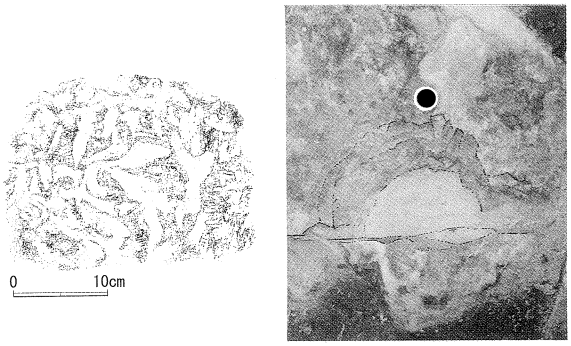


第14図　〔Ｉc〕検出の構造物跡実測図

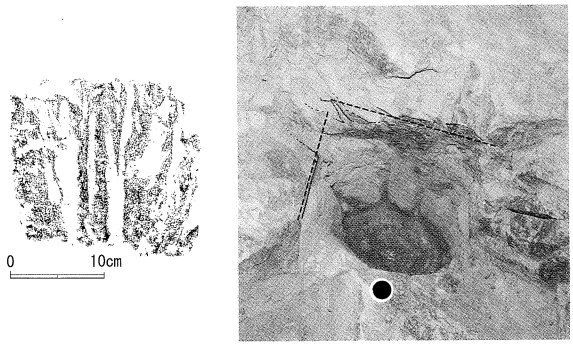
〔岩盤に掘られた柱穴とノミ痕〕　※柱穴写真の●印は、ノミ痕拡影を採取した側壁面。



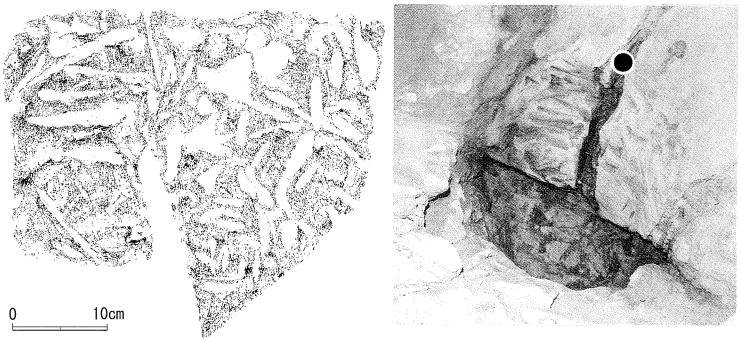
No.8：地山の岩盤は凹凸が目立つ。この柱穴は凸箇所に掘り込まれたものの、浅い掘削に終わっている。
〔長径28cm×短径24cm×深さ6cm〕



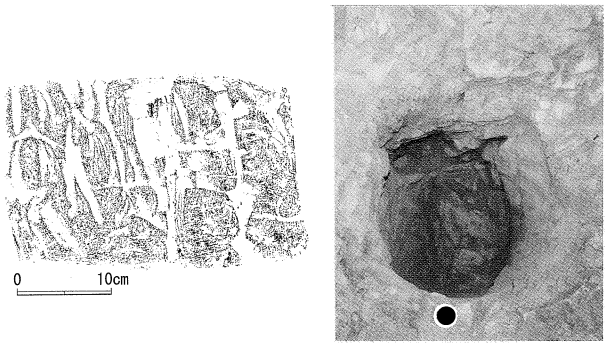
No.34：浅い掘り込みで、底部の形状は隅丸の方形をなす。手前の深く掘られた柱穴に切られている。
〔長径30cm×短径26cm×深さ6cm〕



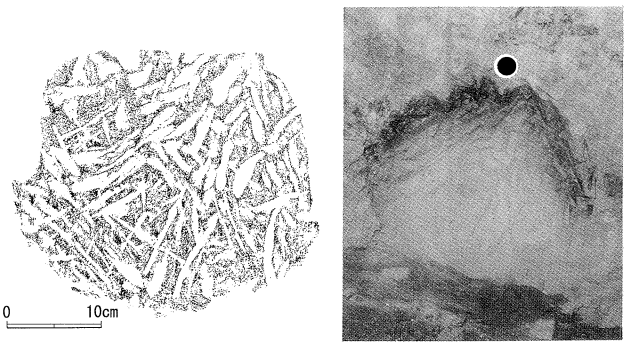
No.25：柱穴の切り込み面は、角張った形状にある。その箇所の側壁は直状態に削り取られている。ノミ痕もそのような形状をなす。角柱を埋め込んだのであろうか。
〔長径18cm×短径14cm×深さ22cm〕



No.37：直径60cmの大きな柱穴。半裁状態にあり、片面は底部まで掘削され、残りは掘り残しの状態を呈しており、理由は不明。
〔長径60cm×短径48cm×深さ39cm〕

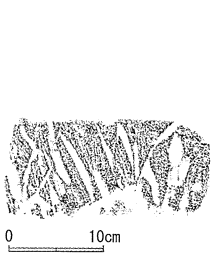


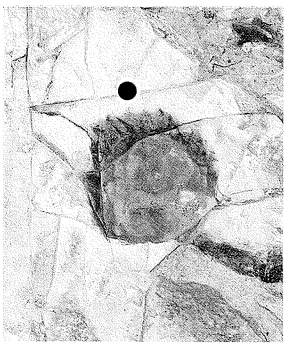
No.27：丁寧に掘削された柱穴。側壁は凹凸を除去するような整形がなされ、ノミ痕も浅く残っている状態。
〔長径46cm×短径34cm×深さ49cm〕



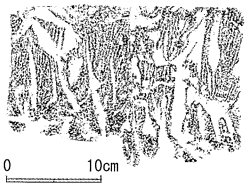
No.44：極めて浅い皿状の柱穴。掘削を中止したものか、それとも単なる支柱の受け皿的なものかは不明。確かに、この程度でも、支柱の滑り留めにはなる。
〔長径34cm×短径26cm×深さ15cm〕

第15図　〔Ⅰa〕柱穴側壁の拓影①



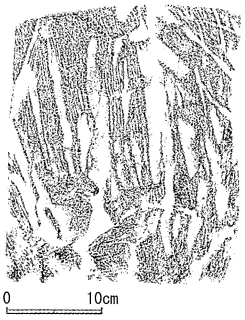


No.60：やや浅いが、丁寧に掘削された柱穴。これも支柱の滑り留めであろうか。
〔長径20cm×短径20cm×深さ10cm〕

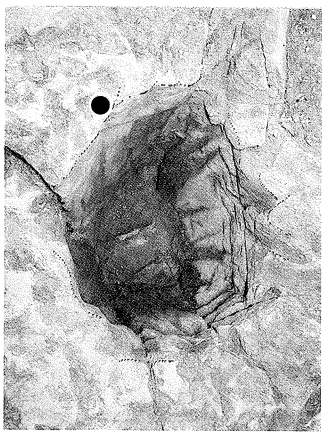


No.122：柱穴の切り込み面は、方形状と円形状に分かれる。
〔長径20cm×短径18cm×深さ14cm〕

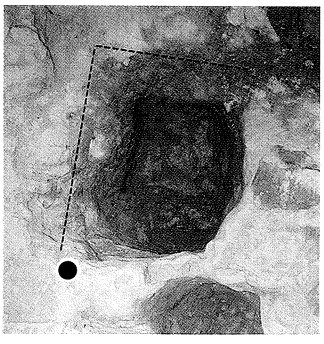
No.106：深く掘削された柱穴の側壁は整形されて、ノミ痕も、さほど残っていない。
〔長径42cm×短径30cm×深さ49cm〕



No.127：側面に細かな縦位のノミ痕が残る。
〔長径22cm×短径20cm×深さ32cm〕

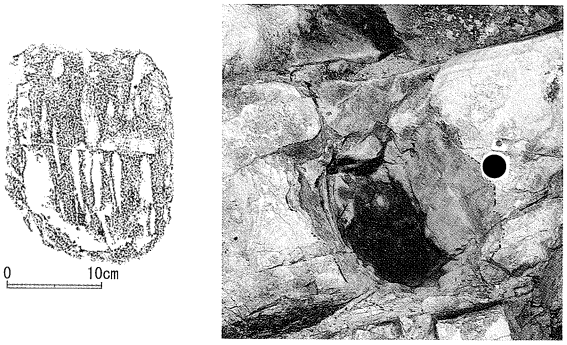


No.109：側面は、やや粗い切り上げ。岩質の関係からか、柱穴はやや歪な形状をなす。
〔長径22cm×短径14cm×深さ21cm〕

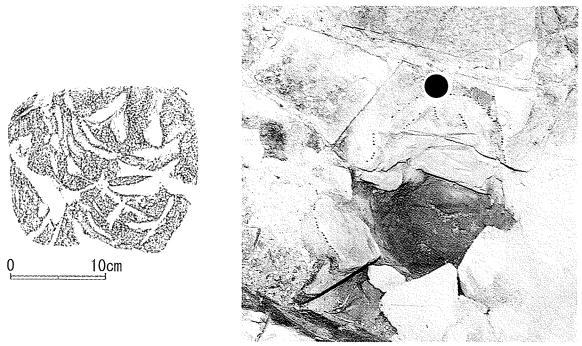


No.142：底部で方形状を呈する。角柱を埋め込んだものと推定される。側壁に縦位のノミ痕がはっきりと残る。
〔長径30cm×短径24cm×深さ29cm〕

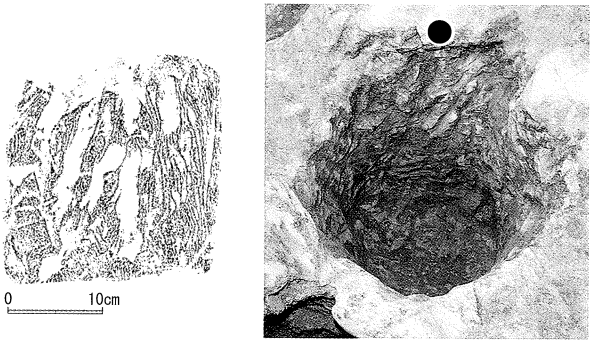
第16図　〔Ⅰa〕柱穴側壁の拓影②



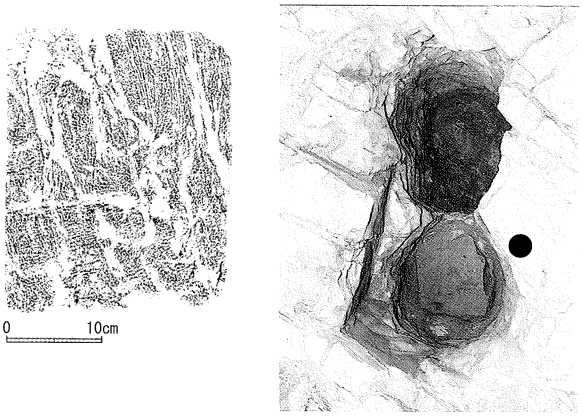
No.168：上下二段に分かれたノミ痕がある。
〔長径30cm×短径18cm×深さ18cm〕



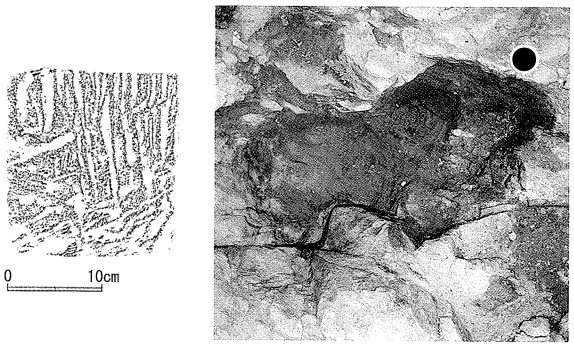
No.210：混然としたノミ痕が残る。
〔長径24cm×短径20cm×深さ27cm〕



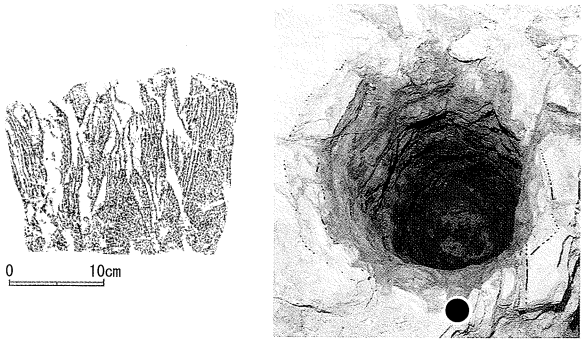
No.182：側壁に太線の縦位のノミ痕が残っている。
太めの工具が使用されたのであろう。
〔長径44cm×短径34cm×深さ46cm〕



No.251：側面は丁寧な仕上げがなされ、ノミ痕も線自体が薄くなっている。
〔長径32cm×短径30cm×深さ48cm〕



No.201：側壁に極細の縦位のノミ痕が残る。小さな工具で仕上げがなされている。
〔長径40cm×短径32cm×深さ35cm〕



No.263：丁寧に掘削された柱穴。側面も丁寧な仕上げになっている。縦位の細かなノミ痕が残る。
〔長径34cm×短径30cm×深さ71cm〕

第17図　〔Ⅰa〕柱穴側壁の拓影③

Ⅰ郭直下の東下と北下の調査

東下のＩｄに１Ｔ(トレンチ)、北下のＩｄ-１に２Ｔ、さらに東下のＩｆ・横堀３に３Ｔを設定した。

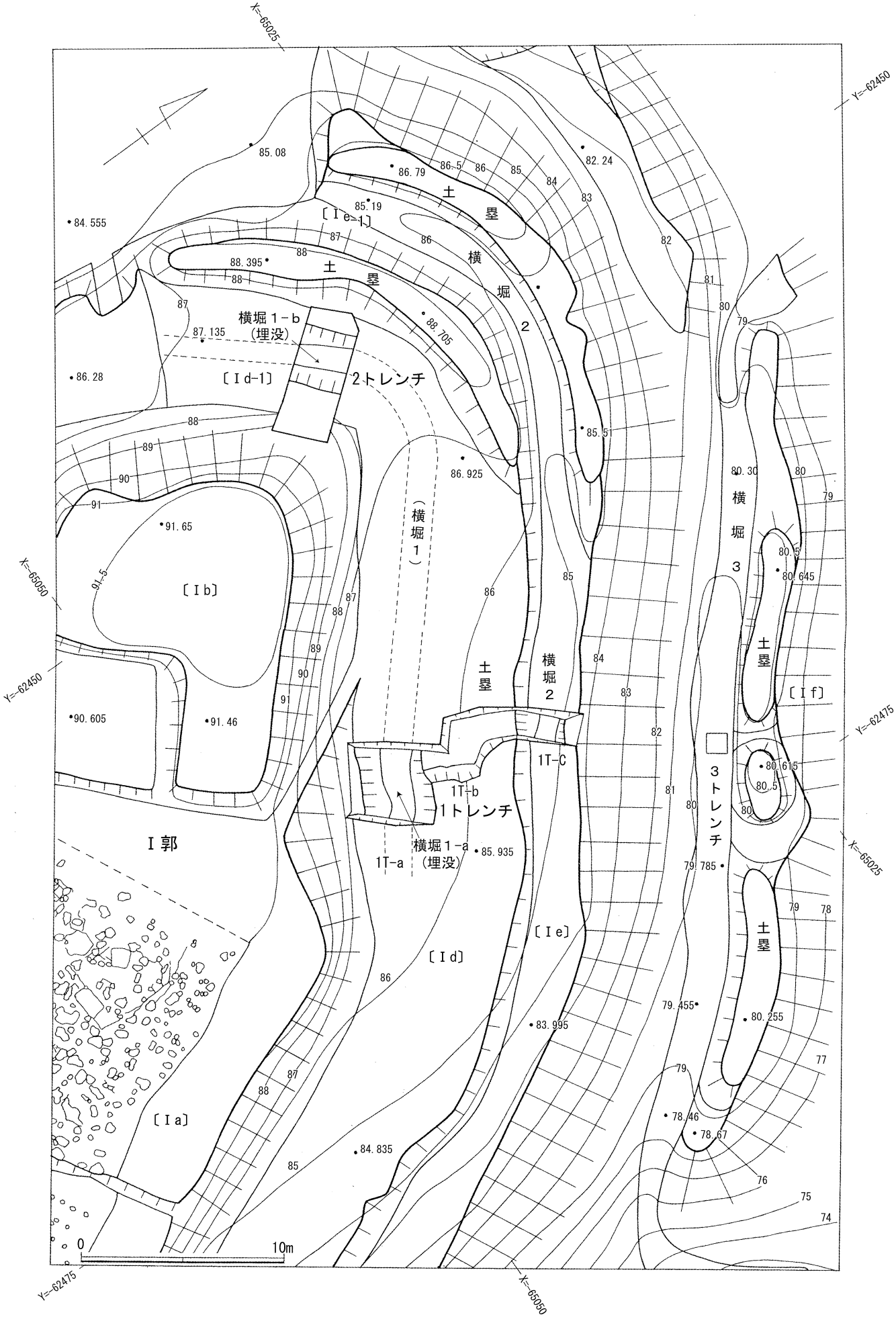
１Ｔ-ａ：完全に埋没していたが、堀跡が検出された。北側に現存する横堀１の延長部分である。この箇所に限っては、跡形も無い様に埋め立てられていた。調査の結果、削り落されたⅠ郭の法面との間に 0.5m幅の犬走りステップを設け、岩盤の地山を箱型に掘り窪めている事が判明した。堀の規模は、上場幅 3.6m、下場 1.2m、長さ 4.0m分を検出。岩盤からの掘り込みは深さ 1.7m。Ⅰ郭側の堀壁は平坦面に整形されて、柱穴と同様に丁寧で細かな作業がなされていた。

１Ｔ-ｂ：土塁は、完全に取り崩されていたが、結果の調査、土塁の痕跡が明らかになった。基底部は幅 4.7mで、土層断面で判明した残存の高さは 1.0m。積み土は版築状態にあったが、分層するには、非常に分かりづらい状況にあった。なお、Ｉｄ-1 に現存する土塁は、基底部が幅 3m幅。したがって、後世にかなり削られていることが分かる。土塁を崩した際に生じた派生土は、堀の埋め立てに利用された。

１Ｔ-ｃ：横堀２の延長部分が検出された。傾斜した地山の岩盤をＬ字型にカットして、肩部に小土塁を積み上げたものである。堀は、上場幅 2.7m、深さ 1.4m。肩部の土塁は、取り崩されていた。

２Ｔ：Ⅰ郭側の犬走りは幅 1.2m、横堀の規模は、上部幅 3.0m、下場幅 1.1m。長さ 2.7m分を検出した。岩盤からの深さは 1.1m。Ⅰ郭側の堀壁の整形は、１Ｔと比較すると、やや粗い感じがする。岩質の違いによるものと思われる。岩質は、こちら側が硬い。

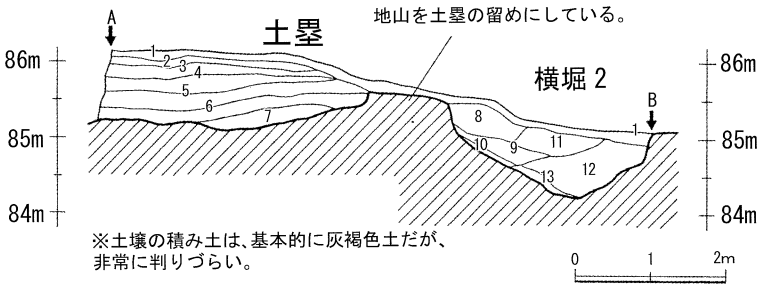
３Ｔ:横堀３に四方１ｍ足らずの小トレンチを入れた時、小堀を確認し、深さ 0.5mのところから、石製品の一部（後に「面取り風炉」と判明した）が出土した。完掘に至っていない。



第18図　Ⅰ郭直下三重横堀測量図

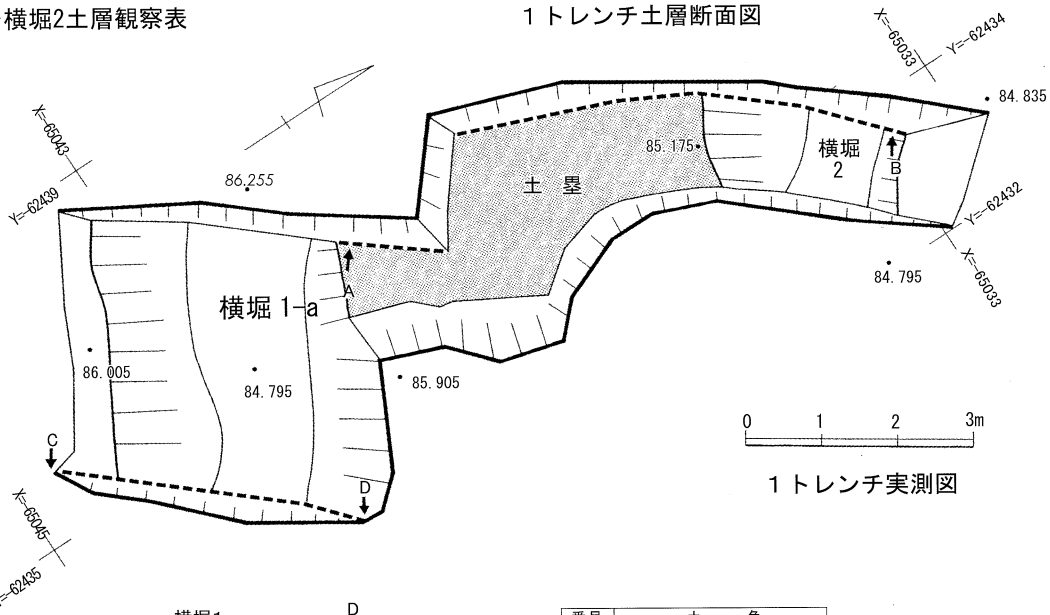
番号	土　　色
1	表　土
2	やや白っぽい
3	灰褐色土
4	灰褐色土（ブロック）
5	大ブロックが少し混入
6	大ブロックが少し混入
7	やや褐色土
8	褐色土（パサパサしている）
9	褐色土（やや硬質）
10	褐色土（小ブロック）
11	黄褐色土
12	褐色土（やや軟質）
13	褐色土（大ブロック）

土塁～横堀2土層観察表

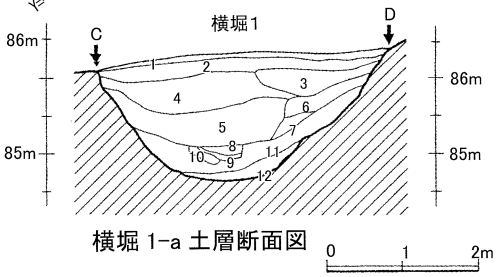


※土壌の積み土は、基本的に灰褐色土だが、
非常に判りづらい。

1トレンチ土層断面図



1トレンチ実測図

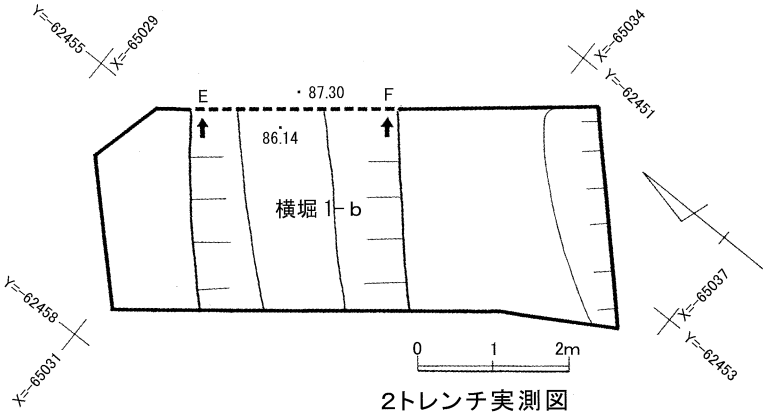


横堀 1-a 土層断面図

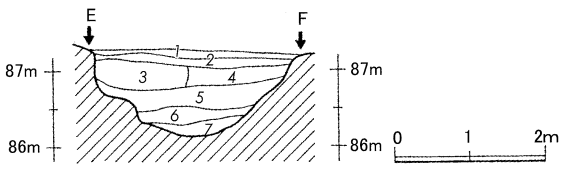
番号	土　　色
1	表　土
2	褐白色土
3	灰褐色土（地山の岩盤が混入）
4	灰褐色土
5	灰褐色土（小指大の炭化物が混入）
6	灰褐色土+黄褐色土
7	黄褐色土+地山の岩盤切り込み
8	灰色色土（ブロック）
9	チョコレート色土
10	黄褐色土（ブロック）
11	黄茶褐色土
12	灰褐色土（自然堆積か？）

横堀 1-a土層観察表

※底部は平坦。
※全体的に埋土は自然堆積ではなく、破城の際に一気に埋められたと思われる。



2トレンチ実測図



横堀 1-b 土層断面図

番号	土　　色
1	表　土
2	褐白色土
3	攪乱層
4	褐色土+黄褐色土
5	白褐色土
6	白色土＞褐灰色土
7	褐灰色土

横堀 1-b土層観察表

第19図　横堀トレンチ実測図

城跡の建物跡復元プランについては、西島眞理子氏によりご検討いただいており、既刊報告書『棚底城跡』でⅠ郭について、『棚底城跡Ⅱ』でⅡ～Ⅷ郭についての玉稿を掲載している。本書ではⅠ郭についてを第４節で、Ⅱ～Ⅷ郭についてを第６節で再掲する。

第４節　Ⅰ郭検出の掘立柱建物について

熊本県建築士調査研究委員会副委員長　西島眞理子

Ⅰ郭にはどのような掘立柱建物が存在していたのかを推定するため、あらかじめ判っていることを示す。

①岩盤面には、おびただしい数の柱穴状の穴（床束穴を含み、以後、柱穴と記す）が存在している。それらの中には、重なって掘られているものもあり、何回か建て替えがあったことがわかる。原因としては、掘立柱建物は礎石建物に比べ根元が腐朽しやすいため耐用年限が短いことや、数度の戦いによる破損、城主の入れ替わり時期の普請などが考えられる。調査結果から、火災による建て替えはない。

②この一帯は、現在でも、石を積み上げた独特の高い塀によって住宅が囲まれていることからわかるように、季節によって倉岳から吹き下ろす風や、八代海からの風が著しく強い地域である。したがって、強風による建物への甚大な被害が度々あったと思われる。

③Ⅰ郭周辺部から散在の状態で頭部大の石が見つかっている。板葺き屋根の場合は、強風時に屋根が吹き飛ばないように、屋根板の上部に重しの石を置くことがある。まとまった量の石が発見されなくても、戦時に武器（投げ石）として使ってしまったとも推定でき、重しの石を乗せた板葺き屋根が存在した可能性は残る。他には、こけら葺き、檜皮葺き(または杉皮)、草葺きなどが考えられるが、建ちが高くなる草葺き屋根は、秋冬に風が著しく強いこの地には不向きである。

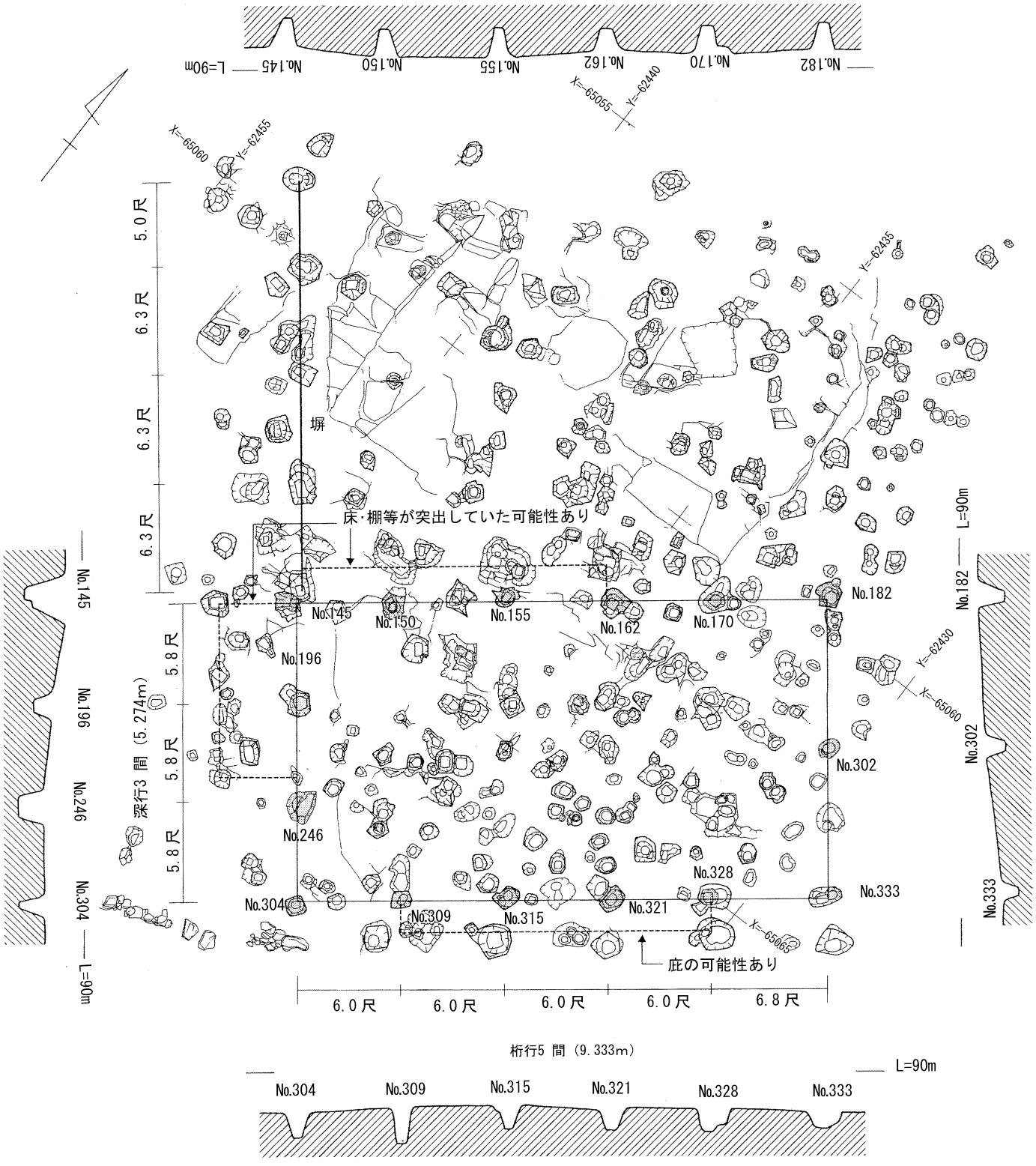
④出土遺物については、擂鉢や灯火具などの生活雑器をはじめとし、茶の湯に用いられた風炉や茶臼、天目茶碗、また輸入陶磁器の青磁・白磁・染付などが出土している。これらの遺物から、Ⅰ郭には、普段の生活空間と共に、茶の湯で客をもてなす接客空間があったと推定できる。中世から近世初頭の遺物の年代は、13 世紀から 17 世紀前半まで幅広いが、大半のものが 15～16 世紀で、その頃がⅠ郭での建物の最盛期であったのだろう。実際、『八代日記』には、天文 13 年(1544)～永禄９年(1566)の事として、天草五人衆である上津浦氏と栖本氏の争いの記録がある。

⑤柱穴には、大きさや深さ、掘り方、根石の有無などに差異が見られたが、岩盤層の堅さや状態が一様ではないところから、これらを基準とした時代差の判断が現段階ではできていない。

Ⅰ郭は、背面から高い山に守られ、正面は海を見晴らせる好適の位置であり、周囲の曲輪の配置からみても城主の館が建てられていたと考えられる。検出された柱穴の状態から、柱は加工した角柱を使い、基準値で柱通りを揃えた建物であろうと推定した。一見、無秩序に見られる柱穴群の中から、精査によって一定間隔おきに直線上に並ぶ柱穴列を拾い出すことができた。その中で、海に面して少し交差する柱穴列が２本あり、それらとうまく対応すると思われる柱穴列も確認できた。１本は、基準寸法６尺ピッチ、他は６尺５寸ピッチで、柱間は、いずれも５間である。時期は不明で、どちらが先行するか判断しかねるが、それらの柱穴列を基準として建物を推定した。

掘立柱建物Ａ（６尺ピッチ）

この柱穴列を基準とすると、梁間３間（６尺弱×３間）・桁行５間の建物が推定できる。１間づつ柱が建ち、梁がすべて柱に架かる最も安定した構造となる。海側の前面に庇が付く。西面にも規則正しく柱穴が並んでいるが、これは防禦や風除けのための塀と推定する。

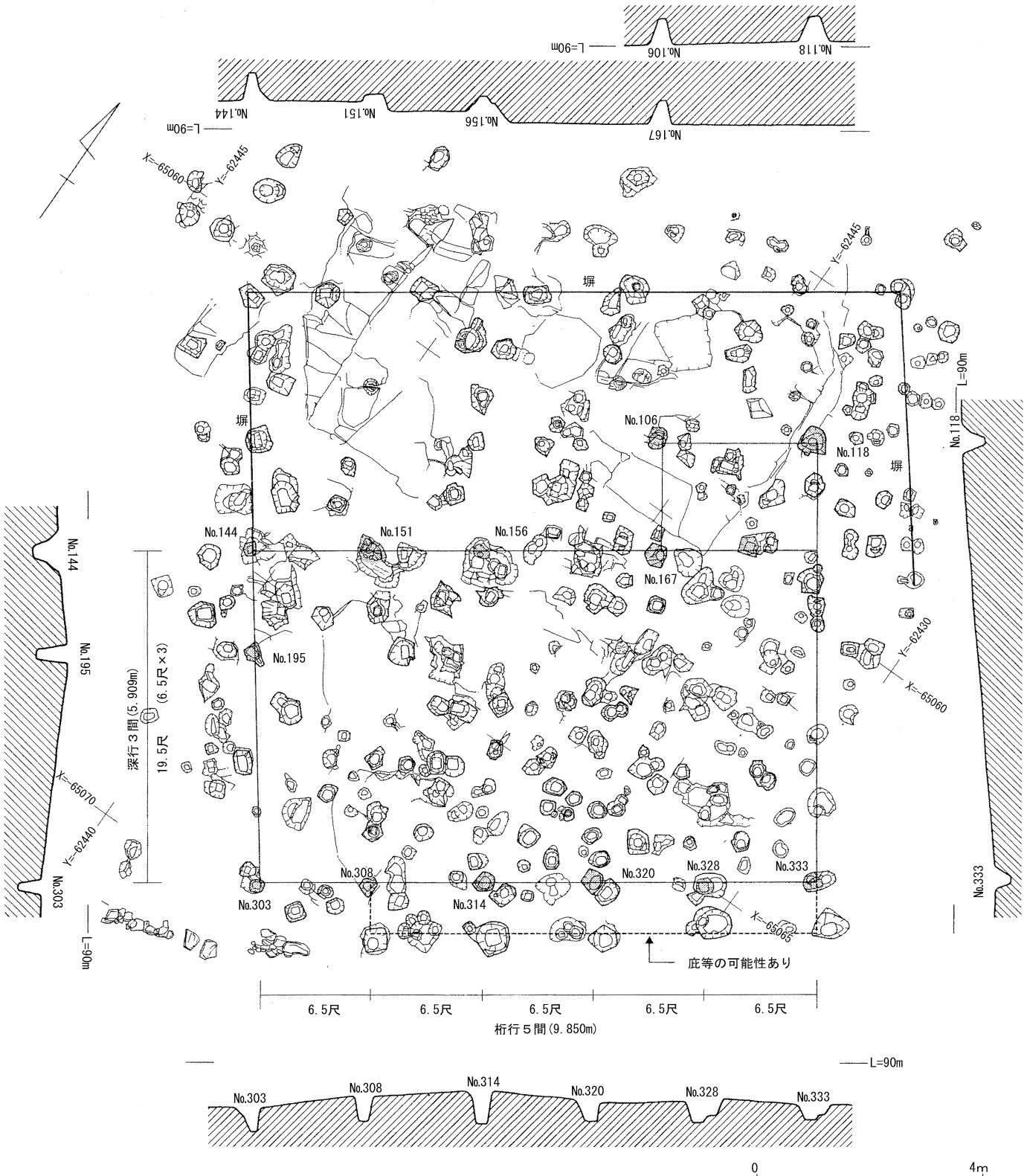


第20図　〔Ｉａ〕検出の掘立柱建物Ａ

掘立柱建物Ｂ（６尺５寸ピッチ）

基本は梁間３間・桁行５間の建物であるが、北側の隅に部分に柱がないため、少し延長させた。海側の前面に庇が付く。また北西面には、防禦や風除けのための塀が廻ると推定する。

また、１間ごとの柱穴は確認できないが、Ａ・Ｂとも、ヌレ縁が廻っていた可能性はある。ヌレ縁は、あまり荷重がかからないので、縁束は掘立としなくても、岩盤の上に直に建てたり、木片か石を飼物にして建てることもできるからである。



第21図　〔Ｉａ〕検出の掘立柱建物Ｂ

では、梁間３間・桁行５間の建物とはどのようなものか考察する。この頃の城主の館の建築遺構は他事例が無いが、13～15 世紀の絵巻物には、３間の梁間の建物が多く描かれている。しかし、建物は一部しか描かれていないため、桁行の規模が不明なものが多い。その中で、時代はやや遡るが、14 世紀初めの『法然上人絵伝』の中の「漆時国の住居」には、縁をめぐらした主屋・馬屋・付属屋などが配置された武士の館全体が描かれており、貴重である。主屋は、３間×５間の母屋に１間×２間の中門廊が取り付いた建物で、ＡやＢの建物と同規模である。この規模であれば内部には、鎌倉時代後期から室町時代を通じて「主殿」といわれる建物に多く設けられた３間×３間の「九間」と呼ばれる正式な座敷を取ることもでき、館とみなしても誤りではないと思われる。

しかし、一般的には、館は、城主が対面を行う床・棚を備えた座敷等の接客空間だけではなく、城主がくつろぐ私的空間、また家臣の控える空間等も含む建物と考えられる。それらを合わせると３間×５間程度ではなく、もっと広い平面の建物があったのではないかと推定する。そのような推定のもとに３間×５間の建物を拡張させてみた。Ｂの建物と構造が一部で重複するため、Ｂ'とする。

表A　A建物跡　柱穴計測表　（単位：cm）

遺構No.	長径	短径	深さ	備　考
No.145	40	30	59.8	
No.150	40	32	50.5	甕(第42図-96)
No.155	40	28	42.3	
No.162	48	46	40.8	
No.170	30	34	52	
No.182	44	32	46	ノミ痕
No.196	46	40	32.2	
No.246	60	48	49.2	
No.302	42	30	36.3	
No.304	32	32	46	
No.309	34	30	63	土師器(第41図-88)
No.315	42	30	44.5	
No.321	46	30	40.2	
No.328	58	40	41.2	
No.333	58	32	36	

表B　B建物跡　柱穴計測表　（単位：cm）

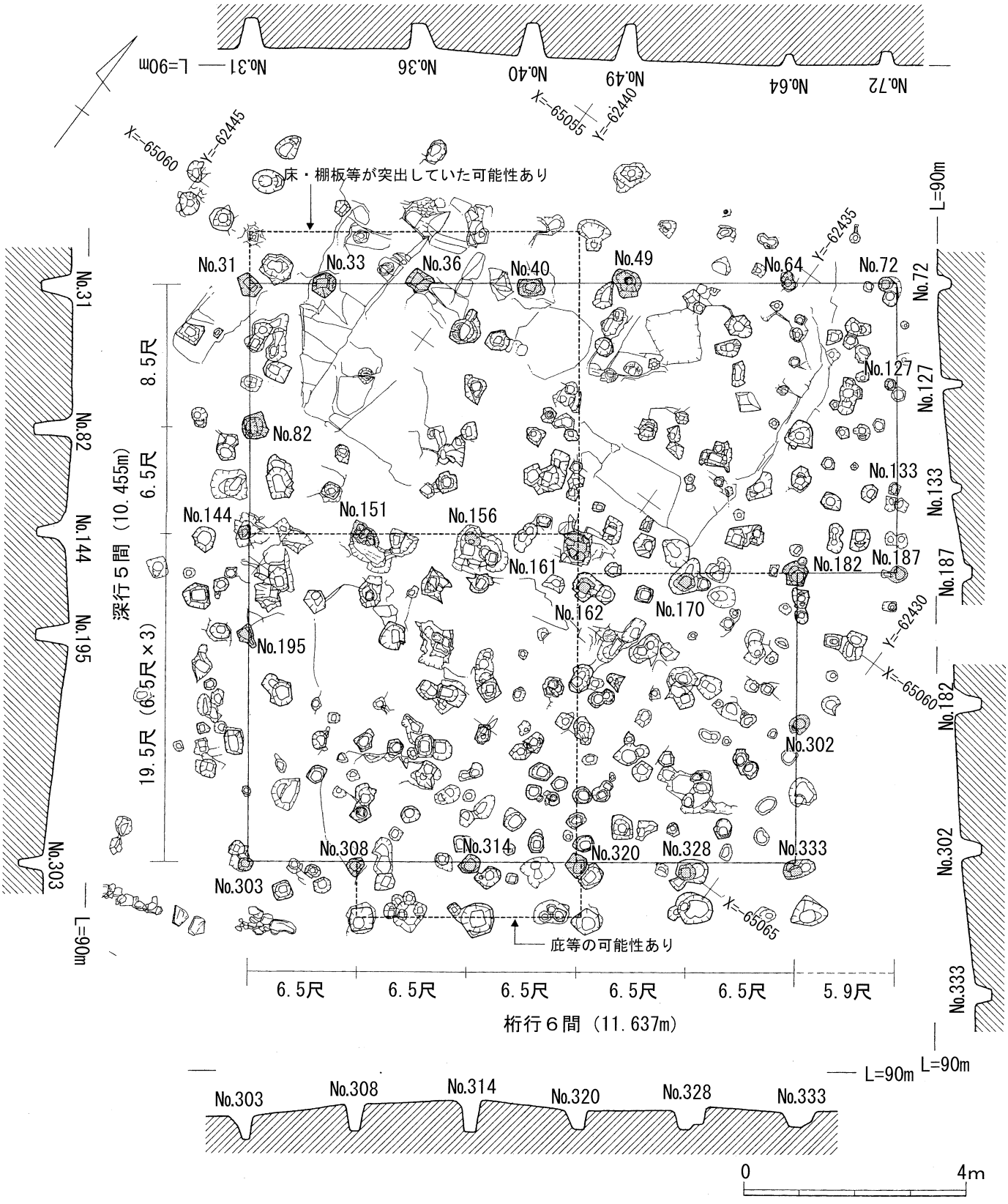
遺構No.	長径	短径	深さ	備　考
No.106	40	30	49	ノミ痕
No.118	50	48	42.5	
No.144	25	20	40	
No.151	46	40	35.5	
No.156	28	24	31.3	
No.167	40	36	41.5	
No.195	40	30	59	
No.303	25	25	42.8	
No.308	34	25	47	
No.314	40	34	56	
No.320	38	34	41.2	
No.328	58	40	41.2	
No.333	58	32	36	

表C　B'建物跡　柱穴計測表　（単位：cm）

遺構No.	長径	短径	深さ	備　考
No.31	46	36	52.5	
No.33	46	44	40	
No.36	40	36	44.5	
No.40	48	30	60	
No.49	58	44	66	土師器(第40図-73)
No.64	38	24	25	
No.72	26	22	24	
No.82	46	44	69	
No.127	20	20	32.5	
No.133	22	18	18	
No.144	25	20	40	
No.151	46	40	35.5	
No.156	28	24	31.3	
No.161	46	46	30	
No.162	48	46	59.8	
No.167	40	36	41.5	
No.170	34	30	52	青花(第38図-43)
No.182	44	32	46	ノミ痕
No.187	30	28	14	
No.195	40	30	59	
No.302	42	30	54.3	
No.303	25	25	42.8	
No.308	34	25	47	
No.314	40	34	56	
No.320	38	34	41.2	
No.328	58	40	41.2	
No.333	58	32	36	

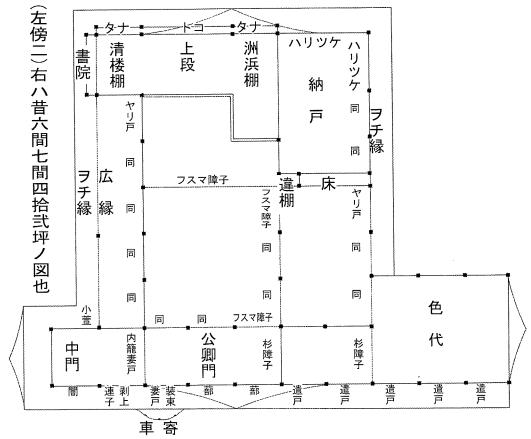
掘立柱建物Ｂ’（６尺５寸ピッチ）

梁間５間・桁行約６間の建物があり、その東北側に玄関（式台）が付いた平面と推定。縁が付く可能性もある。Ａ・Ｂと同様にヌレ縁が廻っていたと推定する。

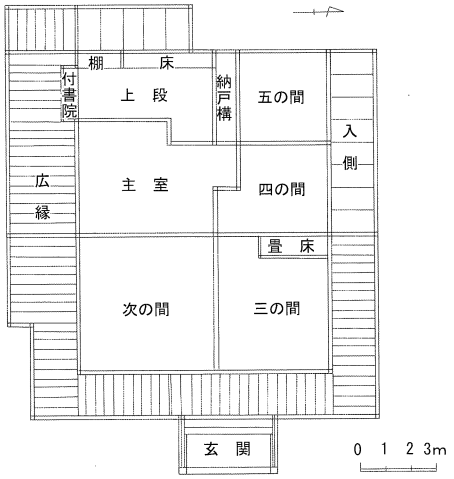


第22図　〔Ｉａ〕検出の掘立柱建物Ｂ’

桃山時代に書かれた木割書『匠明』の中に描かれている「昔六間七間ノ主殿之図」の平面図や、慶長初め頃に熊本城内に建てられ、寛永 14 年(1637)に解体された「加藤平左衛門屋敷御広間」の平面図を取り上げたい。「縁」や「中門」等を除くと「昔六間七間ノ主殿之図」は 5 間×6 間、または「加藤平左衛門屋敷御広間」は 5.5 間×7 間となる。B'は、これらの建物とあまり変わらない規模であることより、このような内部空間のある建物があったと想定することができる。



第23図　『匠明』昔六間七間ノ主殿之図



第24図　熊本城 加藤平左衛門屋敷御広間

(財)永青文庫蔵
(『歴史群像　名城シリーズ２ 熊本城』学習研究社より再透写)

B'の建物の東北側には、位置からみて玄関（式台）と推定できる張り出し部が付き、内部には、3 間×3 間の「九間」も取ることができる。ただ、柱位置が揃っていない欠点はある。このことについては、急を要する建て替えなどの場合は、地山が岩盤であるために新たな柱穴は掘らず、既存の柱穴をそのまま再利用することも十分に考えられる。実際、梁間の柱筋は通らなくても柱に横架材を廻し、その上に梁を架ければ屋根は架けられる。しかも、掘立柱は耐久性には欠けるものの、柱一本で自立する利点があるために、礎石建物よりしっかりした構造と考えられる。

また、天文 18 年(1549)、ザビエルが鹿児島にキリスト教を伝えたことに始まり、海に囲まれた天草にもキリスト教と共に外国文化が流入された。ルイス・フロイスの『日本史』によると「永禄 9 年(1566)、天草五人衆の一人である志岐氏が、ポルトガル人修道士アルメイダにキリスト教の布教を許した」とあり、また、永禄 12 年(1569)、五人衆の中で、最も有力な天草氏の河内浦の崎津に、修道士アルメイダによって「鉄でできた二門の小砲」が備え付けられたとある。まもなく天草氏がキリスト教に改宗し、その後、上津浦氏を最後として天草五人衆全員が改宗したと書かれている。種子島に鉄砲が伝わったのは、天文 12 年(1543)のことで、その頃の城主たちには、キリスト教受け入れの裏に武器獲得という野望があったと思われる。16 世紀半ばには武器の入手による戦法の変化に伴い、築城術も変わって行ったであろうし、少なからず棚底城もそれらの影響を受けたと思われる。

多数の柱穴は、建物建設時の「掘り間違い」があったとしても、ほとんどは建物や何らかの工作物の痕跡のはずである。今回、建物として推定でき得たのは、ほんの一部分にしか過ぎない。特にB' については、可能性を示したに過ぎないことを明記しておきたい。いずれにせよ、岩盤掘り込みの柱穴については、今後さらなる研究が必要である。また、それだけ価値のある遺構である。

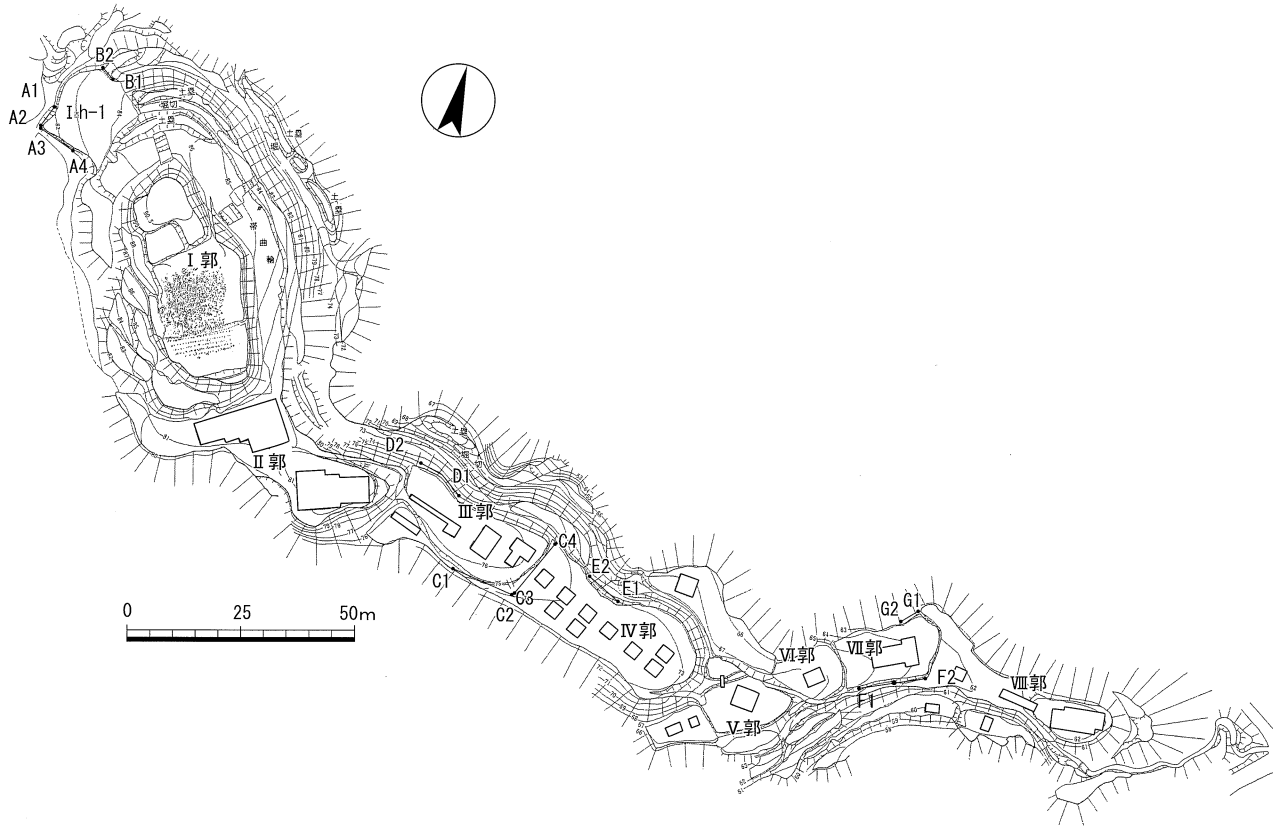
〔Ｉc〕検出の小柱列について

前述の掘立柱建物跡の南面に一段下がった岩盤面があり、５列の小柱穴が見られる。東西約 12.6ｍ、南北約４ｍである。北寄り１列目は、柱穴間の間隔が６尺５寸の三つ割（平均 0.65m）で揃っており、穴の大きさもあまりバラつきがない。２列目は、やや小さい柱穴が混じり、間隔が 0.5～0.6mと狭まっている。３・４・５列目は、柱穴の大きさや間隔にバラつきが増し、線上に乗らないものもある。

これら５列の小柱穴列は、概ね平行に並んでいるものの、１列目の規則性ある配置に比べ、他列の精度の低さに疑問が残る。しかも、南北筋は通っていない。また、１列目の６尺５寸という寸法は、前述の掘立柱建物との関連を感じさせるものであるが、他列については、この寸法と関係があるとは言えない。

そして、全体的に柱穴の大きさは、上段の柱穴に比べて小さいもので、柱ではなく細かい杭か束跡のように思われる。

以上を考えると、この小柱穴列は、建物跡とは考えにくい。また、風除けや防禦のための柵列ではないかと思われるが、５列も並ぶ必要がない。しかし、床束として東西に横材を架ければ、板を張ることができる。床高が上がった分、戦闘時に高い位置からの武器使用が可能となる。まだこの場所は、城館の前面に位置し、海を見下ろす景観であることを考えると、月見の宴や茶会などの遊興の空間として使ったとも考えたい。



第25図　Ⅱ～Ⅷ郭トレンチ・石積実測ポイント配置図

第５節　Ⅱ郭～Ⅷ郭のトレンチ調査

Ⅱ郭

Ⅱ郭-ａを見る限り、柱穴群の形と密集度合いは、Ⅰ郭と全く遜色がないが、Ⅰ郭と比較した場合、柱穴の仕上げが極めて丁寧であった。これについては、「石工集団の学習度合いの結果」との見方も出来た。工事は、Ⅰ郭からⅡ郭へ進んだので、岩盤を掘り込む技術が進歩したとの考えである。両郭の地山が頁岩で岩質に違いがなく、両郭で能力の異なる個別の石工集団が作業を行ったとは、考え難いことが上げられる。しかし、Ⅱ郭-ｂ～Ⅷ郭の柱穴は、通常の仕上げであった。これは、西島眞理子氏が指摘される様に、建物構造の違いが原因であろう。Ⅰ郭とⅡ郭-ａでは、グレイドの高い建物を構築する目的で、同じ石工集団が、順に作業に従事したが、その他の郭は倉庫などであったので、通常の工事（柱穴の掘削）が行われたとの解釈である。

Ⅲ郭

Ⅲ郭では、柱穴数が極端に粗の状態となる。おおよそ建物が存在した状況にない。わずかに小規模な柱穴と堀切が検出されたに過ぎない。南下の４トレンチからも小型の柱穴が検出されたが、形をなさなかった。建物不在の区画と推定した。

Ⅳ郭

11箇所にトレンチを入れたが、西側で、ややまとまった柱穴群が検出されたが、中央から東域にかけて数を減じ、東端では消滅の状態にあった。建物の復元は出来なかったが、柱穴自体は、岩盤をしっかり掘り込んでおり、倉庫や小屋などの実用的な建物が存在した可能性がある。

Ⅴ郭

小型の柱穴が９個検出されたが、形をなさなかった。郭も小さく建物不在の区画である。

Ⅵ郭

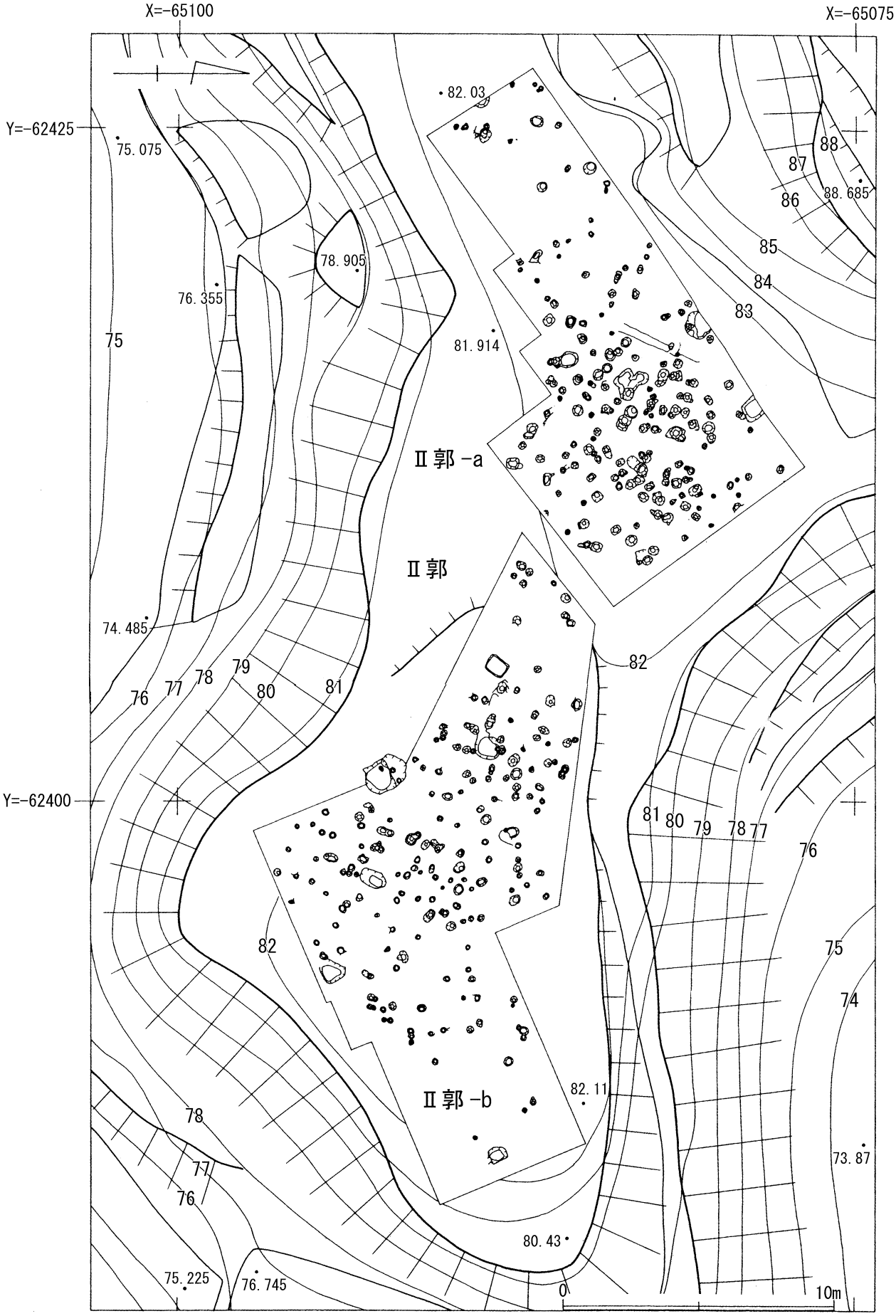
小型の柱穴が疎の状態に掘り込まれており、建物や杭列の類でも無いように思える。

Ⅶ郭

いくつかのピットが直線的な配列になることを確認したが、建物プランまで想定できない。

Ⅷ郭

東側の１Ｔで２間×２間で隅丸方形の炉跡を持つ建物と１間×１間の小型建物を検出した。Ⅴ～Ⅶ郭に比して、出土遺物も残存状態がよいものが多く、見張り所などがあったと想定される。曲輪中央のトレンチでは掘切が検出され、東側は独立した出曲輪的な空間であったことがわかる。



第26図　Ⅱ郭トレンチ設定図

第６節　Ⅱ郭～Ⅷ郭の柱穴群について

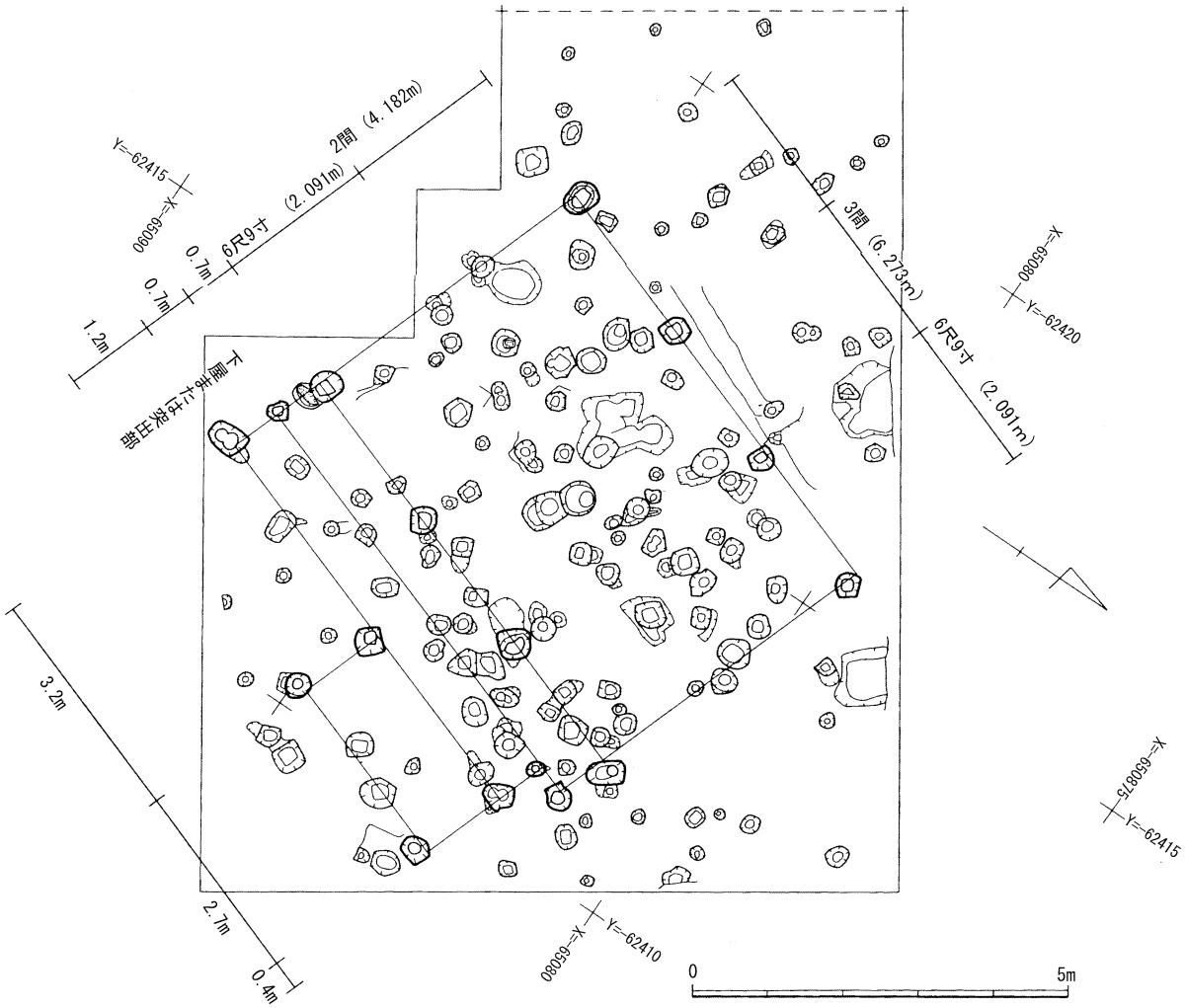
熊本県建築士調査研究委員会副委員長　西島眞理子

Ⅱ郭～Ⅷ郭にもⅠ郭と同様に柱穴群があり、建築物あるいは工作物が存在したと推定できる。また、Ⅱ郭～Ⅷ郭とも、青磁・白磁・染付の碗・皿などと共に、甕・火舎・灯火具・擂鉢など日用雑器が出土しており、生活の跡が伺える。しかし、部分的なトレンチの範囲での検出状況であるため、正確に全体を推定することが困難であるが、比較的、広範囲に掘られたⅡ郭とⅧ郭の柱穴群について推定できたことを述べる。

Ⅱ郭-ａトレンチでは、柱穴群の中から２間×３間の建物が推定できる。この建物の１間の長さは、Ⅰ郭で推定された建物より長く、約６尺９寸（2,091mm）である。この建物の東面には、下屋や突出部が取り付いていた可能性がある。

また、Ⅱ郭-ｂトレンチには、西北から東南に同巾（１間＝約６尺６寸： 2,000mm）で５間分の柱穴が並ぶ。その柱穴列に対応する柱穴は確認されていないため柵列かと思えるが、発掘していない部分に対応する柱穴が存在する可能性はある。現時点では、Ⅱ郭-ｂトレンチ内で検出された柱穴のみで考えると、２間×２間半（１間＝約６尺９寸）の建物が推定される。

次に、Ⅷ郭の東端部には、１間（６尺６寸： 2,000mm）×１間（６尺：1,800mm）の建物が推定できる。位置からすると門番所のようなものとも考えられる。しかし、このような小さな建物としては柱穴の直径が 200mm～350mm と大きい。柱穴の断面を確認していないが、４つの穴の断面形が内転びであれば高い建物であると推定できる。高い建物とすると見張り台か狼煙台が考えられる。

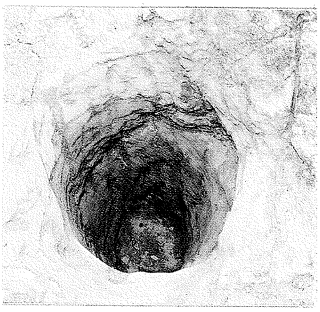


第27図　Ⅱ郭-aトレンチ　建物復元ライン（推定）

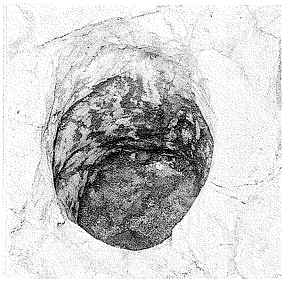
第28図　Ⅱ郭-ｂトレンチ建物復元ライン（推定）

Ⅱ郭-a・P-No.7
〔長径50cm×短径37cm×深さ60cm〕

Ⅱ郭-a・P-No.8
〔長径35cm×短径33cm×深さ56.5cm〕



Ⅱ郭-a・P-No.18
〔長径26cm×短径25cm×深さ54cm〕

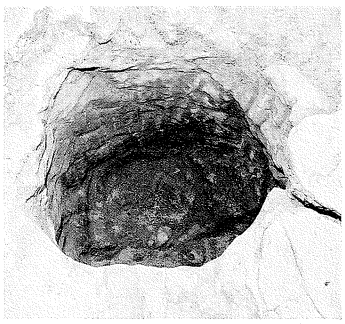


Ⅱ郭-a・P-No.25
〔長径24cm×短径20cm×深さ26.5cm〕

Ⅱ郭-a・P-No.34
〔長径18cm×短径17cm×深さ22.5cm〕

Ⅱ郭-a・P-No.38
〔長径30cm×短径25cm×深さ34cm〕

Ⅱ郭-a・P-No.39
〔長径30cm×短径25cm×深さ46cm〕



Ⅱ郭-a・P-No.40
〔長径35cm×短径31cm×深さ40.5cm〕

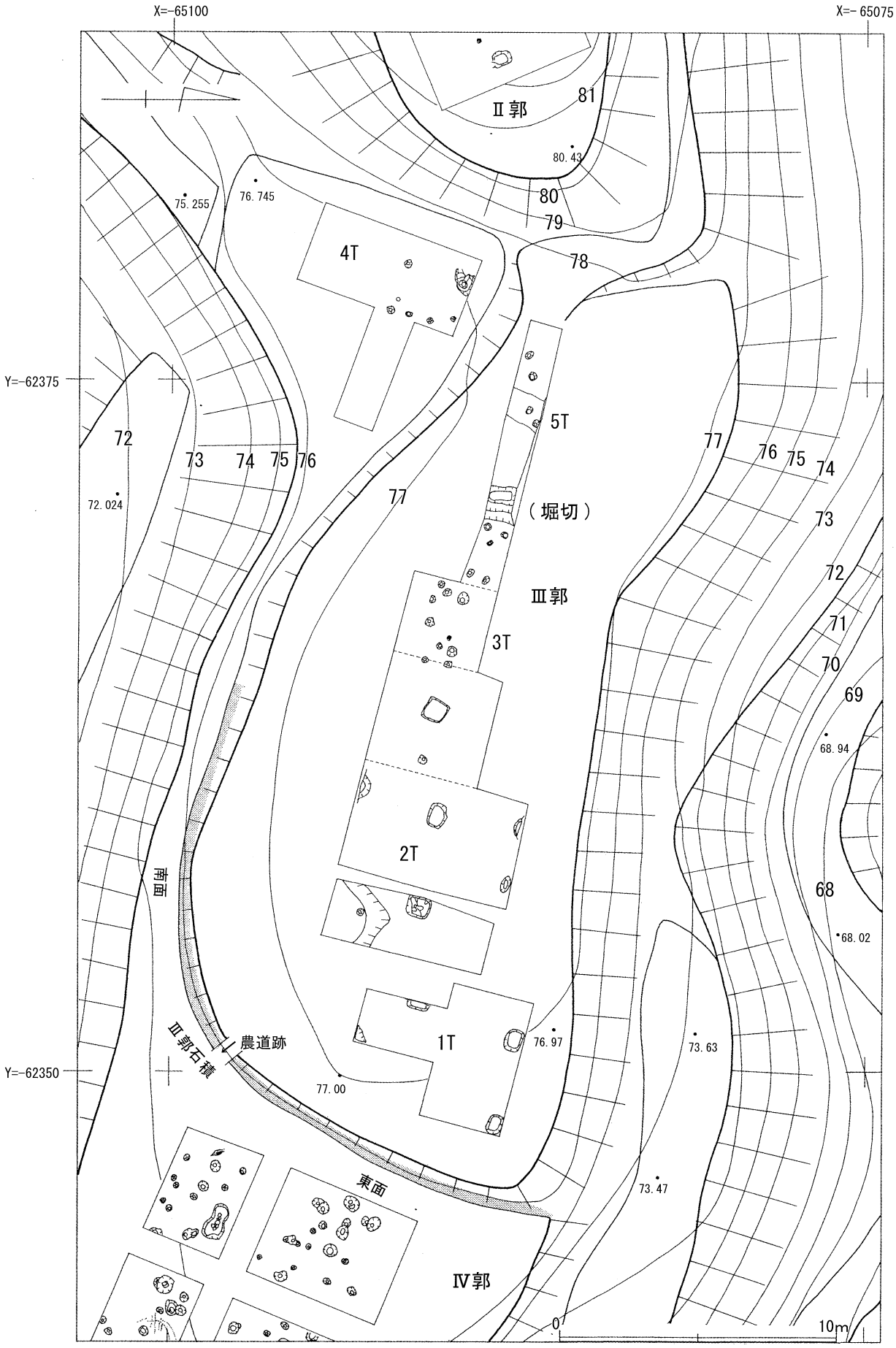
Ⅱ郭-b・P-No.55
〔長径32cm×短径31cm×深さ47cm〕

Ⅱ郭-b・P-No.70
〔長径16cm×短径14cm×深さ34.0cm〕

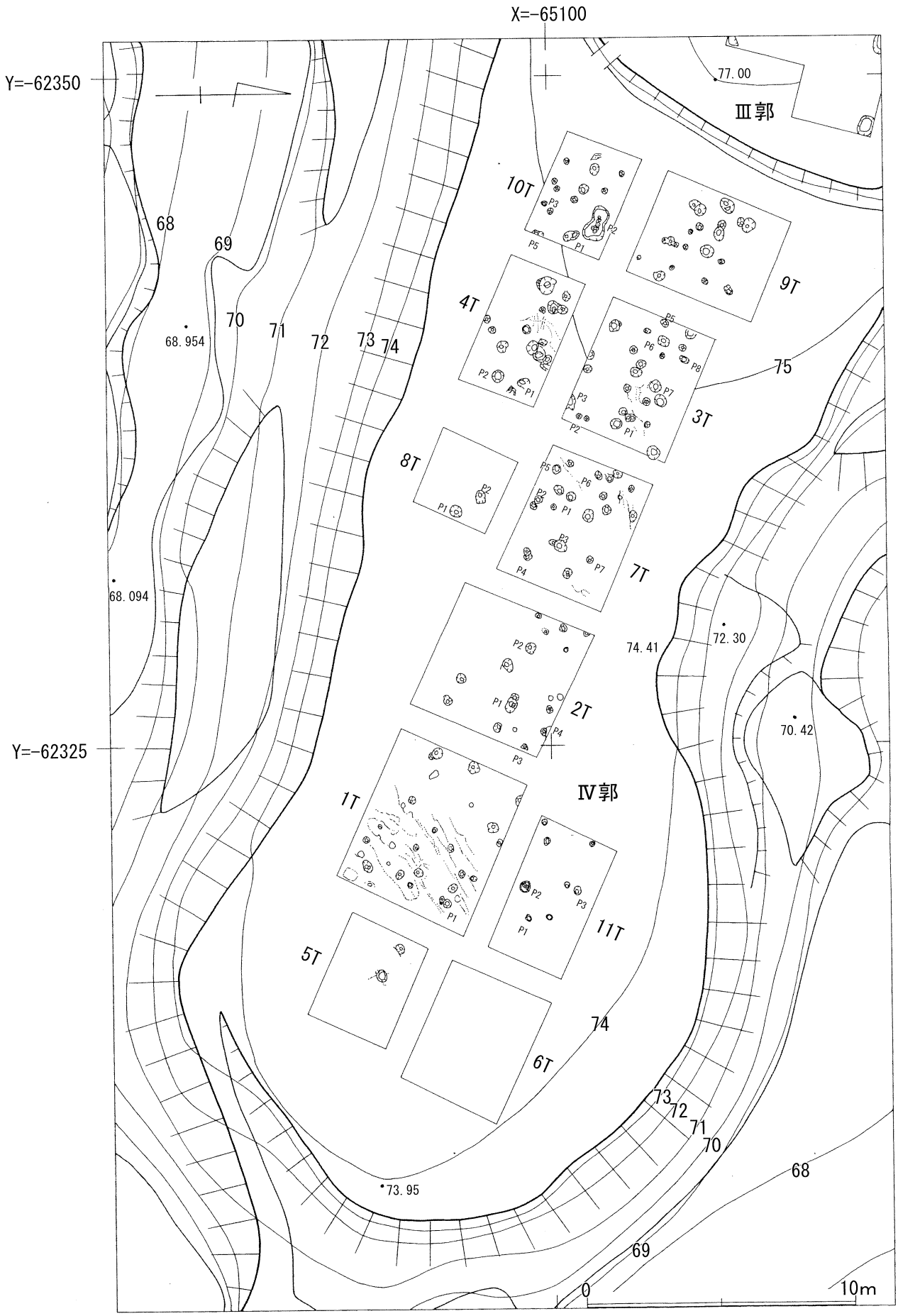
Ⅱ郭-b・P-No.71
〔長径31cm×短径33cm×深さ47cm〕

Ⅱ郭-b・P-No.47
〔長径35cm×短径34cm×深さ54cm〕

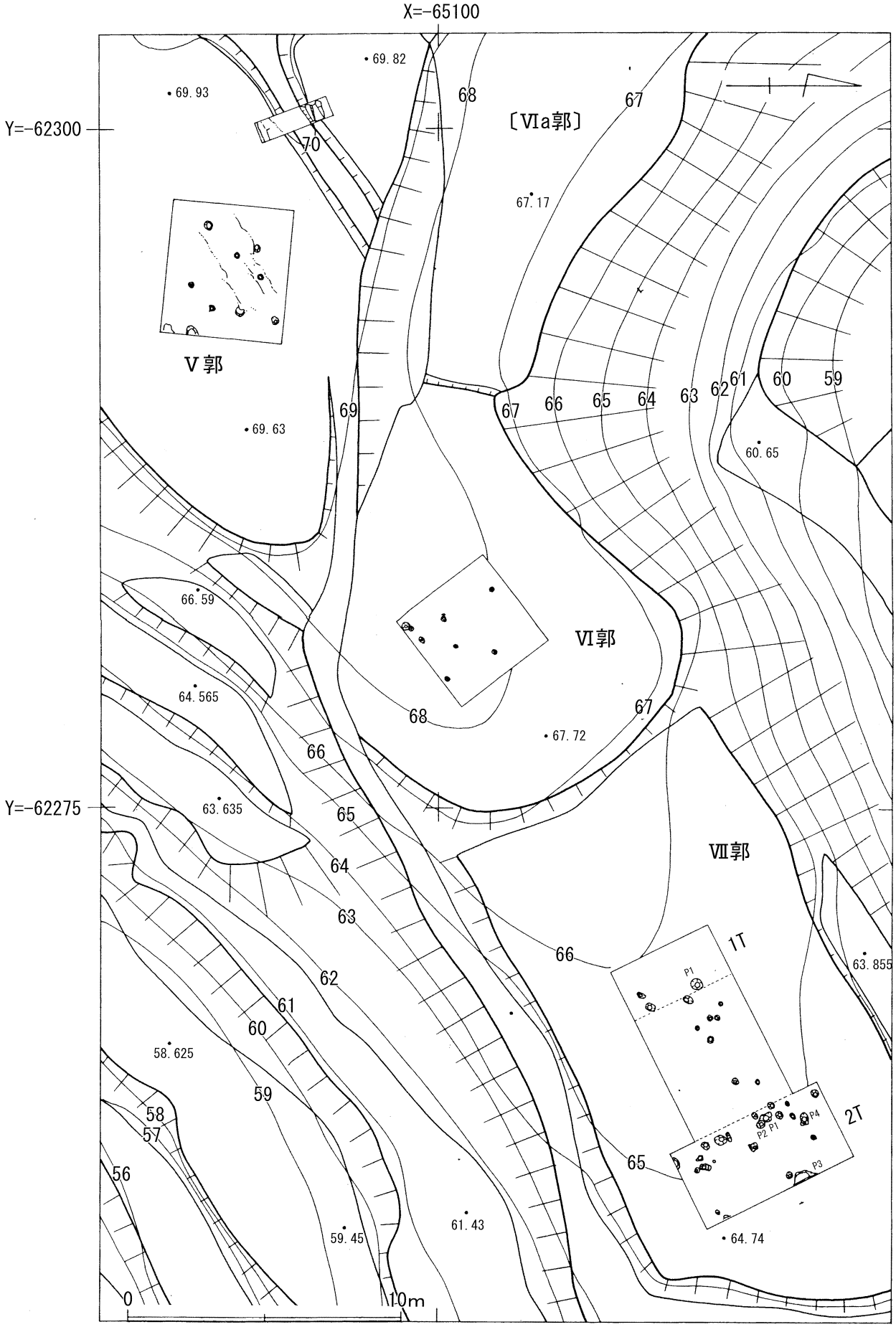
第29図　Ⅱ郭-a・bトレンチ柱穴検出状況



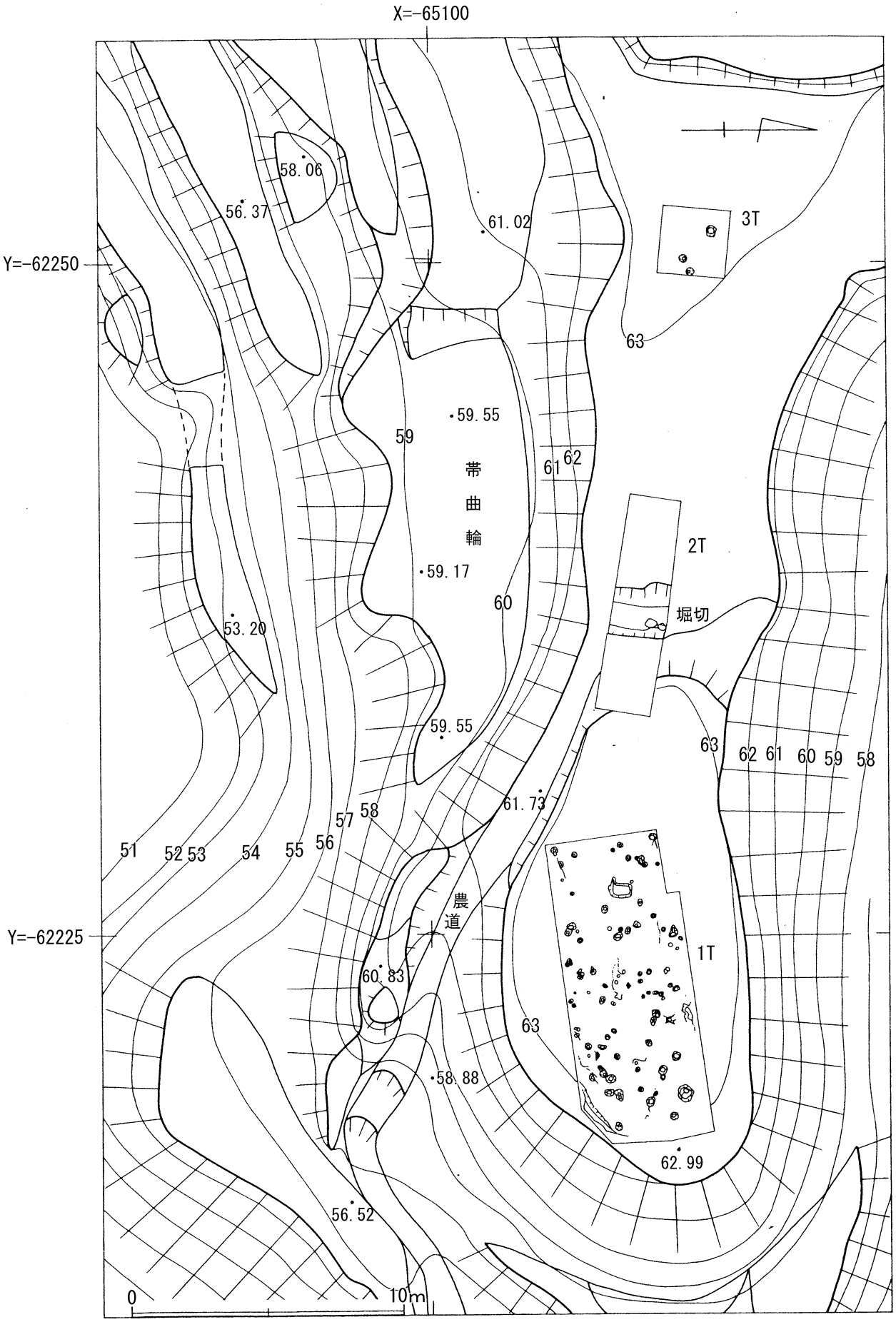
第30図　Ⅲ郭トレンチ設定図



第31図　Ⅳ郭トレンチ設定図



第32図　Ⅴ～Ⅶ郭トレンチ設定図



第33図　Ⅷ郭トレンチ設定図

第７節　城跡内の石積について

城跡の各段差面に、野面積みの石積が残る。城跡は数十年前まで畑作地として開墾されており、葉たばこの栽培などが行なわれていた。石積については、城跡時代のものか、近世開墾に伴う土留めか判別が困難である。特徴的な箇所において石積の実測を実施し、再検討を加えた。

１．Ｉｈ－１周囲の石積（第 34 図　A1-A2・A3-A4・B1-B2）

Ｉ郭西側に形成された方形平坦地Ｉｈ－１の周囲に、安山岩を中心とした石積が残る。石積はＩｈ－１の北側・南西側に構築され、西側は地山が露出する。また南西部石積はコーナーを有し、西側石積部分 A1-A2 の基底部は斜面の傾きにあわせて南へ向かって傾斜して造られている。この石積は意識的にＩｈ－１を囲むもので、Ｉｈ－１の造成時に伴う土留めのための構築であることが明白である。空堀Ｉｅ－１及び土塁はその上位に位置するＩｄ－１と平行して北東から北西へ屈曲する堀であるが、Ｉｈ－１の造成により途絶している。この点から、Ｉｈ－１は耕作のために近世以降に新設された平坦地と考えられ、これらの石積は城跡と関係しないものと考えられる。A1-A2 は石積長約５ｍ。扁平安山岩を中心に用い構築している。A3-A4 は約 9.6m。コーナー部は一部崩落しており、裏グリ石は確認できない。B1-B2 は延長約 4.5m。石材は主に橙色の頁岩である。

２．Ⅲ郭東端～南端の石積（第 35 図　C1-C2・C3-C4）

Ⅲ郭の石積は、南面半分から東面を弧状に取り巻いている。カーブ箇所となる石積の南東隅を壊して農道が登っている。

東面は右側と左側で、石材と残存度合いが異なる。左側は地山産の頁岩を割ったもので、高さ 0.6m～1.4m。キッチリと積まれており、長さは農道による破壊箇所から北側へ 5.5m。

右側は、扁平安山岩が積まれている。この部分の石積は破損が大きく、根石ラインの残存に留まる。高さ 0.5m前後、長さは 7.5m。石材の異なる石積は、接点でピッタリ合わさっている。

南面は、地山の傾斜度に合わせて積まれている。西側から東側へ漸次、石積が高さを増し、前述のカーブ箇所で最大 1.5mの高さとなる。最も低いのは、西側寄りで 0.4m。石材は地山産の頁岩で、残存度合いは良好である。

割石の状態と野面積み状態は、富岡城跡（天草郡苓北町）の二の丸から検出された西側石積に似かよっているが、農道によって破壊されている箇所で石積の裏を観察するとやはり裏グリがない。

３．Ⅲ郭北西端石積（第 34 図　D1-D2）

Ⅲ郭北西端に約 10mの石積が見られるが、北側の大部分は石積がない。C2 からの連続性がない石積である。一部崩落によって石材を失っている。石積高は概ね 60cm 程度の低い石積であり、やや大振りな頁岩を多く使用している。

４．Ⅳ郭北端石積（第 36 図　E1-E2）

Ⅳ郭北端に長さ約３ｍ、高さ約 165cm で残存する石積。東西は崩落しており、元々はさらに長く存在していたと思われ、数点の石材が名残をとどめる。石材は扁平安山岩で根石は大型のものを用い、積み石は薄手のものを用いている。断面は垂直に近い。

５．Ⅶ郭周囲の石積（第 35 図　F1-F2、第 36 図　G1-G2）

Ⅶ郭は全周に石積を有する。このうち延長約 17mを測る南側石積及び北側石積の一部４ｍ分を図化した。F1-F2 は緩やかに傾斜して作られている。石積の外には幅の狭い道があるが、これと同様の傾斜である。高さは 40～70cm 程度で低い。扁平安山岩による構築で東側は樹根などで崩壊が著しい。やはり裏込め石は認められない。一部では岩盤に直接石積を乗せて構築している箇

所もある。

G1-G2 は平成 15 年の調査で石積に直交する幅１ｍのサブトレンチを設けて石積の基礎状況を確認している箇所である。図化部分はサブトレンチを中心に４ｍに留めているが、実際にはこの石積は約 20m あり、F1-F2 同様、Ⅵ郭に向かって緩やかに上る作りである。石積自体は丁寧で、幅 50cm 高さ 20cm 程度の安山岩をメインに比較的整った形状の自然石を選択して構築している。サブトレンチで確認できる断面では砂岩の風化土層で分層できない一括層である。特別に根固めなどはなされておらず、直接基底石を積む。

石積のまとめ

棚底城跡ではここに図示した以外にも随所に石積が確認される。城跡南側の小段群においても段毎に石積が設けられている。Ⅲ郭の石積（C1-2・C3-4）は富岡城跡検出の中世石積と類似していることから城跡に伴う構築の可能性があるが、近世石垣の裏に埋封された状態で検出された富岡城例と異なり、検出状況から城跡時代の所産と断言できない面がある。

Ｉｈ－１に伴う石積（A1-A2・A3-A4・B1-B2）は中世の横堀を埋めて平坦地を造成し、その土留めに使用しているもので、明らかに近世以降の開墾に伴う石積と判断できる。他にも、実測は行っていないが、Ⅷ郭北側端部に残る低位石積はⅧ郭トレンチで検出された小堀切を埋めるように築かれている。また主郭南西の斜面部には竪堀が構築されているが、これも石積で埋め殺してある。このような城郭の防御施設を無機能化させる石積は開墾に伴う後世のものと考えるのが自然である。

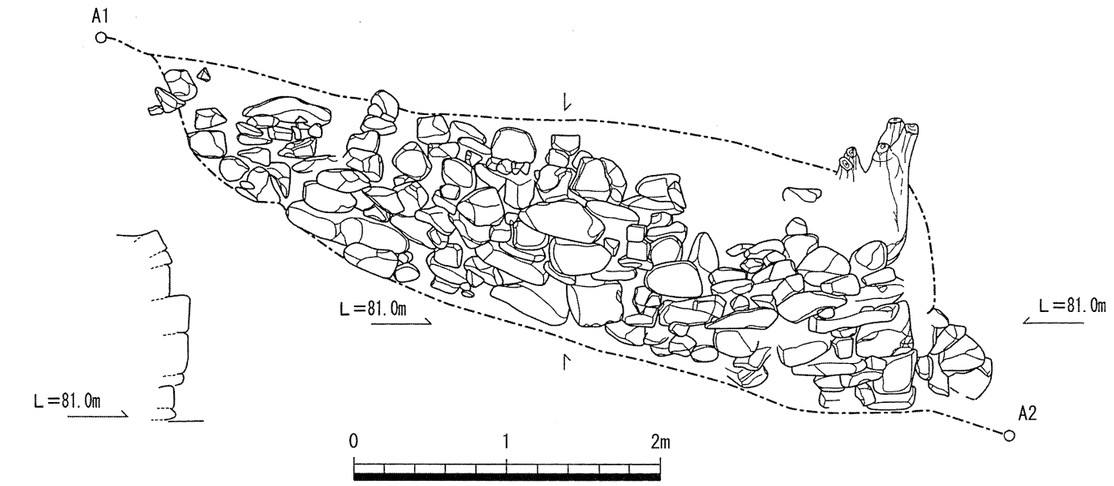
石材はⅢ郭東端石積で、橙色系の頁岩と灰白色系の安山岩が同時に使用されているが、このⅢ郭を中心として西側の石積で頁岩・東側の石積では安山岩が主に利用されている状況がみられる。付近で教良木層の変化が起きており、西側が頁岩、東側が砂岩となる。砂岩は石積に適しておらず、そのためⅣ郭以東は城跡麓より扁平安山岩を持ってきて石積に使用したと考えられる。

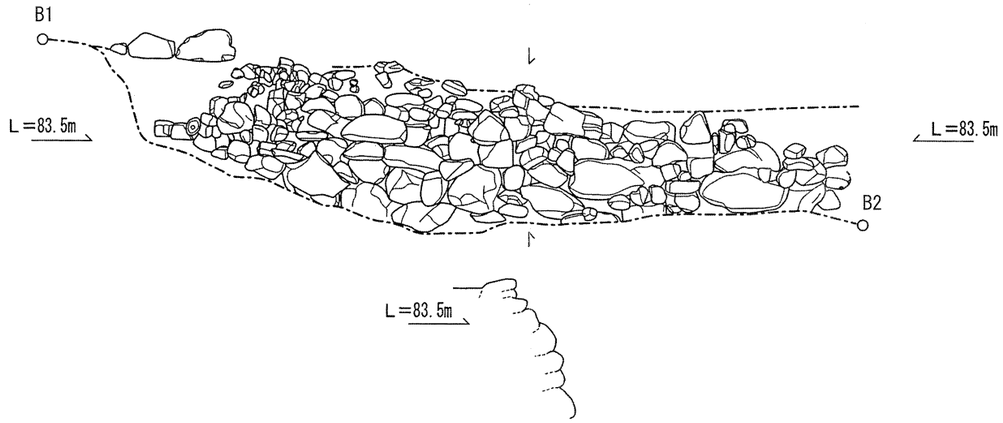
D1-2、F1-2、G1-2 の石積などは 70cm 以下の高さしかないため、曲輪の防御に必要となる対人遮断の実効性はあまり有していない。

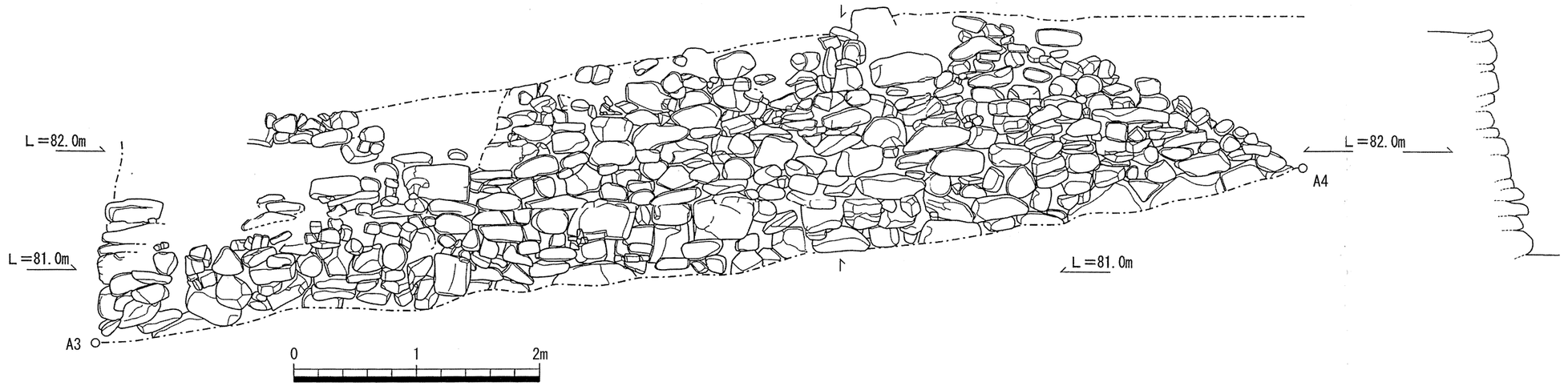
近年の調査では、織豊系石垣が導入される以前の北部九州戦国期城郭で、在地系石積技術を城普請に採用している例が知られるようになっており、佐賀県鳥栖市勝尾城跡や福岡県前原市高祖城跡などで見られる。勝尾城跡の石積では 1.5mほど石積を作った後にさらに高く積み上げるため、後方に控えてまた新たな石積を構築するセットバック手法が見られるが、棚底城跡ではこのような工夫は見られない。

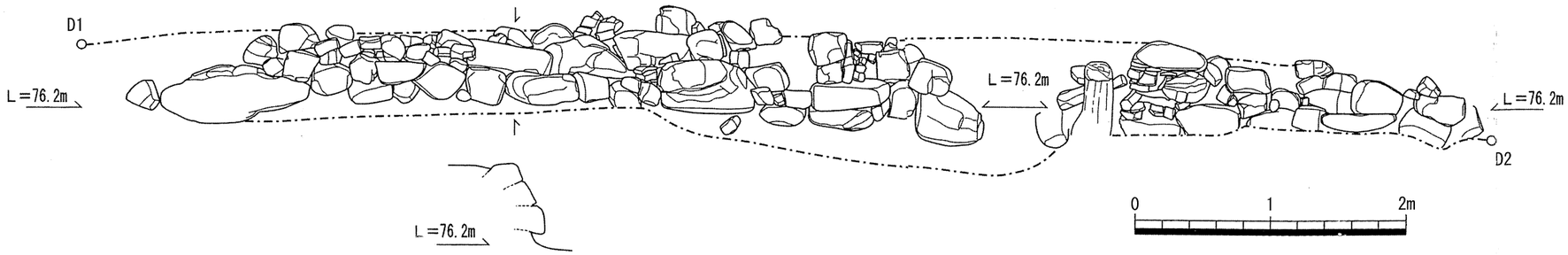
このような状況から、防御施設としての石積とはいえず、可能性としては曲輪造成に伴う土留めとしての石積が残る。しかし、第３節で述べてある通り、調査時には岩盤面に達してから柱穴の掘込みが確認されているため遺構面が岩盤そのものであり、また堀も岩盤を掘削して作り出されている（写真図版８　Ⅲ郭検出堀切）。この全体的な岩盤加工が棚底城跡の大きな特徴と評価でき、曲輪平面の端部にあたる切岸も岩盤を加工して作っていた可能性が高く石積の必要性に疑問が残る。

現状では、石積に裏込めが確認できるものもなく、長期間にわたる保存性も担保されていない。棚底地区は現在でも家屋を守る防風石垣（石塀）が残り、石積の棚田・畑地も普遍的に見られる。天草地域は総じて農業生産性が低く、戦前から戦中にかけて農産量を増やすため、小丘陵程度であれば頂部まですべて畑地に改変してある場合も少なくない。城跡も戦中から戦後まもなくにかけてたばこ畑として全域が利用されていたとの地元の方の話を聞くと、その多くは畑客土を安定させるための石積であったと考えられる。既存の調査は曲輪平面での遺構検出が中心であったので切岸の造りが確認されていない。これが石積の評価が定まらない一因である。今後の調査で位置づけを確かにする必要がある。

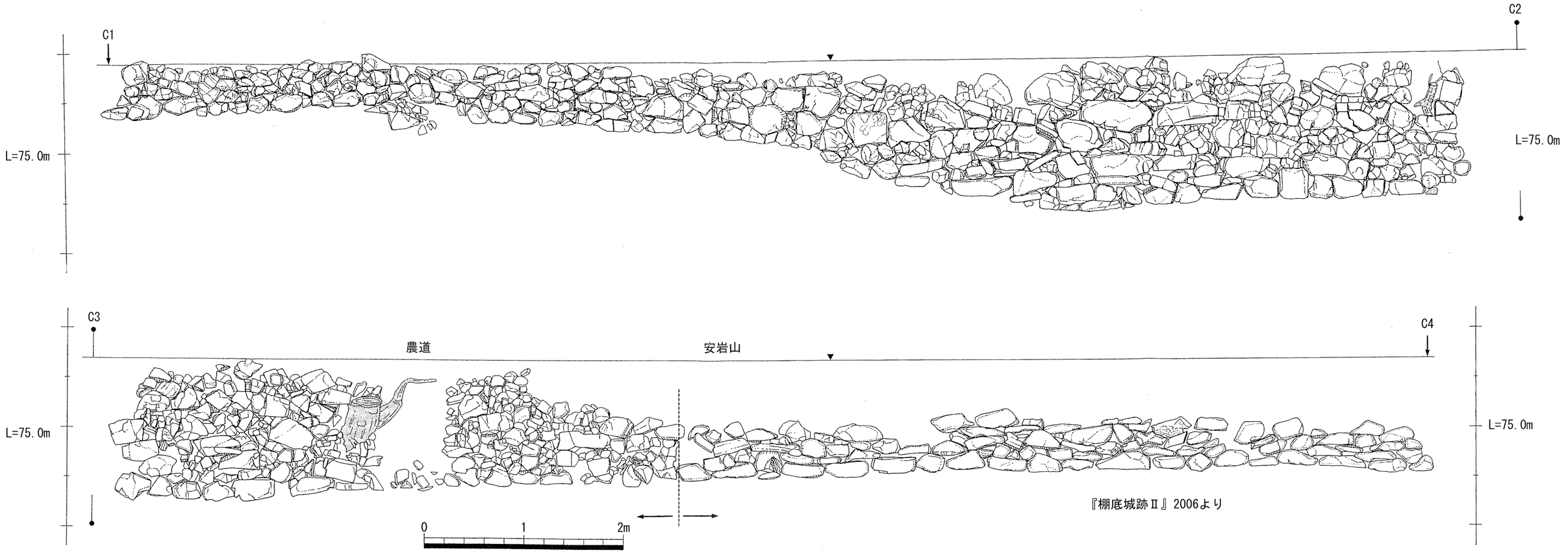


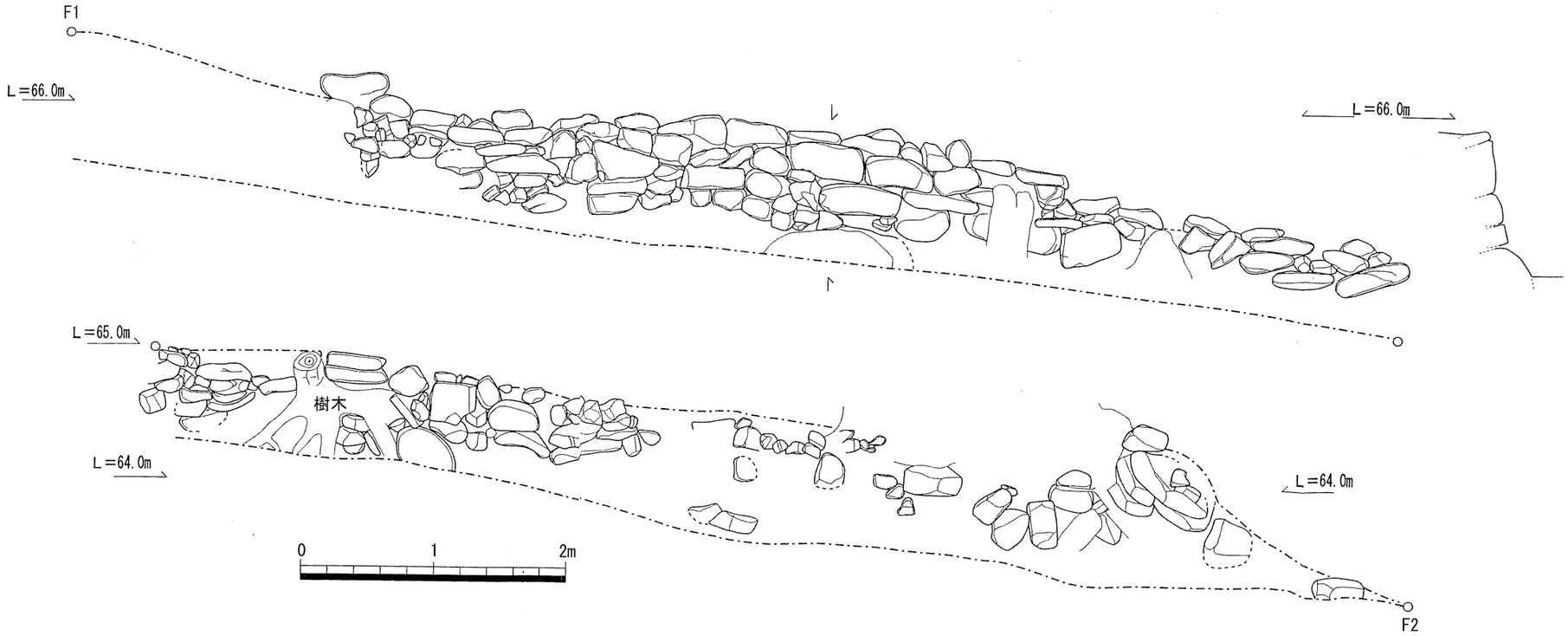




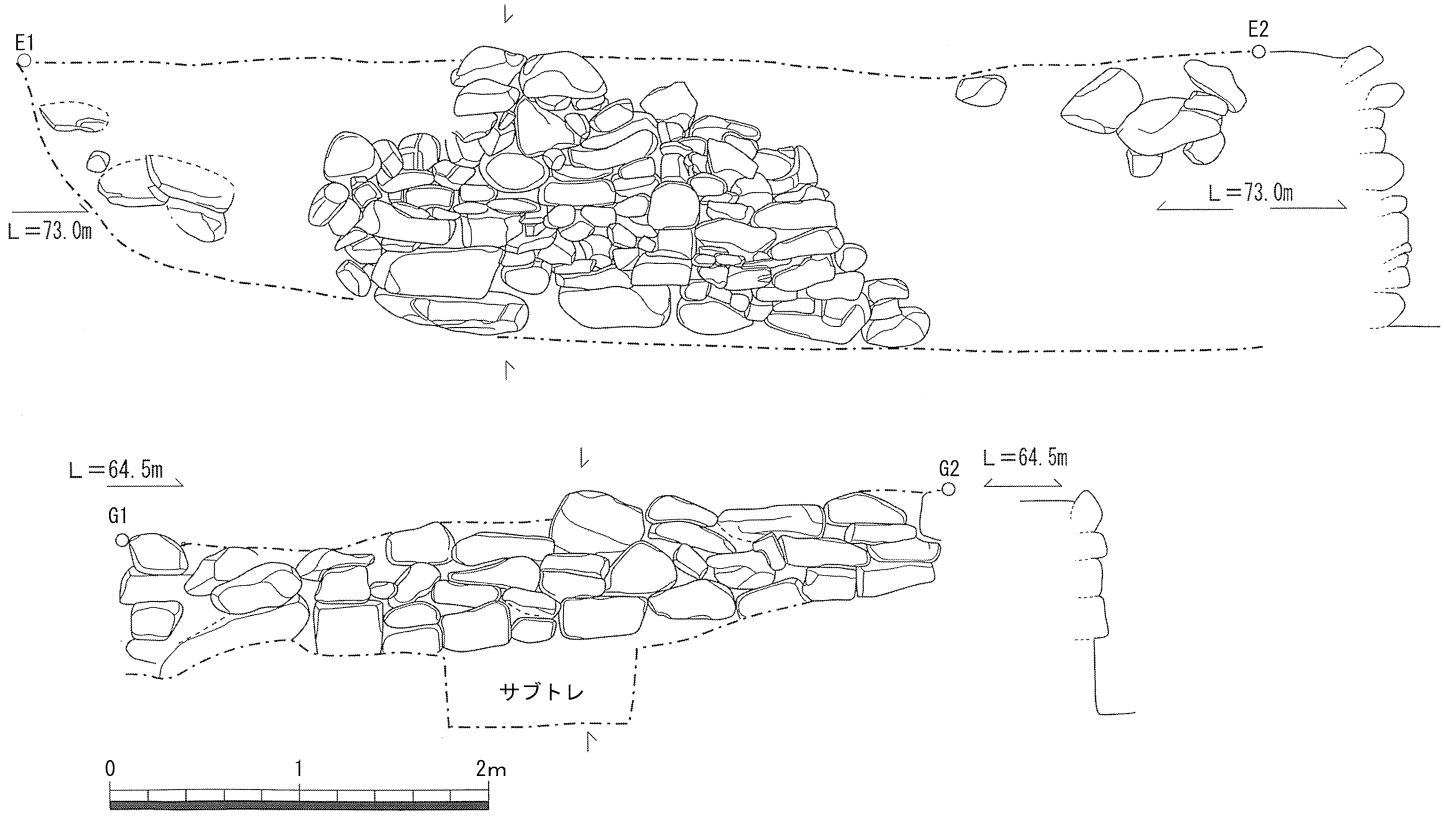


第34図　石積実測図①（S＝1/40）





第35図　石積実測図②（S=1/40）



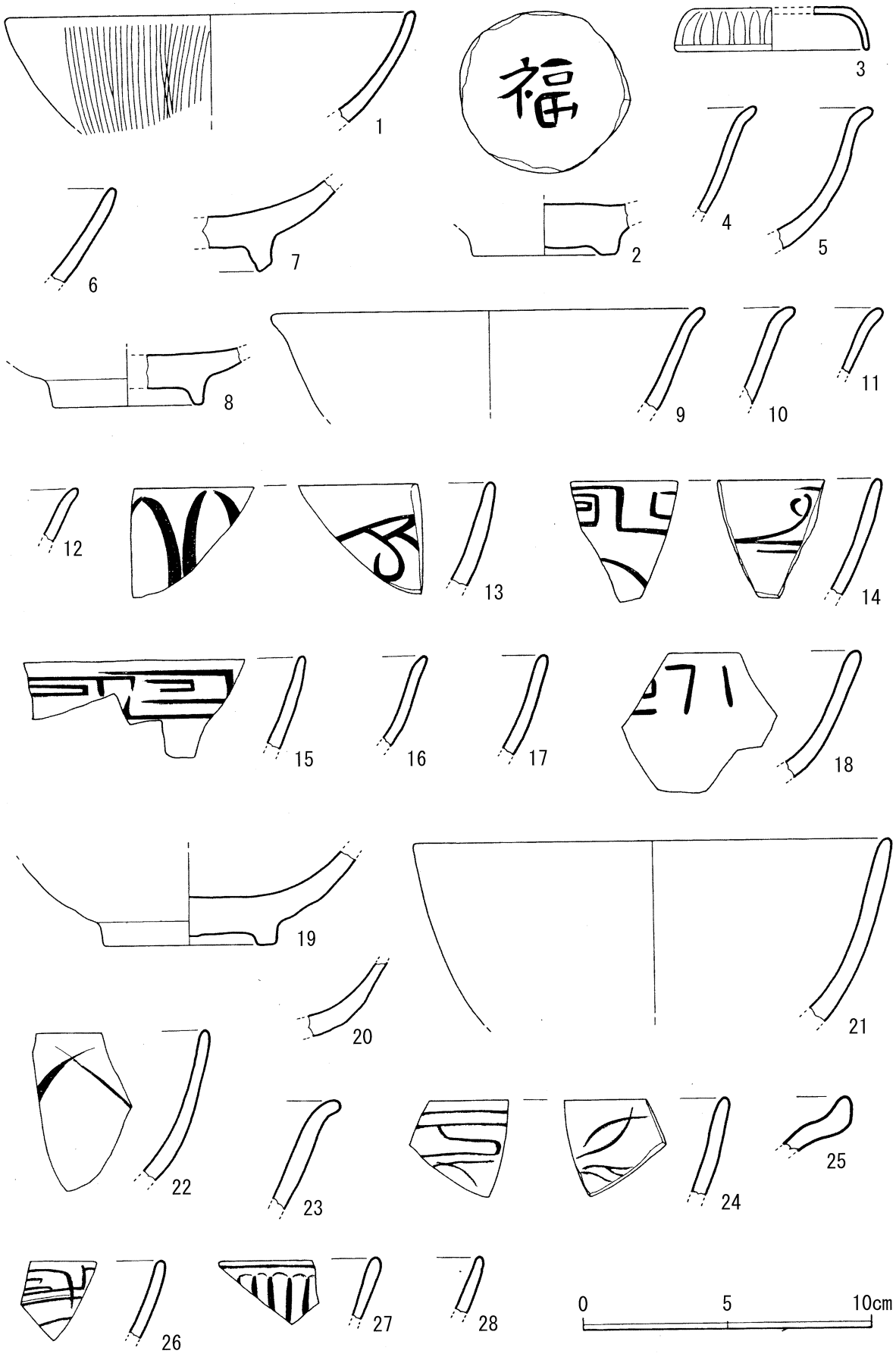
第36図　石積実測図③（S＝1/40）

第８節　出土遺物について

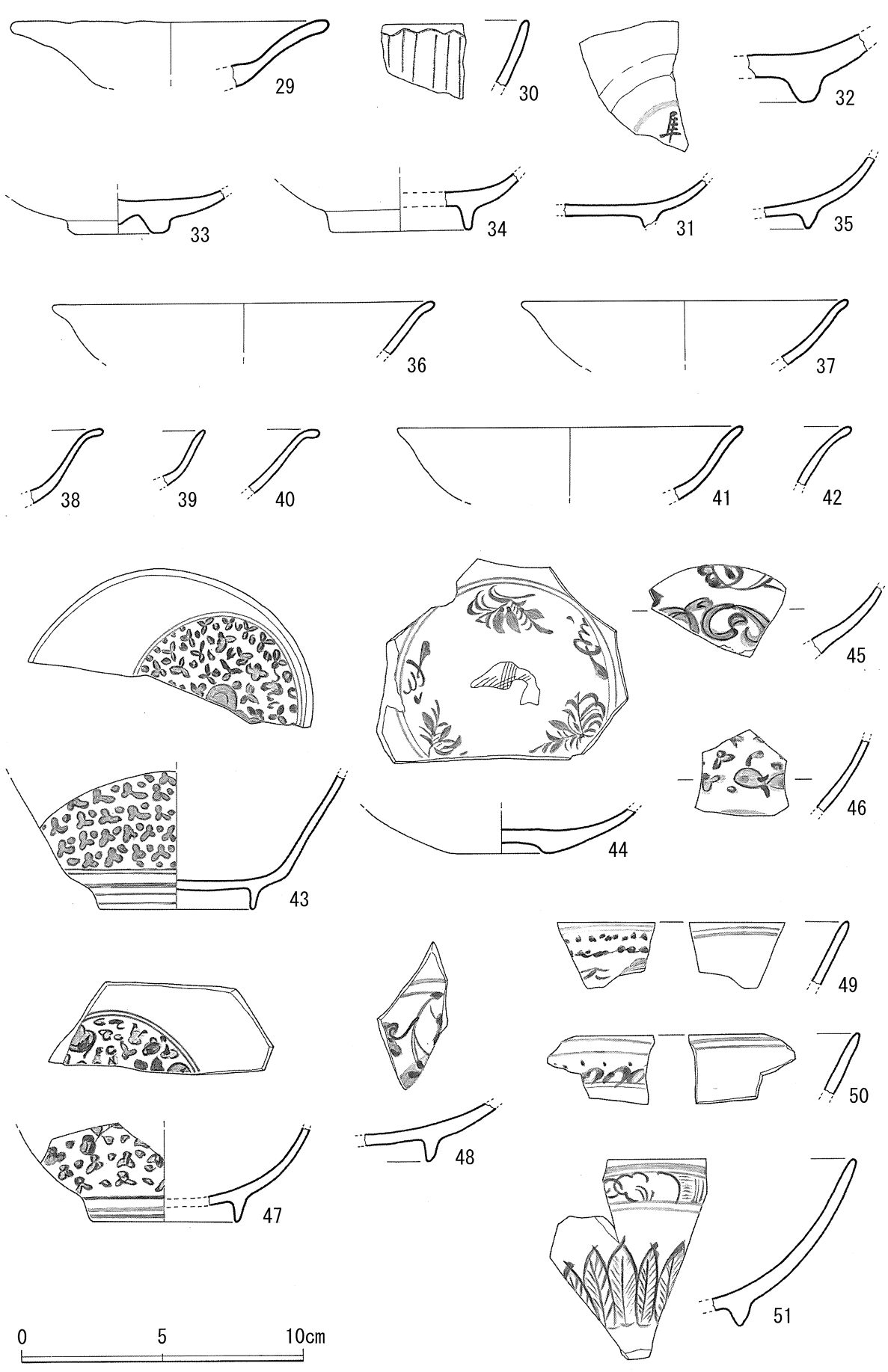
Ⅰ郭出土の遺物

青白磁（３）　３は青白磁合子の蓋である。復元口径 6.8 ㎝、器高 1.5 ㎝。外器面に陽刻の蓮弁文様。柱穴 157 から出土。

青磁（１、２、４～31）　１～31 は３を除き青磁である。１・31 以外は龍泉窯系。１は出土した青磁の中で最も古く、外器面に櫛描き文様がある。復元口径 14.3 ㎝。12 世紀～13 世紀に遡ると思われる。２は見込に「福」の吉祥文をスタンプ。底部は肥厚し、畳付から外底まで無釉。復元底径 5.0 ㎝を計る。柱穴 202 から出土した。４・５・９～12・23 は端反碗の口縁でいずれも体部に文様がない。上田分類のＤ類。５は横堀１T-ａから出土した。９は復元口径 15.1 ㎝、柱穴 274 から出土した。７・８は高台片で畳付から外底まで無釉のタイプ。８は復元底径 5.3 ㎝、見込に印花スタンプ。13 は上田 B-１′類の口縁部。内外器面にヘラ描きがあり、外面に蓮弁文様。14・15・18・24・26 は外面口縁に雷文を持つ上田 C-Ⅱ類。14 は内面にヘラ描き文。15 は被熱しており、柱穴 11 から出土した。18 はやや略化した雷文。柱穴 86 から出土した。24 も内面にヘラ描き文、焼成は不良。16 は横堀１T-ａ、17 は柱穴 41 から出土。19 は底径 6.4 ㎝、高台高 0.3 ㎝、四角の高台を持ち、釉の一部が外底までかかる。底部は肥厚。20 と共に横堀１T-ａから出土した。21・22 は碗か鉢で、21 は体部無文。柱穴 202 から出土した。22 は外面にヘラ描きの簡略蓮弁文。25 は皿か盤で、口縁が逆Ｌ字に折立てられる。27 は上田Ｂ-Ⅲ類。片切彫蓮弁。29 は稜花皿。焼成不良。30 は上田Ｂ-Ⅳ類。剣先蓮弁文様。31 は景徳鎮窯産の青磁皿。端反り白磁Ｅ群や青花Ｂ１皿と同タイプの高台。高台内のみ白磁となる「裏白」でおそらく菊型になろう。時期は 16 世紀中



第37図　出土遺物実測図（1）



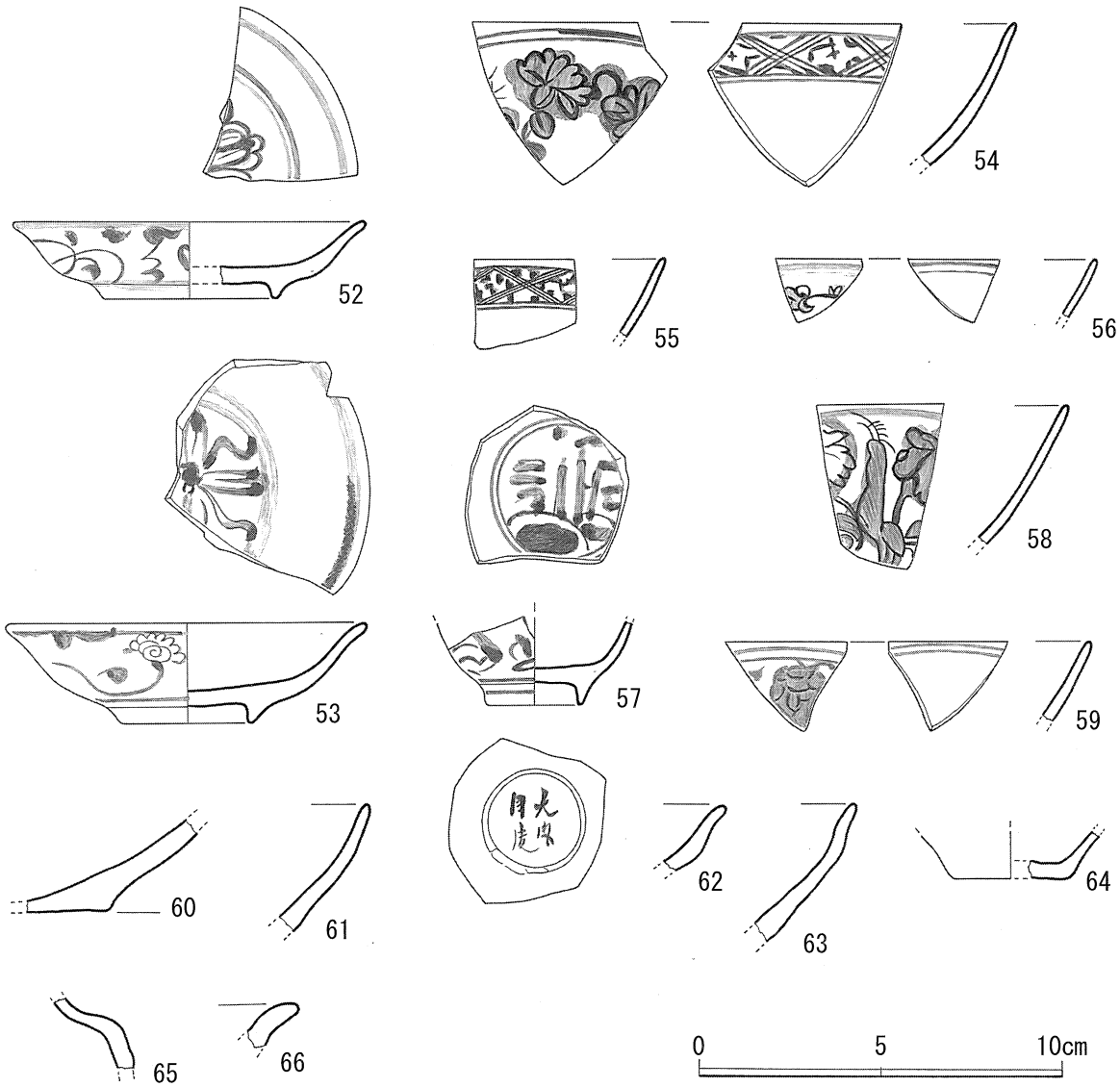
第38図　出土遺物実測図（2）

葉～後半、高台外底に「年」字があり、大明年造銘か。天文年間の大内氏の遣明船と関わる可能性が指摘されている（註１）。

〔釉色〕※灰白青色１　※暗灰緑色２・６・16・19・25　※明白青色３　※灰白黄色４　※灰黄緑色５・30　※暗青灰白色７　※灰青白色８・20　※明青白緑色９　※緑黄灰色 10・11・15・18・23・24・26　※緑白灰色 12　※暗緑灰色 13・21　※緑黄色 14　※青白緑色 17・27　※青白緑黄色 22　※灰茶緑色 28　※青灰白色 29　※灰白黄緑色 31

白磁（32～42）　32～42 は白磁。32 は見込を蛇の目釉剥ぎ。外面から高台まで無釉。緻密な胎である。１（青磁）と同時期の資料と見られる。33 は底径 3.3 ㎝と径の小さい高台を持つ破片。森田 D 群。高台及び高台周辺までは露胎で外底を兜巾状に作る。畳付は 8～10 ㎜幅。横堀ⅠT-a 出土。34 は柱穴 285 出土。35 から 42 は森田Ｅ群皿。35 は高台片。見込に重ね焼きのハマの足痕。36 は復元口径 13.5 ㎝。37～42 は端反の口縁部。37 は復元口径 11.5 ㎝。38 は器壁に荒れが見られる被熱資料。柱穴 346 出土。40・42 は横堀１T-b 出土。41 は光沢がなく黄白色。柱穴 346 から出土した。41 は復元口径 12.2 ㎝。

青花（43～59）　43～59 は青花片。全て景徳鎮系窯で焼かれている。43 は胴部が直線的に立ち上がる。小野分類 D 群碗。外面及び見込全面に「人」字形の梵字文で C 群に見られる文様。復元



第39図　棚底城跡出土遺物実測図（3）

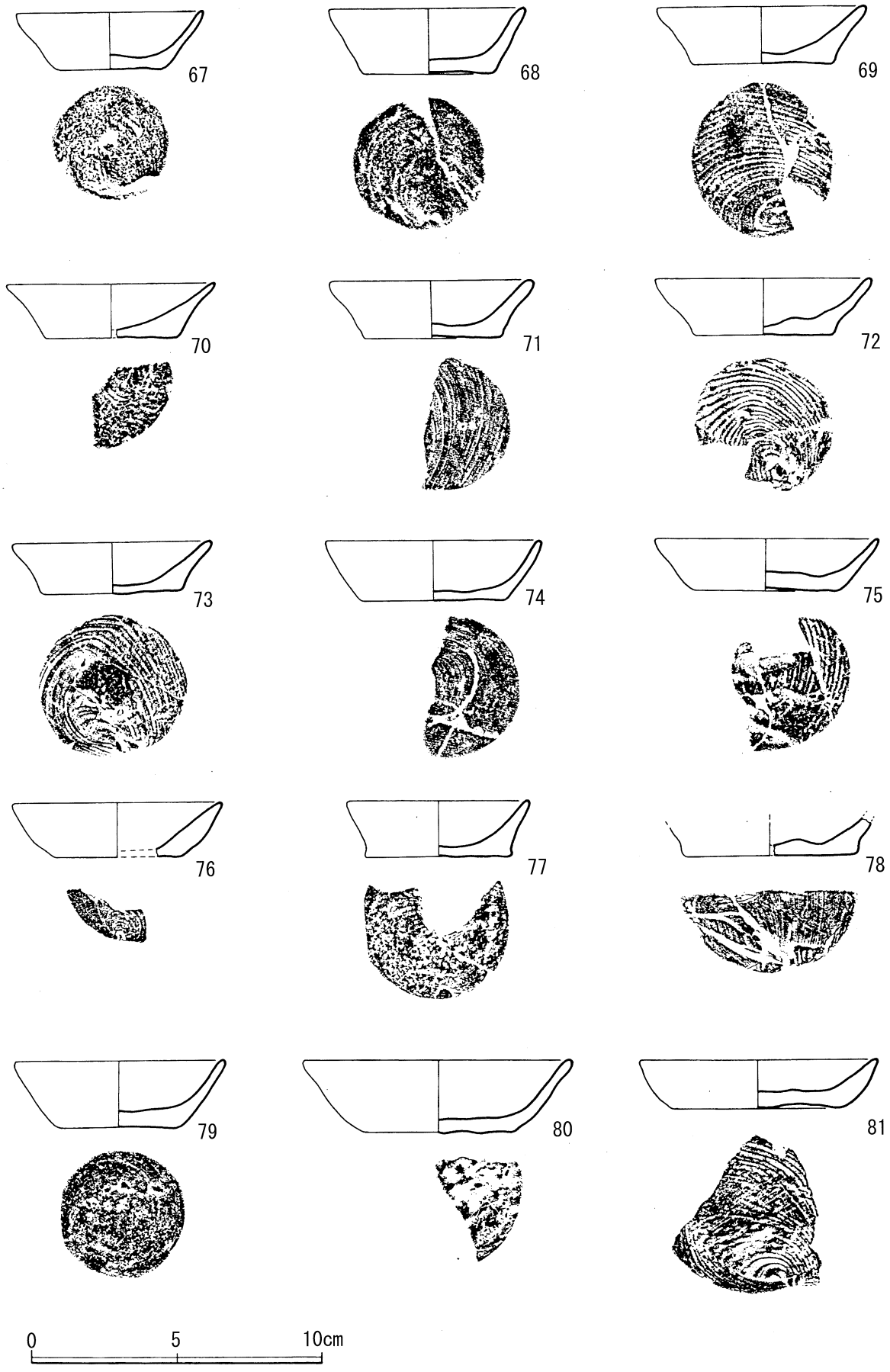
底径 5.6 ㎝。柱穴 170 から出土。44 は小野 C 群の碁笥皿で見込に貼付魚文と海草。碁笥底の設置面を釉剥。45 は外器面の腰部に唐草文様。C 群碗の破片であろうか。46・47 は 43 と同様の「人」字形文様を持つ。46 は器形が不明だが、47 は見込が高台内に凹むレンツー碗タイプで C 群。48 もレンツー碗の C 群。見込は草花文か。47・48 とも横堀 1 T-a から出土。49・50 は波濤文を持つ口縁部。49 は C 群碗、50 は C 群皿の可能性が高い。内面は二重界線。49 は被熱資料。51 は腰に芭蕉文を持つ C 群碗。釉は灰色を帯び、呉須も濁りがある。口縁は波濤文、見込は法螺貝になると考えられる。柱穴 27・285 から出土した 2 片が接合したもの。43～51 は 15 世紀後半～16 世紀中頃。52・53 は端反の小野 B1 群皿。いずれも外面に牡丹唐草、見込に十字花文を描く。52 は被熱資料で、全体的に器面が荒れて気泡が入り手触りに凹凸感を感じる。光沢も失っている。復元口径は 52 が 9.6 ㎝、53 が 9.8 ㎝。復元底径は 52 が 4.7 ㎝、53 が 3.6 ㎝。54・55 は内面口縁付近に四方襷文を持つ小野 E 群碗の口縁片。54 は外面に草花文。線描きで文様のアウトラインを描き、そのラインからわざとはみ出すように呉須をダミる手法。柱穴 68 から出土した。55 は外面無文。57 は小坏である。底径 2.7 ㎝。高台内に「大明年造」銘、見込に蓬来文。16 世紀中頃で、同じタイプのものが博多遺跡第 124 次調査の一括資料に見られる。58 は青花碗の口縁部。54 と同様の技法で草花文を描く。内器面は界線のみ。

陶器（60～65）　60 は中国産と思われる陶器の底部片。外底端は角張り、器面に褐釉がかかる。61～63 は天目碗であり、いずれもスッポン口の口縁。61 は中国産でガラス質の非常に光沢の釉がかかる良品。素地は灰白色。62 は素地がにぶい黄橙色で瀬戸美濃系。63 は柱穴 27 から出土。釉は小豆色で暗灰色、緻密な素地であるので、中国産天目であろう。64・65 は茶入小壺と推定され、64 は底部。内面に光沢のある褐釉がかかり、外面から外底は露胎。底部は糸切痕跡。65 は肩衝の肩部で、内外面に明褐色の褐釉。

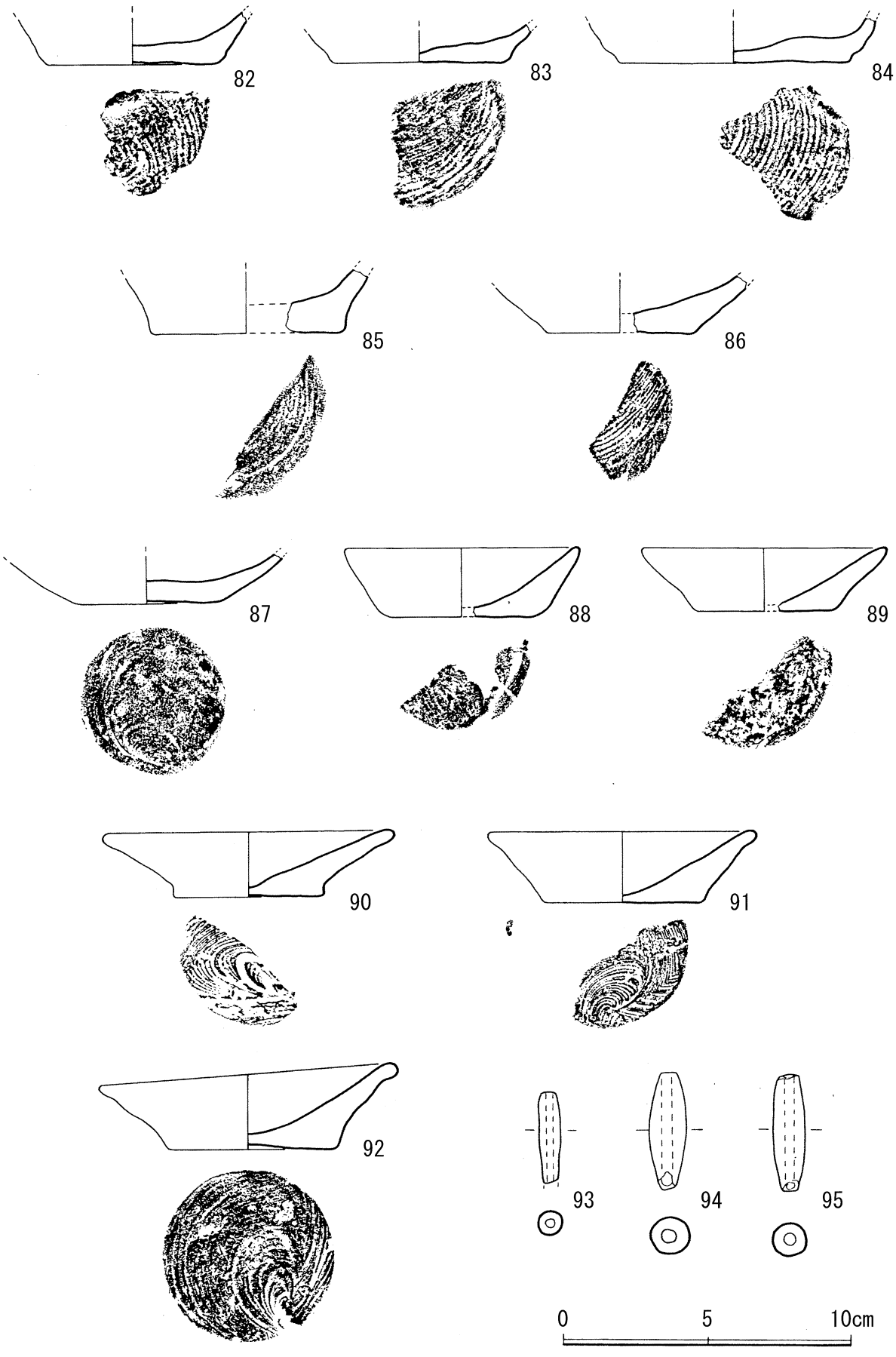
土師質土器皿（67～92）　67～92 は糸切の土師質土器皿で、法量から口径 7 cm・底径 5 cm 前後の小型皿（67～79）、口径 8 cm・底径 5 cm 前後の中型皿（88・89）、口径 9 ～10cm・底径 6 cm 前後の大型（90～92 ）、底径が 6 cm 前後で器高が低いと見られる平皿（81～87）の 4 タイプがある。小型品は概ね 70 のように体部がラッパ型に開き見込に平坦面がないものと、74・75 のように体部が直線的に立ち上がり口縁で多少内湾するものに分れる。75・78 などは見込の中央に凹型のヘソがある。大型皿は 70 と同タイプで、92 のように体部がラッパ型に開き見込が窪む。内面は底へ向けて直線的に作られ、やはり見込に平坦部がないのが特徴である。平皿としたタイプは 81 のように体部が内湾すると思われる。67 は柱穴 285、68 は柱穴 204、71 は柱穴 169、72 は柱穴 285、73 は柱穴 49、75 は柱穴 313、78 は柱穴 14、79 は柱穴 322、80 は柱穴 169、81 は柱穴 213、87 は柱穴 95、88 は柱穴 309、89 は柱穴 13、92 は柱穴 144、83 は横堀 1 T-a から出土した。77 は口縁の一部にススが付着する。この事から推測すれば、棚底城跡では灯明皿以外にも利用された可能性が大きい。焼成は全体的に堅緻で、上質な土師質土器である。

表D　土師質土器法量数値表

遺物番号	口径	底径	器高	遺物番号	口径	底径	器高
67	6.4	3.8	2	81	8.2	6	1.7
68	6.8	4.6	2.3	82		6	
69	7.2	4.9	1.8	83		6.2	
70	7.1	4.6	1.9	84		8	
71	7	5.6	2	85		6.7	
72	5.4	4.8	2	86		5.2	
73	6.8	5	1.8	87		5	
74	7.4	4.9	2.1	88	8.1	5	2.4
75	7.7	5	1.8	89	8.6	5	2.2
76	7.2	4.2	1.9	90	10.1	5.2	2.3
77	6.3	5	1.9	91	9.1	5.7	2.5
79	7.3	4.2	2.3	92	10.3	5.9	2.6
80	9.2	5.2	2.5				



第40図　出土遺物実測図（4）



第41図　出土遺物実測図（5）

土錘（93～95）　いずれも小形で、94は長さ4.1㎝、幅1.3㎝、重さ7.61ｇ。95は柱穴14から出土したもので、長さ4.2㎝、幅1.1㎝、重さ5.71ｇ。

焼締陶器（96～104）　96～104は焼締陶器。98・100・102・104は備前、99は常滑である。98は備前の折り畳み口縁であるが、器壁に多数の凹みがある。98に限らず、本遺跡より出土する備前甕片にはほとんどにこの凹みがあり、被熱によって劣化したものと考えられる。100は柱穴89から出土。102・104は同一個体であろう。103は産地不明の長胴甕。外面は暗赤褐色、内面は褐灰色でかなり堅緻。海外産の可能性。

擂鉢（105～119）　105～119は擂鉢。焼成から瓦質(105・116・117・119)、土師質(106・108・111)、須恵質(107・110・114・115)の３タイプがある。条線単位は、４本(104)、６本(107・108・111・117・118)、８本(114)、９本(110)、10本(109・115・119)、12本(113)の６タイプに分けられる。110は柱穴272、115は横堀１T-ａ、116は柱穴38から出土した。火舎と共に中世城跡から出土する最もポピュラーな中世雑器である。

火舎（120～124）　124は土師質、他は瓦質の火舎。120・122・124は、器面に花文印を有する。123は三巴文様、121は「X」状のスタンプ。

須恵質甕（125～130）　中世の須恵質甕で、125は平行叩き、126～130は格子目叩きが残る。126は柱穴285、128は柱穴157、130は柱穴285から出土した。水甕としての利用が考えられるが備前甕等との時期差や機能分担は判明していない。107などの須恵質擂鉢と同様の中世須恵器。狭域流通品であろう（註２）。

羽釜（132、133）　132・133は瓦質羽釜で、作りは薄手。いずれも内外器面が摩耗しており、かなり使い込まれている。132は柱穴50から出土した。

不明土器（131、134、135）　131は土師器質で内外器面に櫛状のヘラナデ、柱穴263から出土した。捏ね鉢か。134は平底で、体部は大きく開く。135は復元底径19.2㎝、柱穴262から出土した。

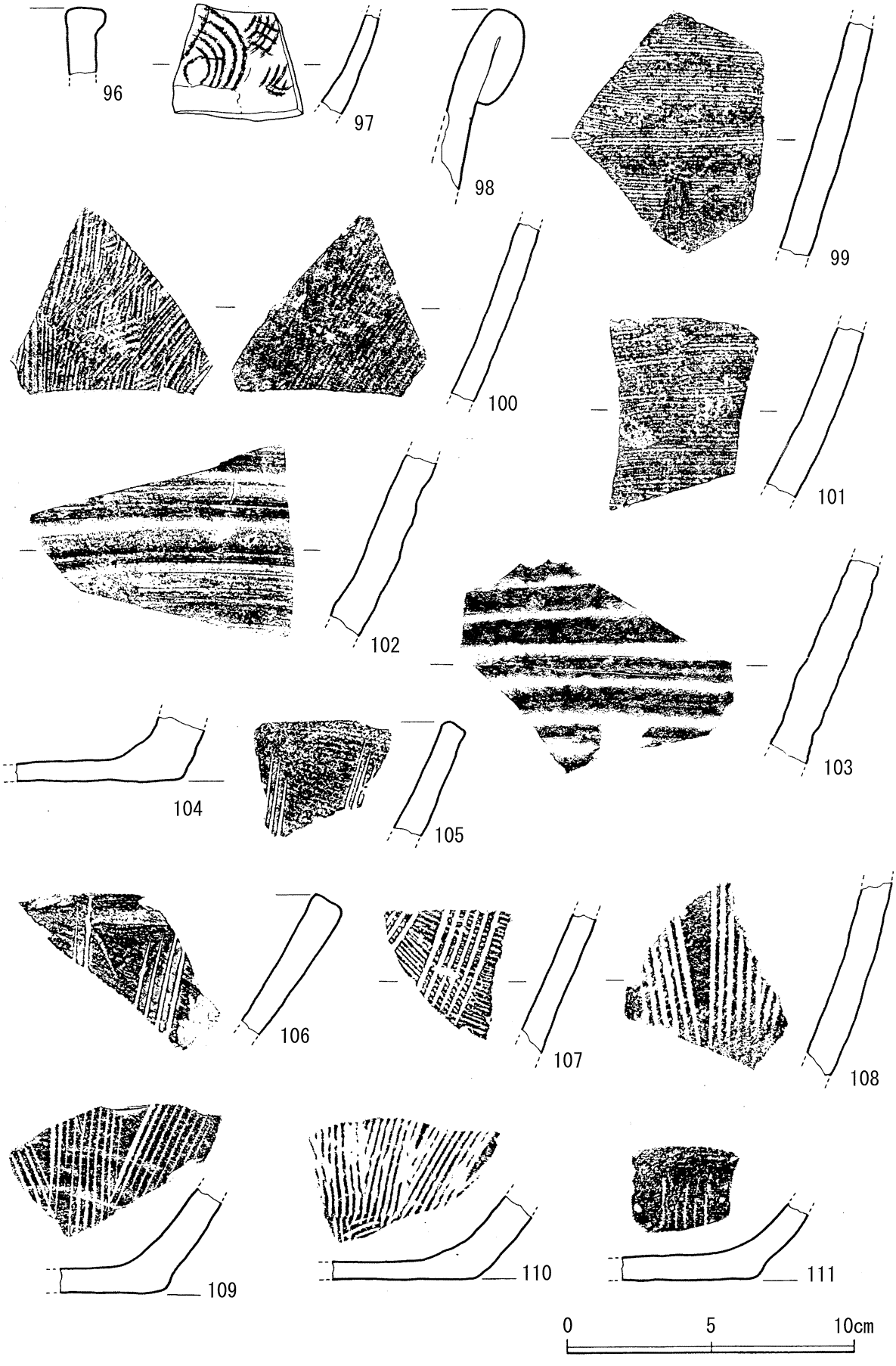
平瓦（136、137）　136、137は平瓦。凹面の布目・コビキ痕跡などが見られない。近世以降の平瓦片で城跡時代のものではなく、廃城後の持ち込みであろう。３点見られたが、内２点を実測。

碁石（138～147）　Ⅰ郭からは、黒色41点、灰白色113点が出土した。このうち10点を図化している。県内ではこれほど大量に碁石が出土したケースはなく、城内での暮らしをあらわす遺物である。前報告で苓北町富岡産の可能性に言及したが、その後、有明町上津浦周辺で取れる「真黒石」である可能性について示唆を受けた（註３）。

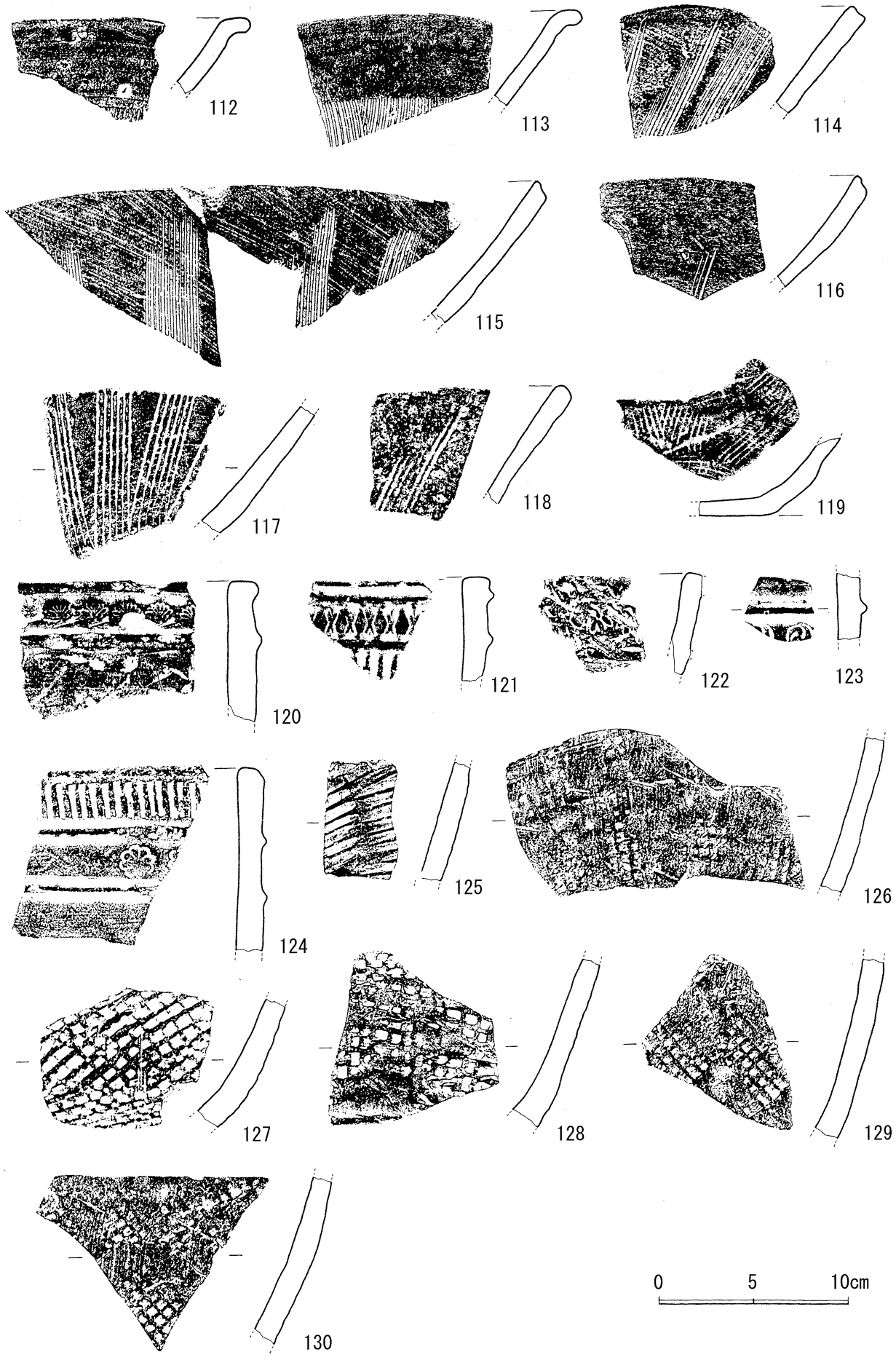
石製品（148～153）　148～152は引き臼。Ⅰ郭と周辺部から５点が出土した。中世の食生活における粉引き文化を代表する遺物。148・149・152は受け皿部が丁寧に作ってあるので茶臼であろう。148・149は砂岩。153は石製の「面取風炉」である。全体の二分の一弱が出土した。２点の接合で、１点は〔Ⅰｇ〕の小段部、他１点は〔Ⅰｆ〕のトレンチ調査で出土した。石材は下浦産砂岩で、復元口径24.5㎝、復元胴径44.7㎝、復元底径26㎝、器高27㎝、器厚は10.8～13.5㎝、方形に抉り取られた推定される焚口は幅約16㎝、推定される重さは約50㎏。丁寧な仕上がりになっている。

Ⅱ郭出土の遺物

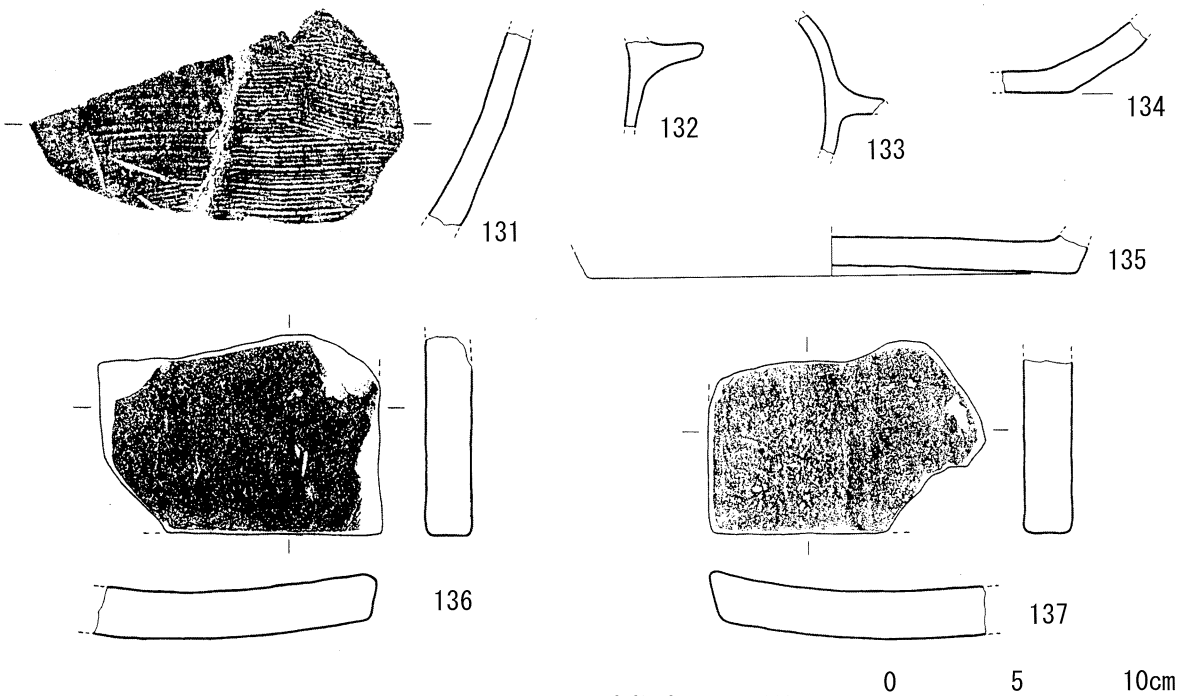
青磁（154～169）　154～169は青磁。154～156は端反の上田Ｄ類片。156は甘い焼成で素地がにぶい橙色。15世紀前半にピーク。157は無文口縁。163は底部片。高台外面まで釉がかかり、外底は無釉と見られる。見込も円形に釉を剥ぐタイプ。底部は厚い。表面は光沢を失いザラザラした感触を残す。被熱資料である。164は退化して波状になる雷文を持つ口縁部。上田Ｃ-Ⅲ類。16世紀中頃～後半。柱穴72から出土した。169も同様か。165・166は稜花皿。15～16世紀まで息の長い遺物である。168は上田Ｂ-Ⅳ類。丸い剣頭２に対して細線１で単位がそろっていない。



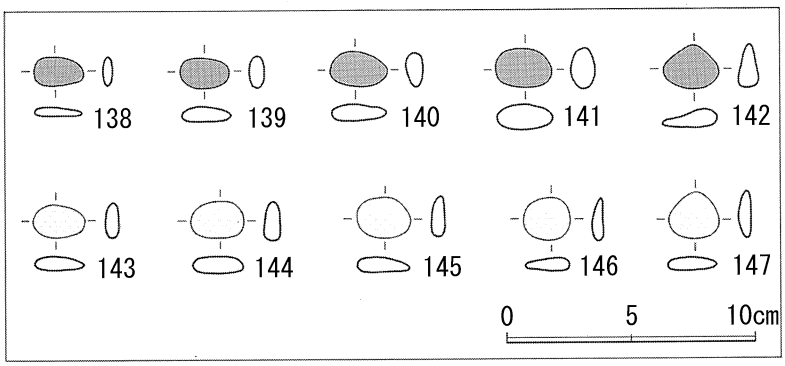
第42図　出土遺物実測図（6）



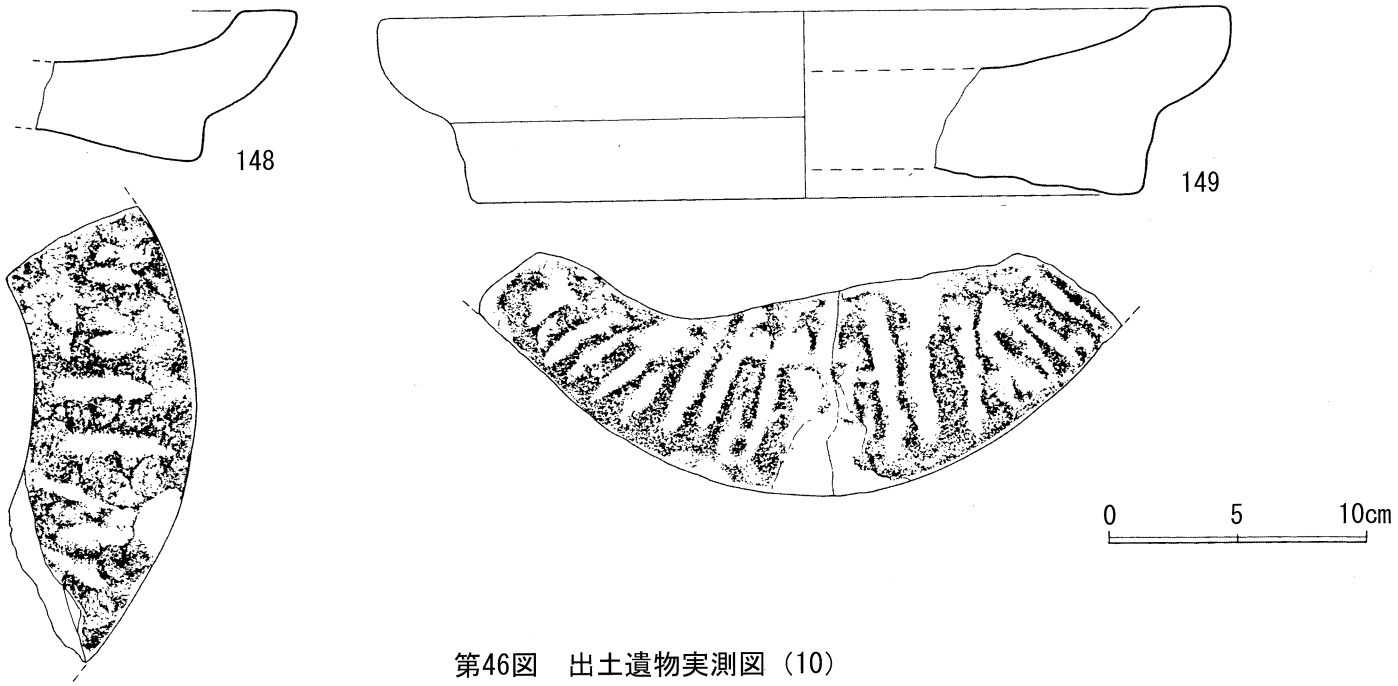
第43図　出土遺物実測図（7）



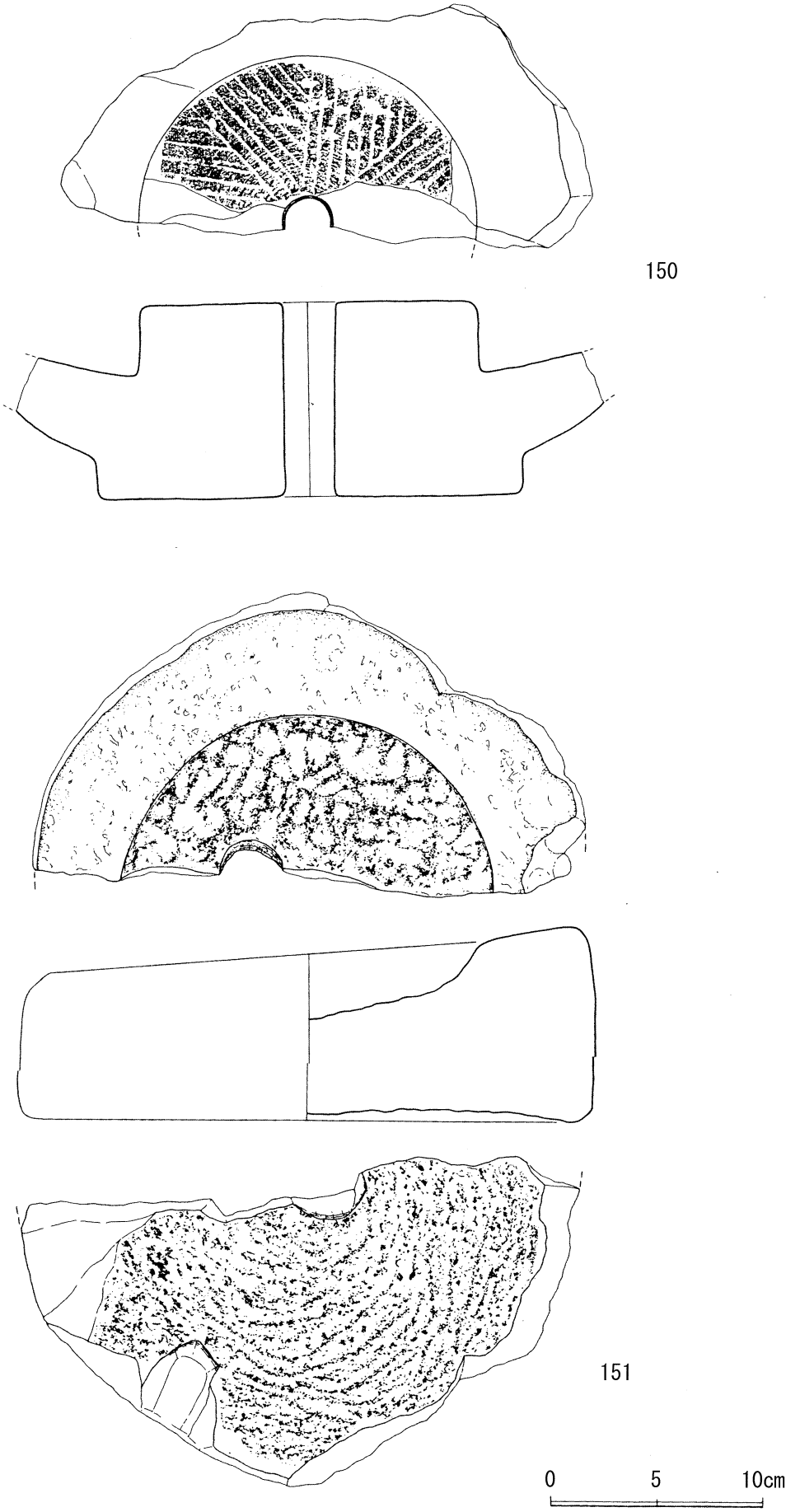
第44図　出土遺物実測図（8）



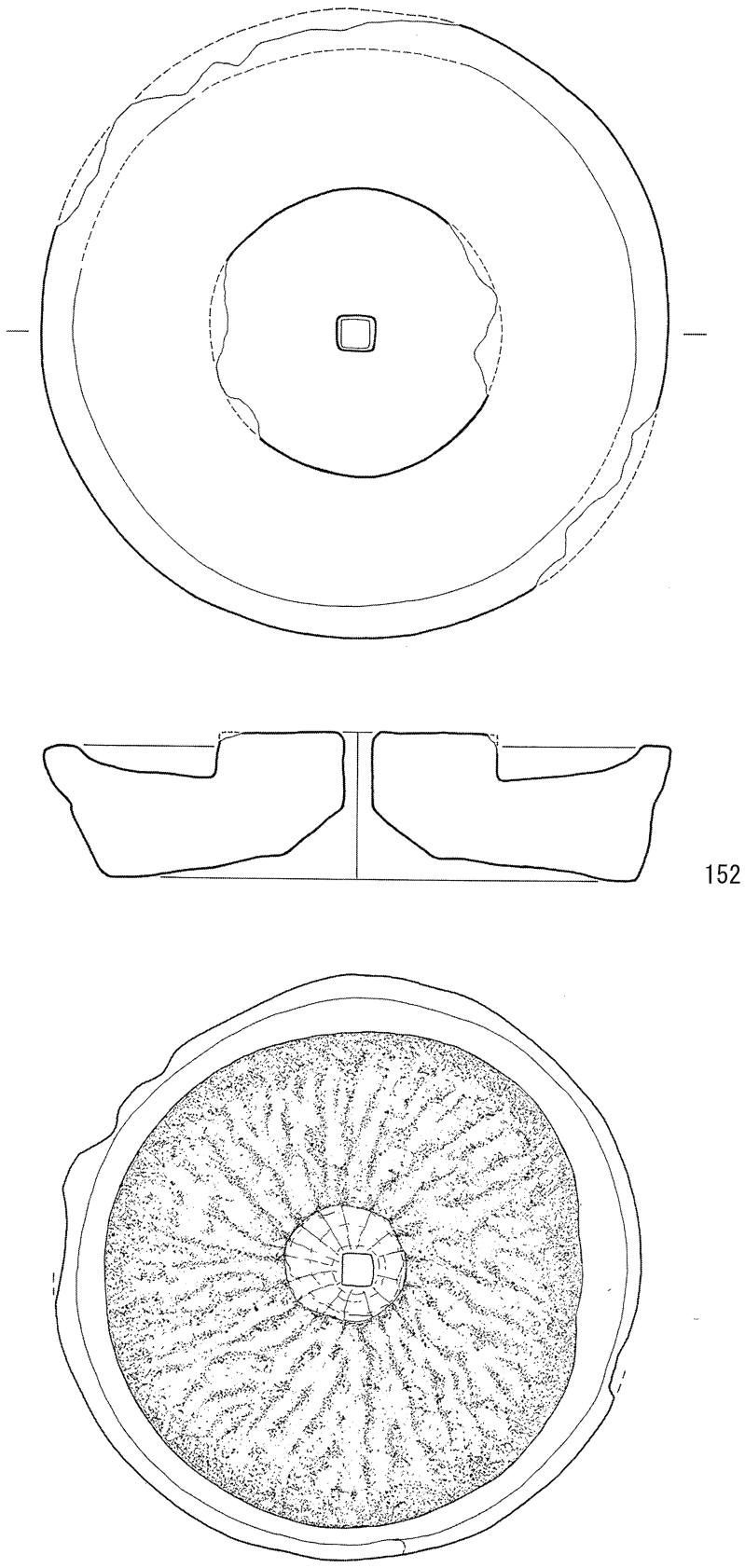
第45図　出土遺物実測図（9）



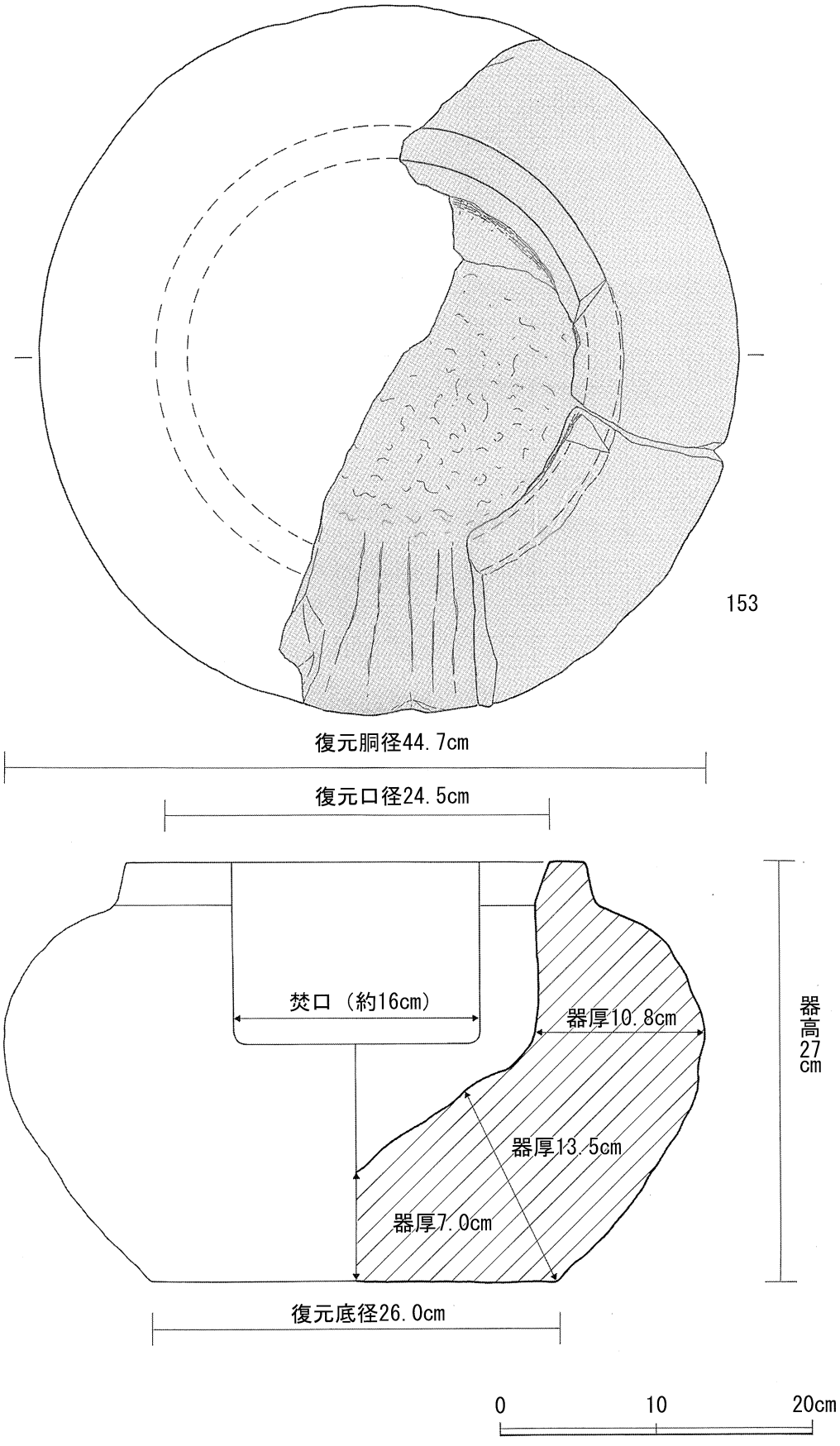
第46図　出土遺物実測図（10）



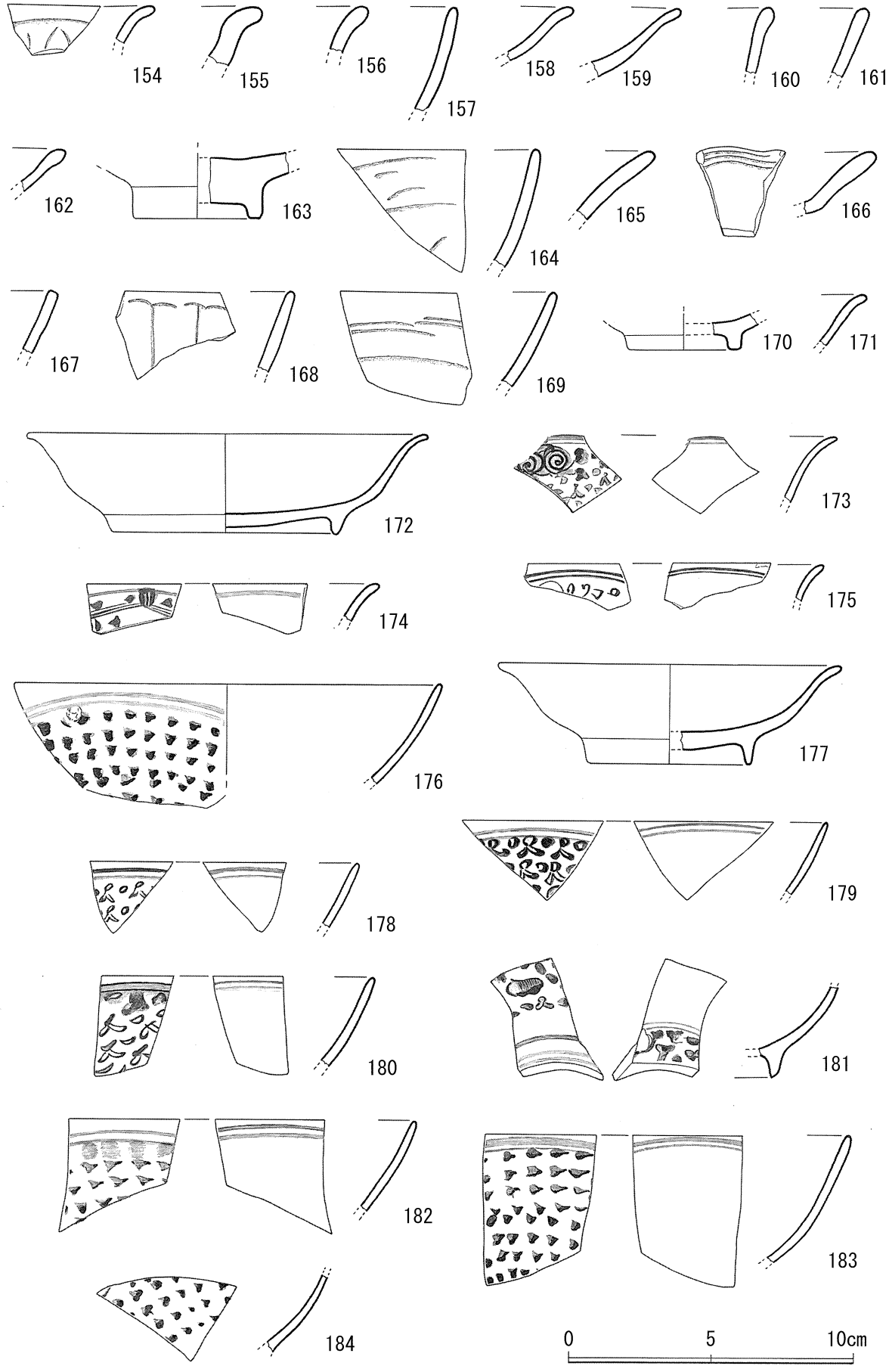
第47図　出土遺物実測図（11）



第48図　出土遺物実測図（12）



第49図　出土遺物実測図　風炉（13）

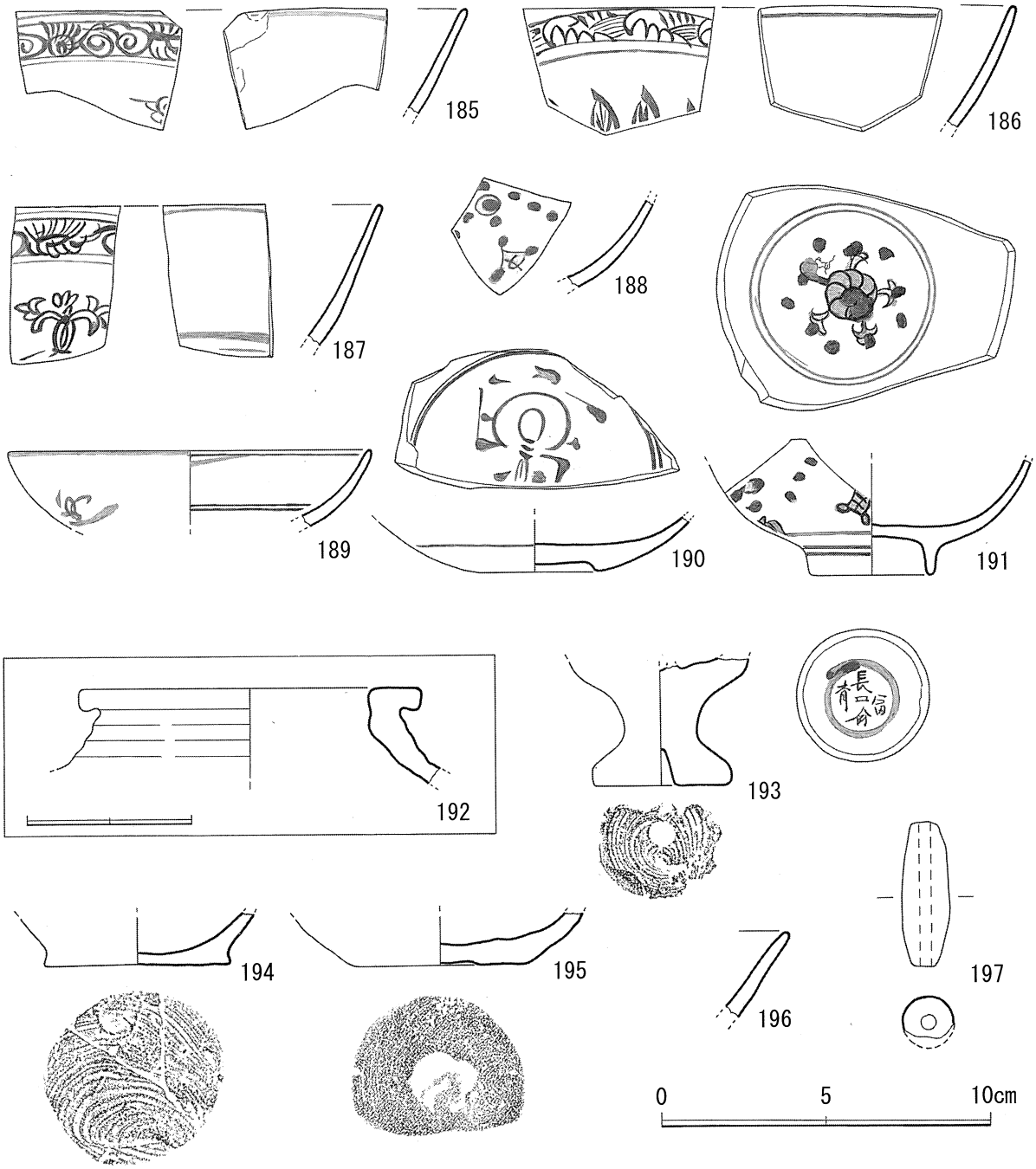


第50図　出土遺物実測図（14）

156～160 が 15 世紀中葉、161・162 は 15 世紀、163 は 16 世紀中葉まで下る。164・165 は 15 世紀のもの。166～168 は、下限が 16 世紀前半、上限は 166 が 15 世紀中葉、167・168 が 15 世紀後半。169 は 15 世紀～16 世紀。

白磁（170～172）　170～172 は白磁。170 は森田 D 類の抉り高台。見込は黄味を帯びた乳白色釉で貫入がびっしり走る。高台部は腰の立ち上がりまで全て露胎。14 世紀後半～15 世紀中頃。復元底径 4.0 ㎝。171・172 は森田 E 群。172 は復元口径 4.0 ㎝、底径 7.9 ㎝、器高 3.5 ㎝。16 世紀。

青花（173～191）　173～191 は中国産青花。189・190 以外は景徳鎮系。173・175 は端反の碗で、文様が C 群と同じ梵字文のもの。かなり薄手の作りとなる。177 は器形から小野 B1 皿か。焼成不良のために呉須が消えているが、端反口縁と胴立ち上がりに界線が確認できる。柱穴 72 よ



第51図　棚底城跡出土遺物実測図（15）

り出土。。176・178～187はいずれも小野C群碗。15世紀後半～16世紀中頃。178～181は梵字文、176・182～184は逆三角文、185・187は口縁に波濤文、体部にアラベスクを描く。179は柱穴41、182・184が柱穴19、185は柱穴73より各々出土。186は口縁波濤文、胴は芭蕉文。187は釉が灰色がかる。呉須も発色が悪い。185と同じく柱穴73から出土。188・191は小野E群碗。同一個体か。191は饅頭心で内外面に瑤銘文、高台内に「長命富貴」銘。16世紀後半。189・190は漳州窯系の粗製碁笥皿。粗製のC群皿である。190は見込に人形寿字文。16世紀後半。

陶器（192、193）　192・193は中国産褐釉陶器の口縁部で、16世紀頃のものか。復元口径21㎝、器面に火膨れがある。図示していないが同様の破片が相当数あり、数個体に復元されるものと思われる。

土師質土器（194～196）　194～196は糸切りの土師質土器。底径は194が5.7㎝で小型皿。外底端が肥厚して角張る。195が5.3㎝だが、体部が緩やかに外に広がっていることから中型皿か。

その他（197～206）　197は土錘。小形で長さ4.5㎝、幅1.4㎝、重さ7.08ｇ。198は須恵質の甕で、内外面に丁寧なナデが入る。口縁は直立し玉縁に作る。199～201は擂鉢。199と201は須恵質で前者には注口が付く。201は柱穴74から出土。200は瓦質で、復元口径26.6ｃｍ。条線の一単位は６本。202～204は瓦質火舎で、202・203は突帯間に花文印。204は体部下位に突帯。柱穴42から出土した。205・206はいずれも格子叩きの中世須恵器甕。

Ⅲ郭出土の遺物

青磁（207）　207は龍泉窯系青磁D類で口縁は軽く外反する。14世紀後半～15世紀後半。釉色は灰白緑色。

白磁（208）　208は景徳鎮系E類の底部。薄壁。

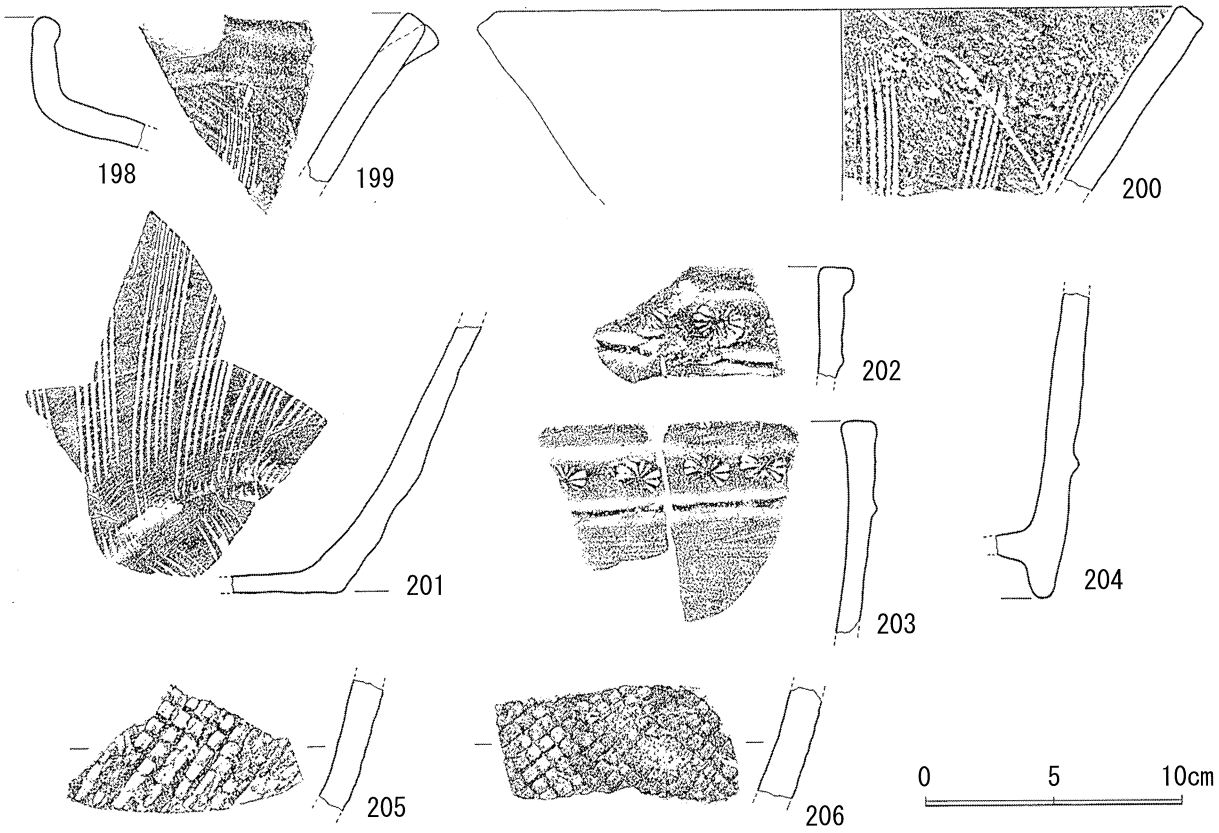
その他（209～213）　209は瓦質擂鉢。条線の単位は８本。210の火舎は２条の突帯が付き、間に「｜」の押し型文。211・212は無釉焼締陶器の底部。212は内面が赤褐色、外面がにぶい橙色。平底で胴部は直線的な立ち上がりを呈し、器壁は薄い。213は平行叩きの中世須恵器。125と同様のもの。

Ⅳ郭出土の遺物

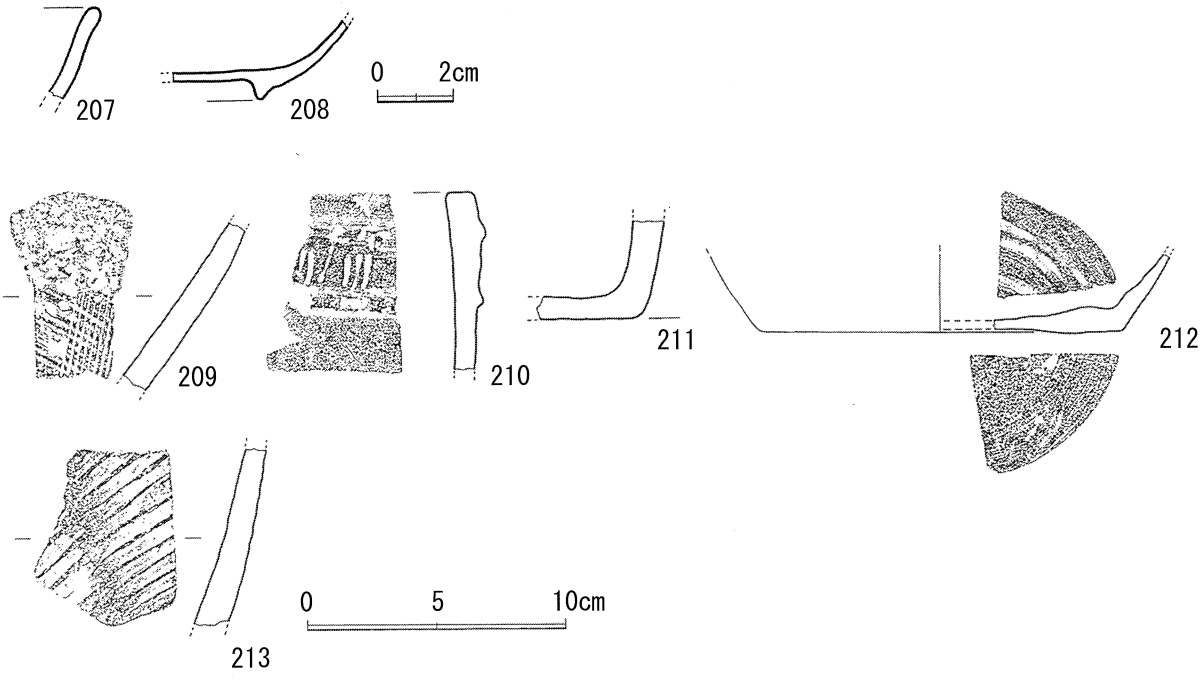
青磁（214～226）　214～226は青磁ですべて中国産。214は碗で復元底径4.8㎝。高台内は基本的に無釉であるが、一部に釉が付着。また輪トチの一部も付着している。見込は草花文スタンプがあり、縦横に掻き傷が見られる。茶筅による傷と考えられ、茶の湯碗として使用されたようである。高台Ⅰ類と分類した。215は大型稜花盤の口縁片。龍泉窯系で口縁が鍔状になるタイプ。被熱資料であり光沢を失っている。7T柱穴5から出土した。216・217は上田D類の端反碗。やや胴部が張る。216は復元口径16㎝。219は底部片で高台外面まで施釉、高台内は無釉。畳付は欠損で不明。見込に小円のスタンプだが円内の模様が判別不可。復元底径4.3㎝。高台Ⅰ類に分類。220も端反りの口縁部。坏か。7T・柱穴3から出土。221は稜線がある碗で、3T・柱穴6から出土した。やや粗く非龍泉窯系か。222は底部片。底径5.8㎝。畳付と高台内が無釉。見込に印花文で214同様、無数の茶筅傷がある。高台Ⅰ類。15世紀頃であろう。223・224は上田B－Ⅳ類。223は内外面とも全体的に被熱し気泡が無数に発生している。口径14㎝。1T・柱穴1から出土。224は口径12.3㎝。226は復元口径14.1㎝。10T・柱穴1から出土した。

〔釉色〕※灰緑色214・220・224　※緑灰色215　※灰白緑色216・217・222　※暗緑茶色218　※深緑219　※灰白青色221　※灰白褐色225　※灰白青緑色226

白磁（227～230）　227～230は白磁。227は森田D群皿の底部。斜方向にカットされた畳付が特徴。釉の一部が高台外にかかるが、基本的には高台外から外底まで無釉。底径3.5㎝。素地は陶質で黄褐色。釉にはびっしりと貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。228・230は景徳鎮系。228はE群。見込がやや高台内に凹む。畳付のみ露胎。底径6.6㎝、2T・柱穴2から出土。229



第52図　出土遺物実測図（16）



第53図　出土遺物実測図（17）

は福建省系の白磁碗。口縁端は肥厚する。外面口縁付近に簡略雷文。白磁と青磁の中間的もの。230はE群タイプの皿であるが、釉色・素地ともに灰色を呈す。底径7㎝、ヒビ焼き状態にある。類例は豊後府内などで知られ（註4）、E群の中でも新しいものと考えられる。16世紀後半頃。

ベトナム青花（231）　231は碗で、ベトナム産の青花碗。口縁部は外反する。体部は2本の界線で区画され、その間に便化した唐草文を描く。内面口縁部も「つ」字状の唐草文を描く。釉は淡黄色、素地は灰白色でやや軟質。呉須の発色も悪く、濁りの強い藍色。14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。

青花（232～235）　232～234は景徳鎮系青花、235は漳州窯系青花。232は小野C群碗口縁片。波濤文。被熱資料で口唇部には煤。15世紀後半～16世紀前半。232は復元口径11.4㎝。被熱しており、2T・柱穴2から出土した。233は端反の青花皿。見込に二重界線と文様を太い筆致で描き、胴部は無文。畳付の露胎幅が広い。小野B2群皿か。234は口縁の波濤文と芭蕉の先端が残る。呉須の発色は暗め。小野C群碗。235はC群粗製の碁笥底皿。復元底径3.7㎝、畳付から外底は露胎で灰色。見込に人形寿字文。16世紀後半頃。

その他（236～255）　236は備前甕の口縁部。折り曲げて帯状口縁になるもので真壁編年Ⅳ期と思われる。3T・柱穴2から出土した。237～244は擂鉢。237は瓦質で黒色、右下斜方向へのハケ目後に横方向へのハケ目、最後に擦り目を施す。口唇部は平坦。238も瓦質。褐灰色。口唇部が段作りになるもの。239はにぶい橙色。240は底部片で擦り目が亀甲状に巡る。全体的ににぶい褐色を呈すが摺り目付近のみ円形に黒変。241～244は須恵質の擂鉢。241は体部の立ち上がり角度が約53度、内面に横方向のハケ目の後、六条の擦り目。灰白色。242は体部角約47度。斜方向のハケ目。灰色で胎土はやや粗い。243・244はいずれも良好な焼成で硬質。後者は斜めにナデたあとに五条の幅広で明瞭な擦り目。245～249は焼締陶器。247、248は薄手の須恵質の甕であるが自然釉がかかるもので、格子叩きをもつ通有の須恵質甕とは明らかに異なる。250、251は瓦質火舎。250は二重のX文スタンプを施す。252は瓦質羽釜。鍔は先端を上向きに作り、内面は横ナデ。にぶい橙色。茶釜か？253～255は格子叩きの中世須恵器甕胴部片。254が3T・柱穴2、255が3T・柱穴5から出土した。

Ⅴ郭出土の遺物

青磁（256、257）　256、257は龍泉窯系青磁。256は上田C類碗で雷文。257はB-Ⅳ類剣先蓮弁文。15世紀後半頃。釉色は256が灰白緑色、257が明灰白緑色。

白磁（258）　258は景徳鎮系のE群白磁皿。体部・底部とも薄壁。

Ⅵ郭出土の遺物

青磁稜花皿（259）　259は龍泉窯系の青磁稜花皿口縁部片。15世紀頃のもの。

瓦質擂鉢（260、261）　260・261は土師質擂鉢で、261の条線の単位は5本。

土師質火舎（262、263）　262、263は火舎。いずれも外器面にX状の印刻文。

その他（264、265）　264は常滑。265は中世須恵器甕。明瞭な格子叩き。

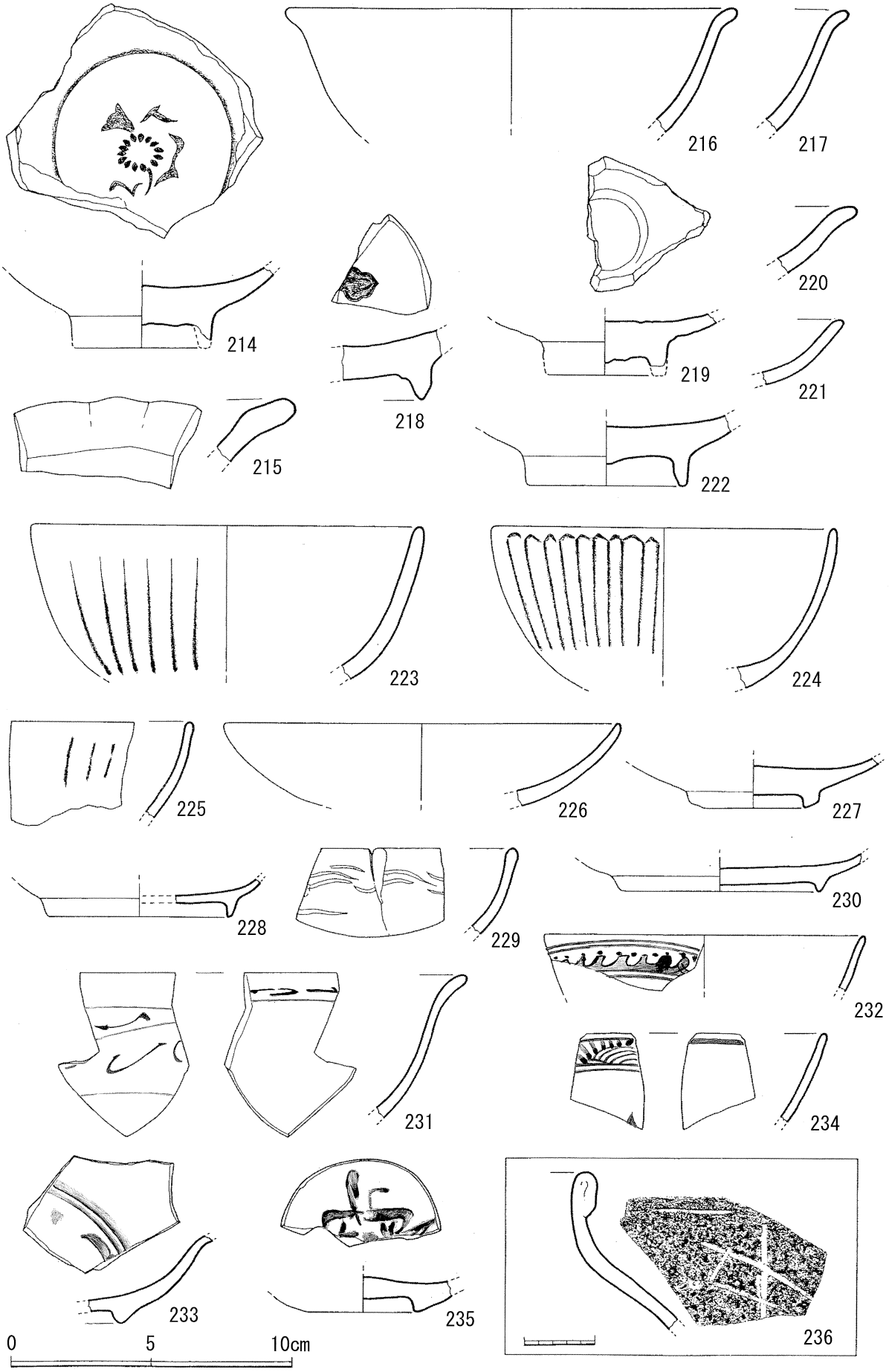
Ⅶ郭出土の遺物

青花（266）　266は小野C群碗。景徳鎮系で16世紀前半～中葉、外器面に「人」字形の梵字文。

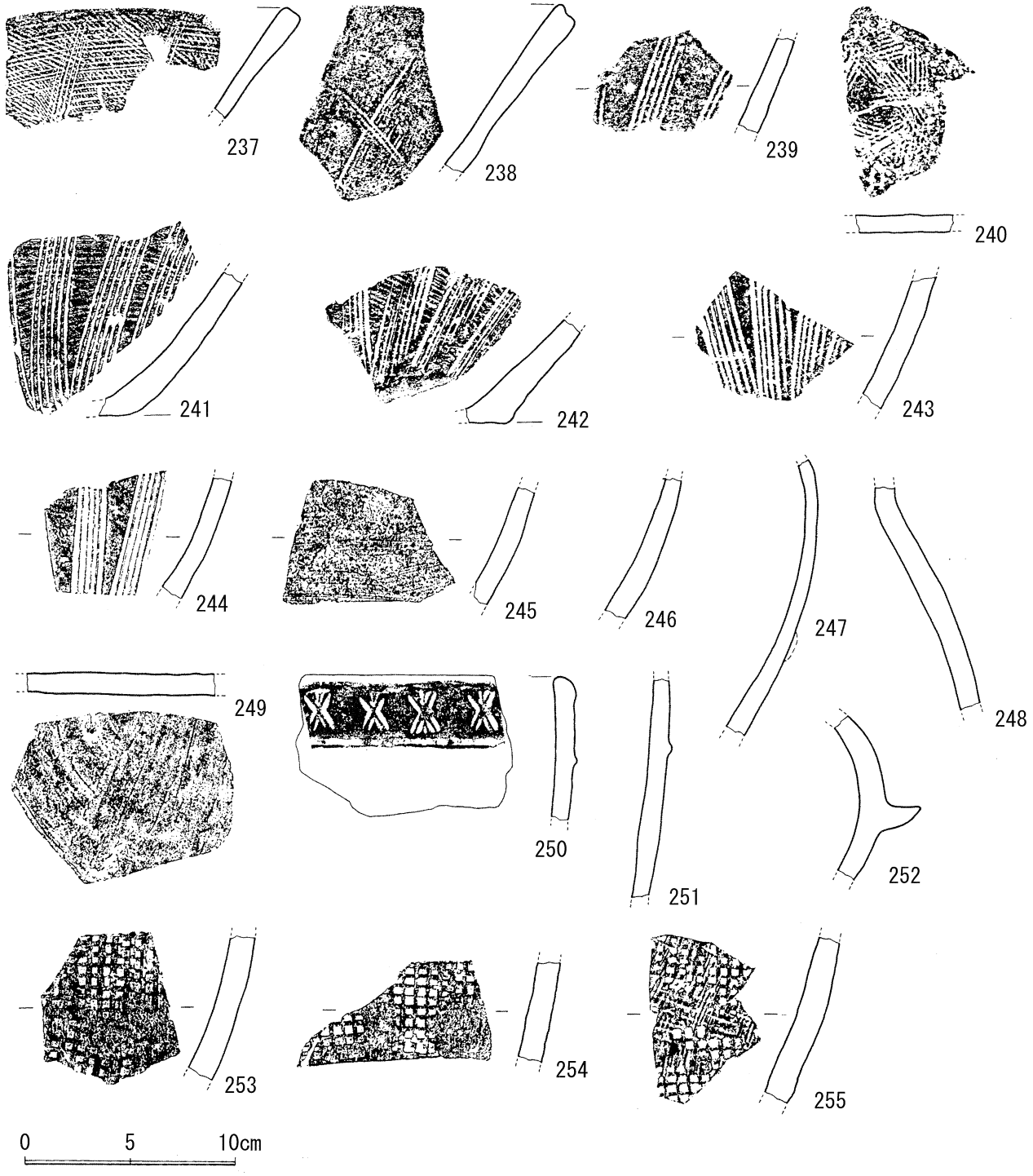
その他（267、268）　267は瓦質擂鉢で、6本一単位の条線。各線間は広め。268は赤みの強い瓦質土器。緩やかに立ち上がる底部片。鉢形になると想定される。2T・柱穴2から出土した。

Ⅷ郭出土の遺物

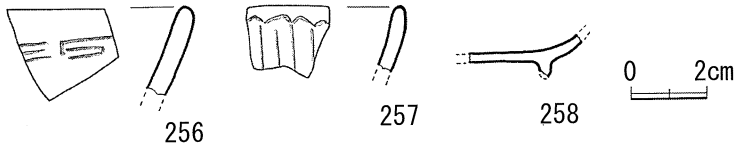
白磁（269）　269は白磁皿の口縁片。無数の貫入がびっしり入る。中国産14世紀～15世紀ころか。復元口径12.6㎝。



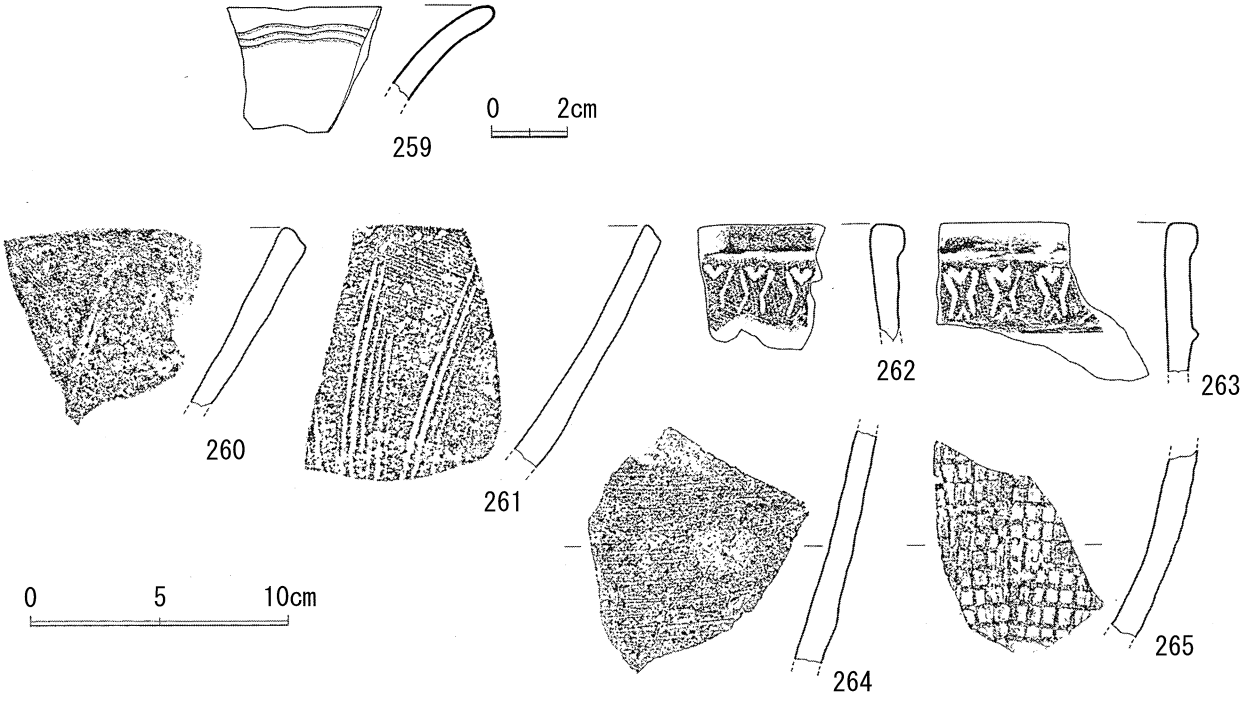
第54図　出土遺物実測図（18）



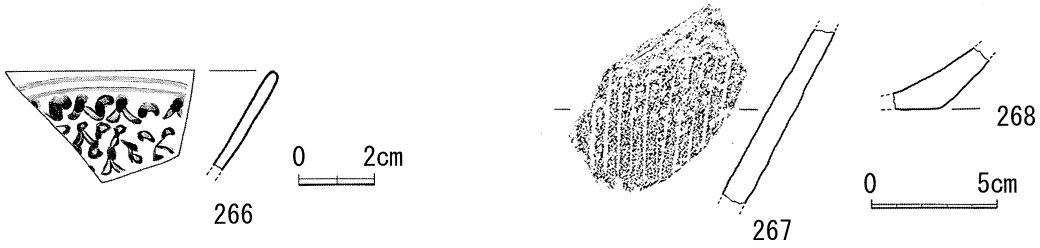
第55図　出土遺物実測図（19）



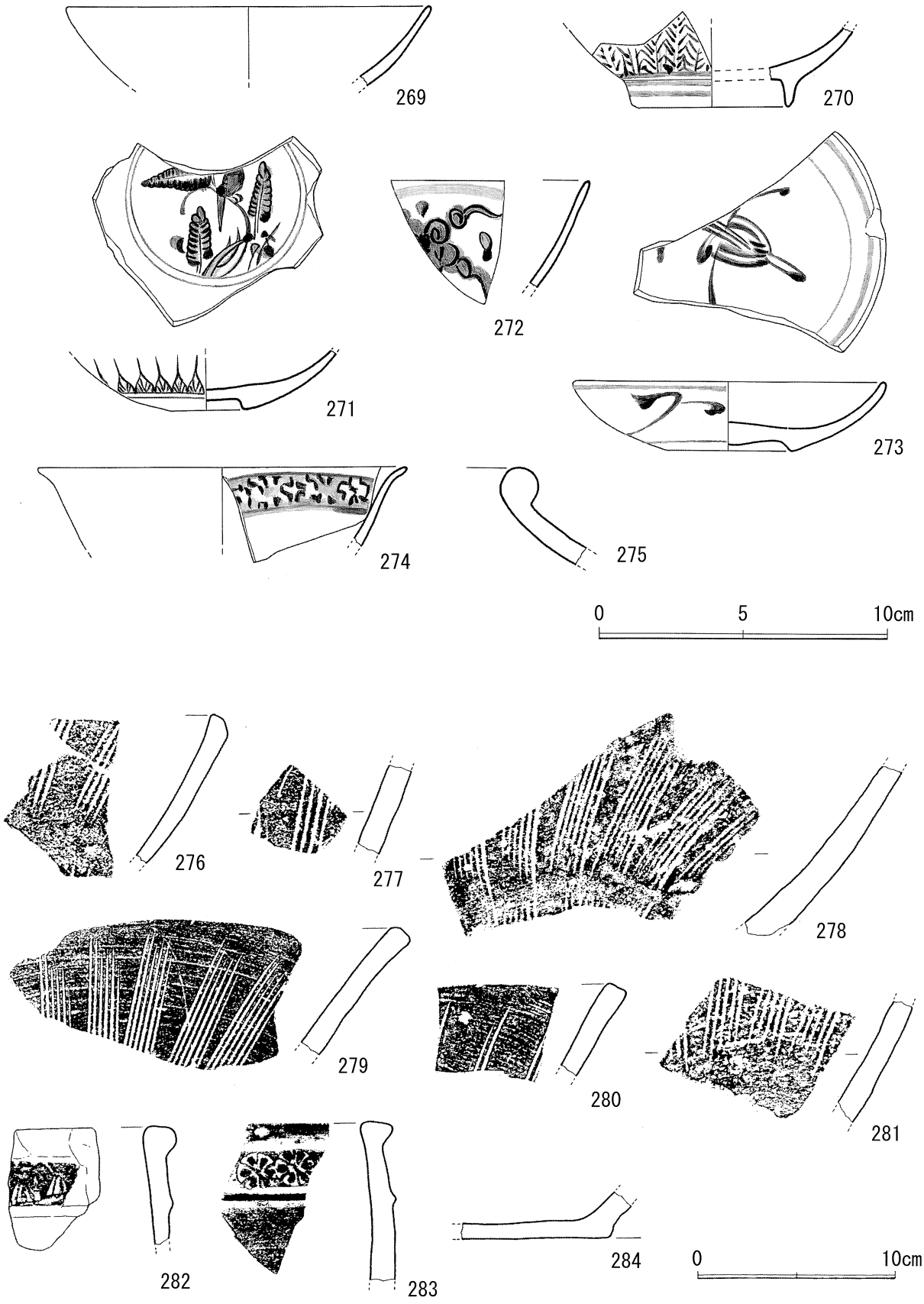
第56図　出土遺物実測図（20）



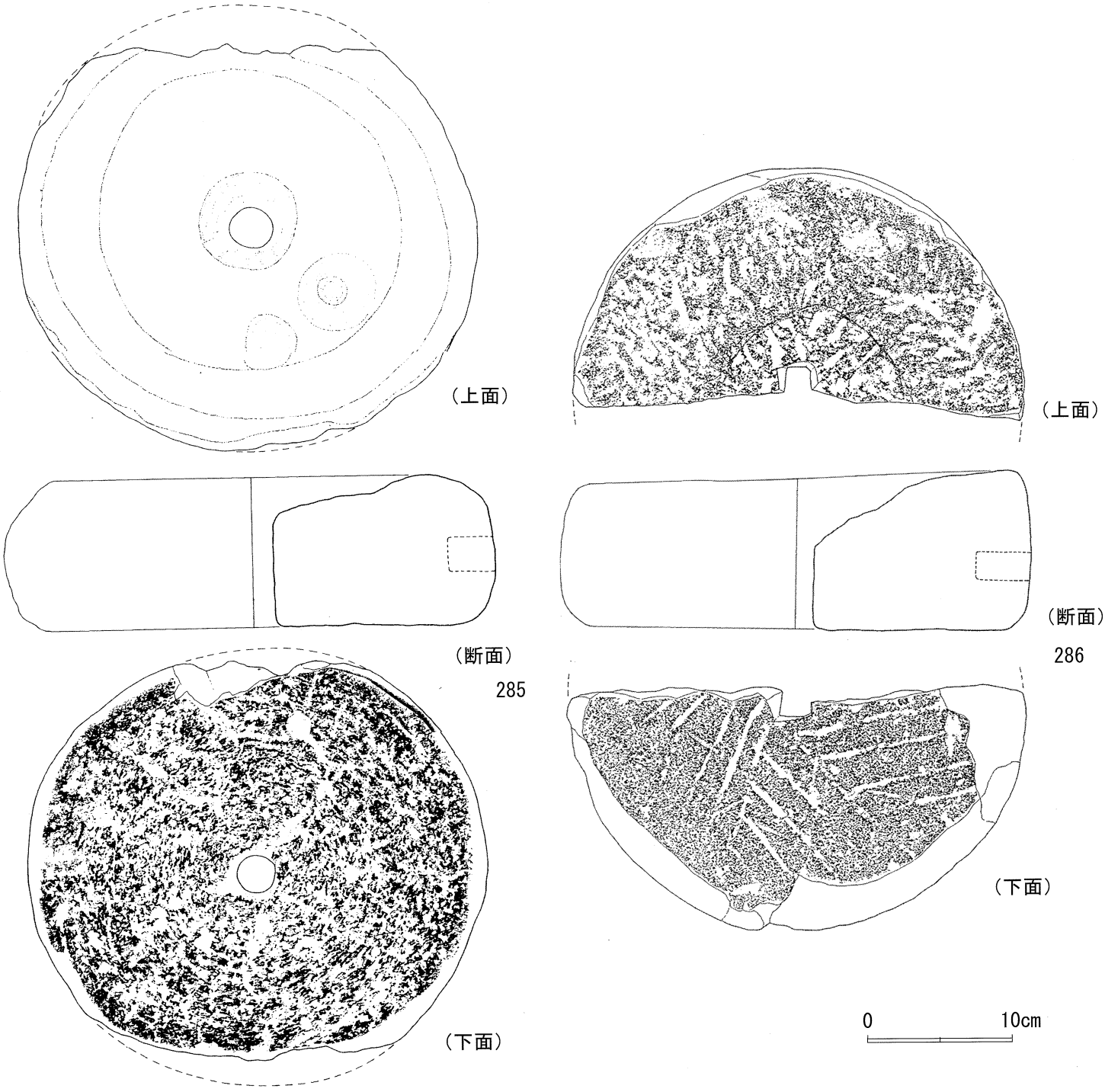
第57図　出土遺物実測図（21）



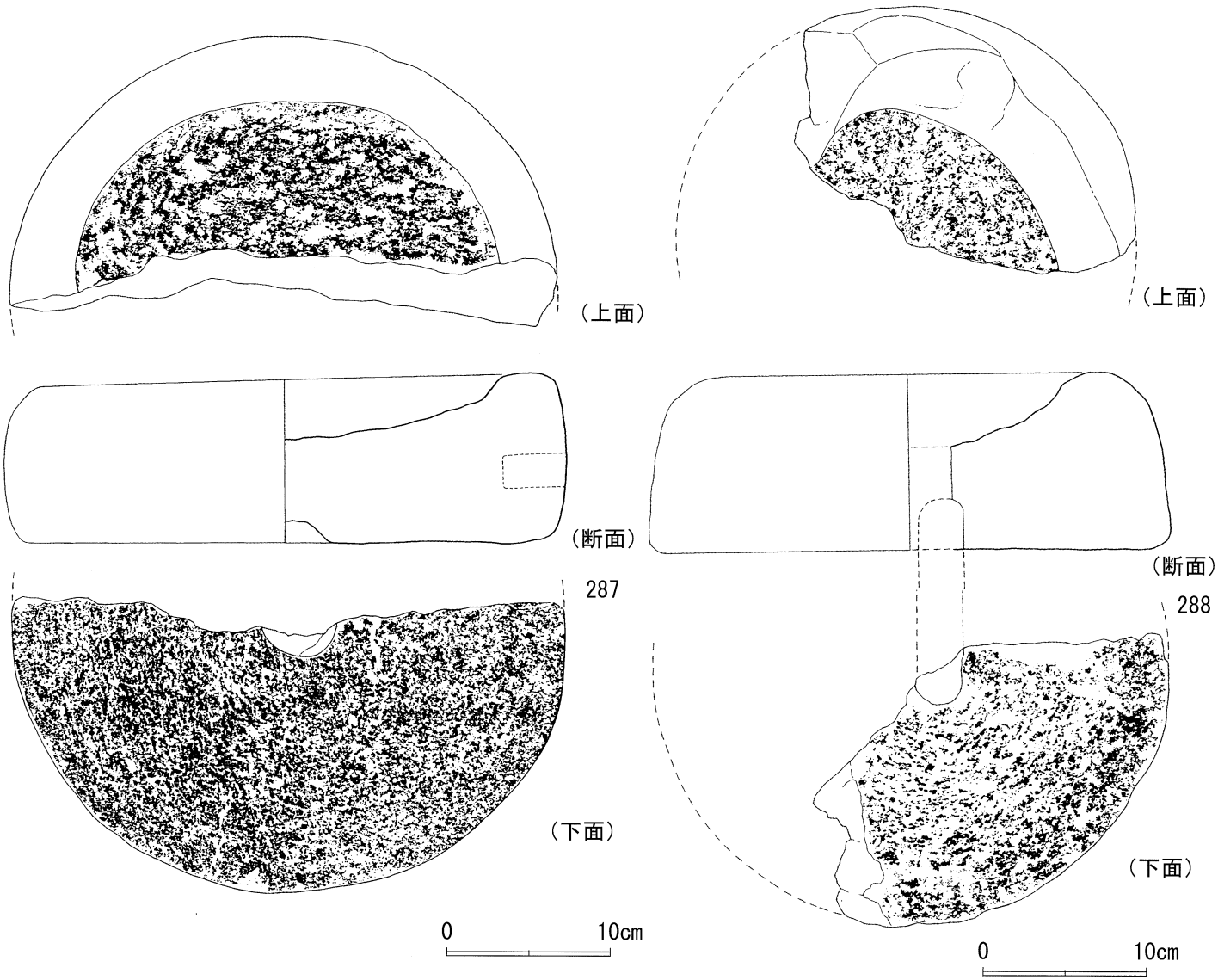
第58図　出土遺物実測図（22）



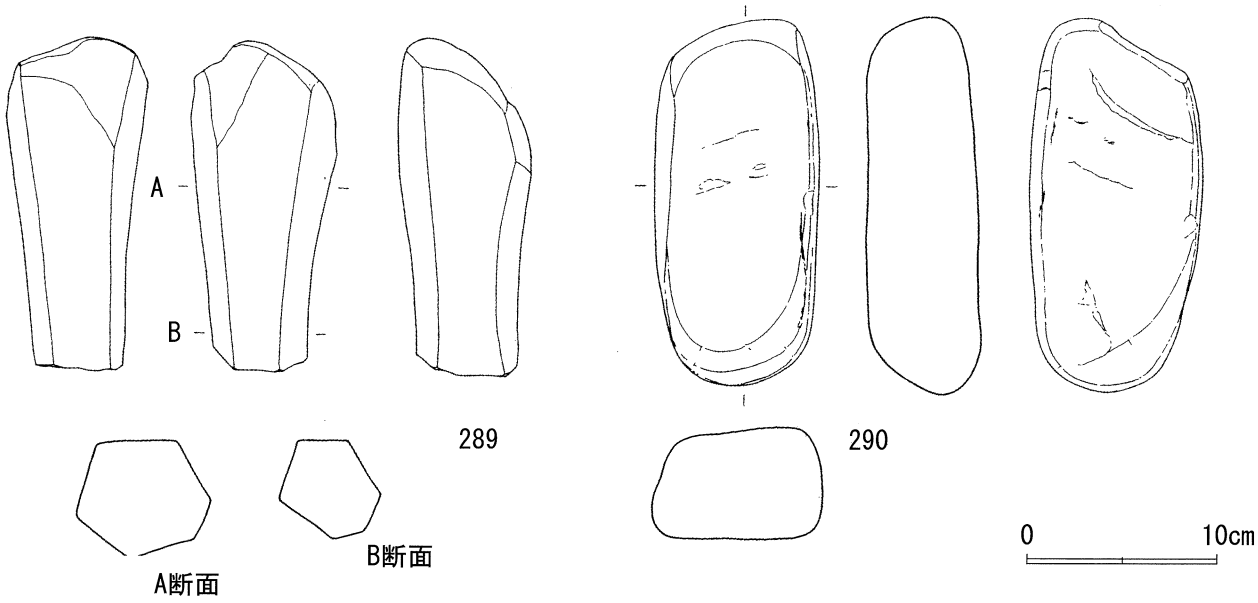
第59図　出土遺物実測図（23）



第60図　出土遺物実測図　ひき臼（24）



第61図　出土遺物実測図　ひき臼（25）



第62図　出土遺物実測図　砥石（26）

青花（270～274）　270～274は青花。270は小野C群碗。立ち上がりに芭蕉文。見込は法螺貝か。復元底径5.3㎝。16世紀前半～中葉。271は景徳鎮系のC群碁笥皿。見込にねじ花文。底径2.5㎝。272は景徳鎮系のE群碗直口縁。外面に如意雲文。16世紀中頃～後半。273は漳州窯系のC群碁笥底皿。復元口径10.8㎝、底径4.3㎝、器高2.4㎝。見込に人形寿文字。1T・柱穴2から出土した。274は端反の小型碗口縁片。内面に四方襷文、外面は無文。景徳鎮系。16世紀後半～17世紀初頭、復元口径12.8㎝。

褐釉壺（275）　275は中国産で明代の褐柚壺。

瓦質擂鉢（276～281）　276から278が土師質、279から281は瓦質。条線の一単位は、277が4本、276・281が5本、278・279が6本。

火舎（282・283）　282・283は火舎。282が土師質、283は瓦質。突帯間には282に印刻文、283に花印文。

中世須恵器甕（284）　284は中世須恵器甕片。1Tから出土した。

石製品

ひき臼（285～288）　285はⅦ郭、286・287はⅣ郭、288はⅢ郭から出土した。全て上臼である。

砥石（289・290）　289は、天草砥石。砂岩でⅧ郭1Tの柱穴1から出土した。290は、玄武岩でⅡ郭の柱穴2から出土した。

小型陶磁器

291～298は遺物カウントの際に見出した未報告の陶磁器細片である。重要と思うものを図示した。

青磁（291、292）　291は龍泉窯系小型香炉の脚部である。15世紀頃か。Ⅰ郭出土。292は型押しで菊形を呈す青磁小皿の口縁部。Ⅳ郭より出土。同類のものがⅠ郭からも出土している。

白磁（293）　293は292と同様の菊形小皿で、外面は線彫、内面には楕円形にえぐりが入る。青磁・白磁とも同様の破片が数点見られる。16世紀中頃～後半の資料であろう。Ⅱ郭より出土。

青釉紅皿（294）　294はごく小さな破片だが、高台外側から胴の立ち上がり、及び見込部に青釉が施される紅皿である。畳付～外底は無釉。博多遺跡等で類例が見られるが、県下では珍しい。16世紀中頃。表土採集資料。

色絵（295～298）　295～298は中国産色絵片である。295～297は景徳鎮系の産で同一個体と思われる。295は内外面に赤錆色で描かれた蔓と花弁、緑で描かれた葉が表現される。花弁・葉は濃い赤錆で輪郭が縁取られている。296は内外面ともに二重圏線が確認できる。297は高台部。白磁E類などと共通する高台。胴の立ち上がりに蔓、見込には圏線が消失した痕跡がある。いずれもⅠ郭出土。298は端反り口縁部。やはり赤の圏線・輪郭と緑の葉が表現されるが、釉に光沢がなくザラザラ。焼成不良か、もしくは被熱した可能性。16世紀中頃～後半のものであろう。

出土遺物のまとめ

出土遺物は20年度に破片点数のカウントを行った。細片が多く、実測図を掲載していないものも多いが、総点数は約2000点を数えた。中には、緑釉陶器（華南三彩か）・青釉小皿・景徳鎮色絵皿などの希少品も確認できた。

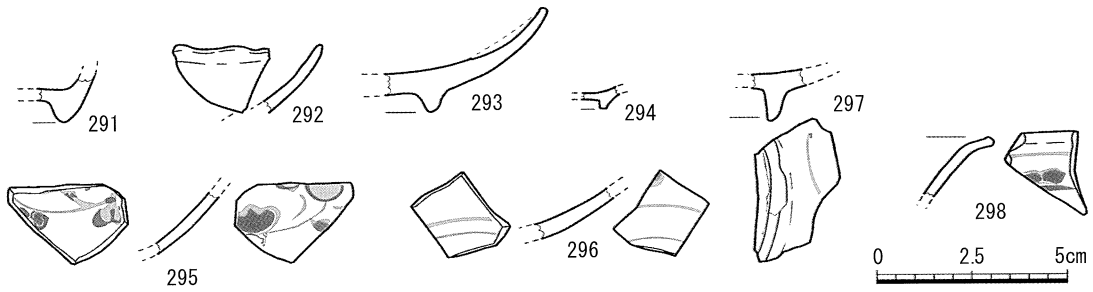
層や遺構ごとのセット関係で判断できないことから、出土曲輪ごとの遺物組成とそれを総合した城郭全体の遺物組成により時期幅と特徴把握を行ないたい。

曲輪別の出土数はⅠ郭→Ⅳ郭→Ⅱ郭の順に多い。調査トレンチの面積が異なるため、一様には比較しがたい面はあるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ郭はいずれも検出した柱穴の数がそれ以外の曲輪よりも多く、切岸の比高差が4m以上で、高低差が少ない他の曲輪に比べ堅固な普請が成されている。これらは重要度の高い主要な曲輪であったことがうかがえる。

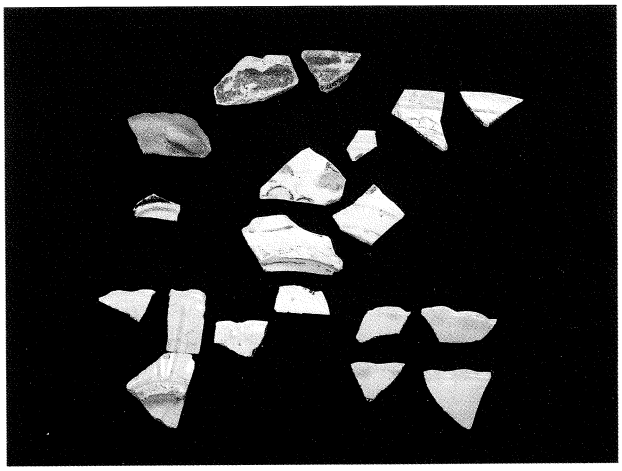
Ⅰ郭は城跡最高所であり古くから城の中心部であったと推定され、青花に比べ青磁の比率が高い。鎬蓮弁を持つ青磁も数点見られた。

土師質土器皿も他の曲輪よりも出土数が多い。とはいえ完存品は少なく、集中廃棄などもされていないようである。

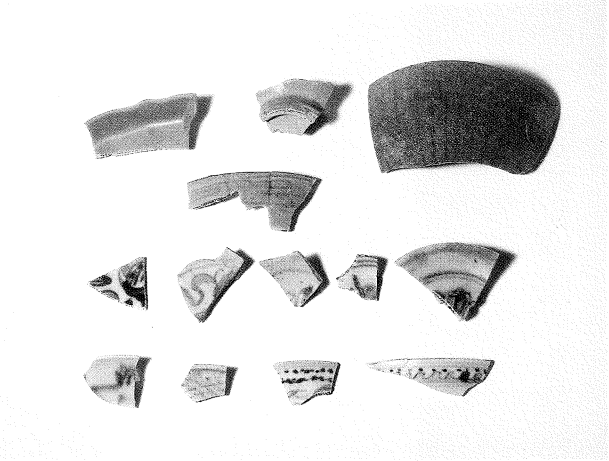
遺構に伴う遺物の一括性がないことから、同時代性が明確にはいえないが、青磁盤、香炉・青白磁合子・緑釉・色絵などがⅠ郭で出土しており、中国産天目も多くあることから棚底城跡の存続期間を通して最も格式ある空間であったことは確かと思われる。



第63図　出土遺物実測図（27）



小型貿易陶磁器片



被熱陶磁器

第64図組成円グラフにおいて「他貿易陶磁」比率が高いのは、中国産飴釉壺の破片数が多いからで、本来は２、３個体が破砕していると思われる。嗜好品を封入したものと思われ茶壺の可能性が考えられる。

Ⅱ郭はⅠ郭東に隣接する副次的な曲輪である。Ⅰ郭に比べ青花の出土数が多い。16世紀に入って生活空間としての比重が増したと見るべきか。土師質土器の個体数がやや少ないが、それを除けば概ね城郭全体の組成傾向と近い。

Ⅳ郭は東西に長い棚底城の中央部に当る曲輪。対馬市水崎遺跡に類例があるベトナム産青花が出土したのはこの曲輪である。また、広域流通品である備前・常滑や狭域流通品と見られる在地の中世須恵器の出土量が多い。貯蔵具の比重が高い曲輪である。表Ｆ中で「灰色自然釉陶器」とした遺物は、この曲輪で集中的に出土しているが、これも貯蔵用の甕で須恵質であるがあきらかに在地の中世須恵器と異なる。自然釉が見られるのが特徴である。数個体が破片となったものであろう。

擂鉢も出土数が多く、城郭の前線で貯蔵・生産を担った実用的な曲輪とみなせる。それを証明

しているのが被熱遺物である。表Ｆでは表記できなかったが、以下に確認できた被熱陶磁器を掲げる。

表E　被熱遺物点数表

器種 / 出土場所	青磁							青花				小計
	無文・不明	BⅣ類（剣先蓮弁）	C類（管文）	D類（端反）	高台Ⅲ類（蛇目釉剥）	稜花皿	盤	B1皿	C碗	C皿	不明	
表土	2			1				6				9
Ⅰ郭　主郭	2				1	1	1	1				6
Ⅰ郭　直下堀			1									1
Ⅱ郭	2			2								4
Ⅳ郭	3	3					1	4	1	2	4	18
Ⅷ郭											1	1
小計	9	3	1	3	1	1	2	11	1	2	5	39

また備前甕も器壁に数多くの窪みが見られる破片がたくさんあり、これも被熱したものと思われる。

以上のような状況から見ると、Ⅳ郭出土遺物に被熱点数が多い。特に青磁Ｂ-Ⅳ類（線描蓮弁）と青花Ｂ１群皿が多く見られる。交戦時にはⅣ郭が激戦地となったと考えられる。

トレンチの広さもあるが、Ⅲ郭及びＶ～Ⅷ郭にかけては出土遺物は少ない。それぞれの曲輪はⅠ・Ⅱ・Ⅳに比べ比高差があまりないことから城郭において重要度がやや低く、新しく拡大した場所と思われる。但しⅧ郭は点数が少ないながらも、碁笥底皿で良好な形状で残るものがいくつかあり、Ｖ～Ⅶよりも生活感がある。末端部として出曲輪的機能が持たされていた可能性がある。Ｖ～Ⅷ郭にかけては土師質土器が全く出土していない。

城郭全体の組成傾向として、貿易陶磁の破片が過半数を占めるのがまず大きな特徴である。それに比例して、土師質土器の出土量が少ない。天草という土地柄、大量のかわらけを生産できる土が足りないことも単純に想定できるが、中央的な武家饗宴儀礼に重きをおいていないことも理由として挙げられるであろう。

貿易陶磁の出土量が多いが、酒海壺・梅瓶・太鼓胴盤などが出土していない。規律化された儀礼空間を作らなかったのではないかと思われる。

一方で珍しい流通品としてベトナム産青花がある。海での交易に力を注いでいたことは間違いない。

青磁の出土量が多いが、無文の細片がほとんどで時期を確定しがたい資料が多い。しかし、全体的に見て鎬のある蓮弁文碗は少なく、線描きで形の崩れた剣先蓮弁文を持つ青磁が数的には目立つ。やや小型の稜花皿も多い方である。城の存続は14～16世紀後半までで位置づけられるが、これら青磁の状況と青花Ｃ群の出土量が多いことから考えても、特に15世紀後半から16世紀中頃までの遺物量が抜きん出て多いことがわかる。特に白磁は傾向が顕著で、そのほとんどが端反のＥ類タイプである。14世紀後半に出現し、15世紀前半から中頃にピークがあるＤ類は若干数の出土しか見られなかった。

註１　大橋康二　「棚底城跡の出土陶磁器を見て」『棚底城跡Ⅱ』　2006

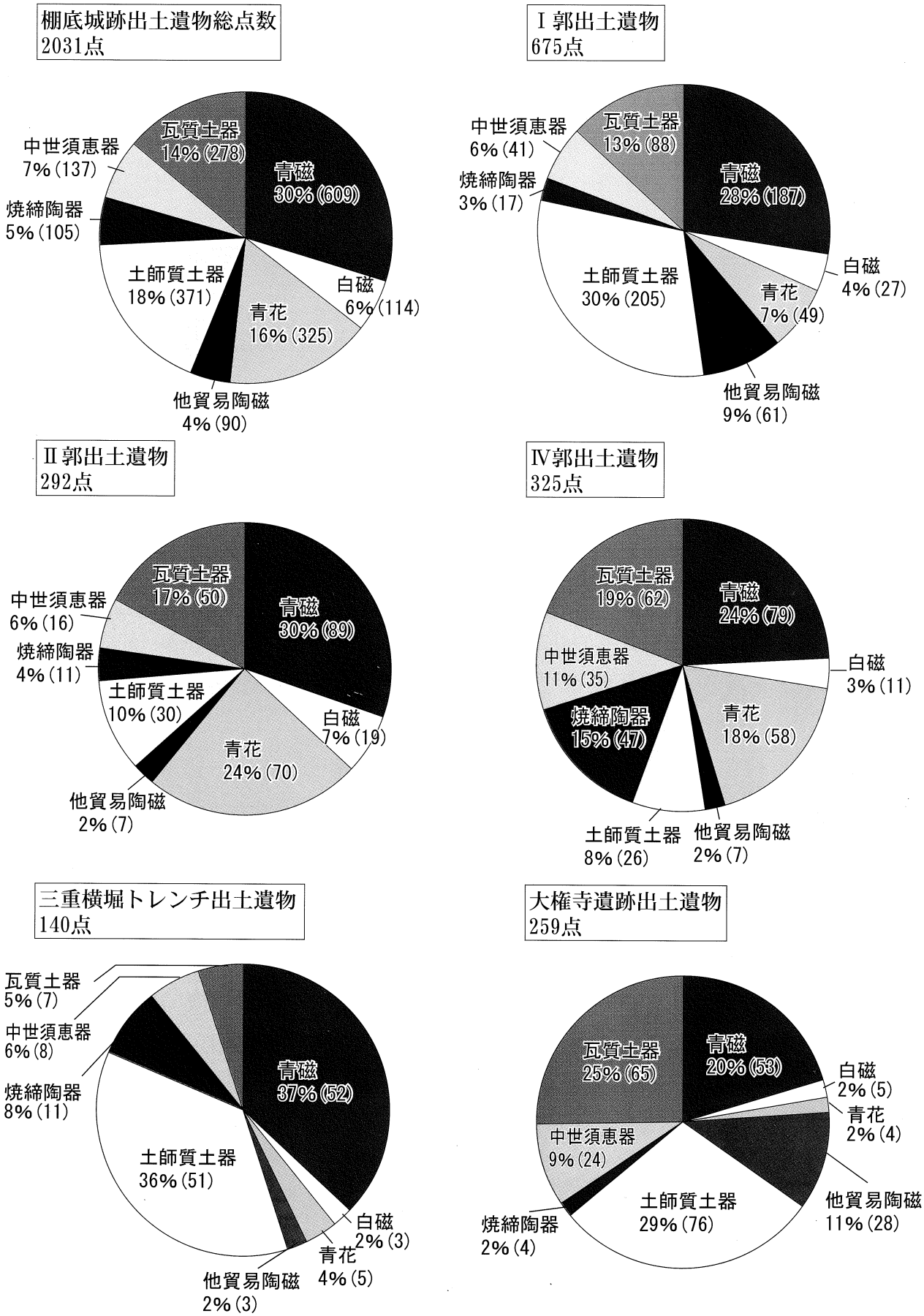
註２　山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性　10－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告　第71集』1997

美濃口雅朗「樺番城窯跡の中世須恵器（1）」『肥後考古第10号』　1997

などの文献に荒尾市樺番丈窯の中世須恵器について言及されている。棚底城跡始め天草の中世城館に普遍的に出土する中世須恵器も岡山県亀山焼に似ており、格子叩き甕が中心であることから樺番丈窯と関わると考えられるが、器種のうち擂鉢が多いことや、歴史時代の須恵器並みの青灰色硬質であることから、確実に同窯の産と断言できない（美濃口文献によると「器種は甕・鉢・鍋・鍔釜・瓦とされ、焼成は低還元炎焼成で瓦質のものが主体、焼成良好な須恵器質のものは少量」とある。）。まだ未発見の窯の製品の可能性もあるが、いずれにせよ有明海や不知火海一体に限定して流通したものと考えるのが自然であろう。

註３　株式会社アバンス　工藤伸氏より教示。

註４　大分市歴史資料館　『豊後府内 南蛮の彩り　～南蛮の貿易陶磁～』　2003



第64図　出土遺物組成グラフ

表F　棚底城跡・大権寺遺跡出土遺物点数表

種別	出土箇所	表土	1郭 主体部	1郭 杭列	1郭北東帯曲輪 三重構堀トレンチ	2郭	3郭	4郭	5郭	6郭	7郭	8郭	種類別破片数	大権寺遺跡出土遺物	
青磁	無文・不明	116	118	5	32	55	7	59	5	0	6	3	406	無文・不明	37
	BⅠ（鎬蓮弁）	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	BⅠ（鎬蓮弁）	0
	BⅡ（鎬なし蓮弁）	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	BⅡ（鎬なし蓮弁）	2
	BⅢ（弁頭弁体分離）	7	2	0	4	1	0	1	2	0	0	1	18	BⅢ（弁頭弁体分離）	0
	BⅣ（線描蓮弁）	13	11	0	1	6	5	10	4	0	0	0	50	BⅣ（線描蓮弁）	0
	CⅠ（雷文帯）	1	8	2	2	0	0	1	1	0	0	0	15	CⅠ（雷文帯）	0
	CⅡ（簡略雷文帯）	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	3	CⅡ（簡略雷文帯）	0
	D（端反）	14	12	0	5	13	2	0	0	0	0	0	46	D（端反）	6
	高台Ⅰ（畳付～外底無釉・見込スタンプ）	2	1	0	2	0	0	3	0	0	0	0	8	高台Ⅰ（畳付～外底無釉・見込スタンプ）	1
	高台Ⅱ（外底無釉・見込無釉）	0	1	0	2	2	0	0	0	0	0	0	5	高台Ⅱ（外底無釉・見込無釉）	0
	高台Ⅲ（外底蛇の目釉剥）	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	高台Ⅲ（外底蛇の目釉剥）	1
	稜花皿	5	2	2	0	6	0	2	2	1	0	0	20	稜花皿	1
	型打ち菊皿	0	2	0	1	3	0	2	0	0	0	0	8	型打ち菊皿	0
	盤（大盤）	1	3	1	2	0	0	1	0	0	1	0	9	盤（大盤）	4
	香炉	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	香炉	1
	他	1	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8	他	0
	合計	162	177	10	52	89	14	79	14	1	7	4	609	合計	53
白磁	D類皿（高台露胎・抉り込）	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0	4	D類皿（高台露胎・抉り込）	1
	E類皿（端反皿）	31	26	0	3	18	5	9	9	0	3	2	106	D類坏（腰折・八角坏）	4
	型打ち菊皿	1	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	4	E類皿（端反皿）	0
	合計	32	27	0	3	19	7	11	9	0	4	2	114	合計	5
青花	B碗	2	1	0	0	4	0	1	0	0	0	0	8	B碗	0
	C碗	25	23	6	5	34	0	7	3	1	4	2	110	C碗	1
	D碗	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	D碗	0
	E碗	4	2	1	0	8	0	3	0	0	0	1	19	E碗	0
	F碗	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	F碗	0
	B1皿	18	3	0	0	4	0	8	0	0	0	0	33	B1皿	1
	B2皿	3	2	0	0	3	0	0	0	0	0	1	9	B2皿	0
	C皿	12	2	0	0	4	5	8	1	0	0	1	33	C皿	0
	C皿粗製	2	0	0	0	2	0	4	0	1	1	1	11	C皿粗製	0
	E皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	E皿	0
	F皿	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	F皿	0
	J2皿（陶質見込蛇目剥）	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	J2皿（陶質見込蛇目剥）	1
	不明	36	7	1	0	11	4	26	4	0	6	5	100	不明	1
	合計	104	41	8	5	70	9	58	8	2	11	11	327	合計	4
その他貿易陶磁類	天目	3	3	0	0	1	1	2	0	0	0	0	10	天目	8
	茶入	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	茶入	0
	青釉小皿	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	青釉小皿	0
	色絵皿	0	5	1	0	0	0	0	2	0	0	0	8	色絵皿	0
	ベトナム青花	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	ベトナム青花	0
	青白磁合子	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	青白磁合子	0
	緑釉陶器	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	緑釉陶器	0
	中国産飴釉陶器	1	40	7	3	6	0	2	0	0	0	0	59	中国産飴釉陶器	8
	中国産黒釉陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	中国産黒釉陶器	9
	その他	1	2	0	0	0	0	2	0	0	0	1	6	その他	3
	合計	8	53	8	3	7	1	7	2	0	0	1	90	合計	28
土師質土器	土師質土器皿	58	191	11	51	29	0	26	0	0	0	1	367	土師質土器皿	76
	土錘	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	土錘	0
	合計	58	194	11	51	30	0	26	0	0	0	1	371	合計	76
焼締陶器	備前	18	9	4	5	8	1	15	1	0	0	2	63	備前	0
	常滑	0	1	0	5	1	0	10	0	1	0	0	18	常滑	0
	灰色自然釉陶器	0	0	0	0	2	0	22	0	0	0	0	24	灰色自然釉陶器	0
	不明	3	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1	8	不明	4
	合計	21	13	4	11	11	1	47	1	1	0	3	105	合計	4
中世須恵器（近郊産）	須恵器質甕（格子叩）	4	15	0	0	6	2	13	2	2	0	2	46	須恵器質甕（格子叩）	4
	須恵器質すり鉢	7	7	2	3	5	0	12	2	0	0	1	39	須恵器質すり鉢	16
	須恵器質火舎	3	1	2	4	0	0	3	0	0	0	1	14	須恵器質火舎	0
	須恵器質不明・その他	9	9	5	1	5	2	7	0	0	0	0	38	須恵器質不明・その他	4
	合計	23	32	9	8	16	4	35	4	2	0	4	137	合計	24
瓦質土器	すり鉢	8	23	4	3	12	1	13	1	3	0	4	72	すり鉢	10
	火舎	9	17	1	1	16	1	9	0	3	0	2	59	火舎	24
	鍔付釜	1	2	0	0	0	0	4	0	0	0	1	8	鍔付釜	2
	不明・その他	16	33	8	3	22	0	36	9	3	3	6	139	不明・その他	29
	合計	34	75	13	7	50	2	62	10	9	3	13	278	合計	65
	曲輪別点数	442	612	63	140	292	38	325	48	15	25	39	2031	大権寺出土総点数	259

1. 貿易陶磁の分類は、
青磁
上田秀夫
「14～16世紀の青磁碗の分類について」

白磁
森田勉
「14～16世紀の白磁の分類と編年」

青花
小野正敏
「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」
（いずれも
1982年『貿易陶磁研究2』
日本貿易陶磁研究会）

によったが一部青花（C群粗製・J2皿）については
森毅
「一六・一七世紀における陶磁器の様相と流通」
（1995年『ヒストリア第149号』）

を参考にした。

2. 青花C碗の数には、文様共通のD碗もしくはC皿が含まれている可能性がある。

3. 土師質土器は、粉砕片も多くあるため、ここでは「底部片」「口縁片」をカウントした。

第Ⅳ章　大権寺遺跡発掘調査の成果

第１節　発掘調査成果について

第１次調査の概要

大権寺遺跡は、棚底城跡から西方に約 400ｍほど離れた高台に位置する。当地には多数の宝篋印塔・五輪塔・宝塔の部材が集積する一角があり、大権寺古塔群と呼ばれている。完存する塔はないが、中に延文年間から永徳年間に亘る紀年銘がある蓮弁地輪がある。南北朝時代の金石年号は天草地域では他所に確認されておらず、特に永徳三年銘は地域最古の年号ということで注目を集めていた。大権寺は地元の伝承で棚底城跡の菩提寺とされている場所である。古塔群と小字名及び伝承により、関連遺跡の可能性があることから、トレンチによる確認調査を実施した。

大権寺一帯は棚底扇状地の最奥部で、連続する棚田が形成されている地区である。石塔集積地の標高は約 100ｍで棚底城跡のⅠ郭より若干高い。また眼下に、上天草市龍ヶ岳町大道と御所浦諸島に挟まれてできた水道を見下ろせる良好な立地である。この水道は、中世には相良氏領下との連絡路として交通の要所であったと想起される。

調査対象地は、天草市倉岳町棚底字大権寺の範囲の中で、五輪塔群集積地周辺地域とした。学術検討委員会の指導に基づき、棚田の段毎に西北～南東方向への地形確認トレンチを設定した（Ａ１～３tr）。便宜上、五輪塔群の存在する段を中段、その西側を上段、東側を下段とする。Ａ１～３tr について概ね内容を把握したあとで、中段にＡ４tr、下段にＡ５tr という追加トレンチを南西－北東方向に設定した。以下、その概要を示す。

Ａ１トレンチ

石塔群が存在する中段に設定した幅２ｍ×長さ９ｍのトレンチ。表土層から 20cm 程度で、安山岩礫を多量に含む礫層に行き当たった。礫層の上位から数点の中世遺物が確認されたため、深度 120cm まで掘り進めたが同一の礫層が続き、遺構はないと判断された。

トレンチ中央でＶ字状にかく乱が走り、大型安山岩に重機のネイルによるものと見られる不自然な欠損が確認された。当地は重機による造成がなされている。

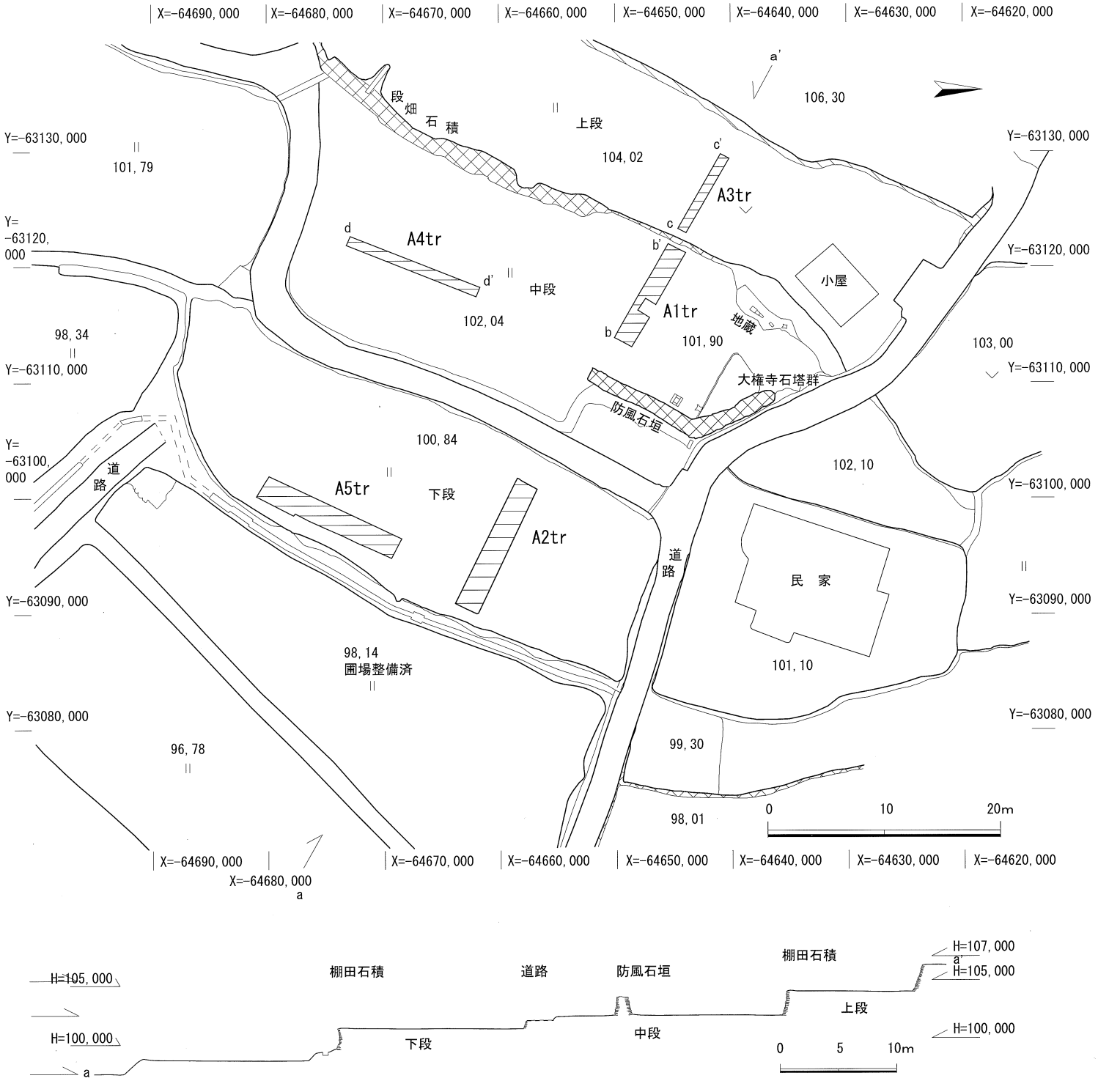
Ａ２トレンチ

下段農地に幅２ｍ×長さ 12ｍで設定。地権者より十年前くらいに耕作効率を上げるため、三枚田を一枚に統合したとの示唆を受けた。三枚田は南西方向へ段下がりしていたとのことであったが、ちょうどＡ２tr の中心線くらいで耕作土の厚みが異なっており、一つ目の段落ちがＡ２tr に当ったものと思われる。このため、土層観察の深掘りを南東半分のみに留めており、結果いびつな掘削状況となった。

耕作土から天目茶碗等の貿易陶磁が出土。Ａ１tr と異なり、礫層に直面しなかったため、遺構の存在に留意しつつ掘削を進めた。全体に礫混じりの少ない良好な埋土で、時折カーボンや遺物が検出される状況であるが、遺構面は確認できなかった。

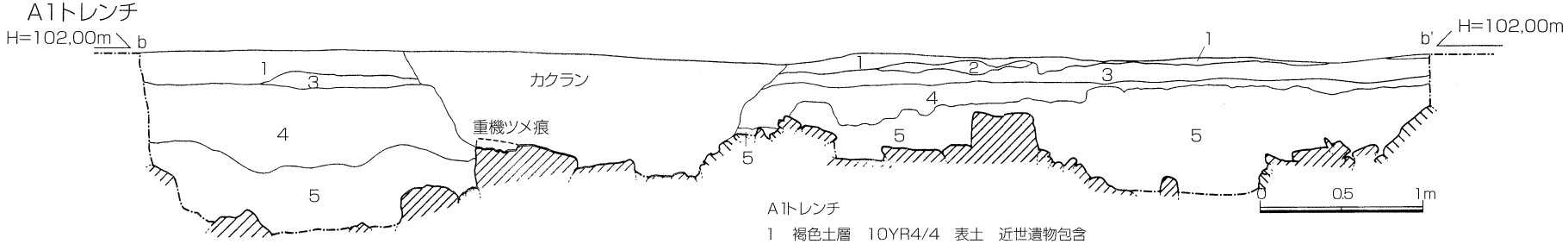
表土下 30cm 程度の耕作土層からは、近現代陶磁破片と共伴し中世陶磁が出土するがその下層からは遺物出土量が減少し、微小な土師質土器片のみ時折確認される程度であった。ややしまりのない土を地表下 110cm 程度まで掘り下げたあたりから、桃色土師質土器皿や瓦質土器の出土が見られ、中世土層が深くまで確認された。

断面観察から土層が全体的に南東へ、海側へ傾斜している状況が判明した。15 層は天草では自然に見られない特徴的な黒褐色包含層である。Ａ２tr 全体で堆積が確認された。層厚 10cm 程度で傾斜角度は南東へ７度。トレンチ北西では耕作土直下で確認され、南東では深さ 120cm にまで下降していく。その下層である 16 層からは古式土師片のみが出土したことから、15 層は 16 層を切って形成された傾斜造作層である。須恵質擂鉢片や土師質土器片などを包含するため中世の層



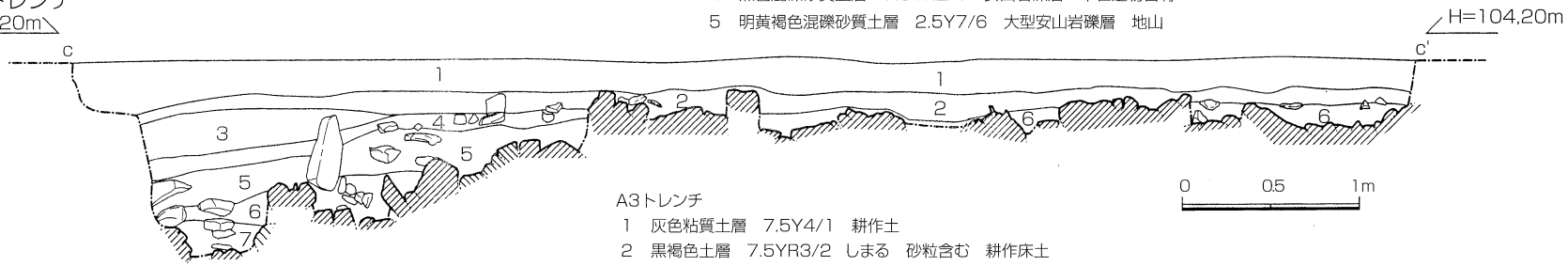
第65図　大権寺遺跡周辺地形図(第１次調査トレンチ配置図)地形断面図

A1トレンチ



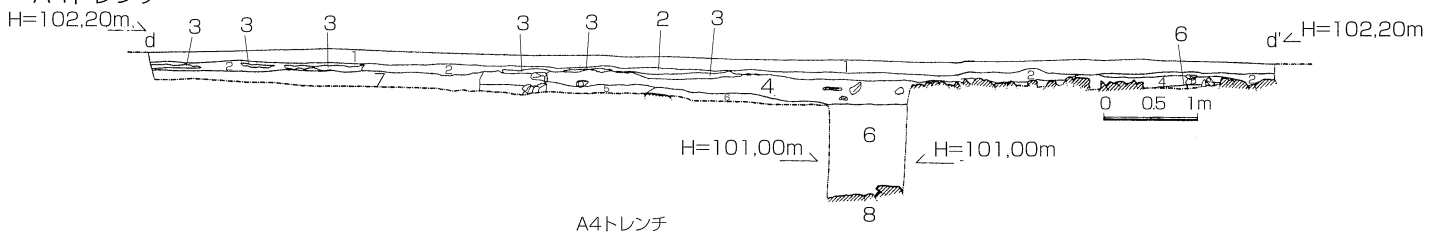
A1トレンチ
1　褐色土層　10YR4/4　表土　近世遺物包含
2　黄橙色土層　10YR7/8　サクサク　近代整地層
3　灰褐色土層7.5YR6/2　遺物包含
4　黒色混礫砂質土層　7.5YR2/1　安山岩礫層　中世遺物含有
5　明黄褐色混礫砂質土層　2.5Y7/6　大型安山岩礫層　地山

A3トレンチ



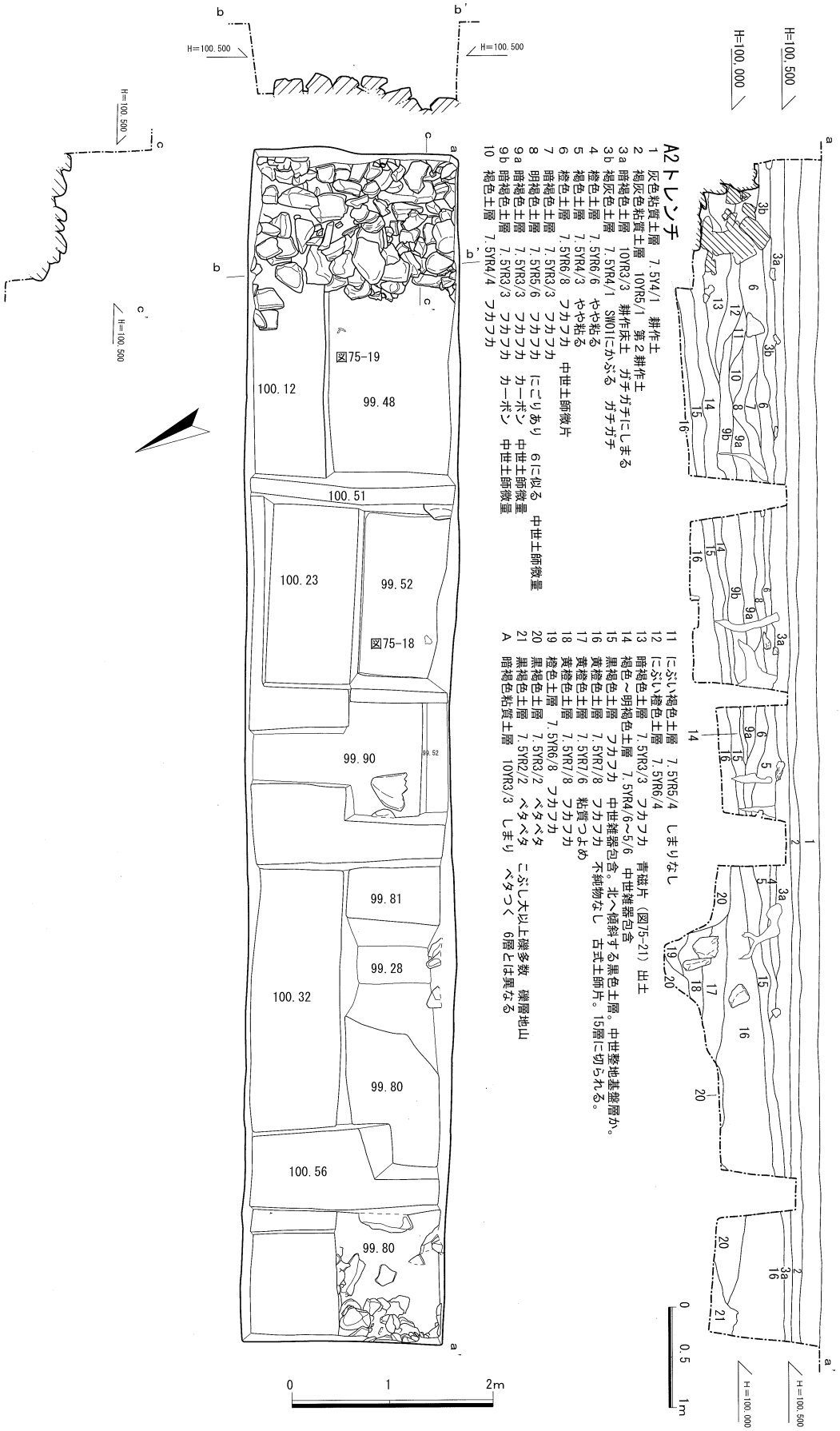
A3トレンチ
1　灰色粘質土層　7.5Y4/1　耕作土
2　黒褐色土層　7.5YR3/2　しまる　砂粒含む　耕作床土
3　灰褐色砂質土層　7.5YR5/2　しまる　黄･橙色粘質ブロックあり　整地埋土か?
4　黒褐色土層　7.5YR3/2　ベタベタ礫含む　砂粒多　中世遺物
5　明褐色～暗褐色土層　7.5YR5/6～3/4　フカフカ不純少　土師器等
6　黒色混礫土層　7.5YR2/1　フカフカで不純物少　中世遺物　安山岩岩石多量
7　明黄褐混礫土層　10YR7/6　安山岩多量無遺物

A4トレンチ

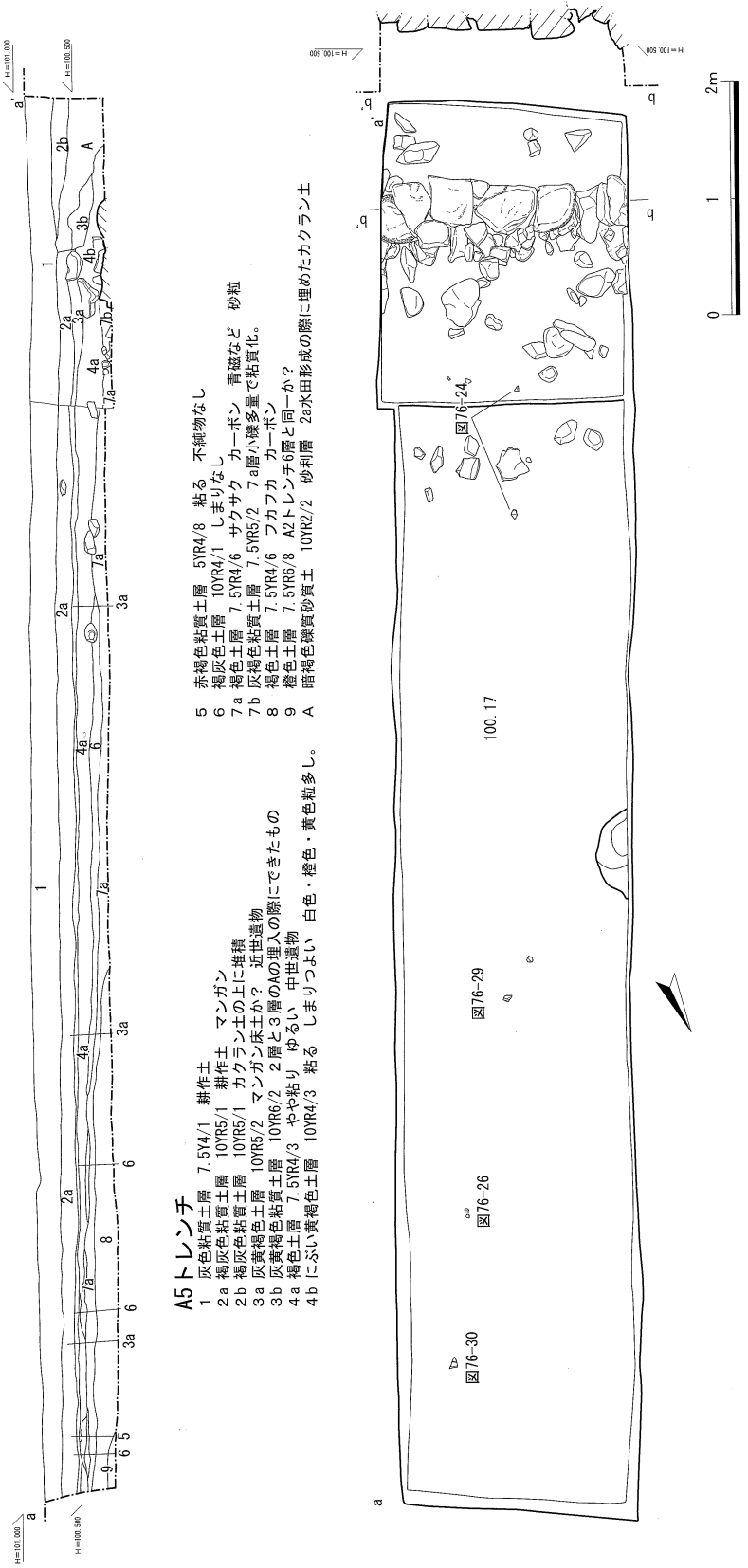


A4トレンチ
1　褐色土層　7.5YR4/4　フカフカ　しまりなし(耕作層)
2　灰褐色土層　7.5YR6/2　しまる　砂粒少なめの土層
3　黄橙色層　10YR7/8　2層中にブロック的に存在　やや粘る
4　褐灰～黒褐色土層　5YR5/1～3/1　ガチガチ　20cm大の石･及び近代瓦を多量包含　家屋廃絶層
5　灰黄褐色土層　10YR6/2　6層を切る形で堆積　ガチガチ　近世遺物
6　にぶい黄褐色土層　10YR5/4　頁岩風化粒
7　にぶい褐色砂礫層　7.5YR5/4　砂利状の砂礫層
8　安山岩礫層　60～80cmの岩石地山

第66図　A1・A3・A4トレンチ土層断面図（A1･A3＝1/60　A4＝1/120）



第67図　A2トレンチ平面図・断面図（S＝1/60）



第68図　A5トレンチ平面図・断面図（S＝1/60）

であることは明らかだが、陶磁器がないため、詳細な時期の決め手には欠ける。

東南端では２m×２m分の石積遺構 SW01 を確認した。当初、棚田に伴う石積の裏グリと考えたが、棚田石積のグリとしては引き幅が長すぎること、径 40cm 程度の石材が多数ありグリ石にしては大きすぎることから、遺構と判断し、一部断ち割りを行い構築年代の確認を行った。

SW01 は、石材のみの組み合わせによる構築でなく、石材間に 13 層の暗褐色土などが緩衝層のように入っている。石と土が混在しており、純粋な石積とは言い難い状況である。なお、石材基底部下には 15 層があり、14 層から基底部が立ち上がる。断ち割った内部からは、微細片であるが数点の中世土師質土器皿（胎土に砂粒を含まず、橙～桃色を呈す）が確認された。

６層から 15 層までの堆積土は包含層であるが、14・15 層を除きほとんどで土師質土器皿の微細片が確認されるだけである。14・15 層においては土師質土器以外に須恵質擂鉢片などの調理具を包含していたが、陶磁器はなかった。13 層で一点のみ青磁蓮弁細片（図 75-21）が出土しており、堆積年代の手がかりとなるが他には、年代基準となるような遺物が見られない。一方で、１～３層までの耕作土中からは青磁碗片・天目碗などの生活遺物が出土する。このことより６層～15 層は中世段階に人為的に埋められた造成土と見ることができ、生活面は１～３層により切り取られていると推定している。図 75-21 の出土から 13～15 層を造成したのは 15 世紀以降と考えられ、SW01 も同時期であろう。

Ａ３トレンチ

上段に幅１m×長さ８mで設定。耕作土層の直下から全面礫層となり遺構は検出されなかった。耕作土層・礫層から青磁小片・瓦質土器・土師質土器皿などが確認され遺跡範囲が上段にも及ぶ可能性は高い。

Ａ４トレンチ

中段に幅１m×長さ 12m、南西 - 北東方向に設定。旧宅地のため、かく乱が激しく地表下 20～40cm の褐灰色土層に近代瓦片を多量に包含する。一部で深度 150cm まで深堀りし、礫層に到達した。深さ 40～150cm までは頁岩質風化粒を中心にした層で、人為的に造成されたものと思われる。中世遺物は確認されなかった。

Ａ５トレンチ

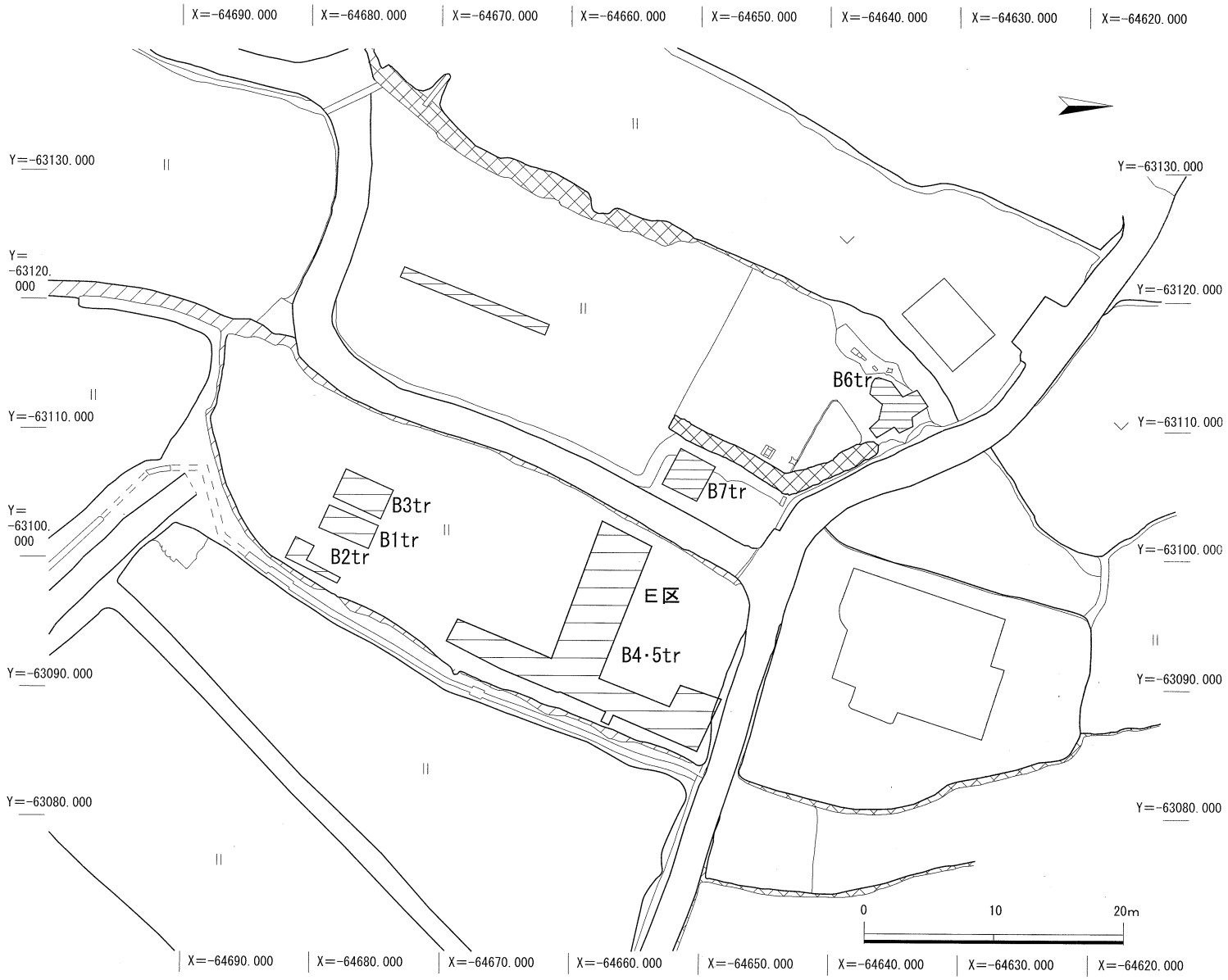
下段に幅２m×長さ 12mで設定。耕作土層除去後、遺構を確認しながら掘り下げ、南西端で石列状遺構を検出した。石列状遺構は、地表下 50cm 前後で検出、サイズ 40～60ｃm程度の略方形扁平安山岩を配し、南西端のラインを揃える。背後に小礫が散在することから、SW01 と同様の石積状遺構と考えたが、ラインが SW01 に直交に近い方向で検出され、レベル的に SW01 より 30cm 前後低い状況で天端が揃うこと、ステッキボーリングでその下部には石材が存在しないことから、疑問を残した。調査期間の制約から周辺掘削まで行えず、検出段階で留め、19 年度の第２次調査に持ち越した。

第２次調査の概要

第２次調査は平成 19 年 11 月から平成 20 年３月まで断続的に実施した。第１次調査で遺構が確認された下段の解明を目的としてＢ１～７までのトレンチ調査を実施した。

Ａ５tr 検出の石列状遺構を確認するために、その延長線上にＢ１～３までのトレンチを設定し、Ａ２tr の SW01 の延伸状況を確認するために、SW01 の南にＢ４tr、北にＢ５tr を設けて調査を実施した。また石塔集積地背後の土堤状の高まりにＢ６tr を設定し、新たに石塔部材を発見した。

また２月に検討委員会で現地指導を受け、Ｂ４Ｂ５を一本のトレンチとして掘削を深め（Ｂ４-５tr とする）、階段状を呈する石段遺構 SS01、昨年度の SW01 の延長線の石積遺構（SS01 より



第69図　大権寺遺跡第２次調査トレンチ配置図

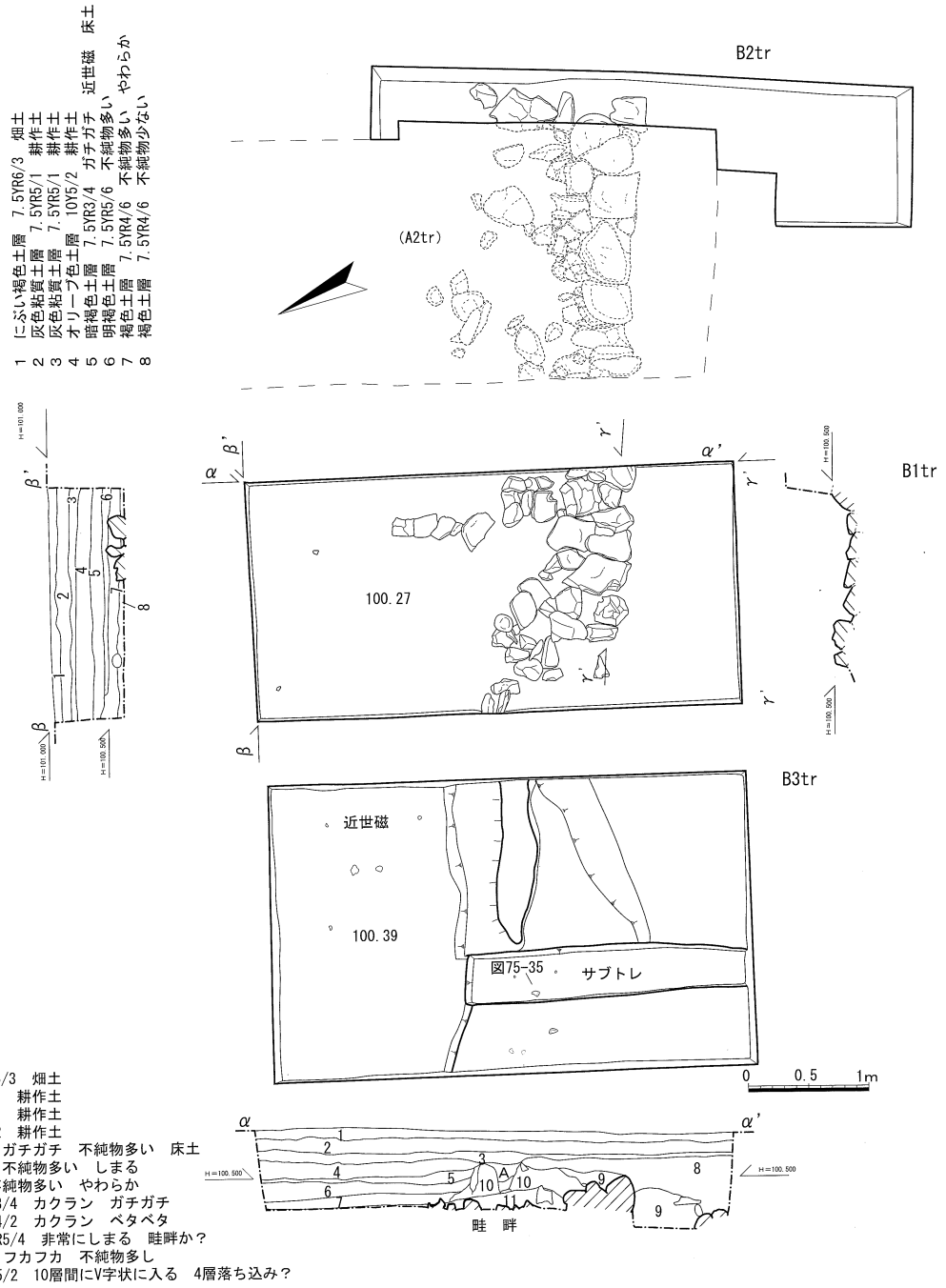
南側を SW01、北側を SW02 とする）を検出した。SS01 が階段状であるため、その進行方向に当る南西にさらにトレンチを拡幅した。調査時からの便宜上この拡幅部をＥ区と呼ぶ。Ｅ区は一部、1 次調査のＡ２tr と重複する設定となった。Ｅ区からも明瞭な遺構面は検出されなかったが、しかし、Ａ２tr とは別の傾斜面を検出し、この傾斜面が硬化していたため、道路面ではないかと想定した（SF01）。当該年度末であったため、この段階で一度調査を終えた。その後、平成 20 年６月に再び検討委員会で指導を受け、SF01 と SS01・SW02 の先後関係を明確にするため、各所にサブトレンチを設けその状況を検討した。その際に SF01 の肩部に石敷遺構 SX01 を確認した。

Ｂ１～３トレンチ

Ａ５tr で検出した石列を追うための各トレンチである。Ａ５tr 西隣のＢ２tr において 140cm ほど石列の延長を確認できたが、そこで石列は途絶した。石列はＡ５tr で検出したものよりかなり

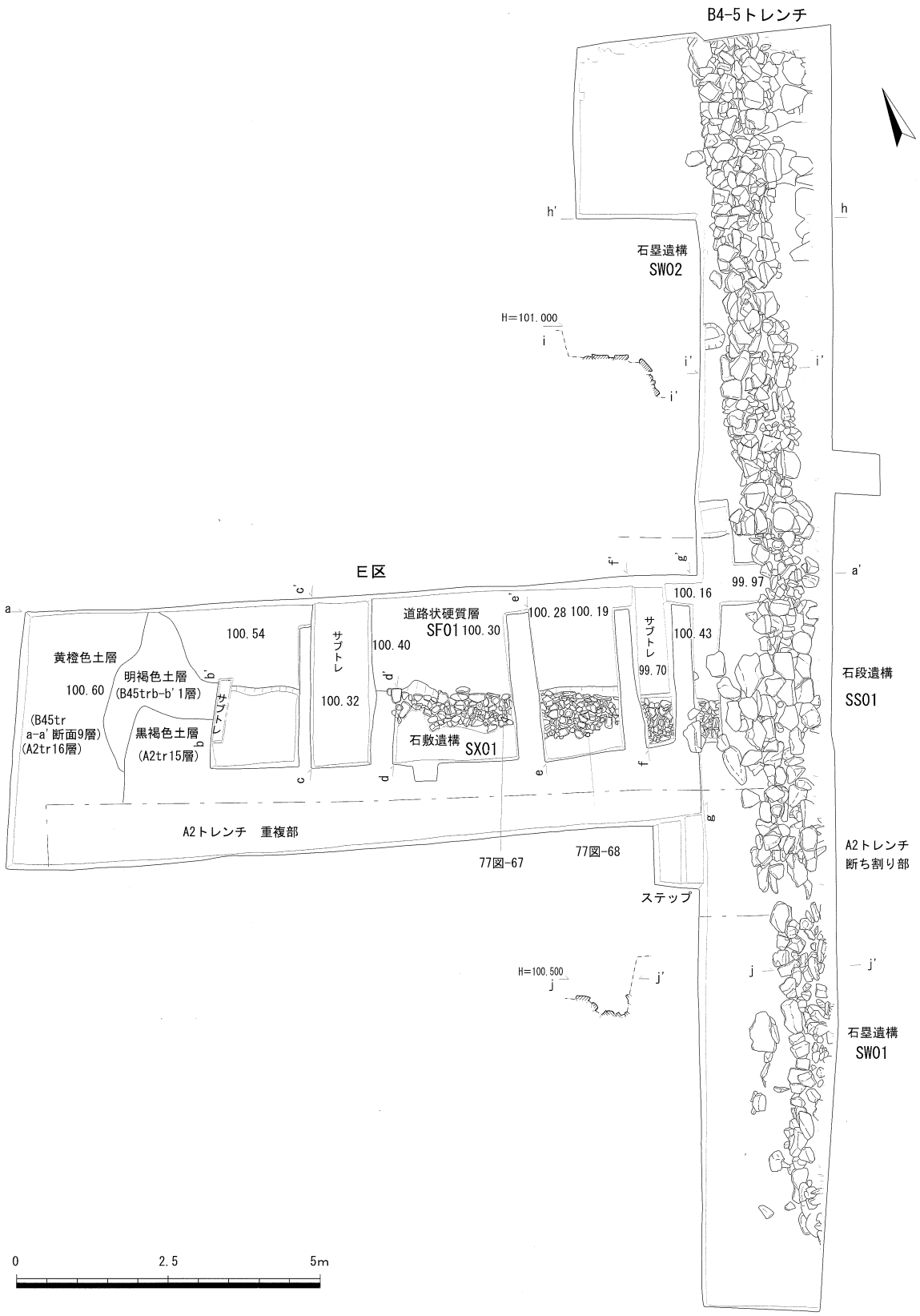
雑な石を使用している。列の背後には小型の礫が散在する。石列の地下の状況についてはステッキボーリングで調査したが石材は確認されず、この遺構が石積とはいえず、石列であると判明した。

Ｂ２tr 西北での途絶は部分的な破壊かと考え、Ｂ３tr で想定線上を調査したが、石列は検出されなかった。Ａ５tr 掘削時に平面的に検出しなかったが、Ｂ１～３tr の掘削段階では石列の被覆土を断面山形の土塁状で検出した。Ｂ３tr の西北端で土塁状の高まりにサブトレンチを入れ、掘下げてみたところ、第 76 図-35 などが出土したが同レベルで肥前系磁器細片も出土したところから、この土塁状高まりを近世以降の産と判断した。Ｂ２tr 断面図の a-a′で見るように、層は土塁状の４層にぶつかる。層はかなり不純物が混入しており、このような堆積状況から４層は近世以



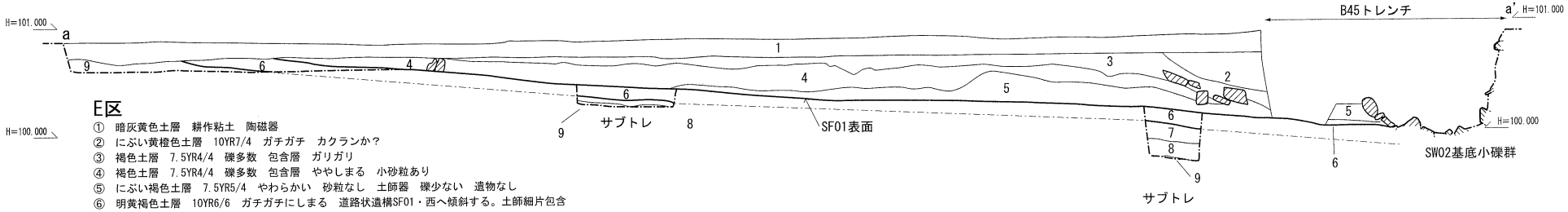
1 にぶい褐色土層 7.5YR6/3 畑土
2 灰色粘質土層 7.5YR5/1 耕作土
3 灰色粘質土層 7.5YR5/1 耕作土
4 オリーブ色土層 10Y5/2 耕作土
5 暗褐色土層 7.5YR3/4 ガチガチ 不純物多い 床土
6 明褐色土層 7.5YR5/6 不純物多い しまる
7 褐色土層 7.5YR4/6 不純物多い やわらか
8 砂質礫層質土層 7.5YR3/4 カクラン ガチガチ
9 褐灰色粘質土層 7.5YR4/2 カクラン ベタベタ
10 にぶい黄褐色土層 10YR5/4 非常にしまる 畦畔か？
11 明褐色土層 7.5YR5/6 フカフカ 不純物多し
A オリーブ灰色土層 10Y5/2 10層間にV字状に入る 4層落ち込み？

第70図 B1・B2・B3トレンチ平面図・断面図（S＝1/60）

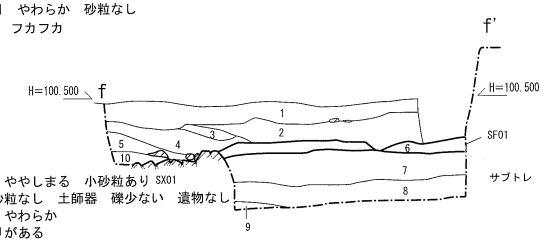


第71図　B4-5トレンチ平面図（S＝1/80）

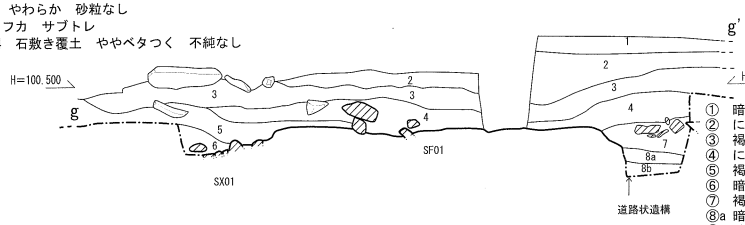
E区基本土層



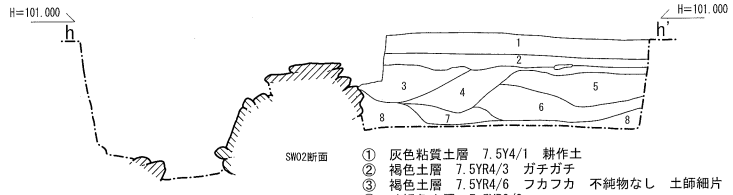
E区
① 暗灰黄色土層　耕作粘土　陶磁器
② にぶい黄橙色土層　10YR7/4　ガチガチ　カクランか？
③ 褐色土層　7.5YR4/4　礫多数　包含層　ガリガリ
④ 褐色土層　7.5YR4/4　礫多数　包含層　ややしまる　小砂粒あり
⑤ にぶい褐色土層　7.5YR5/4　やわらかい　砂粒なし　土師器　礫少ない　遺物なし
⑥ 明黄褐色土層　10YR6/6　ガチガチにしまる　道路状遺構SF01・西へ傾斜する。土師細片包含
⑦ 黄褐色砂質土層　10YR5/6　6層と似るがしまりなし
⑧ 黒褐色土層　10YR3/1　やわらか　砂粒なし
⑨ 明赤褐土層　5YR5/6　フカフカ



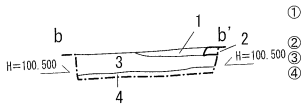
① 褐色土層　7.5YR4/4　礫多数　包含層　ややしまる　小砂粒あり SX01
② にぶい褐色　7.5YR5/4　やわらかい　砂粒なし　土師器　礫少ない　遺物なし
③ 橙色土層　7.5YR6/8　不純　赤みあり　やわらか
④ 褐色土層　7.5YR4/4　②に近いがしまりがある
⑤ 褐色土層　7.5YR4/4　④同色もフカフカ
⑥ 明黄褐色土層　10YR6/6　ガリガリにしまる　土師器かむ
⑦ 黄褐色砂質土層　10YR5/6　上と似るもしまり少ない
⑧ 黒褐色土層　10YR3/1　やわらか　砂粒なし
⑨ 明赤褐　5YR5/6　フカフカ　サブトレ
⑩ 暗褐色土層　7.5YR3/4　石敷き覆土　ややベタつく　不純なし



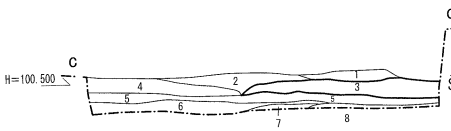
① 暗灰黄色土層　耕作粘土
② にぶい黄橙色土層　10YR7/4　ガチガチにしまる。
③ 褐色土層　7.5YR4/4　礫多数　ガチガチ　包含層
④ にぶい褐色土層　7.5YR5/4　やわらか
⑤ 褐色土層　7.5YR4/4　フカフカ　不純物なし
⑥ 暗褐色土層　7.5YR3/4　フカフカ　SX01覆土
⑦ 褐色土層　7.5YR4/4　不純物なし　⑤と同じか。
⑧a 暗褐色土層　7.5YR3/3　やわらか
⑧b 暗褐色土層　7.5YR3/3　ベタつく



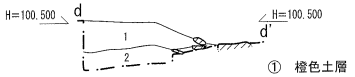
① 灰色粘質土層　7.5Y4/1　耕作土
② 褐色土層　7.5YR4/3　ガチガチ
③ 褐色土層　7.5YR4/6　フカフカ　不純物なし　土師細片
④ 暗褐色土層　7.5YR3/3
⑤ 暗褐色土層　7.5YR3/4　フカフカ　炭化物
⑥ 明褐色土層　7.5YR5/6　フカフカ　礫なし
⑦ 褐色土層　7.5YR4/6
⑧ 黒褐色土層　7.5YR3/2　フカフカ　土師細片　石積にぶつかる層



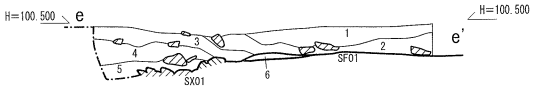
① 明褐色土層　7.5YR7/6　しまる　不純多い
②③の間層的トレンチ西の④にむけてひろがる
② 明黄褐色土層　10YR6/6　道路状遺構の際面
③ 黒色土層　7.5YR2/1　土師器含む
④ 暗赤褐色土層　5YR5/6



① にぶい褐色土層　7.5YR5/4　礫多数　ガチガチ　E基④
② 橙色土層　7.5YR6/6　礫多数　不純物あり　しまり強い
③ 明黄褐色土層　10YR6/6　道路状面　非常にしまる　中世土師片
④ 橙色土層　7.5YR6/6　②よりしまる　礫多数　やや黒色土まじる
⑤ 黒褐色土層　10YR3/1　③④の基礎になる層　フカフカ
⑥ 黒色土層　7.5YR2/1　⑤より黒い
A2トレンチ南壁の(15)層と同一　フカフカ
⑦ にぶい橙色土層　7.5YR6/4　フカフカ
⑧ 明赤褐色土層　5YR5/6　しまりなし
A2トレンチ南壁の(16)層と同一　E基⑨層



① 橙色土層　7.5YR6/6
② 黒褐色土層　10YR3/1



① 褐色土層　7.5YR4/4　包含層　ややしまる　少砂粒あり　礫あり
② にぶい褐色　7.5YR5/4　やわらかい　砂粒なし　土師器　礫あり　遺物なし
③ 橙色土層　7.5YR6/8　フカフカ　礫多い　不純物
④ にぶい褐色　7.5YR6/4　不純なし
⑤ 暗褐色土層　7.5YR3/4　石敷き覆土
⑥ 明黄褐色土層　10YR6/6　道路状遺構掘りすぎ

第72図　B4-5トレンチ土層断面図（S=1/60）

降に形成された畦畔であり、石列はその基礎石であると思われる。B4-5tr で検出した SW石列より南側は完全なカクランとなっており、面を一枚田に造成した折に埋められたもので、B2tr の南端では木製電柱やガイシなどが発見された。

A5・及びB1B2tr を合わせ、石列は約4m分検出したがその軸線は N60° W であり、次項で述べる SW01・SW02 と完全な直交状態にならず差角 77° とやや鋭角であること、B3tr では検出されなかったが石列は畦畔の基礎を成すこと、A5trB2tr とも石列検出面で他遺構が確認されないことなどから石列は近世以降の耕作地形成に伴うもので中世大権寺遺跡に関わる遺構でないと判断した。

B4-5トレンチ

1次調査で確認した SW01 が南北にどこまで延伸するかを確認するために設定したトレンチである。調査開始当初は別々に掘削を行っていたが、最終的に一本の石積遺構となったので、トレンチを結合した。便宜上、B4-5トレンチと呼称する。

先に触れたとおり、現地表面になる以前は耕作区がA2トレンチあたりで南西に段下がりしていたことから南側は遺存状況がよくない。

結果的にトレンチのほぼ端から端に及ぶ石積遺構 SW01・SW02 を検出し、その中央部には石段遺構 SS01 を検出した。SS01 が階段であるとした場合、その進行方向になんらかの遺構があるのではないかとの想定から、トレンチ中央を南西方向に拡充したのがE区である。最終的にT字型の変則トレンチとなった。E区は南側がA2tr 北側と重複する。

E区は表面から順次検出を行なったが、礫含みで明瞭な遺構面は検出できなかった。E区北西部で耕作土の下から明黄褐色の硬質層を確認し、この上面を追っていったところ東へ緩やかに傾斜しながら下がり SW02 に接する状況であった。傾斜角は凡そ7度でA2tr の 15 層の傾斜角と一致し、全体的に傾斜地形であることがわかる。第 72 図のa-a´の断面図で見るようにこの明黄褐色硬質層6層は耕作土である1層に切られるまで続いており、さらに傾斜面が西へ登攀して続いていたことを示す。A2tr などと異なり、E区北側では耕作のための床土（盤練り層）がない。

SW01・SW02

A5tr で検出した SW01 の延長線を検出した。検出総延長は石段遺構 SS01 も含み、約 19m。SS01 を中心に南北方向へ延伸しているが、主軸はN17°Eでややずれがある。遺構番号は SS01 より南側を SW01、SS01 より北側を SW02 とする。

また、現在の棚田石積のラインとも若干ずれがある。そのため、北側では石積の前面まで検出できたが、南側は棚田石積の裏込に壊され、背面しか確認できない。当初は北側の現況の石積に沿って屈曲するという想定でいたが、調査の結果さらに直進して、現在の道路を跨いで延びていくことが判明した。

石積幅は約 100cm で、前面（東側）に 45°ほど下方へ傾いた貼石を並べ、背面は 50cm 程度の自然石を並べラインを決めている。内部はA2tr での調査結果通り、土を混和しながら安山岩が充填されていると考えられる。そのため、本来は純粋な石積とは言いがたい。石積天端については、SW01 は耕作により天端が破壊されている。SW02 は天端が残っている可能性もあるが、雑然として揃ってはいない。さらに上部まで積み上げられていたことも考えられる。

造成時の土留め遺構としての性格が考えられ、基壇状平坦地の端線になるのであろう。A2tr での断ち割り状況、A2-13 層出土の青磁片と SW02 北側のトレンチh-h´の状況から中世の産物で、15 世紀以降の構築と考えられるが明確な年代は不明である。

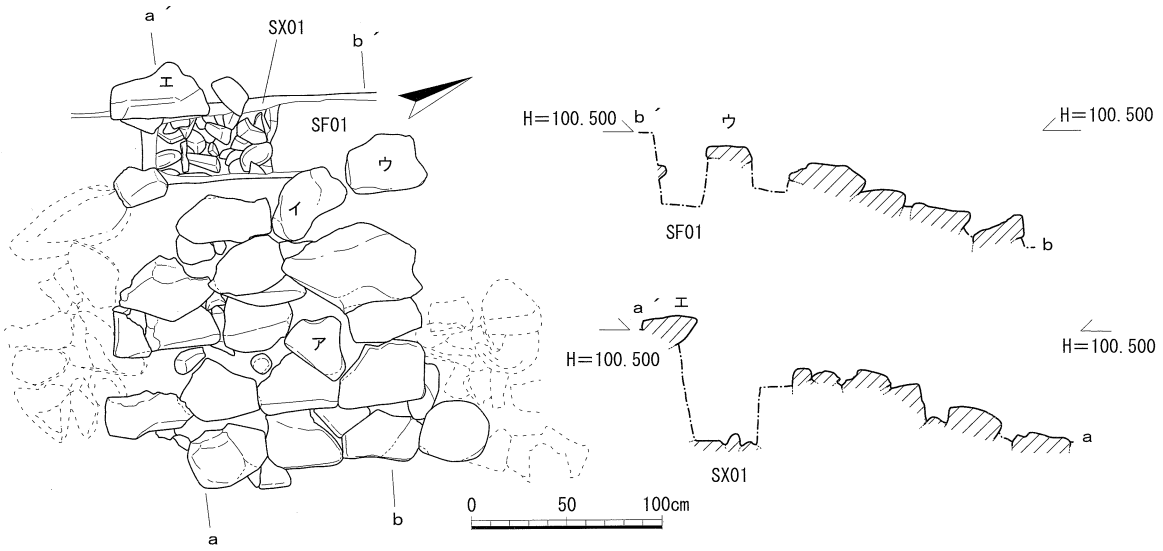
SS01

B4-5tr の中央において検出した。遺構は地元産安山岩の扁平自然石を4または5石を並置し、

東南東から西北西へ向かい５段にわたって階段を構築している。石材は東向きに面を揃えた 40cm 程度の扁平石が多く使用されているが、大小にややばらつきがある。段ごとの比高差は６～16cm と揃っていないが、おおよそ 10cm 程度に集約される。

５段目の構成石材であるイ・ウは現位置より動かされており、６段目は確認できない。わずかにエに７段目の構成石材であった可能性が残る。６段目があったと思われる位置をサブトレとして掘削した折に SF01 と SX01 を検出した。

SW01・SW02 は SS01 の両脇から延びていき、その軸線と SS01 の登段方向は約 90 度であることから同時期の構築と見て間違いない。



第73図　SS01実測図（S＝1/40）

SF01・SX01

SF01 はＥ区にて検出した硬質層であり、道路状遺構と位置づけた。明らかに他の層とは締まり方を異にしている。当初は地山と想定するほどであったが、層に若干の中世土師皿片が混入していた。傾斜７度で、サブトレのｃ-ｃ´やｆ-ｆ´で確認したところ層厚は概ね 10cm 程度であった。南側の肩部には SX01 の石敷遺構がある。北側は、ｇ-ｇ´で肩の落ちを確認しているが、石敷遺構は存在しなかった。ｇ-ｇ´では SF01 の幅は約 2.7ｍを測る。Ｅ区西側では耕作土直下で面的に広がっており、さらに西へ向かって傾斜があったところを耕作土によって切られている。ｂ-ｂ´では黒色土層である３層の上に堆積している。このｂ-ｂ´の３層はＡ２tr の 15 層である。

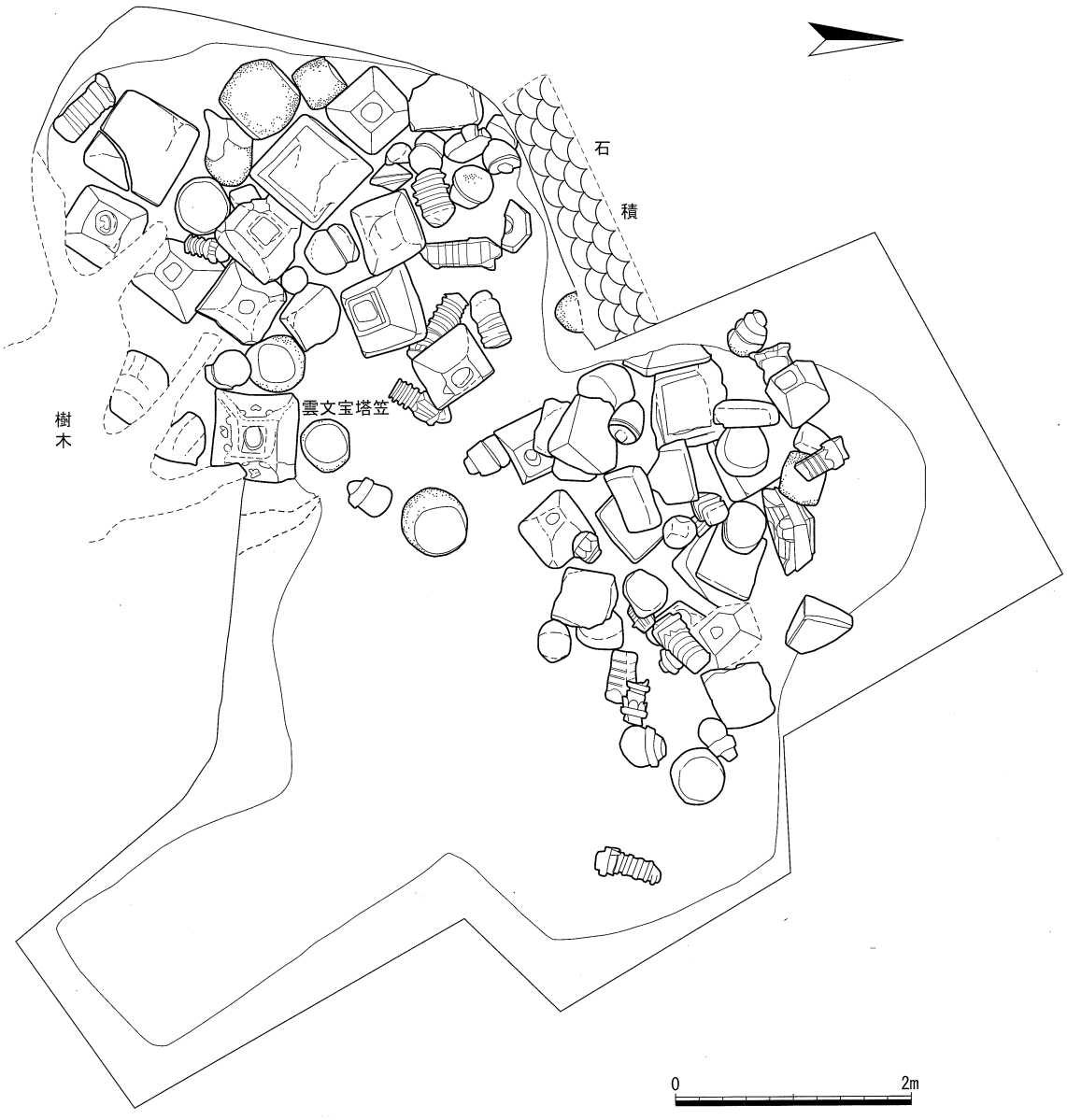
SX01 は石敷遺構で敷き幅が約 50～70cm、長さは 5.5ｍ分検出した。SF01 と同じ傾斜で東へ向かって下がり、完全に SS01 の地下に潜る。西側についてはｄ-ｄ´のあたりで途切れる。10cm 前後の礫を雑多に敷き詰めるが、性格は不明。構成礫の直上で第 77 図-67・68 の須恵質擂鉢が出土している。

SF01・SX01 ともに SS01・SW02 に先行する中世遺構であり、石段に遡る坂路面の可能性が考えられるが、明確な性格までは断じえない。

B６トレンチ

中段の調査区西側、従来から石塔部材を据えていた場所の裏手には土塁状の盛りあがりがあった。この箇所にＢ６trを設定し掘削したところ、近現代に集積された数多くの石塔部材が出土した。出土部材は猪目・雲文文様を持ち底面に垂木・隅木を表現した珍しい形式の宝塔笠や銘を持つ宝篋印塔基礎座を始め、約140点である。従来、大権寺の石塔は宝篋印塔・五輪塔が中心と考えられていたが、相輪（これまで相輪はすべて宝篋印塔として計上されていた）・笠（火輪との識別困難）が多いことから宝塔も相当基あったと思われる。

この集積は遺構ではなく、近現代の宅地造成によって押しやられた集積である。大量の近現代陶磁器・瓦・ガラスビンなどが埋土に含まれていた。若干ながら中世瓦質土器も見られた。



第74図　B6トレンチ平面図

B７トレンチ

中段、防風石垣の東に３ｍ×３ｍで設定し掘削した。E区から西に上るSF01（E区6層）の有無を確認したが、存在せず、９層と思われる礫混じりの明赤褐色土層が堆積していた。遺物も全く出土しなかった。

第２節　出土遺物について

２次に亘る大権寺遺跡調査で出土した中世遺物は259点である。その多くが細片であり、器形の全容がわかるものは極めて少なかった。ほとんどのトレンチで遺物が出土したことから、周辺全体に大権寺の範囲が及ぶものと考えられるが、その多くは耕作土中から近現代遺物に伴ってのものである。細片が多いのは耕作時に農機で破砕されたからであろう。33・34はＢ３tr、46はＢ４-５trなどというようにあきらかに同一個体であるが、トレンチを跨って出土している資料もあり、かなり散らされていることがわかる。

Ａ１tr出土遺物

１・２は青磁。１は外面は丸彫で鎬の無い蓮弁を作出。内面には花文スタンプ。上田分類Ｂ-Ⅱ類。２は盤か坏。内面に丸彫の蓮弁。釉は厚い。３は見込が凹むレンツー碗タイプの肥前系染付碗。

Ａ２tr出土遺物

４～６は龍泉窯系青磁片。４・５は端反の上田Ｄ類。６は内面に丸彫の蓮弁。坏か。７・８は白磁。小型の菊皿で、接合しないが同一個体である。９～11は天目碗。９はすっぽん口片、10は体部片。内外面ともガラス質の黒釉が厚くかかるが外面下半は露胎。11も厚いガラス質の釉がかかるが、被熱して器面が荒れており、断面も黒変する。いずれも中国産と思われる。12は景徳鎮青花皿。畳付は削られて露胎。見込には二重圏線と玉取獅子が描かれると思われる。小野分類Ｂ１皿。

13は軒平瓦瓦当。中心飾の下半部のみ５葉。全体では12葉になると思われる。顎背面はやや斜めに立ち上がり、色調は灰黄色。燻し過程がないことから中世の瓦片である可能性は高い。ただし、これ以外に瓦片は出土していない。

14は火舎。菊花スタンプを施文。15～18は擂鉢。16・17は底部に擂り目がある。いずれも灰青色で硬質。16は15層、18は14層より出土。天草全域で見られる須恵質の中世陶器である。19・20は土師質土器皿。いずれも14層中より出土。摩滅が酷く、糸切り痕すら判明しない。この２例に限らず大権寺遺跡の土師質土器皿はいずれも焼成が甘い。21は青磁片。耕作層以外から出土した唯一の陶磁器である。片切彫で鎬のない蓮弁を作出する。上田Ｂ-Ⅱ類。焼成は不良で、素地はにぶい橙色を呈す。

出土層位を特記していないものはいずれも１～３層の耕作土層から出土したものである。21を除く陶磁器がいずれも耕作土層から出土したことから生活面は耕作面によって切られている可能性が強い。

Ａ３tr出土遺物

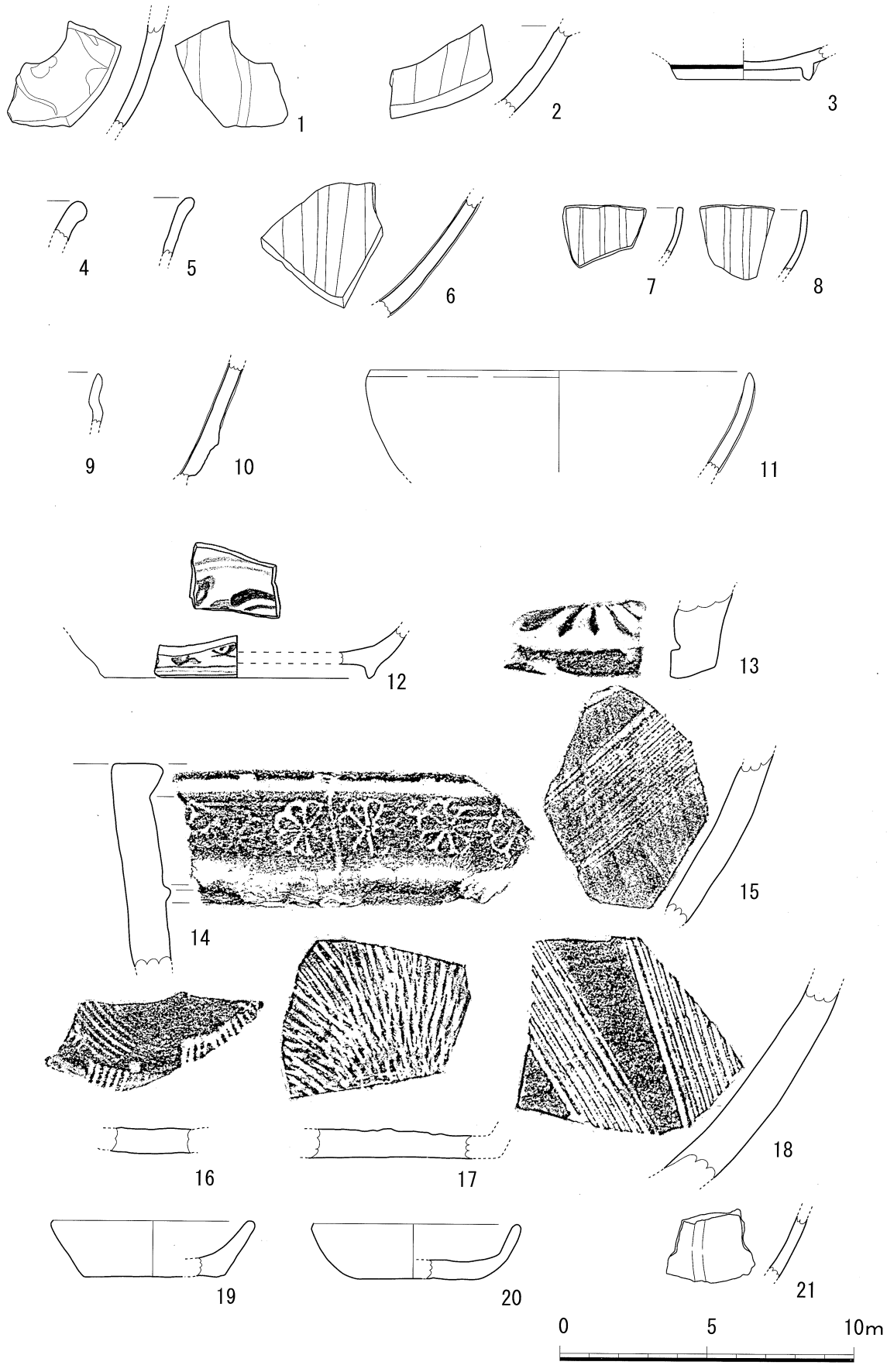
22は須恵質擂鉢。斜方向へのハケ目調整が良好に残る。他に図化できない青磁細片や土師質土器など、若干の中世遺物が出土し上段であるＡ３trまで遺跡の範囲であったと考えられる。

Ａ４tr出土遺物

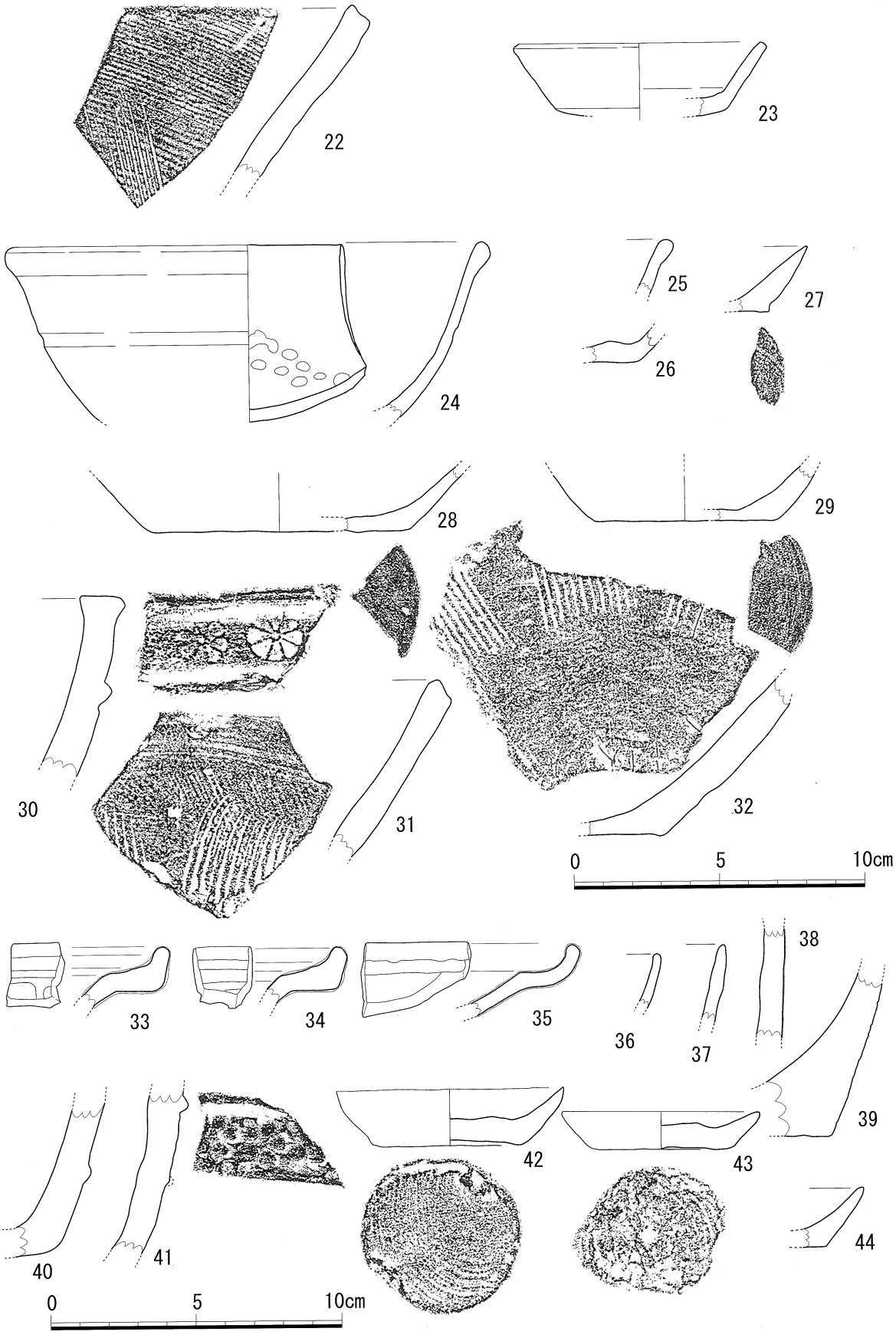
23は白磁坏。腰折れの森田Ｄ群。浅黄橙色の軟質素地に乳白色の釉がかかる。貫入が多い粗製品。多量の近現代遺物に混じって出土している。

Ａ５tr出土遺物

24・25は龍泉窯系青磁。いずれも口縁を外反気味に丸く作る。24は内器面に二重の連珠を押し出す。菱形を呈すものと思われる。４層出土。25は７層出土。26～29は土師質土器皿。27は内面が直線に立ち上がり、口縁を鋭角に作る。内面と口縁付近外に煤が付着。26・29は内外両面



第75図　大権寺遺跡A1、A2tr出土遺物実測図（S＝1/2）



第76図　大権寺遺跡A3～5、B1～3tr出土遺物実測図（S＝1/2）

に煤。火を受けたものである。27は3層耕作層、29が7層、26・28が8層からそれぞれ出土。30は瓦質土器の火舎。8層。31・32は同一個体の瓦質擂鉢。底部が薄い。31が4層、32が3層出土。

B1～3tr出土遺物

33・34は青磁大盤。同一個体と思われる。端部を上方に引き上げるタイプ。内面は大型蓮弁となる。B3tr。35も青磁盤だが、端部は丸みをつけて引き上げてある。B3tr出土。釉や素地は24に近い。いずれも龍泉窯系。36・37は天目碗口縁片。37は小豆色の釉で素地に黒色粒を多く含む。中国産。B3tr出土。38・39は施釉陶器である。中国からの舶載品と思われる。38は外面に天目釉に似た黒褐色の釉がかかり、内面は刷毛目。同様の破片は数点の散布が見られた。B2trのカクラン。39は壺の底部。内面に黒釉がかかり、外面は露胎で灰色、ロクロによるヘラケズリ痕跡。茶壺か何かであろう。B1trのカクラン。40・41は瓦質火舎。42～44は土師質土器皿。42は唯一完存に近い土師質土器皿で法量7.8cm。例外的に焼成がよく糸切り痕跡も明瞭に残る。大権寺遺跡での土師質土器皿は全体的に法量7㎝前後に復元され、棚底城跡の小型に相当するものが多い。

B4-5tr出土遺物

45～50は龍泉窯系青磁。45は端反の上田D類。46は33・34と同一片の青磁大盤。B4-5trの最南端石材の上から出土。B3trとの距離は12mほど離れていることから、かなり広範囲に耕作で散らされてしまったものと推定される。47は小型香炉の小片。口縁胎はくの字状を呈す。胴部が竹筒状になるものであろう。48は稜花皿口縁。棚底城跡からも多く出土しているタイプである。49は高台部。畳付を斜めにカットする。50は焼成不良の底部片。外底を蛇の目釉剥ぎするタイプの量産品である。高台は丸みを持つ。E区の西側で出土。

51～54は中国産白磁。いずれも森田D類である。51は八角坏。トレンチ北側の耕作土。52、54は腰折れ坏。52は釉に光沢がある精良品。53は底部片で高台を抉るタイプ。焼成は不良。

55、56は青花。55は高台細片。見込に法螺貝が描かれるC碗か。15世紀末～16世紀前半。56は漳州窯系の粗製青花皿。見込は濁りの強い呉須をダミる方法で形の崩れた菊花を描き、蛇の目釉剥ぎを施す。外底は露胎。同様の出土例は平戸和蘭商館跡で見られる。16世紀後半頃であろう。トレンチ北側の耕作土から。

57～59は土師質土器皿。いずれも焼成甘い。60～63は火舎。すべて瓦質。64～68・71は須恵質擂鉢。64～66は口縁を段付き風に作る。68・71は内面全体にハケ目を施してから摺り目を入れている。67・68は石敷遺構SX01の直上から出土した。69・70・72・73は須恵質甕。69はくの字型に屈曲し、肥厚し丸みを持つ口縁。72は丁寧なつくりでシャープさがある。70・73は格子叩きが明瞭。

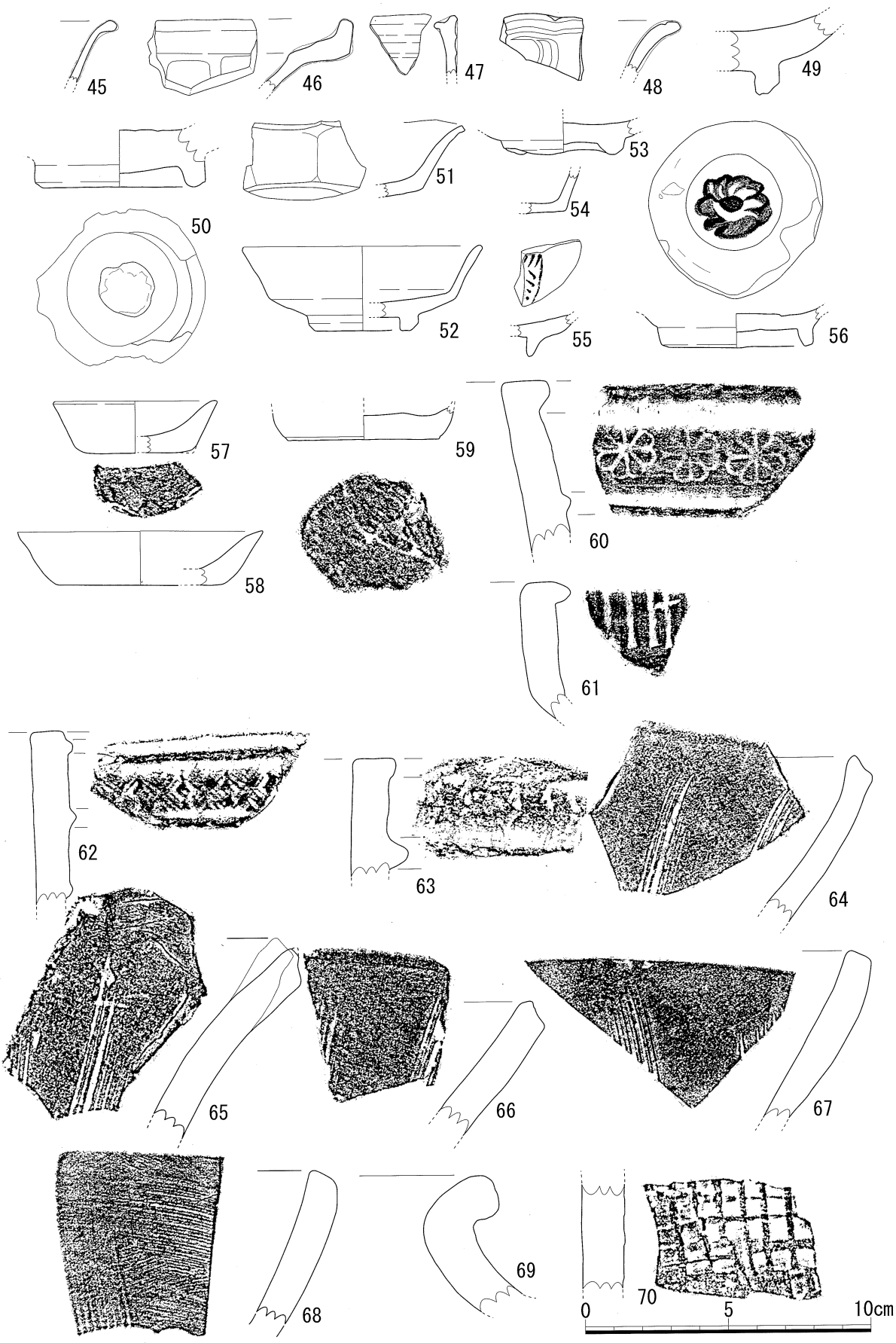
74は金銅製金具。トレンチ南側の耕作床土より出土した。先端が花形で、体部は薄作りで湾曲する。丸頭のリベット状部品が3本装着される。仏具関連の金具と想定される。

B6tr出土遺物

石塔部材とともにいくつかの瓦質土器が出土したが、大量の近現代陶磁も一緒に出土したことから宅地造成時に動かされたものである。75は火舎。76・77は瓦質擂鉢。76はにぶい赤褐色、77は灰黄色。78は瓦質鍔釜。下半部になるにつれて器壁が薄くなる。外面下半部には広く煤が付着し、実使用されたものである。

出土遺物の特徴

トレンチ調査であることから、ここで掲げた遺物の特徴が「大権寺」という寺院全体の様相を



第77図　大権寺遺跡B4-5tr出土遺物実測図（S＝1/2）

表しているとは言い切れないがひとまずのまとめを提示する。出土遺物点数表はP82表Fに棚底城跡分とあわせて掲載している。

まず出土状況からは青花が極めて少ない。棚底城跡からは大量の青花が出土しているが大権寺遺跡ではほとんど出土しなかった。ただし、12、55、56など若干点は確認できた。

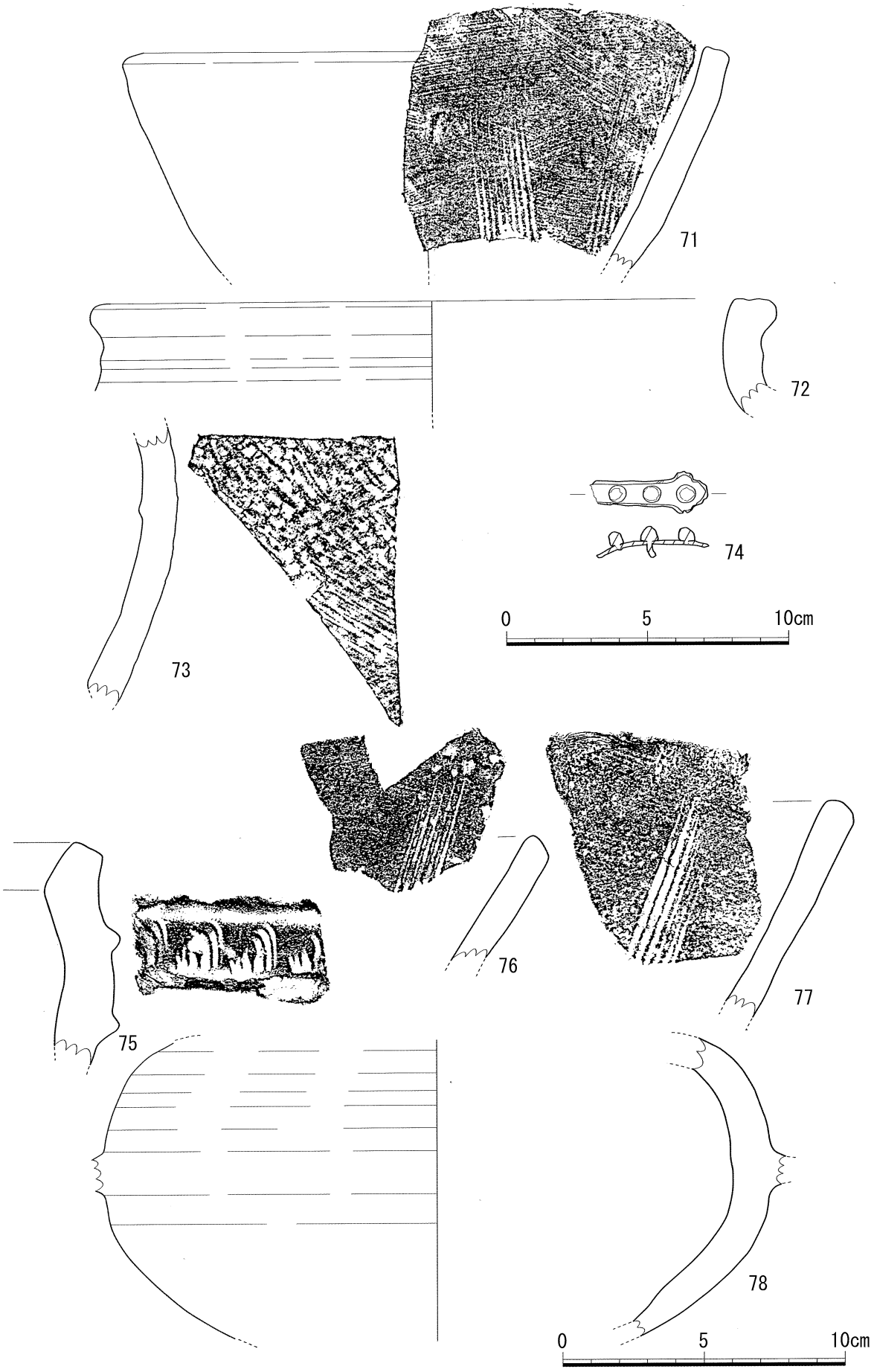
また白磁も特徴的で、棚底城跡で多く出土した景徳鎮産の端反皿、いわゆる森田E類は全く出土しなかったが、その前段階にあたる腰折れのD類は5点出土している。青磁については、出土点数が多いが、無文細片が多く特徴がないものが多い。編年指標になる碗に特徴的なものが少ない。逆説的に棚底城跡で主流であったB-Ⅲ類・B-Ⅳ類などが出土していないことが一つの特徴である。

土師質土器皿は小破片が多く、形状がわかるものが少ない。棚底城跡の土師質土器皿と比較すると総じて焼きが甘く軟質。灯明皿として使われていたのであろうが、A5trの26・29は内外面が煤で黒変しており、火災にあった可能性もある。同様に被熱した資料としてはA2trの天目碗がある。

天目は合計8点と全体の出土数の少なさから考えれば比率は高い。瀬戸美濃と見られるものはなく、すべて中国産であろう。大型青磁盤や小香炉もあることから中世寺院の生活痕跡が窺える。

擂鉢については須恵質のものが多く瓦質の出土数を凌駕する。また貯蔵具としての甕も須恵質のものが多く見られる。P80の註2で触れたように、古墳時代や古代の須恵器と見まがう硬質な製品で、岡山県の亀山焼に類似する。肥後でも荒尾の樺番丈窯や相良の下り山窯などで中世須恵器を産出し、樺番丈窯の須恵器も亀山焼須恵器と類似するとされる。しかし前者は構成に擂鉢がなくやや軟質であるとされており、後者は玉縁白磁を模倣した鉢から12世紀頃の窯とされており、この大権寺遺跡や棚底城跡の出土品と少なからず異なる部分もある。現段階では産地特定までできない。機能的に重複する備前や常滑が棚底城跡からは出土するが、大権寺遺跡からは出土していないことから15世紀まではこれらの在地系中世須恵器が製粉・貯蔵の主流を担い、戦国期頃から、擂鉢は継続しながらも、貯蔵部門は広域流通品である備前・常滑等の普及により座を譲り渡すのではないかと思われる。

このことから年代的には棚底城跡におけるⅠ期に大権寺遺跡の最盛期がある。出土数が多い中国産天目や青磁盤もこの時期のものと考えられ、華やかな寺院生活が営まれていたものと推察される。その後寺院としては衰退したと思われるが、12や55などの16世紀にかかる青花片が若干出土していることや戦国末期頃の特徴を持つ石塔部材があることから、衰退しながらも墓所・供養所としての機能を有して続いていたものと考えられる。



第78図　大権寺遺跡B4-5、B6tr出土遺物実測図（S＝1/2）

第３節　石塔群の特徴について

大権寺石塔群

中段に集積する五輪塔・宝篋印塔・宝塔などの中世石塔群は、周辺に埋没していたものが昭和4～50 年代に発見され、その出土部材を組みあげて現在の古塔群となった。そのため、従来より完存する塔はない。

これらの石塔部材の中で、蓮華文反花座を彫出した地輪が四基あり、各々延文三年(1358)・康安元年(1361)・永徳三年(1383)（２基）の紀年銘を持つ。また段付きの宝篋印塔基礎の内２基に、嘉慶二年（1388）・永享二年(1440 年)の紀年銘を持つものがある。永享二年分を除く五点の紀年銘はいずれも北朝年号を刻むことが大きな特徴である。天草地域に遺存する 14 世紀の紀年銘は全てこの大権寺古塔群のものである（これに次ぐものは本渡亀川古塔群の応永十一年（1404 年）銘宝篋印塔基礎である）。

平成 17 年に倉岳町教育委員会が主体となって大権寺石塔群の調査を行い、その詳細は『棚底城跡Ⅱ』に掲載している。この調査により石塔部材は下記表の通り 234 点が確認・図化されており、その部材数は天草地域で最多数を誇る。

なお、17 年の調査では紀年銘蓮華座部材を宝篋印塔としてカウントしてあったが、上部部材が乗るべき蓮華座が円形で規格されているため地輪として修正した。また、相輪と火輪の数量の多さと宝塔の塔身が認められることから、相輪・火輪には宝塔部材も含まれていると思われる。宝篋印塔の塔身や五輪塔の地輪がやや少ないのは転用で持ち出された可能性が高い。

発掘調査出土石造物

今回の発掘調査では大権寺石塔群の背後に設定したＢ６トレンチより新たに出土した石造物は 141 点である。先述の通り、近現代の瓦や陶磁器と共に出土したことから明らかに人為的に寄せ集めて埋められたものである。中段にかつてあった民家の造成時に寄せられたものと思われる。従来分と出土分で計 375 点となり、さらにその数量が増加した。

表Ｇ　大権寺石塔　部材別点数表

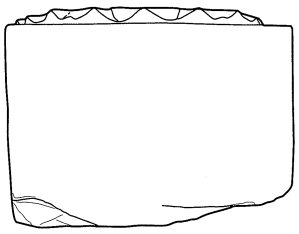
塔種	部材種	17年度 確認点数	19年度 出土点数	備考	
宝篋印塔	相輪	36	38	宝塔相輪の可能性があるものを含む	
	笠	9	1		
	塔身	4	3	梵字刻×１	
	基礎座	15	2	紀年銘×２　無年号銘×５	
宝塔	相輪	?	?	宝篋印塔相輪の中に含まれる。	
	笠	7	4	猪目文刻×１　相輪受の作り出しがあるもの。さらに火輪にも含まれていると考えられる。	
	塔身	2	0		
	基礎	0	0		
五輪塔	空風輪	37	30		
	火輪	55	23	無年号銘×１　宝塔笠の可能性があるものを含む。	
	水輪	54	27	梵字刻×１　墨書梵字×１	
	地輪	15	11	紀年銘反花座×４　無年号銘×３　墨書×１	
無縫塔	塔身	0	1		
	基礎	0	1		
小　計		234	141	総　計	375

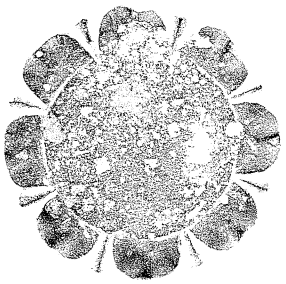
出土部材はやはり転用しがたい相輪・空風輪が多いが、宝篋印塔部材が少なかったことから、やはり相輪には相当数、宝塔に使用されたものがあると思われるが現段階では判別ができない。紀年銘が入った石造物はなかったが、『道海禅□門』銘を持つ宝篋印塔基礎座と『金』銘を持つ火輪及び雲文猪目文を持つ宝塔笠が出土した。石材は、かなり脆い黒色の軟質凝灰岩が多いが、灰色～灰白色の硬質凝灰岩もある。反花地輪を始め作りの丁寧な古手のものの多くがこの硬質凝灰岩製である。他に若干ながら安山岩や砂岩を使用したものがある。凝灰岩は他所からの運び込み、安山岩・砂岩は天草での生産品と思われる。

紀年銘拓影

蓮華座拓影

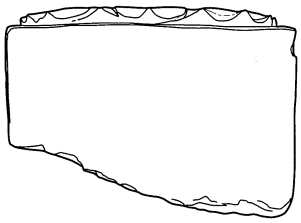
読解銘文

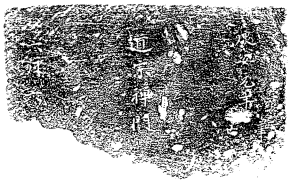


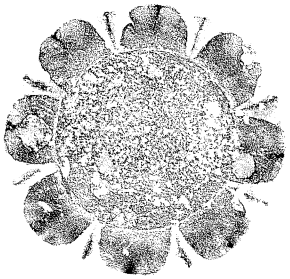


延文三年　戊戌
明俊禅尼
孟夏四日

延文三年銘

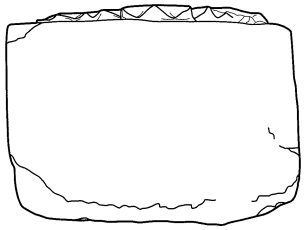


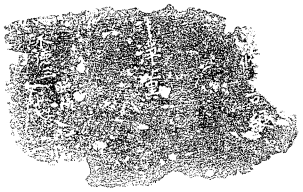


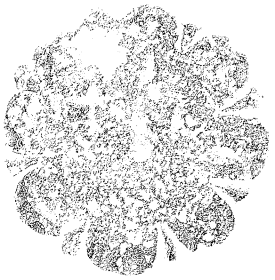


康安元年　辛丑
道宗禅門
六月六□

康安元年銘

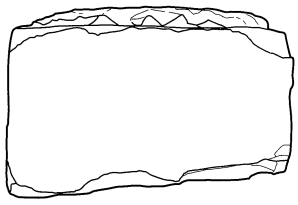


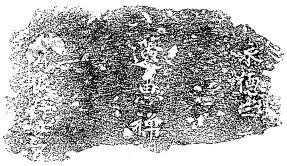


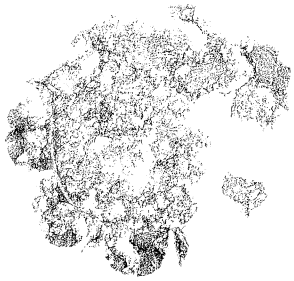


□修善根
浄薫
永徳三　昭陽
□渕獻　八月時□

永徳三年「浄薫」銘

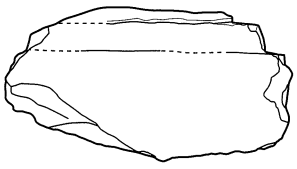


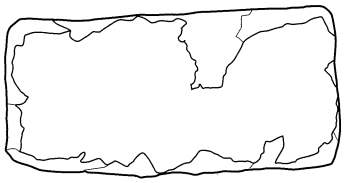




永徳三年
蓮恵禅門
□月彼岸廿五日

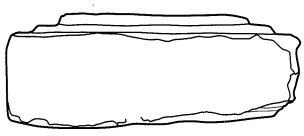
永徳三年「蓮恵禅門」銘

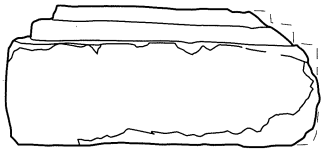




嘉慶二年銘

「道正禅定門」銘





永享十二年銘

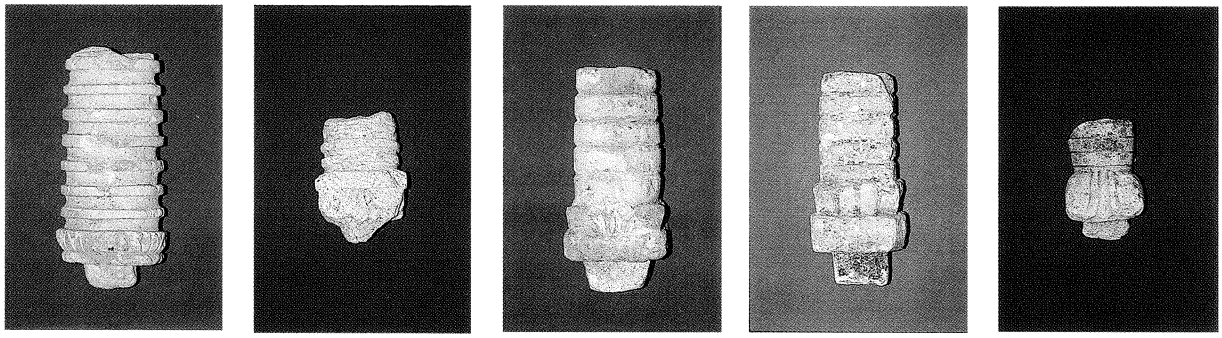
0　10　20cm

「末豊」銘

第79図　大権寺古塔群主要石造物

宝篋印塔

相輪（宝塔相輪も含む）　計38点出土した。形状から概ね５類に分類できる。断面が正円を呈し九輪を丁寧に作り出すものをSo１類。九輪を丁寧に作り出しているが、断面が隅丸方形になるものをSo２類。断面隅丸方形で、九輪が簡略化され溝彫りで表現されるものをSo３類。断面が方形で九輪が溝彫りのものを So４類。断面は正円だが九輪を溝で表現するものも一点あり、これを So５類とする。So１類からSo４類へ徐々に略化していくと考えられるが、宝篋印塔・宝塔の塔種による形状の差も考えられる。

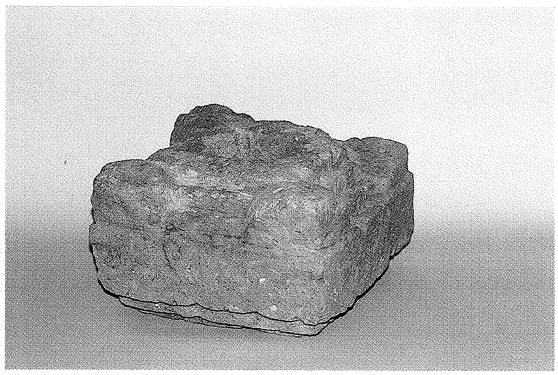


So１　So２　So３　So４　So５

笠　１点のみ。隅飾は欠損。

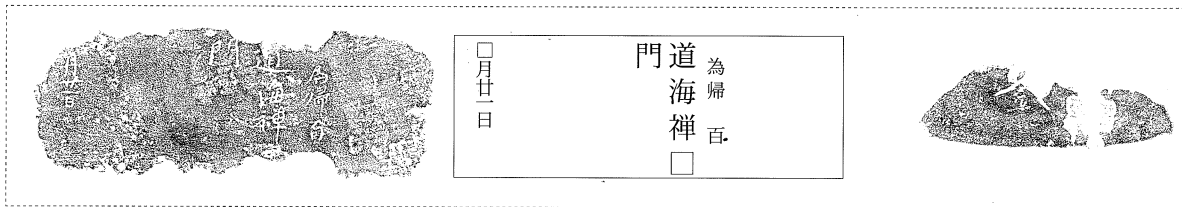
塔身　３点出土。硬質凝灰岩が１、黒色凝灰岩が２。
認されない。

基礎座　２点出土。ともに段作りの基礎座である。うち１点には以下の通り銘がある。年号は確
硬質凝灰岩。



宝篋印塔　笠

宝篋印塔　段付基礎座『道海禅』銘



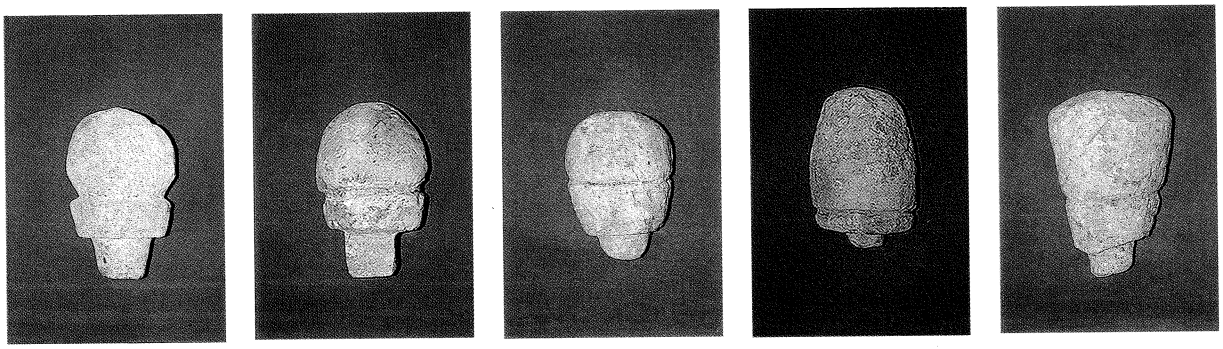
第80図　『道海禅』銘基礎座拓影・『金』銘火輪拓影

五輪塔

空風輪　計 30 点出土。空部と風部を明瞭に区別され彫り出されているものを Ku 1 類、空風の区別が深彫りの溝になるものを Ku 2 類、空風の区別が浅い溝になるものを Ku 3 類、空風の区別線が下部のホゾ付近まで降り全体形状が団栗型になるものを Ku 4 類、空部が撥型になるものを Ku 5 類とした。これも Ku 1 類から 5 類へ時代にともなって略化していくものと考えられる。撥型の Ku 5 類は戦国時代末から江戸時代にかかるくらいの型式である。

Ku 1 類は 5 点。砂岩が 2、硬質凝灰岩が 2、軟質凝灰岩が 1。火輪に差し込むホゾは全て断面丸型である。Ku 2 類は 8 点出土。小型品が 6 点。大型品が 2 点。小型の 6 点は砂岩製 2、安山岩製 1、軟質凝灰岩 3。ホゾは断面四角が 2、丸が 2、不明 2。大型の 2 点は空風輪区別の溝が体部中央まで上昇する。かなり大雑把なつくりを呈す。いずれも軟質安山岩製。Ku 2 類は材質・形状ともバラエティがあり、略化が始まる時期の様相と考えられる。Ku 3 類は 12 点出土。硬質凝灰岩製 3、軟質凝灰岩製 9 点を数える。ホゾは断面方形が 4、断面円形が 6、不明が 2 点。Ku 4 類は 2 点のみ。いずれも軟質凝灰岩でホゾ断面は方形。Ku 5 類は 3 点出土。硬質凝灰岩が 1、軟質凝灰岩が 2 点。

空風輪の形状から、かなりの形状略化が認められ、南北朝期から江戸初期に至るまでの長期間に亘り石造物が用いられたと思われる。

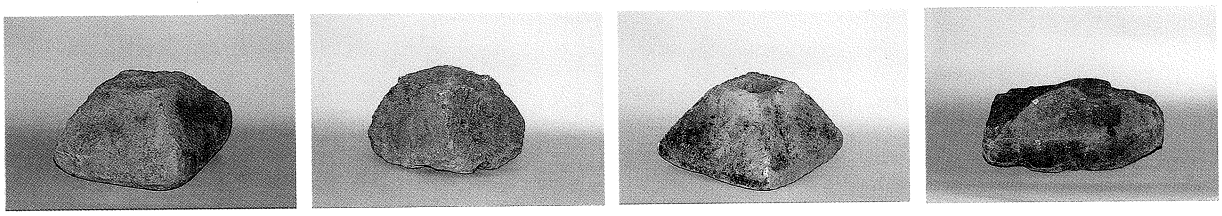


Ku 1　Ku 2　Ku 3　Ku 4　Ku 5

火輪（宝塔笠部も含む）　計 24 点出土した。火輪形状を持つものの中で、頂部ホゾ穴に周堤を持つもの 4 点を宝塔笠と認識し省いたが、相輪数の多さからなお 24 点中には宝塔笠が含まれている可能性が高い。

稜部に反りが認められホゾ穴が円形のものを Ka 1 類、稜部に反りがなくホゾ穴が円形のものを Ka 2 類、稜部に反りがなくホゾ穴が方形のものを Ka 3 類とした。

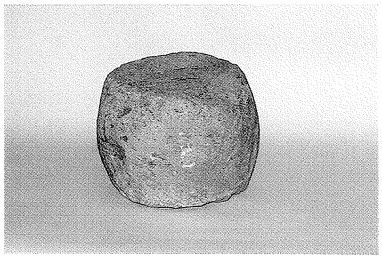
Ka 1 類は 5 点。全て灰白色の硬質凝灰岩製。Ka 2 類は 11 点出土。うち 9 点が黒色軟質凝灰岩製。Ka 3 類は 8 点。安山岩製が 1 点、硬質凝灰岩 2、軟質凝灰岩 5 点。軟質のものに「金」銘を持つ火輪がある。



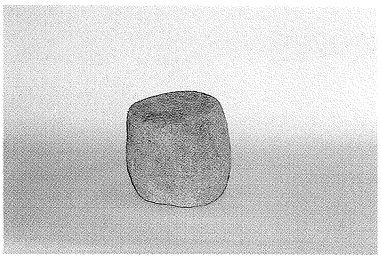
Ka 1　Ka 2　Ka 3　『金』銘火輪

水輪　計 27 点出土。ほとんどが円筒形で、20～28cm の中型を Su 1 類、16～19cm の小型を Su

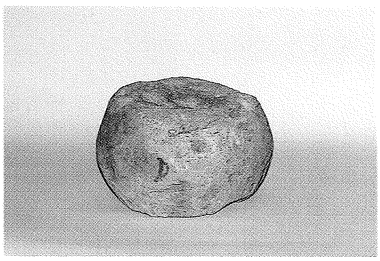
２類とする。Su１類は 14 点出土。Su１類には梵字を墨書きするものが認められた。砂岩１、安山岩２、硬質凝灰岩４、軟質凝灰岩７。 Su２類は 12 点出土。砂岩２、硬質凝灰岩２、軟質凝灰岩８点。



Su１

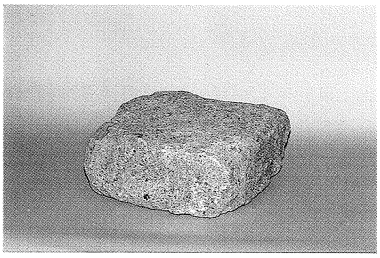


Su２

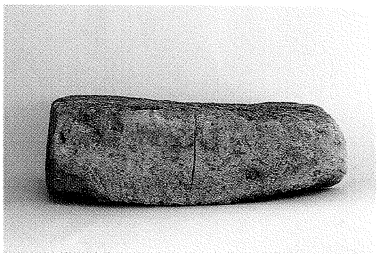


梵字墨書水輪

地輪　計 11 点出土。転用されやすい部材であるため、出土数が少ない。一片 37cm の大型のものから一片 24cm 程度の小型まであるが、分類は行なわなかった。安山岩製１、硬質凝灰岩製１、他は全て脆い軟質凝灰岩製である。やや小型のものに墨書が見られるものがある。中央に梵字を配置し、左右に五行ずつ墨書を記す。赤外線撮影を行ったが、文は判読できていない。



安山岩地輪



墨書地輪

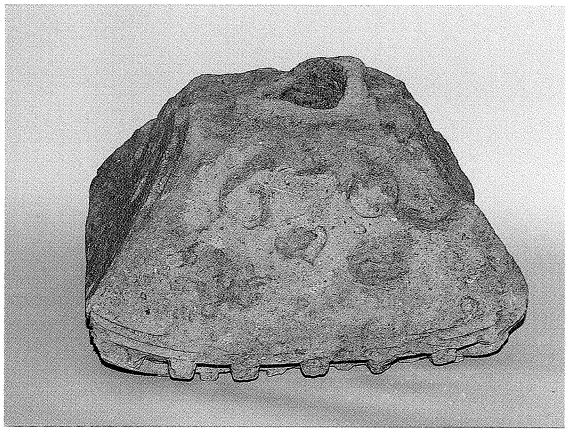
地輪赤外線撮影

宝塔

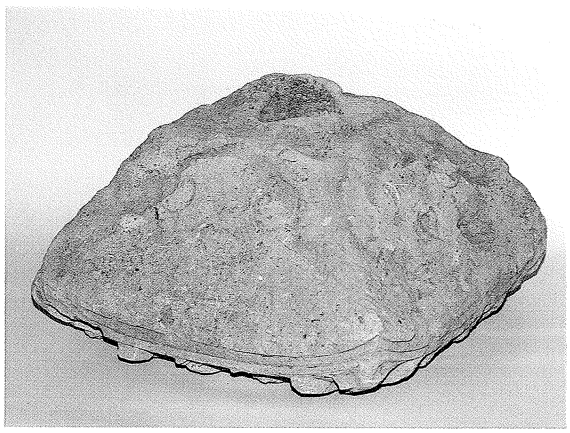
笠　確実なもので４点あり、頂部ホゾ穴に周堤があるもの。

雲文猪目文宝塔笠

屋根斜面に装飾的な彫刻がなされた宝塔笠が出土している。中央に猪目文・上位に雲文２が対称に彫刻されている。また、雲文より上の部分及び両サイドの稜線（降り棟に相当）までに至る「へ」の字状ラインより上方は一段低く彫られている。寺院建築の切妻に用いられる懸魚をモチーフにしていると考えられ、非常に高い彫出技術である。軒下に当る部分には垂木が五本あり、また角には隅木もある。塔の屋根構造を模した笠であるが、これらの表現は三面のみに見られ背面に当る一面にはなんらの装飾もない。裏面には径 21cm の円形刳りこみがあり、塔身頸の受けである。硬質凝灰岩で製作され、南北朝期のものであろう。



雲文猪目文宝塔笠　正面



雲文猪目文宝塔笠　左面

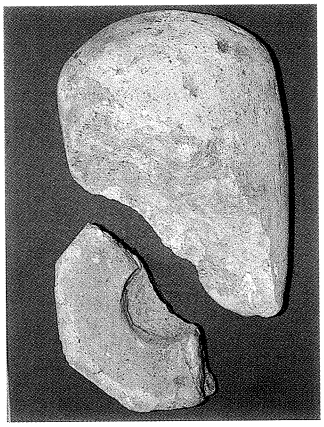
左面　　正面　　右面

第81図　雲文猪目文宝塔拓影

胴部　有頸でソロバン珠型の胴のふくらみを持つ。

無縫塔

塔身と八角台座が出土している。塔身が球体でなく長身であることから戦国時代末期の産と考えられる。



無縫塔

復元塔数

従来の大権寺古塔群の部材を平成17年度に確認した点数と平成19年度の発掘調査によって出土した点数を合計したところ、計375点であった。宝篋印塔あるいは宝塔の頂部となる相輪が合計74点、五輪塔の水輪がやはり合計で81点となった。前報告書『棚底城跡Ⅱ』段階の集計では五輪塔62点・宝篋印塔36点であり、さらに数量が増加し、より数多くの造塔が行なわれたことが明らかになった。宝塔あるいは宝篋印塔が74基存在したとすれば、天草はもとより県内においても有数の多塔場所である。

第Ⅴ章　棚底城周辺関連遺跡について

第１節　「城山」について

一般的に地域では棚底城のことを「高城」と呼称している。これに対し、棚底城から扇状地を挟んで西の対岸にあたる丘陵部を「城山」と呼び、古くから城跡であると知られている。約 500 mほど離れて向かい合う二つの城は伝承によれば、別々の豪族が勢力を張り、戦を繰り返していたとのことである。

城山はその最高所が標高約 112mで棚底城跡Ⅰ郭よりも約 20mほど高い。両者は大権寺遺跡を付け根としてＶ字状の位置関係となる。城山の頂部への道は、なだらかな斜面が続くのみで、最高所まで至る。途中で掘切、切岸などの地形改変を伴った遺構は一切見当たらず、尾根伝いに地形加工している棚底城跡とは対照的である。最高所は楕円形の平坦地を呈するが、周囲の急峻な削り落としは確認できず緩斜面となる。このような状況から、「城山」は「城を冠するが遺構を有しない城郭」と考えられる。第４図に提示したように、天草では城を冠する地名が近接している事例が少なからず見られる。同時代性が調査によって証明されている事例は、河内浦城と下田城などの一部例を除けばないが、同一の城郭と認識されるものや棚底城のように対立していたと認識されるものが地域の言い伝えとして残る。

城山の尾根線は南東に下り、その先端は塔尾台地として広がるが、台地の北側にあたる地名が「さかたぬき」である。「さかたぬき」は八代日記の弘治２年（1556 年）11 月７日の項に現れる地名で、「上津浦ヨリ棚底さかたぬき破候而、打取五人、生取五十三人、牛馬三十疋」との表現からなんらかの施設があったことが考えられる。城山とさかたぬきには相関性があると想定され、城山はさかたぬきから臨時の山上がりをするための用途を有していた可能性もある。

第２節　藤河栫について

八代日記「さかたぬき」の項よりやや遡り、弘治２年６月１日の項には「上津浦ヨリ棚底之内、藤河栫破候」とある。「栫」は九州南部において地名や苗字として散見され、字義には「柴を立てふさぐ」との意味がある。「八代日記」や「上井覚兼日記」などの史料に城や城下の屋敷地などとして頻出する南九州に特徴的な城郭用語として認識される（註１）。

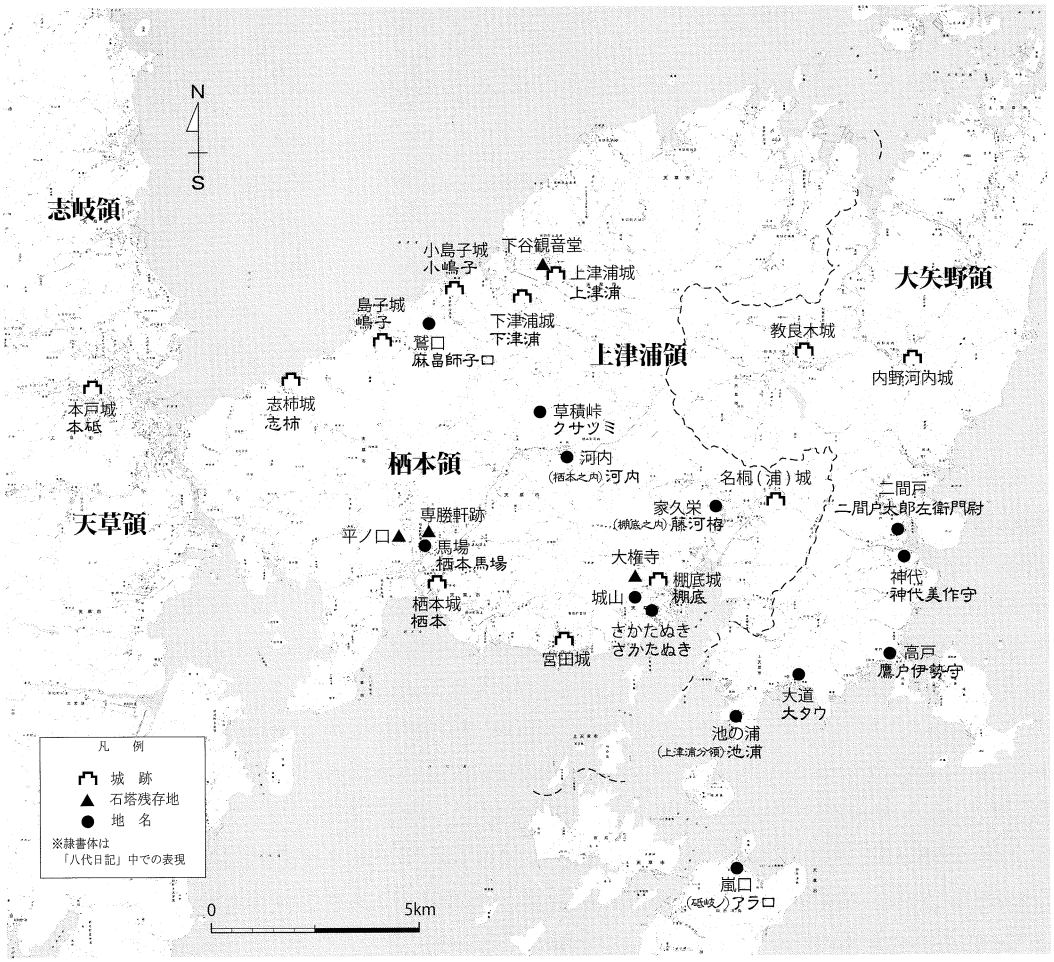
倉岳の東山麓には現在も「藤川」「家久栄」という小字名が隣接して残っており、藤河栫は遺構の詳細な比定地は不明であるが、家久栄地内に存在していたと推定される。

家久栄、藤川の地名は、倉岳の北中腹を源流とし山を北から東へ回りこむように流れる浦川沿いにあり、この谷伝いに西北へ進むと旧栖本町の河内に行き当たる。河内はやはり八代日記に記述が残っている。河内から藤河栫を経由して、棚底城に至る上島中央の谷合い道が弘治～永禄年間頃の重要な交通路であり、上津浦氏が棚底城の奪取のために、この路線の占有を企図したことが、文献史料からあきらかとなっている。

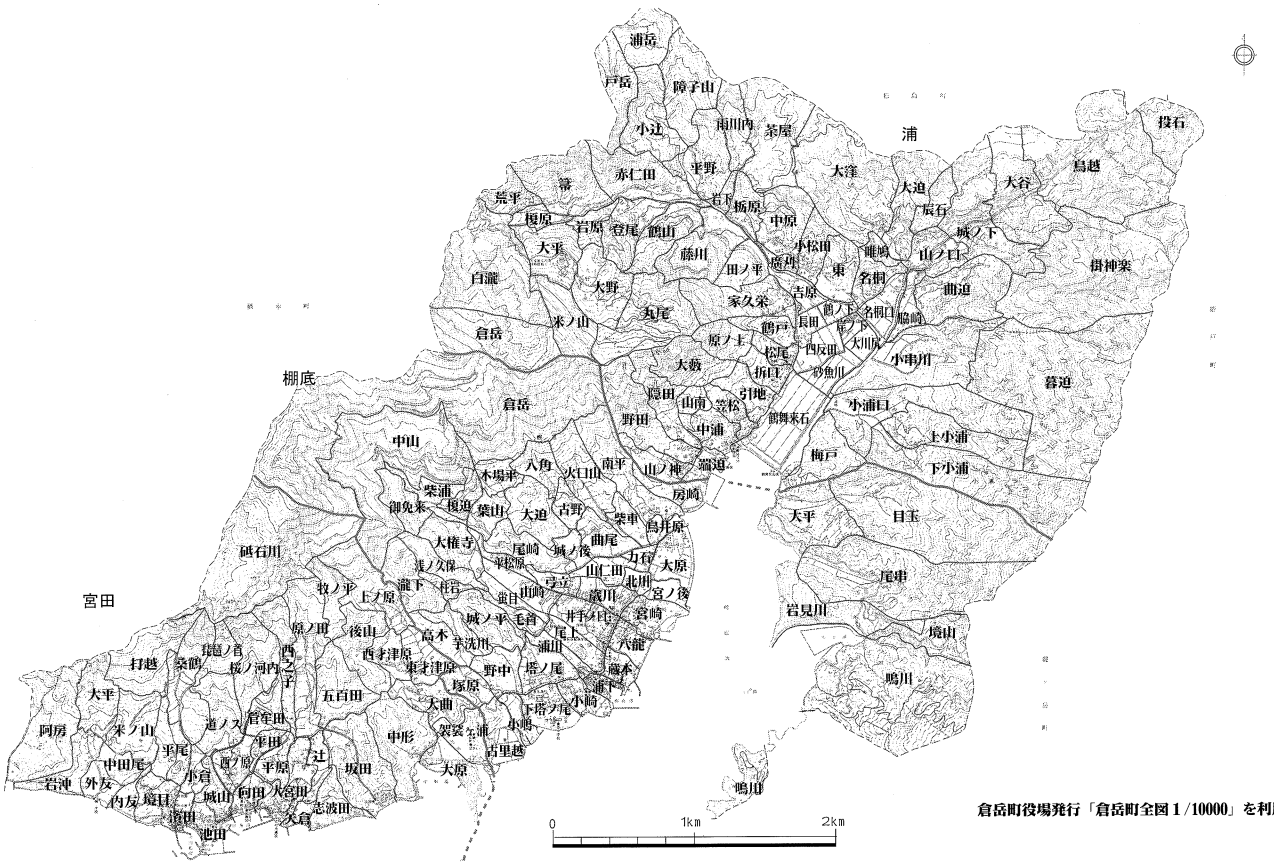
藤河栫は棚底城へ至る道程で、重要な地点に構築された防御施設と考えられる。地域には「栫」の具体的な場所を比定する伝承は伝わっていないが、「藤川には関所があり容易には通行できなかった」「荒平どんが下の谷沿い道を通ろうとすると、藤ノ子どん（藤川を方言でフジノコと言う）が邪魔をするので、しかたなく上の中腹道を通っていた」など隘路の通行阻害に関する伝承はいくつか伝わっている。荒平は、藤川よりさらに西にあたる谷の最奥部の地名である。「栫」の遺構は、家久栄集落の麓沿いに存在した可能性が高いと思われる。

さかたぬき、藤河栫は棚底城関連外部施設として位置づけられ、その位置確定が課題である。

註１　鶴嶋俊彦「肥後の栫（カコイ）」『南九州城郭談話会報 第 23 号』2005　南九州城郭談話会

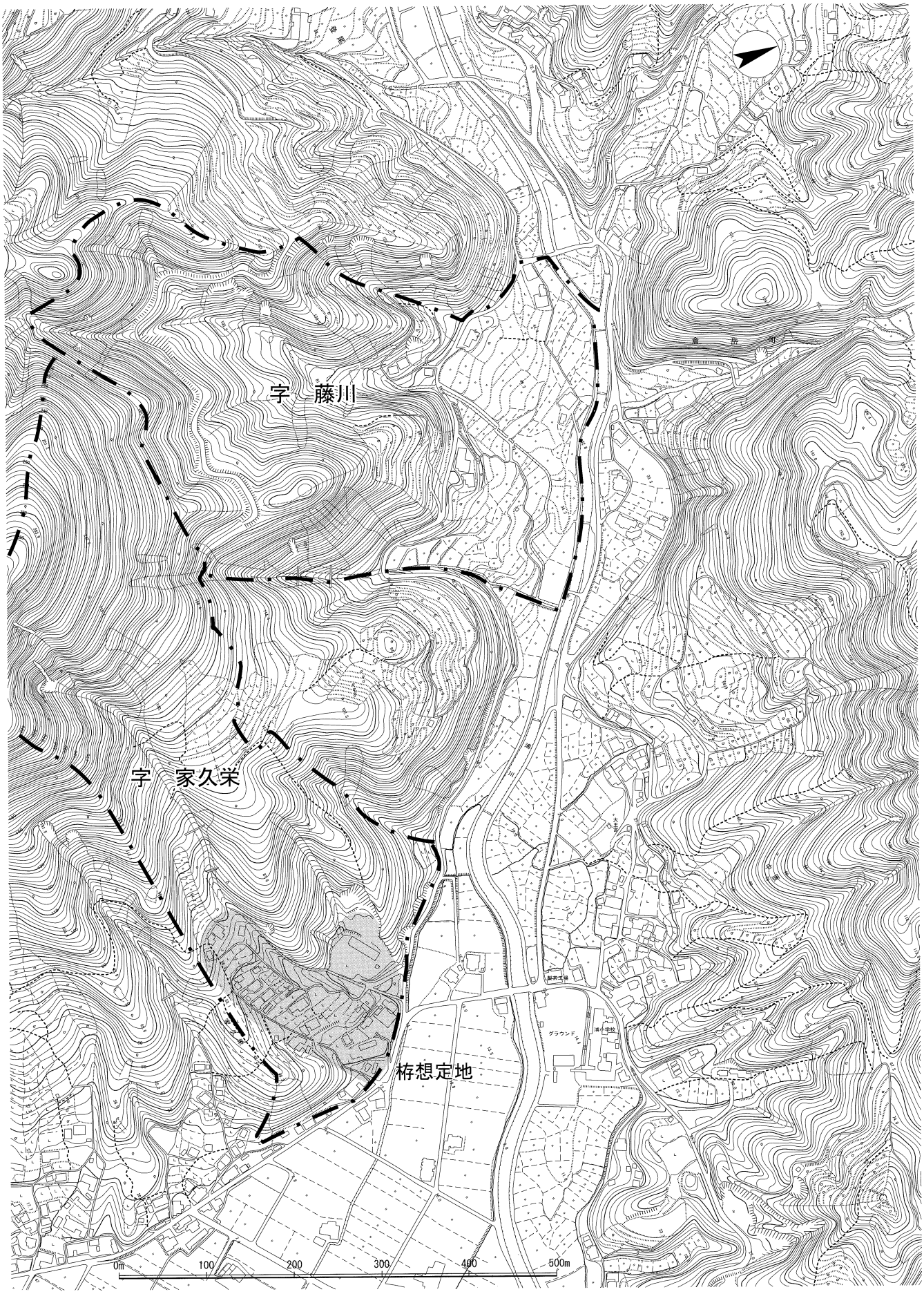


第82図　棚底城跡関連地図



倉岳町役場発行「倉岳町全図1/10000」を利用して作成

第83図　旧倉岳町字界図



第84図　藤河桁比定地周辺地形図（字　家久栄）

第VI章　考察編

棚底城の構造

鶴嶋俊彦

1　先行研究

天草の城跡を実証的な調査によって初めて通覧したのは鶴田八洲成氏で、「天草の中世城跡の構造」としてまとめられている。その51城跡の中には棚底城も含まれ、大権寺の石塔群とともに「土塁と空堀が同所にある典型的なもの」と注目しているものの、遺跡としての評価は高くなく、それは『熊本県の中世城跡』でも同様であった。その後は倉岳町役場の歳川喜三生氏による町内遺跡として踏査されていたが、平成14年から町史編纂事業として測量調査と発掘調査が実施されるに及んで、その実態が明らかになった。その結果は、2冊の文化財調査報告書（以下、『報告書』と略す）として刊行されている。

2　占地

棚底城は、天草随一の高峰、倉岳の南麓斜面の標高90.9m比高40mの丘陵末端にあり、南方と東方に棚底川が形成した扇状地を見下ろす。地元では「高城」や「城の平」と俗称され、扇状地面に広がる山崎・上揚の集落は、城下の集落と推測され「大手」姓の民家などがある。扇状地を挟み南西方500mの丘陵にある標高112.2m比高25mの「城ノ平」は、地名から城跡であることは疑いないだろうが、頂上は削平が不十分で堀切などの城郭遺構も確認できない。史料にも直接登場せず、棚底浦などの民衆が戦乱の最中臨時的に避難した在地性の強い「村の城」ではないかと推定される。

3　現況

棚底城は、Ⅰ郭を主郭に8郭の曲輪群から構成される。尾根鞍部の野首、Ⅰ郭南西側の斜面、Ⅲ郭～Ⅷ郭の南側斜面には階段状に連なる大小の腰曲輪状の平坦地があり、石積みも部分的に存在する。『報告書』でもふれてあるように、棚底城は昭和30年代まで曲輪面や南斜面が耕作地として利用されており、その開墾の際に石積みで塞いで埋められた竪堀や堀切なども確認できる。こうした後世の改変はあるが、全体的な城郭遺構は状態良く保たれているといえる。

4　遺構概説

『報告書』では8郭とするが、切岸の高さや地形のくびれによって3区の遺構群に大区分できる。以下、A・B・C区と仮称し遺構群の特徴を述べる。

A区は、野首の堀切や横堀に防御されたⅠ郭と、その帯曲輪としてⅠ郭に付属したⅡ郭の部分である。下位Ⅲ郭との間の切岸は比高差が4mで十分な切岸高をもつ。野首には開墾や農道設置で埋もれかけた幅8～15mに推定される大堀切があって、倉岳から延びてきた尾根の鞍部を大きく遮断して城域を確定させている。

大堀切の内側には、三重の横堀がある。Ⅰ郭に近い順から堀幅が10m、6m、9mと、遮断に十分な規模をもち、堀の先端はⅠ郭の北斜面に周り込んでいる。『報告書』によれば、横堀の土塁は地山の削り出しではなく平坦面に版築によって築かれていて、本来は帯曲輪であった場所に横堀を入れた可能性がある。Ⅰ郭北斜面の10m下には、横堀群を補強するように長さ45mばかりの直線横堀があり、さらにその両端は竪掘となっていて、Ⅰ郭とⅡ郭の北斜面の防御が強く意識されている。

一方、野首の南側は開墾や農道の取り付けなどで大きく地形改変を受けている。『報告書』で「Ⅰh-1」と呼称され「腰曲輪」とされている15m四方の平坦面は、西側と南側に小円礫による石積みがあり、近現代の開墾による畑地とみられ、開墾前は北斜面同様に三重の横堀が囲繞していた

ことが推定できる。

Ⅰ郭の南斜面下方には開墾に伴い上半部が埋没している幅３ｍの竪掘の下半部が遺存している。北斜面の直線横堀に付属した竪堀と同様の機能を有していたとすれば、南斜面での三重横堀群の先端はこの竪堀付近まで延びていた可能性も考えられる。

Ⅰ郭の発掘調査では、梁間３間×桁行５間、または梁間５間×桁行６間の平面形の大きな掘立柱建物や縁台または舞台と想定される建築遺構の柱穴群が検出されている。また、Ⅱ郭の発掘調査でも４棟程度の掘立柱建物が推定されている。

Ｂ区は、Ⅲ郭とその東側のⅣ郭部分である。Ⅱ郭の切岸下にあり、地形的にもくびれた東側のＶ郭とは比高差４ｍの切岸で分離される。Ⅲ郭とⅣ郭間には高さ1.5mほどの石積みがあり、Ⅲ郭から８ｍ下の北斜面には長さ17mほどの直線横堀が確認されている。また、Ⅱ郭南側斜面に延びた帯曲輪が付属している。

Ｃ区は、Ⅳ郭の高さ４ｍの切岸下にあるＶ郭からⅧ郭部分である。各々1m前後の段差をもつ。Ａ・Ｂ区に比べると加工度は低く、各曲輪の面積は小さい。地形的にくびれているが、Ⅳ郭とＶ郭の間でのトレンチ調査では、堀切は確認されていない。Ⅷ郭中央のトレンチ調査では曲輪を東西に分断する幅２ｍの「堀切」の一部が確認されている。この堀切の北縁が円礫を積み塞いであるのは開墾によるものであろう。Ⅷ郭先端の発掘調査では、梁間２間桁行２間の掘立柱建物と１間四方の掘立柱建物が確認されている。城の先端にあることから、望楼的な施設であろうか。Ⅷ郭基部から５ｍ下の北斜面の派生尾根には、竪堀２条が確認されていて、城域先端でありながらしっかりとした防御となっている。

平野に突き出た城域先端のＣ区には、麓からの登城道がⅧ郭に取りつき、Ⅶ郭→Ⅵ郭→Ｖ郭と通過する。『報告書』では登城道としてＶ郭から南側に張り出した派生尾根上の農道を候補にあげているが、開墾によってルートが明瞭でない。防御上ではⅥ～Ⅷ郭からの側射が活かせる前者のルートが優れている。

5　遺構の特色

以上３区の遺構群を曲輪面積や出土遺物、想定される建築群などで比較すると、Ａ区はＢ・Ｃ区に対して大きく優越した内容をもち、主郭であったことを示している。

野首に遮断のための大堀切と多重横堀が必要とされたのは、野首の尾根地形が本来緩斜面であったためであるが、執拗ともとれる三重の横堀は、城を死守して城領の当知行を貫徹しようとする意志の表れであり、上津浦氏と栖本氏を基軸とした「棚底抗争」の熾烈さを表象する遺構といえるだろう。

棚底城の縄張りの特色は、野首の三重横堀、北斜面の直線横堀、同じく北斜面の派生尾根先端の竪堀群である。天草の中世城郭を概観すると浦々や山間小盆地に立地する小規模城郭が多く、これらは主郭周りを切岸のみで防御する事例や野首に１条の堀切を置く程度の城郭が多く、横堀を導入して技巧的で重厚な縄張りとしたものは概して少ない。例えば天草五人衆の本城とされる城郭の場合、天草氏の河内浦城や志岐氏の志岐城は野首に１条の堀切がある程度で、栖本氏の湯船原城も丘陵尾根両端を堀切で仕切ったものであり、上津浦氏本城の上津浦城は独立丘の地形に大きく頼ったものであった（註１）。

一方、天草諸島で棚底城のように横堀を採用している事例は、棚底城に隣接する宮田城跡（天草市倉岳町宮田）や名桐城跡（同町浦）、棚底の北隣地の教良木城跡（上天草市松島町）、内野河内城跡（同町）、それに上津浦城をあげうる程度である。上津浦城を除けば城主不詳であるが、これらは天草上島に限定され、上津浦氏の領域または領域であった可能性を指摘できる地域にある。

6　類似城郭

宮田城は棚底城から３ｋｍ南西の海岸に位置する標高69.7mの「城山（じょうやま）」と呼ばれ

る独立丘にある。山裾から中腹にかけては果樹園や畑に利用され、南西部には江戸時代からの墓地があるが、標高38mの中腹以上では城郭遺構が状態良く確認できる。城山は平面三角形で、南西尾根に二重の横堀を使用した方形の出入口空間がある。ここを過ぎると高さ3～4mの大きな切岸を持つ4段の腰曲輪群があり主郭に続く。主郭の南東尾根にも4段の腰曲輪群が付く。主郭の北尾根には見事な三重の堀切とその斜面に取りついた竪堀群があり、北側からの敵の侵入を強力に遮断している。このうち上段と下段の堀切先端は西側斜面に水平に延びて横堀化して竪堀に連結し、斜面での敵兵の横移動を防いでいる。また、主郭の北西には、比較的小さな竪堀2条を長大な竪堀で挟んだ斜面があって防御壁を構成することから、頂上曲輪から3段下の腰曲輪群までの防御を主たる目的とした縄張りであったことがわかる。

宮田城の出入口は西側にあり、全体の防御も西方に厚く、栖本方面（西側）からの敵を仮想したものであろう。宮田城西側麓を流れる砥石川西岸には「境目」という小字地名があるが、栖本との領土抗争に起因した地名と考えることも可能であろう。

名桐城跡は、棚底湾最奥部の大字浦字「城の下」にある。名桐川左岸の丘陵末端に位置し「城山（じょうやま）」とも呼ばれている。尾根上に連続する3つの丘を城域とし、長さは350mに及ぶ。下段の標高70mの丘頂は切岸の高さや丁寧さ、曲輪の広さから主郭とみられる。西側に帯曲輪が付き、背後の幅3mの堀切や南・北斜面に各1条の竪堀がある。標高77mの中段の丘も構造的には主郭に類似し、西側に腰曲輪、斜面に竪堀3条が付いている。

この二つの丘に対して標高84mの最上段の丘は、削平の未熟な曲輪でありながら背後の尾根に幅6m、深さ3m規模の堀切を大胆に入れたもので、前2者とは異質な構造となっている。特にこの堀切の南端は、尾根を分断せずに途中から曲輪裾を水平に廻って横堀状となっており、宮田城跡北端の堀切群に類似した構造となっている。

教良木城跡は、倉江川の中流の教良木盆地入口の標高108mの山塊の東端にあり、「城山（じょうやま）」と呼ばれている。麓の小学校裏手にある天草有数の古塔碑群側からの登城道を登ると、標高 90m付近の迫が転石や粗割石を用いた在地技術とみられる高さ2mの石積みで塞いであり、ここに間口2mの平入りの虎口（出入り口）が開いている（註2）。虎口の東側は岩盤が露頭する急斜面であるが、西側には幅3～4mの横堀が山頂を迂回しながら北東部の断崖まで 215mほど延びていて、東西径130m、南北径85mの城域をつくる。出入口は南西張り出し部、北西尾根上にもあり、後者は平入り虎口と石積みをもった食い違い虎口が組み合わさった搦手口となっている。城内には高さ30㎝程度の石積みをもつ基壇状の造成が確認されるものの、緩やかな自然傾斜面が主体となっている。

内野河内城跡は、倉江川支流の横道川の右岸の「城ノ平（じょうのひら）」と呼ばれる3つの丘からなる。標高45mの西端の丘の大神宮の場所には石垣が残る。神社の周囲などが大きく破壊を受けているが、残存石垣とグリ石の分布から内枡形の虎口とその東側の櫓台だけを石垣としていたことがわかる。矢穴や裏込めグリ石があり織豊系の石垣技術が使われていて、慶長年間に下った寺沢時代のものである。標高53mの中央の丘は西側斜面が開墾で変形しているが、上面は十分に削平された3段の曲輪からなる。北東の丘との間に堀切状の横堀があり、その横堀が曲輪の北側の切岸下を西方に迂回し最終的に竪堀となって斜面を下っている。注目すべきはその横堀に付属して緩斜面を埋めるように 16 条の畝状竪堀群と5条の竪堀が整然と配置されていることである。城域東端となる標高58mの丘は、長さ40m超の堀切を入れて城域の東限とする。よく削平された主郭の周囲には腰曲輪があり、北側の腰曲輪群では、その連絡を絶つように竪堀を効果的に配置する。

上津浦城の場合は、主郭南尾根を断ち切る幅10mの堀切が顕著な遺構で、他は各曲輪下の切岸を重視した防御とされていたが、棚底城北斜面の直線横堀に類似した長さ20mの二重横堀を主郭の東斜面に確認できる。この二重横堀は、東側の緩斜面にあって、弱点の防御に効果的に使用されている。

7　城郭遺構の年代

棚底城や上津浦城などのように横堀を採用した縄張りは、天草では例外的で異質な事例である。在地の伝統的な技術体系から遊離していることは、外部からの技術導入の可能性を強く示唆している。そこで、天草の国人衆と交流をもった環不知火海・環有明海の有馬氏・名和氏・相良氏・島津氏などの周辺勢力の城郭に類例を探すと、相良氏の領国内に横堀を採用した縄張りの城郭が複数存在していて、相良氏からの技術供与が想定できる。

野首や尾根上に横堀を回して防御としている城郭は、芦北郡の湯浦新城（芦北町）や球磨郡の一尾之城（球磨村）・大畑城（人吉市）・岩野城（水上村）・久米新城（多良木町）・永里城（あさぎり町）などがある。いずれの城も、相良氏が島津氏との領土紛争や領国支配に備え、八代から人吉に本拠を戻し領国の防衛網を再編し始めた永禄５年（1562）から同７年頃の改修や新規築城と推定される城である（註３）。なお、側面の直線横堀の事例も、永里城や久米城で見ることができる。

一方、畝状竪堀群の場合、相良氏が天文年間の前半期において城郭の局部に３条から５条を導入したことはあるが、主体となることはなく採用期間も上記の期間に限定されるものであった（註４）。内野河内城跡の場合は横堀と組み合わせて主たる曲輪の側面全体をカバーする意図が明らかで、天正期に北部九州で盛行した使用例に類似している。その導入時期は天正前期頃とみられ、守護として臣従している大友氏側からの技術供与を想定するのが妥当であろう（註５）。

ところで、史料的に確認できる棚底城の城主、すなわち棚底地区の領主は上津浦氏→天文 13 年からの栖本氏→永禄３年からの上津浦氏、と変遷した。その後の天草は、天正６年（1578）の大友氏衰退を契機にやがて島津氏に帰属し、同 16 年に小西行長領となるが、翌 17 年に小西行長による天草国衆討伐によって上津浦氏などが没落、その後は棚底城に城代などが置かれて維持されたといった史料や形跡は確認できない。したがって、棚底城の最終城郭遺構の形成年代は、その上限を相良氏領国の上記城郭との類似性から永禄５年～７年前後、その下限も島津氏侵攻直前の天正６年頃までと絞り込むことが可能であろう。

小野正敏氏の分析によれば、出土遺物は「Pre Ⅰ期」（13 世紀の鎌倉朝時代）のものがあるが、「棚底Ⅰ期」（14 世紀後半～15 世紀中葉）から増加し、「棚底Ⅱ期」（15 世紀第３四半期～16 世紀第１四半期）に質・量ともにピークに達し、「棚底Ⅲ期」（16 世紀第２四半期～同第３四半期）には激減するとされている。出土量を勘案すると、城郭の原型はⅡ期の 15 世紀後半代には確実に形成されていた、と指摘できるが、横堀などの遺構からすると、現在見られる縄張りはⅡ期に形成されたものではなく、戦国時代の終末期の状態を示していると考えられ、「棚底Ⅲ期」でも後半代の時代となる。

8　まとめ

『八代日記』に見られるように、天草の政治情勢は、天草五氏の同盟と離反の繰り返しで複雑を極めていた。そうした情勢の中でも上津浦氏と栖本氏に限っては常に敵対関係にあって、この２者の対立がいつも天草の政治情勢の基軸にあった。その対立の根底にあったのが、棚底の領有権であったことは疑いがない。

この「棚底抗争」に相良氏が大きく関与していたことは、阿蘇品保夫氏や高野　茂氏、稲葉継陽氏などが指摘するとおりである。大友氏領国の辺境にあたる天草の統治は、相良氏による「仰次」と「申次」を介した間接支配であった。天草の紛争にあたって相良氏は、上津浦領や栖本領、天草領に向け援軍を送りつけて城番をつとめ、伏草（ゲリラ戦）に出陣するなど、軍事的に大きく関与する姿勢をとりつづけていた。しかし、そこに特定の国人を一貫して支援するという政策はなく、天草五氏と有馬氏や島津氏など周辺大名が織りなす軍事的な同盟と対立の状況に即応したものだったとみられる。

ところで、永禄３年 11 月の栖本氏から上津浦氏への棚底城返還は、相良氏の「御異見」によっ

て実現した（『八代日記』永禄３年11月25日条）が、その九カ月前の同年２月30日、大矢野方使僧によって八代年行へ「棚底申達之事」が伝達されている。この「棚底申達之事」とは、２月26日の「上津浦ヨリ棚底ニ動」を契機とした棚底民衆の言い分を棚底抗争の当事者ではない大矢野氏が仲介者として相良氏に進達したものと理解される。すなわち、上記「御異見」は、拉致や略奪の危険にさらされながら抗争の場に暮らす棚底民衆の平和への希求という民意に沿った形で発された可能性を考えたい。

相良氏と上津浦氏との関係は、『八代日記』によれば、同４年佐敷の軍勢が上津浦領の池浦を夜討ちする事件があるものの、同５年以後、上津浦からの年頭の使者派遣や双方の使者・使僧の派遣を緊密に繰り返すような友好関係となり、同６年５月には上津浦からの使僧が「御家上津浦代々之儀」と、相良氏に忠義する誓いを伝えている。同７年６月、相良氏の意見によって上津浦・天草の同盟がなり、翌８年６月には八代で上津浦鎮貞と相良義陽の参会が実現し、７月になると上津浦・天草・大矢野が同盟し、栖本・志岐・有馬・島津の軍事同盟と対決するようになり、８月になると相良方の八代衆・球磨衆が栖本に対して直接軍事行動に出るようになった。

棚底城にみられる相良氏領国と同等の城郭縄張りの形成は、相良氏と上津浦氏との関係が改善され緊密となった時期に正しく相当している。棚底城の優れた縄張り技術は、「御家上津浦代々之儀」、すなわち相良氏への同心・与力といった忠義に対する見返りとして相良方から提供された可能性が高く、上津浦氏領域の重要な諸城には相良氏配下の城普請に巧みな軍師や家臣達が派遣され縄張りしたことが想定される(註６)。諸城のうち宮田城は、栖本領との境界にある棚底領域の城であり、浦地区の名桐城跡や教良木城跡は上津浦と棚底を結ぶルート上に位置していた。特に倉江川流域の教良木や内野河内は、栖本領や大矢野領などの他領を通過せずに上津浦から棚底や二間戸・高戸・大道に至ることができる経過地で、天草上島の北岸と南岸を結ぶ交通の要衝であり、上津浦氏にとっては棚底と同様に重要な領域であったといえる。

上津浦領域の主要城郭の強化と配備といった相良氏の軍事介入によって、防衛力が増強し交通網が確保され、結果的に棚底の当知行が貫徹されることになり「棚底抗争」には終止符が打たれた。相良氏の積極的な軍事介入が城郭技術の単なる供与に止まるものであったのか課題は残るが、ともかくその影響力や威光は島津氏が天草に進出する天正６・７年頃までの当分の間、温存されることになったであろう（註７）。

以上のように、棚底城は天草の政治史を語る場合の中心舞台としての存在だけでなく、日本戦国社会の領土戦争や当知行の様態、国人と大名などの地域間交流や城郭技術の供与、さらには恒常的な戦場となった地域の民衆の行動様式を知る上での恰好の材料を提供している城郭である。

追記

脱稿後に行った内野河内城北東にある通称「上ン城」の踏査では、野首に土橋や急角度の堀切、側面帯曲輪に竪堀・竪土塁、先端の緩斜面に三重の横堀をもつ総長 180ｍの城郭遺構を確認し、字名から「打越城跡」と仮称した。棚底城等と同様に相良氏側からの技術供与の存在を示唆する城跡である

註

(1) 天草の城郭を通覧している鶴田八洲成氏によれば、城郭分布は内陸に少なく入江の内の小半島の丘陵に多いとし、遺構的には野首に堀切をもつ場合が多い、とする。また、木島孝之氏によれば、「天草国衆の城郭では、虎口プランは全く発達せず、平入り虎口か、あるいは不明確なものばかりである」とし、天草地方の在地系縄張りの特徴を本渡城や志岐城、河内浦城を事例に「単純な造りの複数の曲輪を、帯曲輪による横のラインでまとめる縄張り」としている。

(2) 教良木城の石積みは、基盤岩の砂岩の露頭部分を切岸に利用しながら迫を石積みで塞いで城門を置いたものである。裏込め石や矢穴も確認できないので織豊系城郭に見られる石垣技術とは異なる在地的な技術とみられる。類似した石積みは、天正８年が落城となる朴河内城（水俣市）では曲輪の造成の主体として高さ1～2

mの石積みが採用されていて、湯浦新城や久木野城など、天草の対岸となる芦北郡の相良氏支配の城郭で確認できる。これらは基盤岩の露頭を巧みに利用したりして曲輪造成時の縁辺処理の方法として採用している。本論では裏込め石を用いた織豊系城郭の本格的「高石垣」と区別するため、「石積み」という用語を使用した。

(3) 相良氏は永禄７年５月３日、人吉城御内(みうち)において将軍家使者を応接し口宣と官途を受けたように、この時期本拠を人吉に戻している。一尾之城は永禄10年以前に相良義陽が井口石見守に預けた城で（『井口文書』二号）、大畑城は日・隅の国境監視の城であり永禄５年が初見（『八代日記』）である。永里城は麓を走る古道が永禄７年貫通の球磨と真幸を結ぶ「真幸通用道」（『八代日記』）に推定され、中腹部以下の城郭遺構と関と推定される対岸の土塁囲みの方形空間が軍事道とともに隣国への進軍を想定した前線基地として追加整備されたものと考えられる。

この時期における縄張りの大きな転換は、永禄４年の八代への鉄砲の招来を契機としていることが想定される。永禄４年には人吉の老者が八代本城の間切を実見しているように、これ以後「間切」という城郭施設が『八代日記』に散見するようになる。時期的にも用語的にも「間切」は横堀であった可能性が高い。

(4) 相良氏領国の畝状竪堀群は、八代本城や高塚城、種山城、佐敷城、水俣城にあり、球磨郡では人吉城、岡本城、宮原城、上村城で確認できる。相良氏領国の場合、竪堀は３～５条程度で横堀とは組み合わず、単独で斜面に施工されている。その使用年限は、堅志田城での事例から天文９年を上限とし、上村城や久木野城の事例から弘治３年ころまでと推定される。

(5) 大友氏領国での畝状竪堀群は、妙見岳城・高崎山城・鶴賀城などで採用されている。豊前・豊後国境の場合だと天正７年前後の構築と推定されている（小柳和宏「城郭構成要素の変遷」『大分県の中世城館』大分県教育委員会　2004.）。内野河内城の場合、構造的に大友領国の畝状竪堀群の事例に類似し、「ハ」字状に開いた特徴的な竪堀などもあり、相良氏が介在せずに大友領国からの直接的な軍事介入をうかがわせる。天正６年の耳川合戦の敗戦を契機として、大友氏側が勢力維持や挽回のために領国境目で実行した島津対策の一例ではなかろうか。

(6) 相良氏が縄張り技術を提供した可能性がある事例として堅志田城（美里町）がある。堅志田城は阿蘇惟豊と対立していた阿蘇惟前が大永３年に築城した本城で、天文２年の婚姻による相良長唯の軍事支援が始まり、同９年には「堅志田番」として芦北衆が派遣され、八代衆も出張している。堅志田城の縄張りは尾根線に堀切を多用し部分的に畝状竪堀を採用しているように、相良氏領国の主要城郭にみられる特徴をもち、阿蘇氏の領内では類例がない異質な縄張りとなっている。

(7) 棚底城や宮田城などの造営は、棚底民衆の意向を受けて初めて実現した可能性を考えておきたい。すなわち、民衆は大規模な城郭改修や普請に伴う労働を提供し、その代替として戦乱の際には上記城郭を避難場所として確保できることになり、人取りや略奪などの凄惨な戦場からの緊急避難が可能となったのではないだろうか。「棚底Ⅲ期」において出土遺物が激減するのは、「棚底Ⅱ期」にみられた城主権力の居住の場から、栖本氏や上津浦氏の城番制による軍兵の駐屯地、そして臨時的な民衆の避難場所への変貌といった内実の変化が大きな要因ではなかろうか。

参考・引用文献

（１）　鶴田八洲成「天草の中世城跡の構造」『天草建設文化史』社団法人天草地区建設業協会　1978.

（２）　鶴田八洲成「棚底城」熊本県教育委員会編『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会　1978.

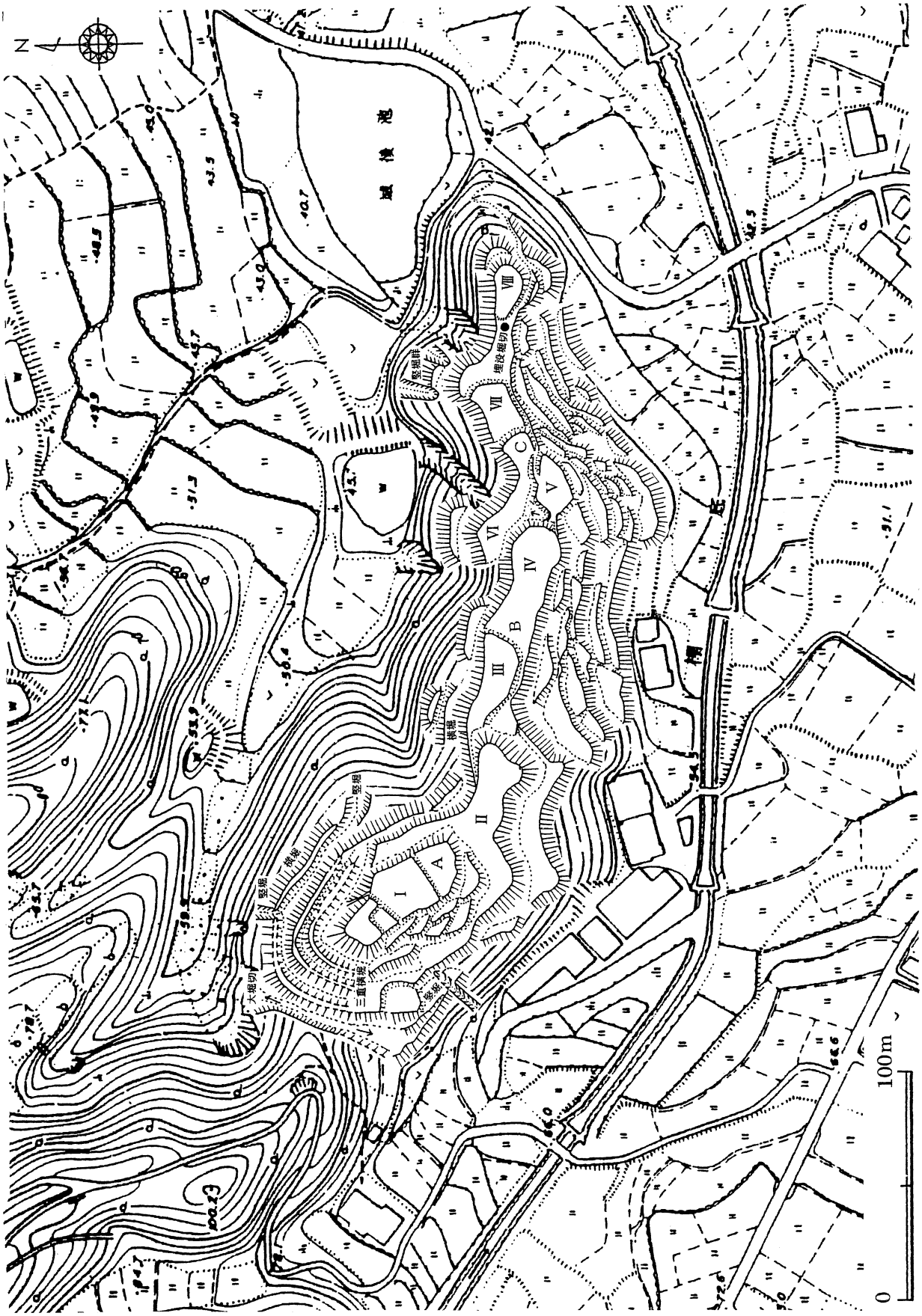
（３）　木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』（財）九州大学出版会　2001.

（４）　歳川喜三生編『棚底城跡』倉岳町教育委員会　2005.

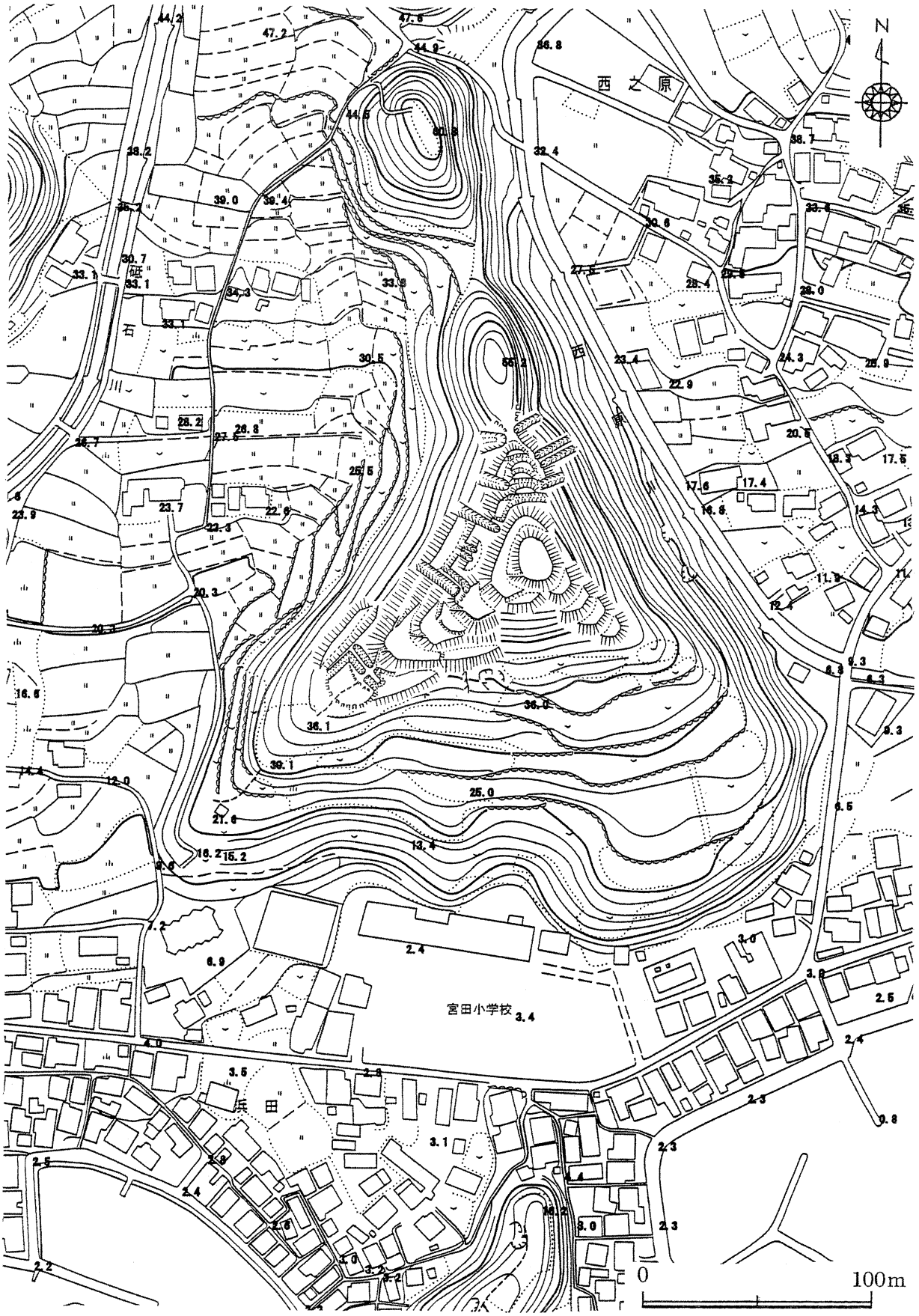
（５）　歳川喜三生編『棚底城跡Ⅱ』倉岳町教育委員会　2006.

（６）　歳川喜三生編『倉岳町誌』倉岳町　2006.

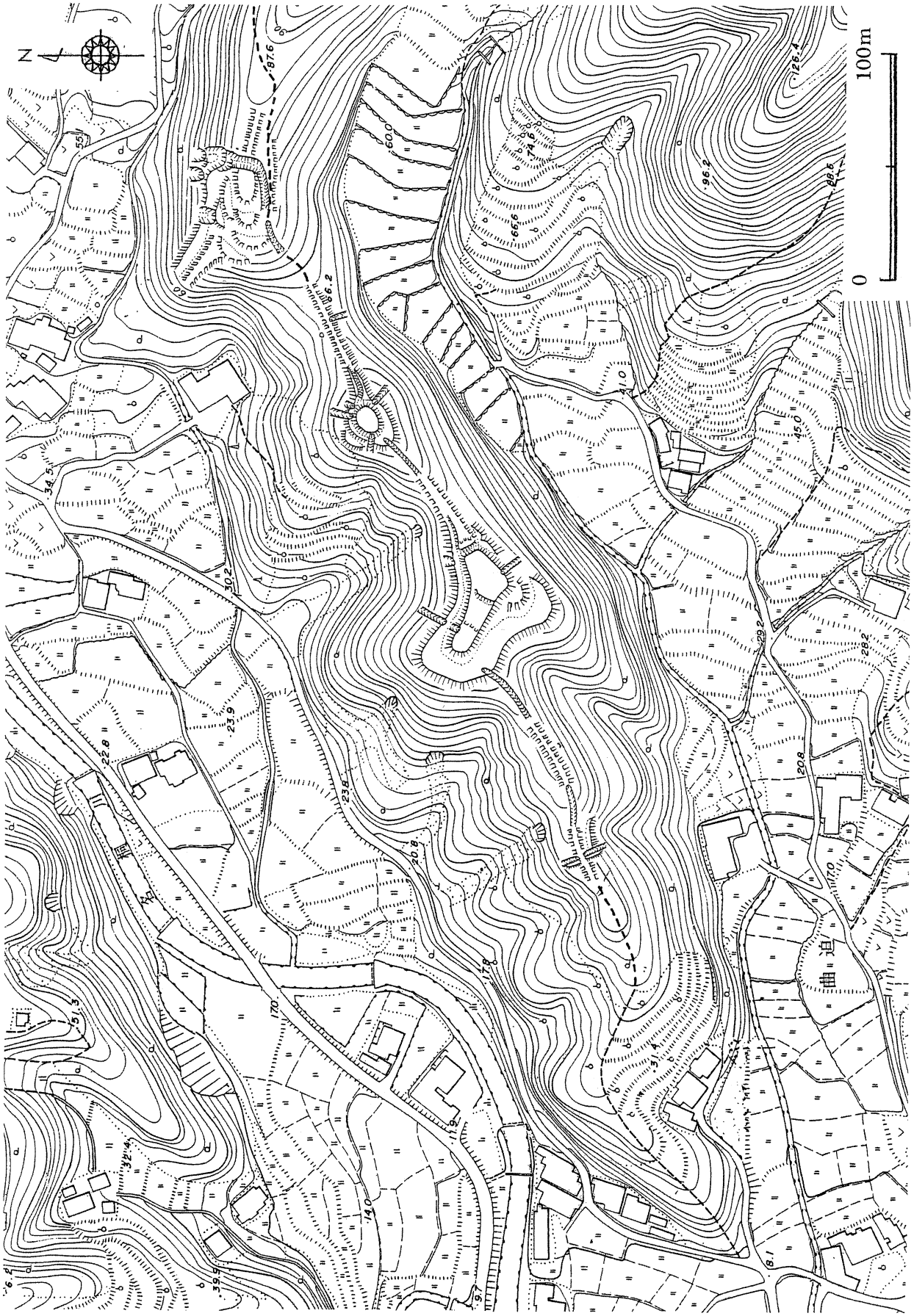
（７）　高野　茂「第２章　後期中世社会と大矢野」『上天草市史　大矢野町編２　中世』　上天草市　2007.



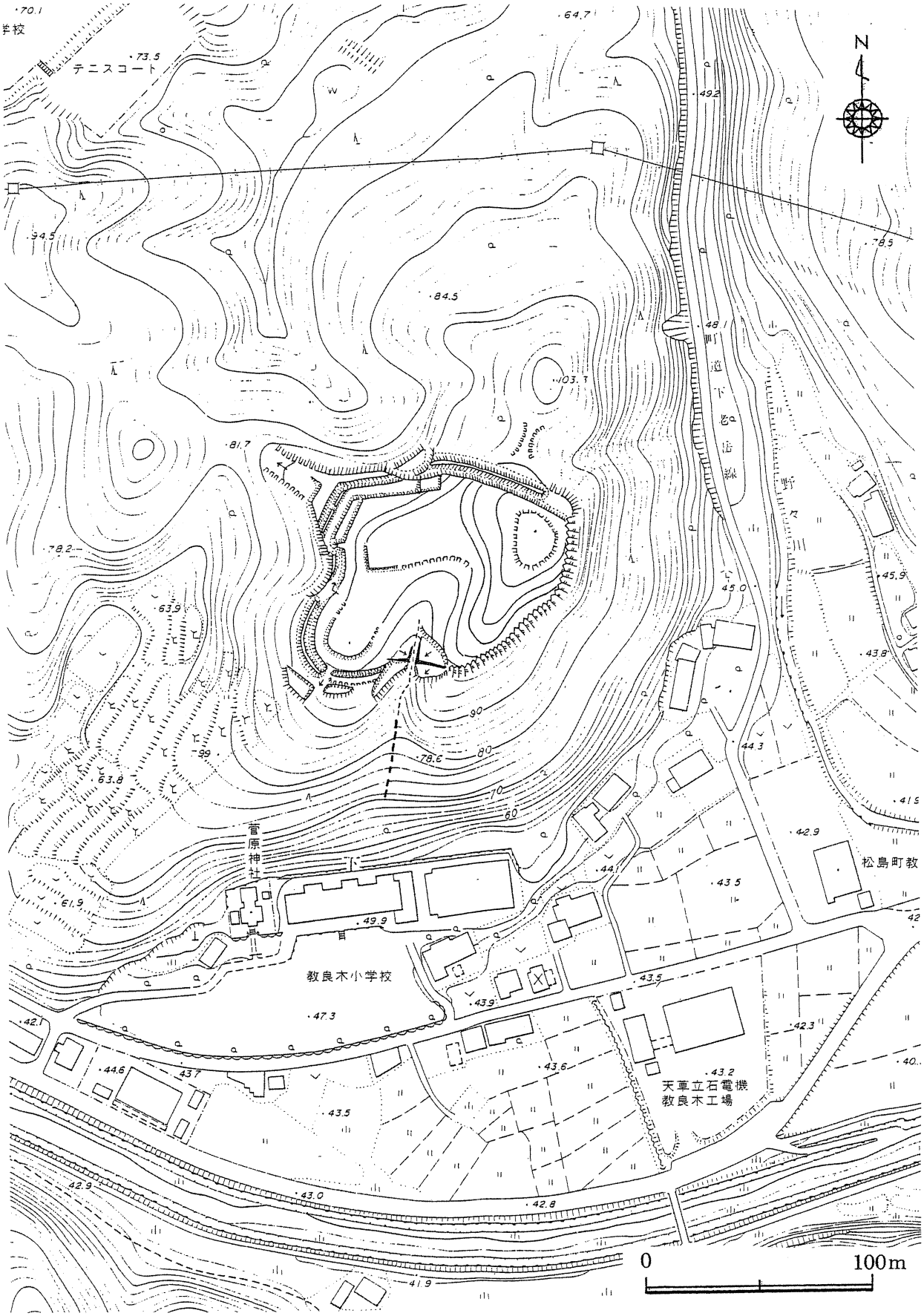
第85図　棚底城跡縄張り図



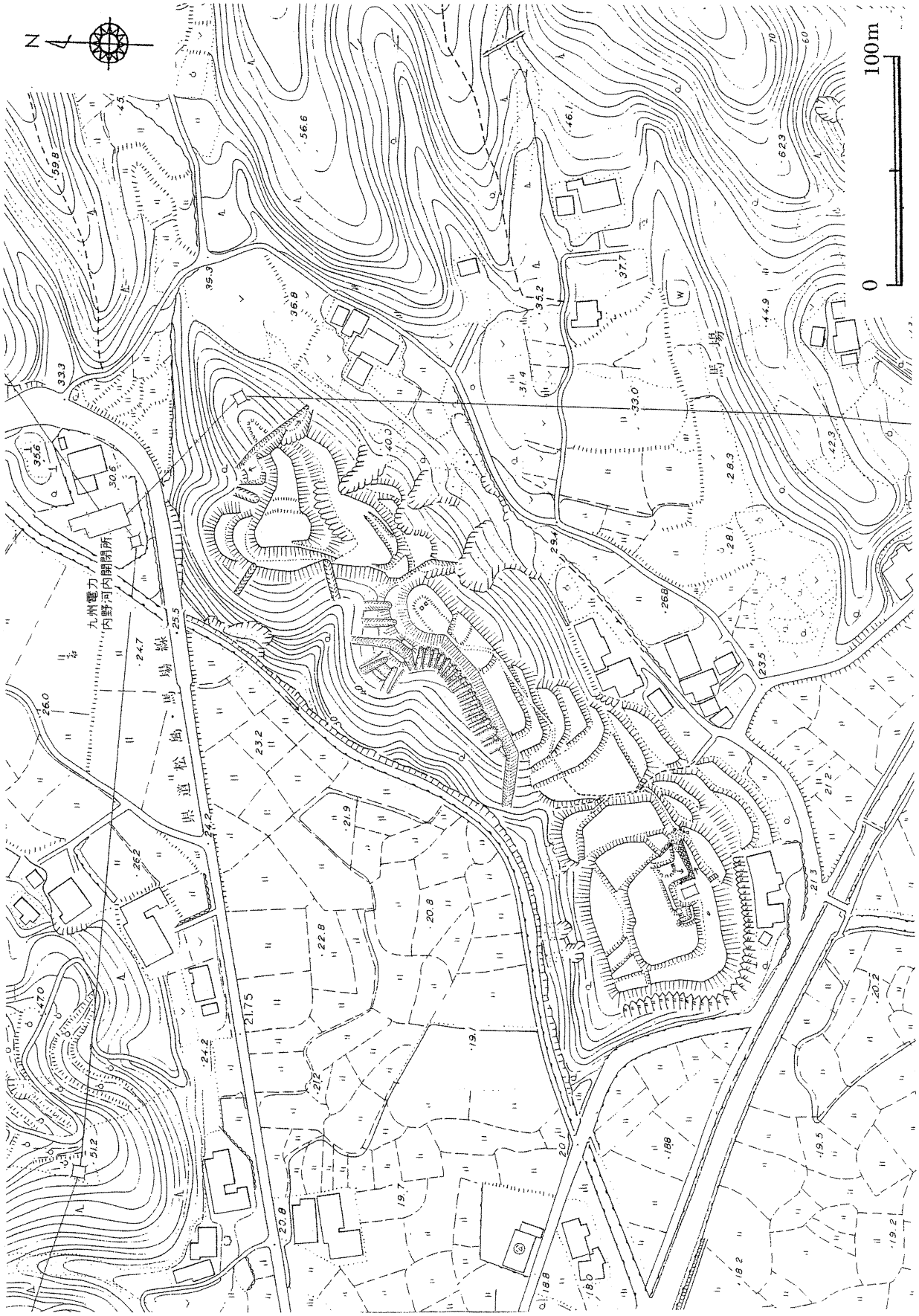
第86図　宮田城跡縄張り図



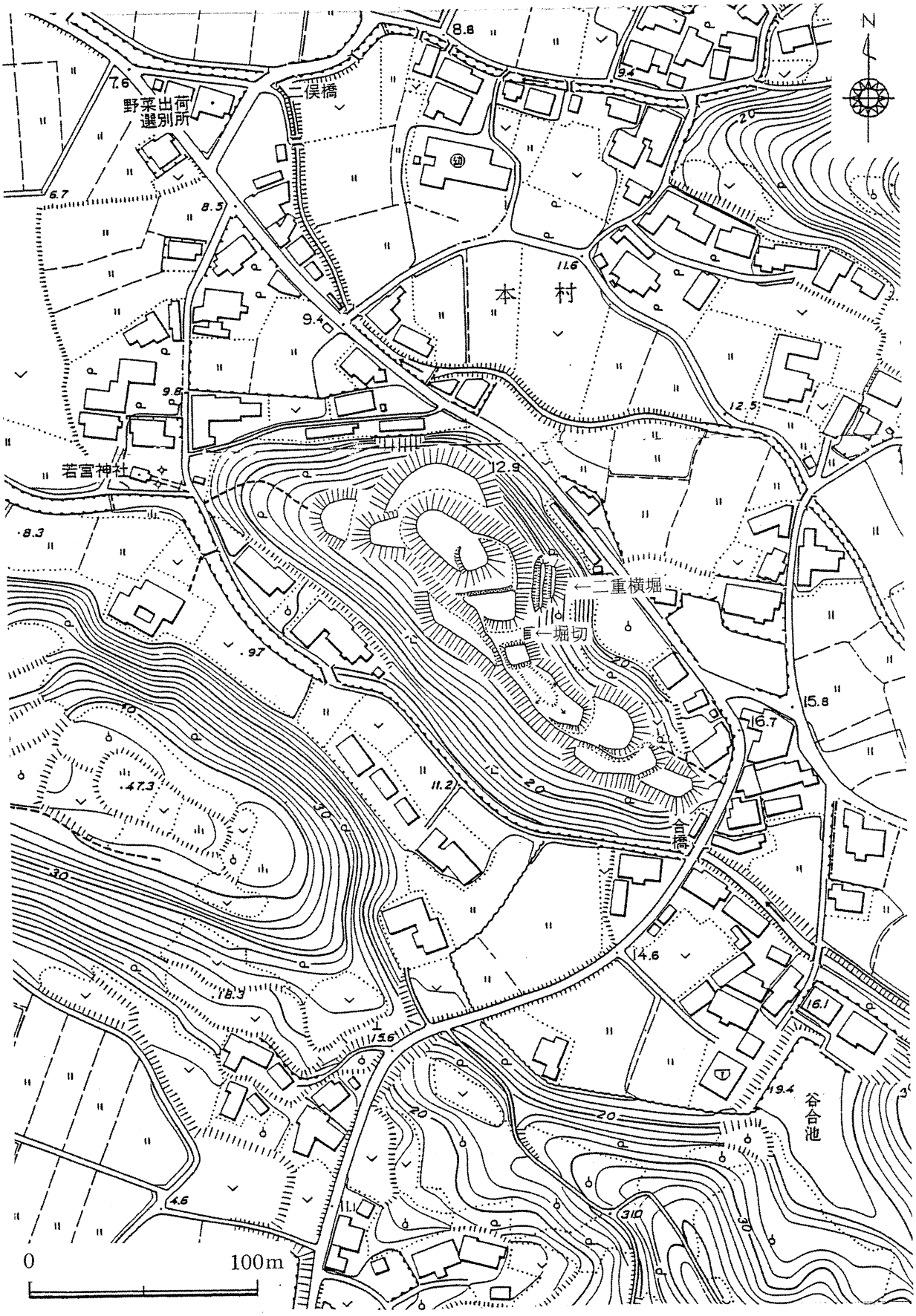
第87図　名桐城跡縄張り図



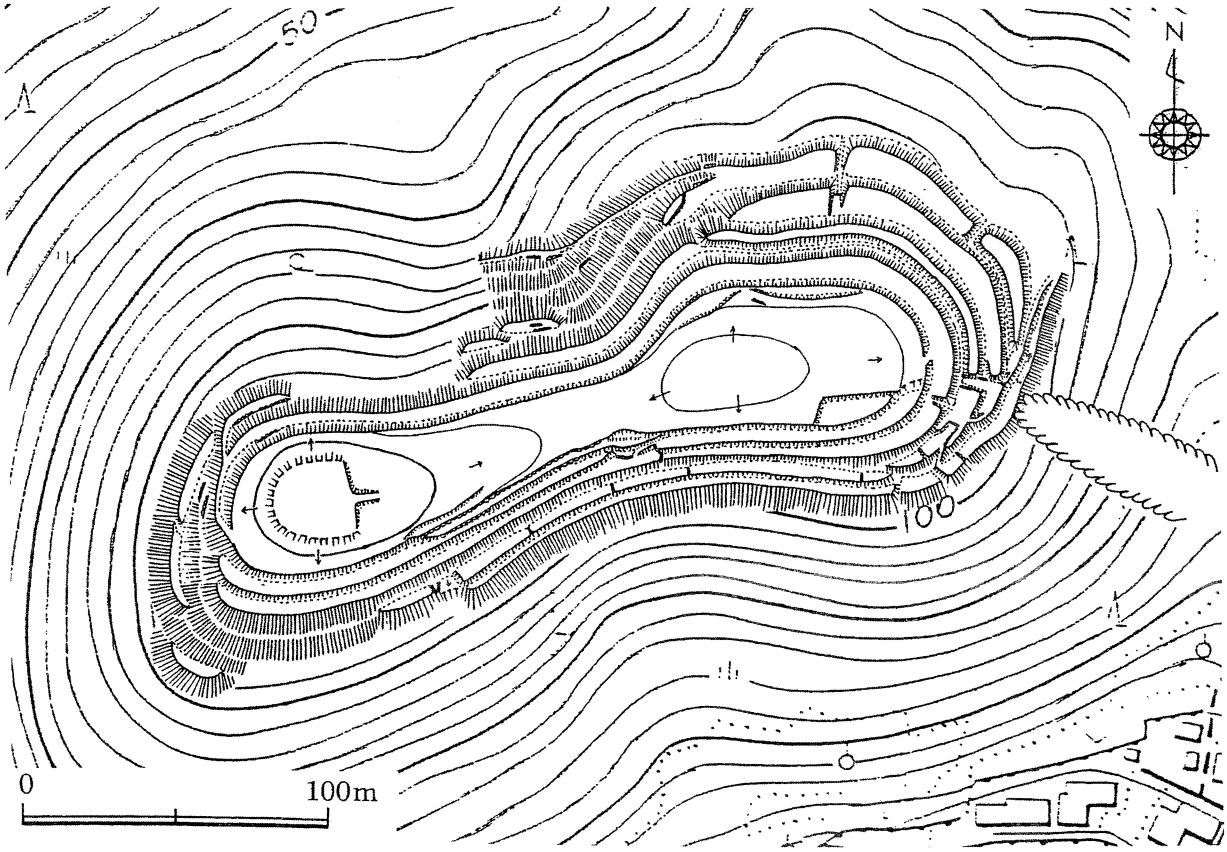
第88図　教良木城跡縄張り図



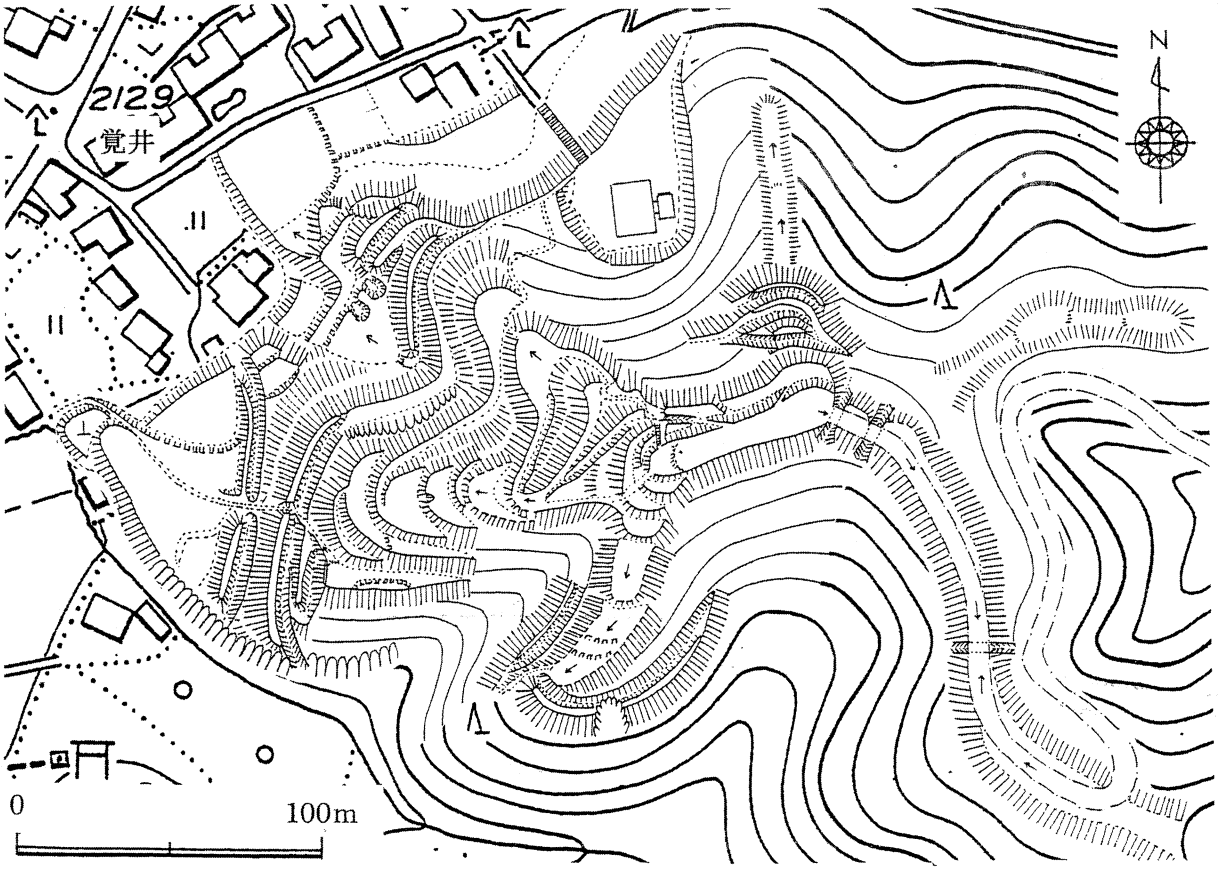
第89図　内野河内城跡縄張り図



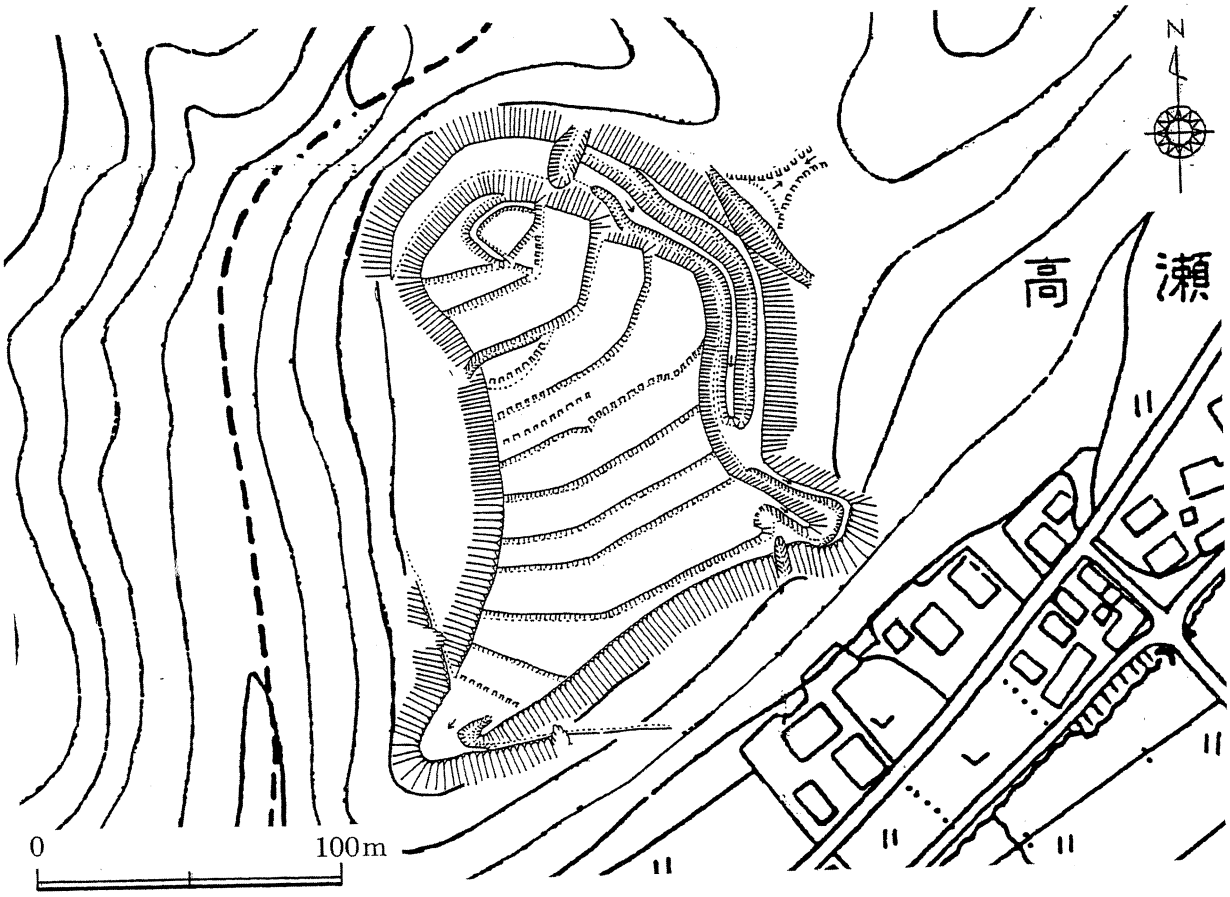
第90図　上津浦城跡縄張り図



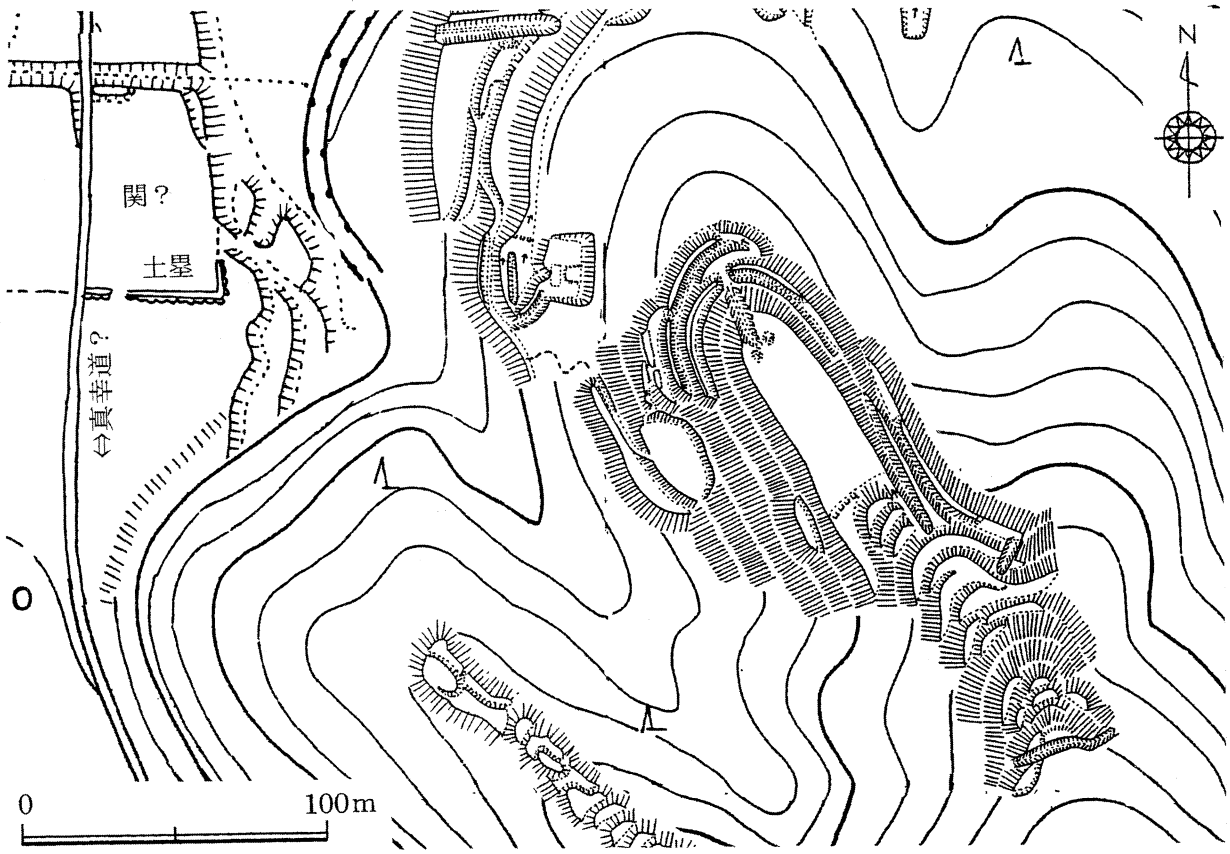
第91図　湯浦新城跡縄張り図



第92図　久米新城跡縄張り図



第93図　岩野城跡縄張り図



第94図　永里城跡中腹部縄張り図

出土陶磁器と棚底城

小野正敏

本稿では、棚底城の出土陶磁器について、３つの視点から検討し、概要を説明する。１）は、小規模な山城として豊富な焼物の出土が暗示する生活拠点としての棚底城と城主空間の検討、２）は、陶磁器等から推定される棚底城主の性格について、３）は、陶磁器を年代的なグループに分類し、その年代と変化が示す城の変遷の問題を考える。なお、本稿の概要は、倉岳町教育委員会2006「棚底城跡Ⅱ」に所収されている小野講演記録「棚底城跡出土の陶磁器からみえること」に加筆したものである。

検討の基礎とした資料は、倉岳町教育委員会2005「棚底城跡」、同2006「棚底城跡Ⅱ」と、その後作成された全出土陶磁について曲輪単位に型式分類し集計した「表Ｆ棚底城跡大権寺遺跡出土遺物点数表（P82 中山圭作成）」による。

１　生活拠点としての棚底城と城主の空間

まず、棚底城跡から、豊富な量と質の焼物が出土し、ここが生活の拠点であったことを示す点を注意したい。陶磁器集成表によれば、これまでの発掘調査による出土陶磁点数は、合計 2031点であり、発掘面積の合計は約1109㎡である。曲輪毎に多少の数値の違いはあるが、城全体の合計を構成比になおすと、中国製陶磁器（青磁・白磁・染付の碗皿が主）が52%、土師質土器（主としてかわらけ）が18%、焼締陶器（主として甕や壺）が５%、中世須恵器（主として甕や壺）が７%、瓦質土器（在地産擂鉢や火鉢など）が14%である。これを大まかに機能にいいかえると、中国陶磁類は日常的な什器である碗皿、かわらけは、灯明皿や酒杯、甕や壺は貯蔵用具や調理用具、瓦質土器は調理や暖房、茶の湯の風炉などであり、基本的な日常生活機能を支える陶磁器が中心である。また、これを㎡当たりの点数に直すと1.83/㎡となり、山城としては、陶磁器の出土量が多い遺跡だともいえ、生活拠点としての棚底城ということになる。

曲輪毎に数値を比較すると、特に出土頻度が高いのがⅠ郭で、2.2/㎡であり、また、組成ではかわらけが30%で、Ⅱ郭の10%、Ⅳ郭の８%など他の曲輪に比べて高い構成比をもつことが特徴である。これは、灯明皿用に加えてかわらけがもつもうひとつの宴会時の酒杯という重要な機能を反映した数値と推定される。Ⅰ郭は、縄張りにみる城内での位置関係からも、発掘された建物遺構からも城主に関わる中心の曲輪と考えられるが、他の城館の調査例からは、戦国期の空間ランクの高さと連動するかわらけの比率の高さが指摘されており、この数字は妥当な構成比といえる。

また、Ⅰ郭の調査では、中国製天目茶碗、茶入、茶壺、また建水に使われた中国南部産の陶器鉢、茶臼などが出土し、戦国期の茶の湯道具がセットとしてそろっていることも重要である。さらに、青磁製品をみると、青磁盤（大皿）と香炉もⅠ郭を中心に出土する傾向がある。これらが、戦国期の各地の城館に共通してみられる、ハレの接客空間で室禮や宴会時のもてなしの道具として使用された陶磁器の一部であることをあわせ考えると、Ⅰ郭を城主の空間として説明するに相応しいものである。同様に、瓦質土器の火鉢などには風炉の破片も混じっている可能性があり、瓦質土器の火鉢や風炉などが上級の空間に多いことが指摘されており、Ⅰ郭の瓦質土器の点数がⅡ郭とともに高いことも同じような意味があると考えられる。

これと対照的な組成がⅣ郭であり、1.64/㎡とⅠ郭に次ぐ量であるが、かわらけの比率が減少し、その分が貯蔵・調理関係の陶磁の増加となって示される。城内における曲輪による空間機能分化・分担を暗示している。

棚底城出土陶磁器の大半は、日常用品であり、城が生活の主たる機能を担った場所であったことは先述のとおりである。一方、指摘したように、少量ではあるが中国製天目茶碗や茶入など、他の山城ではあまり出土しない稀少品や高価な品々が存在し、それらがⅠ郭に集中することが、

もうひとつの特徴である。換言すれば、質、量ともにこの城のなかで卓越するのがⅠ郭だといえる。

2　棚底城主の性格

次に第２点として、Ⅰ、Ⅱ期までの棚底城の城主、文献史料には明らかにされない、いわば幻の城主はどのような性格、どの程度のランクだったのか、棚底城の機能とも関連して検討したい。

結論的には、棚底城は、海の領主、海の権益に生きた城主の城と推定される。

この視点から特に注目されるのは、Ⅰ期の陶磁器グループに属する15世紀のベトナム産染付碗である。この時期のベトナム産焼物の出土には共通する特徴が指摘できる。例えば、対馬島浅茅湾入り口に位置する尾崎水崎遺跡はたくさんの東南アジア産陶磁器が出土していることが知られるが、陶磁器全体の７割が朝鮮半島産、２割が中国産、残りの 0.5 割が東南アジア産であり、日本産は 0.4 割と最も少ない。この遺跡は宗氏の下で貿易に携わった早田氏の本拠地とされる。早田氏は、「浦々の領主」、海の領主のひとりで、琉球、朝鮮などと盛んに貿易をした人物としてしられる。こうした水崎遺跡や博多のように、朝鮮・中国・琉球をはじめとする国際的な交易に関わる島嶼地域や港湾遺跡などで、この時期のベトナム産陶磁器が出土する傾向が強い。華南三彩の盤も同様に考えて良いだろう。つまり、棚底城でベトナム産の陶磁器が出土したということは、この城主が城とセットになる棚底の湊を介して海の交易に積極的に関与していた可能性が高いことを示唆している。

この問題は、棚底が単に八代海に面した良港であるということだけではなく、最近の天草砥石の出土状況も重要な視点となる。汐見一夫により、鎌倉をはじめ、最も北は、北海道上之国町所在の勝山館という戦国時代にアイヌとの取引をした館など、中世の日本列島に広く流通していることが明らかにされてきた。この天草に広い海を使って流通する広域商品があったということは、この地が、列島規模の商業ネットワークにつながっていたことを意味し、流通の拠点としてその結節点である湊がもつ権益を背景にこの棚底城も存在したといえる。

3　陶磁器の年代と城の変遷

次に、陶磁器を型式分類し、その年代と型式群の変化について検討する。特にここでは量的に最も多く、また細片でも型式分類が可能な貿易陶磁を中心に分析する。時期的な分類からは、最も古い時期の陶磁器は13世紀代の同安窯系青磁碗と白磁合子が確認されるが、これらは量も少なく断片的であり、一定のセットを形成して使用されたものは、15世紀前半から16世紀後半に至る３つのグループにまとめられた。これらを各々棚底Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期とし、13世紀代のものをPreⅠ期とした。

また棚底城出土陶磁器には、２次的に被熱した＝火災に遭った痕跡を残すものが多数観察され注目される。被熱した資料は、Ⅰ郭、Ⅱ郭、Ⅳ郭、Ⅶ郭などに分布し、一箇所にとどまらず複数の曲輪に及んでいる。つまり城全体が広範囲に焼けた状況、おそらく戦乱などで焼き討ちされたことを暗示すると考えられた。被熱した資料は、一部にⅠ期に属する青磁碗Ｃや青磁碗Ｄにも見られるが、その多くはⅡ期の青磁碗Ｂ４や染付碗Ｃ、染付皿Ｂ１、Ｃである。一方Ⅲ期の陶片には認められていない。（分類の記号は第95図参照）

これらは後述するように、文献史料から示される棚底城をめぐるいくつかの画期に連動することが指摘できる。陶磁器群の年代観と事件との関連を加えてまとめたのが第95図である。

PreⅠ期：13 世紀頃の青磁碗と白磁合子に示される棚底城の前身の遺構があったと推定される時期である。通常領主の恒常的な本拠として山の上に山城が造成されるのは15世紀前半以降であり、それ以前は、平地の居館・屋敷を本拠として、戦乱時など時限的に山城が使われると考えている。一方、球磨郡山江村の山田城にも同時期の陶磁器が一定量出土していることから、この時期に後の山城と重複する場が使用されることが熊本地域においては特異な例ではないともいえる

が、棚底では、この時期の遺構などが分離されてなく陶磁器も少ないため、その実態やⅠ期との関係などは不明である。

棚底Ⅰ期：主として15世紀前葉から中葉に使われた青磁碗Ｃ１や青磁碗Ｄ、白磁皿Ｄなどにより構成された時期であり、いわゆる棚底城の時代の始まりといえる。青磁碗Ｄのなかには一部14世紀後半にのぼるものがある。

この時期は、「大権寺」所在の宝篋印塔の紀年名と重なることが注目される。大権寺は、城から西へ 400mの地点に残る寺院跡と推定される遺跡で、その一角に集められた石塔群のなかには、延文３年（1358）を上限、永享12年（1440）を下限とし、慶安元年（1361）、永徳３年（1383）２基などの紀年名が確認される。トレンチ発掘による出土陶磁器は、Ⅰ期を主体に少数ながらⅡ期に属するものが含まれる。

この寺院は年代観や位置関係からみて、棚底城とセットになって営まれた寺院と考えるのが自然である。天草において最も古いとされる14世紀代を含む宝篋印塔36基、五輪塔62基が集中することや棚底Ⅱ期以降の紀年名石塔、陶磁器が少ないことを考慮すれば、まさに棚底Ⅰ期とともに連動して盛衰したことになり、この時期の棚底城主との深い関連、反対に次のⅡ期の城主の関与の薄いことが指摘できる。前身の Pre Ⅰ期をふくめ、棚底城の成立や変遷を議論するうえで欠かせない問題を提示する。

棚底Ⅱ期：15世紀第３四半期から16世紀第１四半期に比定される、棚底城で陶磁器が最も多く消費された中心的な時期である。この時期には日本列島規模で染付が大量に消費されるようになり、日常什器の碗皿では、青磁は碗Ｂ４と稜花皿が残るだけで、染付碗ＣやＤ、染付皿Ｂ１やＣ、白磁皿Ｅなどの組み合わせが主体に使われる。いわゆる戦国時代前半のセットである。

また、先に指摘したように、この時期の陶磁器には被熱した資料が集中することが注目される。さらに、14世紀代の生産年代をもつ青磁盤（大皿）も被熱しており、これらの高級陶磁も骨董品としてⅡ期に使用されたことが推定される。前項で述べたⅠ郭を中心とする城主の権威と階層の表徴であるステータスシンボル的な威信財もこの時期のものと考えてよいだろう。

棚底Ⅲ期：16世紀第２四半期から16世紀第３四半期に比定される、染付が中心の時期である。この時期の染付は、碗Ｅ、皿Ｅとともに白磁や青磁の菊皿などで主に構成される。戦国時代後半のセットである。この変化は1530年代頃の天文年間に、商人によって大きくモデルチェンジされたと考えている。また、棚底城ではⅡ期に比べて、Ⅲ期の陶磁器消費量が激減していることが特徴である。

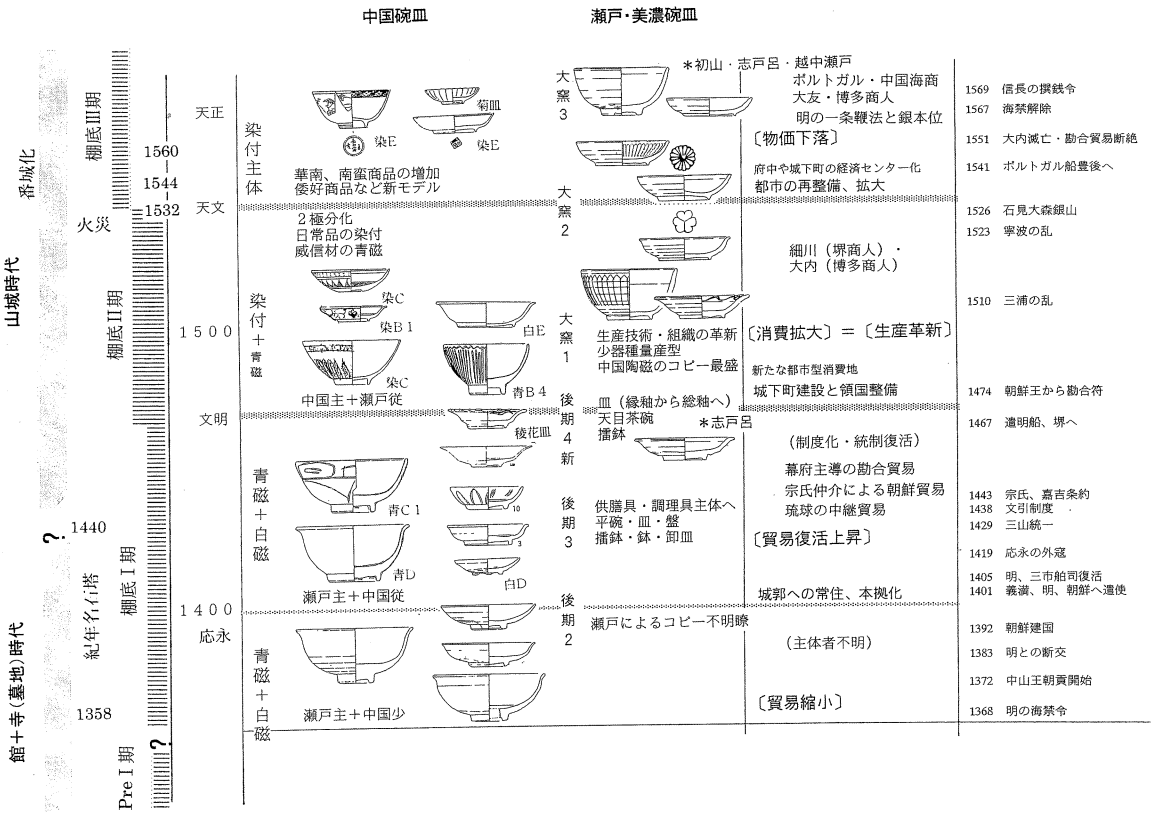
以上のようなⅡ期とⅢ期の出土陶磁器の様相と文献史料との関連から棚底城の変遷について指摘したい。文献史料については、主として報告書に掲載された阿蘇品保夫の「八代日記」研究の成果による。

Ⅱ期、Ⅲ期の時代は、天草衆と呼ばれる国人が、守護菊池氏や相良、大友、島津といった本土勢力の消長に連動しつつ戦乱が続く、天草の戦国期にあたる。なかでも特に、年代的にⅡ期とⅢ期の過渡期にあたる天文元年（1532）には、天草氏による志岐・栖本・大矢野・長嶋各氏を味方にして上津浦氏を攻める事件が起きている。天文13年（1544）には、棚底城に詰めていた上津浦親類が下城したとの記録があり、これ以前に棚底城は上津浦氏の番城となっていたことがわかる。その後、天文20年（1551）をはじめ、弘治２年（1556）以降上津浦氏と栖本氏の頻繁な抗争が続いて、永禄３年（1560）に至り、両者の和議が整い、棚底城が上津浦氏に引き渡されることになる。この時点では栖本氏がもっていたことが確認できる。いつから棚底城が栖本氏支配になったかは定かではないが、天文13年に関わる事件が契機になった可能性が高いと考えられる。

これまでみてきた陶磁器の検討成果にもどれば、Ⅱ期の陶磁器が示す豊富な生活財や戦国期の城主がもつに相応しい、日常の碗皿以外の、茶の道具や高級品の青磁大皿などの特別なものを所有する様相から、Ⅲ期には、そうした城主の権威を示すような威信財だけではなく、一般的な日

常生活財など、陶磁器類が激減する様相への変化が、こうした事件に連動するものと考えられる。また、Ⅱ期の被熱陶磁器に示される棚底城の焼き討ちは、その具体的な時期は特定できないものの、モデル的にはⅢ期以前に起きたことであり、Ⅱ期からⅢ期への画期として、城主の変化があり、番城化という城の機能が大きく変質したこと、そしてその契機が、この火災＝焼き討ちの出来事であったといえる。その後、Ⅲ期の棚底城は、番城として上津浦氏と栖本氏の争奪となったのである。

Ⅱ期の様相は、全国的にみても国人領主クラスの城主が存在する本拠としてのあり方と位置づけて遜色のないものである。固有名詞は不明であるが、おそらくⅠ期の幻の棚底城主の系譜がⅡ期とⅢ期の画期となった天文の事件までは継続したものと推測される。その場合、大権寺のⅡ期の状況について若干問題が残るが、調査面積の少ないこともあり、今後の調査の発展を注目したい。



第95図　陶磁器変遷と棚底城模式図

戦国期棚底城の歴史的位置

稲葉継陽

はじめに

本章は、『八代日記』（慶應義塾図書館蔵）等の文献史料によって戦国期棚底城の政治的・軍事的位置を明らかにし、そのうえで、棚底城遺構周辺の「城山」「さかたぬき」「藤河」といった関連地名が示すところを明確にして、ひろく天草地域の中世城郭群に共通する特徴についても検討する。天草地域に50ほど確認されている中世城郭遺構のなかで棚底城が持つ歴史的価値、さらに天草地域ひいては肥後国地域の戦国史における同城の歴史的位置を明確にすることが、本章の目的である。

1　戦国期棚底城の政治的・軍事的位置

本報告書収録の鶴嶋俊彦「棚底城の構造」は、棚底城遺構が近隣の宮田城遺構（栖本氏の恒常的支配領域の東限に位置する）とならんで、天草地域には類例をみない規模と発達した縄張りを持ち、その構造的特徴が相良領国内の城郭と共通するという注目すべき事実を指摘している。

上津浦氏、栖本氏、大矢野氏、志岐氏、天草氏、長島氏といった天草郡諸領主は、戦国期を通じて複雑な同盟・敵対関係を展開し、領土紛争を継続した。その過程を示す『八代日記』の主要な記事を年代順に示した表H「戦国期天草郡城郭関係史料」によれば、その特徴は以下の三点である。

第一に、鶴嶋も指摘するように、上津浦氏と栖本氏が一貫して敵対関係にあった点である。

第二は、両氏の本拠城郭（上津浦城・栖本城）に対する攻撃以外で、主要な攻撃＝争奪対象となったのが棚底城であったことである。享禄期まで棚底城を確保していた上津浦氏は、天文13年（1544）2月2日に栖本氏らの攻撃をうけて棚底城を「下城」し、以後、同城は栖本氏の支配となる（表HNo.2）。次いで天文20年（1551）7月からは天草・上津浦・大矢野の三氏が連合して栖本氏に対する攻勢を強め(表HNo.5)、弘治2年（1556）からは栖本城とならんで棚底城及び周辺地域への攻撃が開始され、継続する（表HNo.8～20）。その決着がついたのは永禄3年（1560）11月における栖本氏から上津浦氏への棚底城の明け渡しであり、それは、肥前島原の有馬氏や大村氏が上津浦氏に合力して栖本城に着陣し、紛争が大規模化する情勢に対応した八代相良氏の「異見」、すなわち仲介・調停による結果であった（表HNo.21～24）。相良氏による上津浦・栖本両氏の調停の主題が棚底城の処置、すなわち棚底城領の割譲にあったことは、両氏の長期対立の焦点が棚底の支配実現であった事実を明確に示す。

天文20年（1551）から永禄3年（1560）11月まで展開した上津浦氏及び近隣合力領主による以上の棚底城攻撃を、以下では「棚底抗争」と呼ぼう。なお、永禄3年の棚底城明け渡し以降、上津浦氏と相良氏は以前にもまして強固な同盟関係で結ばれ、現存する棚底城の遺構は、この時期に相良氏の城普請技法が取り入れられて形成されたものと推定されることは、鶴嶋がいうとおりである。

第三は、棚底抗争を基軸とした上津浦・栖本両氏の軍事紛争が、八代相良氏の介入を伴って展開したことである。天文初年の天草・志岐・栖本・大矢野・長嶋氏連合による上津浦氏攻めでは、相良氏は上津浦氏に「合力」し家臣団を番編成して上津浦城に派遣している（表HNo.1）。弘治2年（1556）から3年にかけての上津浦氏による栖本攻めに際しては、相良氏は逆に栖本氏を支援し、弘治2年末から翌年にかけて「栖本ニ越年之番」衆を派遣していた（『八代日記』）。さらに、棚底抗争後の栖本氏による反撃に対しては、上津浦氏を支持する軍事介入を強めた（表HNo.29～32）。なお、相良氏が天草諸領主の対立し積極的に介入したのは、有馬氏など肥前の勢力が天草に浸透することをくい止めようとする政治的意図によるものだとみられる。

以上のように、戦国期の上津浦氏と栖本氏は、それぞれが八代相良氏の軍事支援（合力）を取り付けながら紛争を有利に展開しようとした。棚底城の政治的位置は、こうした両氏の争奪対象すなわち境目の城であった点に見いだすことができる。そして、棚底城の縄張りの大規模化を規定したのは、この城が天草上島において長期間領土紛争に晒された境目に存在したという政治的・軍事的条件であった。

以上を確認したうえで検討すべきは、棚底の地が上津浦・栖本両氏にとっての境目となった地政学的な理由である。この点で注目されるのは、上津浦氏や大矢野氏が八代の相良氏に派遣した使者に関する、以下の『八代日記』の記述である。

【上津浦氏関係】

a 上津浦ヨリ鷹戸方屋形へ参上候、（天文5年10月21日条）

b 上津浦千寿殿ヨリ家督祝儀として、鷹戸方八代ニ被着候、（天文12年9月19日条）

c 頼興御曹司御誕生ニ、上津浦ヨリ薗田方御悦ニ八代ニ御越候、（天文15年2月17日条）

d 上津浦ヨリ晴広様御代次ノ御祝ニ平江方御越候、（天文15年10月15日条）

e 上津浦ヨリ為使者鷹戸方被着候、晴広さま高塚ニ御光義之条、鷹戸方如高塚伺候候、（天文18年11月28日条）

f 上津浦ヨリ神代美作方為使者、八代ニ着候、（同天文20年11月17日条）

g 上津浦ヨリ鷹戸方、万満殿さま御かとく御祝義ニ使者候、（弘治元年12月1日条）

h 上津浦ヨリ頼房様御下向ニついて御悦、又御家上津浦代々之儀仰られ候、使僧、（永禄6年5月9日条）

i 上津浦使者鷹戸伊勢守方也、蓑田兵部少輔方座敷ニテ御会尺三献也、勢州小宿ニハ御名代澄河方也、（永禄6年6月26日条）

j 上津浦ヨリ朝息庵八代ニ使僧候、此方任御異見、天草殿一味之由候、（永禄7年6月14日条）

k 上津浦ヨリ田太左衛門尉被遣候、合縁之儀、（永禄9年4月24日条）

【大矢野氏関係】

a 大矢野ヨリ御代次御祝ニ吉野方御越候、（天文15年11月3日条）

b 二間斗ニテ大矢野御会尺、晴広様八代ニ廿六日ニ御帰宅、（天文17年3月25日条）

c 大矢野ヨリ使者東殿、御曹司御下向ノ御祝儀、（天文21年11月12日条）

d 大矢野ヨリふたまて（二間戸）太郎左衛門尉方使者候、時且（宜）かけ（書）かふし（交）にて御頼之由候、（天文23年11月25日条）

これらは、上津浦氏・大矢野氏から八代相良氏に派遣された使節の名が明記された記事等の抜粋である。

まず上津浦氏関係で注目されるのは、使者全10例のうち5例を「鷹戸方」が占めている事実である。特筆すべきは、e で相良氏と名和・阿蘇氏との領土紛争の最前線たる益城郡高塚城にあった相良晴広のもとまで鷹戸方が「伺候」して面会していること、「棚底抗争」後の h で相良・上津浦「代々」の軍事同盟関係が確認された直後、i において、「鷹戸伊勢守」が八代に派遣されていることである。鷹戸氏は天文期から永禄期までを通じて相良氏当主にも信任の厚い、対相良氏担当の使節であったとみてよい。

鷹戸氏は旧龍ヶ岳町高戸を名字の地とし、大道城を拠点とした在地領主であったと推察される（以下第4図「天草の中世城跡分布図」、第82図「棚底城跡関連地図」参照）。高戸の地は葦北郡田浦の対岸にあたり、上島北岸を本拠とする上津浦氏にとっては同地と鷹戸氏を相良氏との連携上の橋頭堡として確保することが、栖本氏との紛争を有利に展開するための軍事的条件として重要であったと考えられる。なお、f で派遣されている「神代美作方」は、高戸の北に位置する旧姫戸町神代を名字の地とする在地領主と考えられ、現在のところ中世城郭遺構の存在は知られていないが、その

地理的位置はやはり八代との連絡上の重要地点であり、同氏もこうした条件によって鷹戸氏に準ずる上津浦氏の対相良使節を担当したものとみられる。その他の使節についての詳細は不明である。

次に大矢野氏関係をみれば、bで相良晴広と大矢野氏との会談の場所となった二間戸を名字の地とする「二間戸太郎左衛門尉方」が、dで相良氏との軍事同盟を締結する際の使節として八代に派遣されているのが注目される。二間戸は神代の北に接する地で（旧姫戸町）、港と城を有し、大矢野氏と相良氏の連携上の要地であったことは確実である。

このように、上津浦・大矢野両氏はそれぞれ高戸・神代、二間戸という相良氏との連携上の要地とその地の在地領主（土豪）を勢力下に確保し、島内の紛争に対処しようとした。棚底城はこれらの地の西側、すなわち栖本氏の支配領域側に隣接している。栖本氏にとっては、上津浦氏の高戸支配を実力で否定して、上津浦氏と相良氏との連携を遮断することが常に戦略上の課題だったのであり、そのために高戸に隣接する棚底の地を確保することが必要であった。上津浦氏からみれば、栖本氏に棚底を奪取されることはすなわち高戸支配の危機を意味した。棚底城が両氏の争奪対象となった理由はここにあったと考えられる。

棚底城は相良氏との政治的・軍事的関係に規定されて展開した天草諸領主の紛争、わけてもその主要な対立基軸をなした上津浦・栖本両氏の一貫した紛争展開の過程で、上津浦氏と相良氏との連携実現上の要地として争奪対象となった城であった。その意味で棚底城跡は、天草の戦国史を理解するうえで最も重要な城郭遺構であるとみることができる。

2　「藤河栫」

戦国期の棚底城遺構を理解するためには、縄張り遺構本体のみならず周辺の地名等や交通路と文献史料とを総合的に検討し、天草地域内での位置づけを検討する必要がある。ここでは『八代日記』に表れる「藤河栫」と「さかたぬき」なる地名、さらに棚底城遺構と扇状地をはさんで向かい合う丘陵上にある「城山」地名について検討する。

まず、「藤河栫」の所見は『八代日記』弘治2年（1556）6月1日条の次の記事である（表HNo.8）。

上津浦ヨリ棚底之内、藤河栫破候、

この記事は、天文13年（1544）3月に棚底城を栖本氏に奪取された上津浦氏（表HNo.2）が城の奪回のための攻撃を継続した「棚底抗争」の開始を告げたものである。「棚底之内」という表現からみて、「藤河栫」なる城郭施設が棚底城領内に存在しており、それが上津浦氏によって奪取されたこと示す記事だと理解することができる。

「栫」は「囲」「覚井」等とも表記される地名として県内にも多くの事例があり、一般に戦国期の山城遺構の麓に位置し、在地領主が日常的に居住した領主館及び家臣団集住区を堀や土塁で囲った領主制の拠点を指す、戦国期の呼称に由来する。しかし、棚底城遺構付近には当該の地名は残存せず、「藤川」「家久栄（かくえ）」の字名が、遺構から北東約二 km の距離にある浦集落内に存在する。その位置は、「家久栄」が浦地区のある扇状地の南西側丘陵の縁辺部、「藤川」がそれに隣接した同扇状地の奥部にあたる（第84図「藤河栫比定地周辺地形図」参照）。

注目されるのは、これら地名がいずれも上津浦から棚底へとつながる交通路上で棚底地域への出入口に位置していることである。すなわち「藤河栫」は、栖本氏支配下の棚底領において上津浦氏の棚底城攻撃を遮断する目的で構築された小規模城郭施設を指すものと考えられる。そうした理解の根拠となる事例が次の史料である。

同（大永）七年丁亥正月四日壬午ノ日　蕨野カコイ破、相良ノ大蔵方打死、（『八代日記』）

「蕨野」は、当時阿蘇惟前が確保していた益城郡の堅志田城に八代方面から入る主要な交通路たる「白石野越」上（旧小川町と中央町との境界付近の峠）に位置する地名である。これは、相良氏が堅志田城攻撃の軍勢をこの道を使って出張させ、討死者を出しながらも「カコイ」を奪取するこ

とに成功したことを伝える記事であって、領主拠点城郭ではなく、拠点城郭どうしを結ぶ要道城に設けられた交通遮断用の城郭施設たる「栫」の存在を示すものである。なお現在、蕨野の地には簡素な城郭遺構の存在が確認されている（鶴嶋俊彦の現地踏査による）。

以上のことから、浦地区の「藤河」「家久栄」の字名は、『八代日記』に表れる「藤河栫」の遺称であり、それは栖本氏が上津浦氏による棚底城攻撃を遮断するために構築した城郭施設であったと断定してよいだろう。なお、「棚底抗争」の開始時に上津浦氏が藤河栫を奪取したことが4年後の棚底城奪回（表 HNo.24）へとつながったとみれば、藤河栫は弘治2年（1556）から永禄3年（1560）まで継続した「棚底抗争」における上津浦氏の棚底城攻撃の前線基地＝軍団駐屯地として機能したとも考えられる。遺構等の調査を実施して、棚底城遺跡本体とともに評価することが必要である。

3　城山と「さかたぬき」

次に注目すべき地名は、棚底の扇状地をはさんで、棚底城遺構と並立するように存在する「城山」の地名である。当然、同所にも中世城郭が存在したと想定されるが、現状では山上に遺構を認めることはできない。しかし、この地名も戦国期棚底城と関係を有した城郭施設の存在を伝えたものである可能性が排除されない以上、具体的な検討を加える必要がある。

天草地域内の中世城郭の分布を示した第4図「天草の中世城跡分布図」をみられたい。棚底城のように、戦国期の在地領主が使用したことが明らかな城郭遺構に隣接する丘陵上に「城山」等の地名が並立する事例が、50例中じつに16例もある。共通する特徴は以下の二点である。

第一に、上津浦城、志岐城、栖本城・馬場城、河内浦城のように、在地領主の本拠城郭が多く含まれることである。

第二は、棚底城と同様に、並立城の一方には明らかな縄張り遺構がみられるものの、もう一方には「城山」等の地名のみで明確な遺構が確認できないケースが多いことである（志岐城、河内浦城、上津浦城など）。

戦国期領主城郭に隣接する「城山」等の地名が示すものは何か検討してみよう。

可能性1：「向城」説

可能性の一つは、次のような史料に表れる「向城」の遺称とみる説である。

14世紀内乱の九州において一貫して南朝方有力武将として軍事行動を続けた阿蘇（恵良）惟澄は、正平3年（1348）にみずからの軍忠を書き連ねて征西府に提出し恩賞を申請した。惟澄の軍事行動を具体的に記したその軍忠状（「阿蘇家文書」）は、次のような記述で埋め尽くされている。

①同五月、取田口向城之刻、河尻詫磨以下罷向之間、武光相共致合戦畢、
②其後頼尚取山崎向城之時、武光相共致合戦畢、其後馬場三郎・宋刑部以下、令発向味木庄、搆城郭之間、馳向致合戦、
③御敵忍取種山黒鮫城之間、此所御方要害後山也、可令八代出入断絶之間、不廻時日馳向、取向城於米山
④惟澄於笠松鞍楠二箇所、取向城之刻、大友孫次郎率数百騎、令発向小野庄、搆城郭之間、馳向致合戦、追散凶徒、令破却彼城之時、一族若党十余人手負討死畢、

合戦は城郭（要害）の構築と破却の応酬として叙述されているが、注目すべきは①～④のいずれにも見られる「向城を取る」という行為である。それは③にあるように、すでに存在する敵方の城郭に相対して築城する行為で、激しい反撃を引き起こしているが、向城は敵方の城郭とその周辺の支配領域を攻略する第一段階として構築されている。

領主的土地所有の象徴である城郭を争奪対象とした中世の合戦において、相手方の城郭に相対する位置に、寄せ手がみずからの土地所有を主張して軍団駐屯地ともなる「向城」を設置することが行なわれた。こうした「向城」は城攻めに際して臨時的に構築され、使用も一時的であったと考えられるから、地名のみで明確な縄張り遺構をのこさない理由も整合的に理解可能である。

棚底の「城山」の場合、その位置からみて、栖本氏の棚底城攻めに際して構築された向城であった可能性が指摘できるのである。

可能性２：領域民衆の避難所説

もう一つの可能性は、戦国期における次のような史料に示される、領域民衆の避難所説である。

> 今朝山鹿へ懸引候、彼方御陣所之由候へとも難渋申候、其故者、三里四方之事者あかり城仕、女童取乱罷居候間、城内ニ御人数ハ成ましく候、麓ニむなかたと申村候、是ニ御番衆者可召置之由申候、必竟狼藉人に怖候故と聞得候、此等御成敗肝要之由也、さてハ先々むなかたと哉覧ニ両人被打入被仰調候て可然之段、返事被成候、
>
> （『上井覚兼日記』天正 12 年 9 月 15 日条）

天正 12 年（1584）9 月、肥後に侵攻した島津氏は山鹿城主を従属させると、その本拠城郭たる山鹿城を自軍の「番衆」を駐屯させる「御陣所」とすべく、家老の上井覚兼はその旨を山鹿城主に通達した。ところが山鹿城内には「三里四方」の「女童」すなわち城下民衆が島津軍の「狼藉人」を怖れて大量に避難しており、山鹿城主はこれをもって島津軍の駐屯を拒否し、島津側もこれを認めざるを得なかったというのである。

戦国期の合戦において、大名の軍隊の戦闘員の中核を構成した「雑兵」＝武家奉公人が敵地において非戦闘員の百姓、わけてもその家族（女性や子ども）を大量に略取し（「濫妨狼藉」、「狼藉人」としての雑兵）、戦争奴隷として売買することが一般的に行なわれていたこと、さらに戦場の民衆は人身略取から身を守るために領主城郭や村共同体として構築した小規模城郭に避難したことが、文献史学の研究によって明らかにされている（藤木久志『雑兵たちの戦場』、稲葉継陽ほか『日本の中世 12 村の戦争と平和』など）。上の史料は、そうした城郭への避難行動が「あがり城」なる熟語までをも生み出していた事実を伝えており、城下民衆の避難機能が戦国期の領主城郭の一般的機能となっていたことを示唆していて重要である。

こうした戦国期の一般状況を念頭に置いたとき、棚底城に関する次の『八代日記』の記述は大きな意味を持つ。

> 上津浦ヨリ棚底さかたぬき破候而、打取五人、生取五十三人、牛馬卅疋、
>
> （弘治 2 年 11 月 7 日条、表 HNo.13）

「棚底抗争」において、上津浦氏の軍勢が棚底の「さかたぬき」という場所を攻撃し、5 人の戦闘員を討ち取ったばかりでなく、53 人を生け捕り、牛馬 30 匹を略取したという。牛馬とともに略取されたことからみて、被害者の 53 人は非戦闘員の百姓とその家族であったと断定してよいだろう。

重要なのは、「さかたぬき」の通称地名が棚底地区に現存すること、その場所が「城山」の麓にあたることである（第５図「棚底城跡周辺地形図」参照）。しかも、「さかたぬき」から「城山」頂上付近までは登山道で結ばれており、両者は密接な関係にあったことが明らかである。

以上から、「棚底抗争」渦中の弘治 2 年（1556）における上津浦氏の棚底城攻めに際して、「さかたぬき」「城山」付近には、農耕用牛馬をはじめとする私財を携えた棚底地域の民衆が多く避難しており、上津浦軍の略奪の被害にあった事実が明らかとなった。「さかたぬき」「城山」には、民衆避難用の城郭施設が存在したのではないか。

一般に天草地域の領主城郭は地形に制約されて、山上に大規模な縄張りを構築することは困難であった。したがって、上記の山鹿城のように領主城郭そのものの内部に城下民衆を避難させることは不可能であったと考えられる。棚底の「城山」地名は領主城郭に隣接した民衆避難用の城郭施設の存在を伝えるものである可能性があり、天草地域の領主本拠城郭の多くにみられる並立城様式も、同様に理解することができる。また並立城の一方が明確な縄張り遺構をのこさない点も、民衆避難用の施設であったことからその構造が領主城郭と比較すれば簡素なものであったとみれば、説明可能である。

なお、このように考えた場合、棚底城の縄張りが現存する遺構のように大規模化したのは、鶴

嶋が推定した如く、永禄3年（1556）年11月の上津浦氏による奪回（表HNo.24）、同6年5月の上津浦・相良同盟の成立（前掲『八代日記』上津浦氏関係h）以降、相良氏の城郭普請技術と普請協力が入ってから後の段階であったということになろう。

まとめと展望

以上、文献史料によって、戦国期棚底城の政治的・軍事的位置、周辺地名をも含めた城郭としての特質を検討した。結論として指摘し得るのは以下の二点である。

第一に、棚底城は相良氏との政治的・軍事的関係に規定されて展開した天草諸領主の紛争、わけてもその主要な対立基軸をなした上津浦・栖本両氏の一貫した紛争展開の過程で、上津浦氏と相良氏との連携実現上の要地として争奪対象となった城であった。永禄期に相良氏が棚底城の普請に積極介入した理由や、上津浦との交通路を遮断する「栫」の設置の意味も、こうした同城の政治的・軍事的重要性から理解することが可能である。その意味で棚底城は、天草戦国史のみならず、解明が遅れている戦国期肥後の政治史を理解するうえで最も重要な城郭の一つであることは疑いない。

第二に、棚底城が天草地域の中世城遺構に固有でありながら地域内にひろくみられる並立城郭の一つであり、それが中世の城郭攻防戦の実態を何らかのかたちで反映したものと考えられることである。ことに、本章で述べた領域民衆避難所説は、在地領主本拠地や境目の並立城が、大規模城郭の構築が困難な天草地域の在地領主と民衆とがいわば共同で創出した地域独特の人身保護のためのシステムであった可能性を示しており、戦国期城郭研究の新たな局面を開拓する遺構として注目されるのである。

最後に、天草地域の中世城と近世城との関係について注目すべき点を指摘しておきたい。同地域の中世城跡のうち北岸部に所在する遺構のなかには、近世初期の寺沢領時代に一定の改変を受けながら使用されたとみられるものが確認される。

富岡城跡（第4図-1）は、寺沢氏によって普請されて天草支配の拠点とされた城だが、近世の石垣の裏込めから中世の石積が検出されている（苓北町教育委員会『富岡城跡Ⅴ』）。

上津浦氏が大矢野領との境目の城として使用したとみられる大浦城跡（第4図-36）は、九つの曲輪を配する規模の大きい遺構だが、主郭には近世の石積がめぐらされている。さらにそれは内側から人為的に突き崩された様相を呈しており、近世のある時期に城割りを受けたものとみられる。

佐伊津金浜城跡（第4図-22）は海に面した小丘陵上に築かれているが、高さ5mを超える特徴的な近世石積を有する。同城は文献史料によって近世初期に寺沢氏が拠点としたことが明らかである。注目すべきは、近世の文献史料（「慶安差上帳」）に「佐伊津古城」としてみえる佐伊津高山城跡（第4図-23）が同城に隣接していることである。「志岐文書」によれば、中世の佐伊津は志岐氏の支配下にあったことは確実で、これらの城は戦国期志岐・上津浦領境目の並立城とみることができる。

以上のように、天草地域の中世城のうちには、

①中世城の縄張りの上に近世的普請を施して拡幅した富岡城

②中世城の主郭部に石積普請を施した大浦城

③境目の並立城の一方に石積普請を施した佐伊津城

といった、それぞれ特色ある普請法によって近世城郭化されたものが存在した。

現在、中世・近世移行期における城郭使用の連続性と断絶性を、豊臣政権の惣無事令（「仕置」）、いわゆる「一国一城令」、藩政確立に伴う「支城 - 備制」の止揚という、政治史の三段階に即して具体的に検証することが研究上の大きな課題となっているが、天草地域の移行期における上記の特色ある城郭普請事例は、この課題に迫るうえで重要なデータを提供するものと思われる。

表H　戦国期天草郡関係史料

○熊本中世史研究会編『八代日記』(青潮社、1980年)

No.	年・月・日	条文
1	享禄5(天文元)・6・13	<前略>…天草(尚種)・志岐(重経)・栖本・大矢野・長嶋(但馬守)同心にて上津浦ニ動候、そのまま着陣候、同十六日　八代上津浦治種ニ合力、一番衆御立候、同廿六日　二番衆御立候、七月一日丁未　上津浦にて合戦、相良六郎左衛門尉方打死、[割注]上津浦治種衆親類殿原中間二十八人打死候、同九日　上津浦之城つめ候、同十一日ニ三番衆立候、十八日　四番人数被立候、廿二日　天草・志岐申剋ニ開陣、…<後略>
2	天文13・2・2	上津浦親類中、棚底下城、
3	2・4	上津浦親類中、上津浦城下城、
4	2・6	種教(上津浦)上津浦下城、
5	20・7・8	天草・上津浦・大矢野ヨリ栖本ニ動候、
6	7・7～8	有馬ヨリ上津浦合力ノ人数渡海候、大野殿・安徳殿・南条殿、是ハ栖本ニ働候間、其留守ノ番也、
7	23・12・11	大矢野ニ小田左京進方使者候、巨細ハ天草・志岐・上津浦一同ニテ大矢野ニ可懸取由候間、ふたまて(二間戸)太郎左衛門尉方を以御頼之由候て、かきかハし承候、其礼として被遣候、
8	弘治2・6・1	上津浦ヨリ棚底之内、藤河拵破候、
9	6・29	栖本ヨリ上津浦堺へ打出候、上津浦ヨリ出合候、合戦候て栖本衆十八人打取候、クサツミト云所歟、
10	7・4	上津浦ヨリ栖本ノウラ々々破候、
11	8・25	三(上)津浦ヨリ栖本馬場ヲ破候、
12	9・14	上津浦ヨリ鷹戸大タウ(道)破候て、六人打、いけ取廿人、
13	11・7	上津浦ヨリ棚底さかたぬき破候而、打取五人、生取五十三人、牛馬卅疋、
14	12・14	上津浦ヨリ栖本ニ動候、
15	3・7・9	上津浦ヨリ栖本トマリ破候、
16	11・18	上津浦之内麻畠師子口ト云所ニ、天草・栖本ヨリ大伏草候而、両家之人数敗軍、
17	永禄元・3・16	上津浦ヨリ棚底ニ動「候」、嶋子ヨリ下津浦ニ動候、
18	4・2	天草殿衆上津浦動候、天草衆十八人打取、
19	2・7・12	上津浦ヨリ栖本ニ動候、
20	3・2・26	自上津浦ヨリ(衍)棚底ニ動、栖本衆三人打候、今日歟、
21	9・23	栖本為着陣、有馬諸勢上津浦ニ着船候、二百余艘、
22	9・25	有馬衆ニ間斗(二間戸)放火、
23	9・27	有馬(義貞ヵ)・大村殿栖本ニ着陣、志岐・上津浦衆乍勿論同前也、
24	11・19	棚底之事、自栖本ヨリ「衍ヵ」上津浦へ被渡候、廿日ニ有馬諸勢如有馬帰陣、同廿五日　上津浦ヨリ延命院を以八代奉行まて被仰候、御異見を以棚底請取申候とての御禮、
25	4・3・11	上津浦分領池浦、佐敷ヨリ夜討候而、一人打二人取候、就夫佐敷之舟上津浦領地ニ罷越候ヲ被留置候て、此方ニ仰點合、やかて被帰候、同廿日五十人八代ノことく被遣候、
26	8・6・28	志岐・栖本・有馬・和泉同前ニテ天草嶋子ニ動候、
27	7・2	志岐・栖本・有馬・和泉同前ニテ本砥(渡)動、
28	7・9	天草・大矢野・上津浦三人ニテ志柿ニ動候、栖本衆ト上津浦衆ト合戦、上津浦衆六人打死、
29	8・24	栖本動ト候而、今日明日ニ砥岐ノコトク出船、九月四日ニ帰宅、深水殿・東民部左衛門尉殿・蓑田平馬允殿本砥(渡)ニ行候、
30	8・26	栖本ニ働ト候而、求麻ヨリ深水殿・東民部左衛門尉殿出船候而、トキ(砥岐)ノアラ(嵐)口ト云所ニ着船、
31	9・13	上津浦ヨリ、栖本之内河内ト云所ニ働候而八人打取、手火矢二ツ、兵具五十斗(計)、如上津浦取候、
32	9・17	志柿ニ着着「衍」陣、求麻衆・天草衆同前、八代衆ハ廿一日ニ番立候、
33	9・4・6	上津浦ヨリ栖本動、麦作拂、
34	同日夜	栖本ヨリ棚底ニ麦作カリ候ヲ、あふこ百卅本おい落候、

※(　)は編者注、「　」は朱記をそれぞれ示している。

○『上井覚兼日記　上』(岩波書店、1954年)

No.	年・月・日	条文
1	天正2・12・5	一、五日、如常出仕申候、志岐殿より両使にて候、[割注]正興寺　湯之浦入道以被申候、二三ヶ年御無音ニ罷過候、殊ニ肝付御手裏ニ参候、此等御祝言早々申上候すれ共、海路遠境之間打過候、背本意候、随而天草と義虎和平之調儀候之由、廻船傳説ニ聞得候、先年從此方被對　御書ヲ、和泉と天草無事ニ罷成候、然處、義虎鹿兒嶋へ参上被成候時分、
2	3・2・26	<前略>…次にハ天草境和平之儀、此前以上意御調達候之處、久玉境廻返之条、遺恨不過是候、然者少なり共手を付候ハヽ、和融被成候する由候也、…<後略>

○『鹿児島県史料　旧記雑録後編1』(鹿児島県、1981年)

No.	番号・文書題	内容
1	752・志岐麟泉書状	畏而令言上候、抑其以後可申上候之処、依海路遼境経過候、誠背本意存候、仍而肝付表之事被召崩候之由承及候、千勝萬勢目出存候、返々遠方之故、無沙汰連日之辻相違之様ニ候、心外之至候、兼又先年當郡之立柄請　上意、無爲ニ申調之處、天草太夫依氣任久玉之義之事、我々までも無首尾者ニ罷成候、迷惑仕候、以其旨、薩州一防戦御現形候、爰元無油断候、只御一人可被指上候、何様可申談候、但　上意可爲法次第候、殊義虎深重申合候旨共候間、不存余儀候、貴察之御前ニ候、委曲御老中迄令申候、宜預御披露候、恐惶謹言、 「義久公御譜中天正二年ト朱カキアリ」 八月七日　麟泉(花押) 嶋津殿 御奉行衆 追而織色一端・黄蠟令進上候、允奉表御祝儀計候、 恐惶、 志岐兵部少輔入道 嶋津殿　麟泉

※「　」は文書中の異筆・補筆を示している。

○『熊本縣史料』　中世篇第四(熊本県、1967年)

No.	番号・文書題	内容
1	40・ 志岐麟泉(鎮経)書状	(包紙)「八月七日麟泉より河上上野入道殿・村田越前守殿 平田美濃守殿・伊集院右衛門大夫殿へ之状壹通」 態令啓入候、其以後可申通候處、依遠方乍存候、心外之至候、仍其肝付表之事、被召崩候」之由承及候、千勝萬勢、目出存候、兼又先年當郡之立柄、請　上意、天草大夫兄弟和談申」候、然處無程、久玉之事被義(マヽ)候、彼弟共落去申候、悉我々までも罷成不首尾者候事、言語」道断、迷惑仕候、先々此表儀(義)絶候、然者薩州・天草和順之義示給候之段、不及分別候、既」義虎御取合上者、無申事候、御察之前ニ候、爰許之事、義虎順逆御同心之外、無他候、爲」御存知候、併御一人可被指上之事、可目出候、何様可申談候、可得御意候、恐々謹言、」 八月七日　麟泉(花押) 川上上野入道(久隅)殿 村田越前守(経定)殿 平田美濃守(光宗)殿
2	44・豊臣秀吉内書案	「十二月五日小西摂津守殿へ 秀吉公より之御状写壹通入」 志岐城落居之様子言上候、早速申付候段、尤思召候、志岐事、雖助命候、妻子以下不残行」長近所(宇土)へ引越候て、彼城にハ別人可入替候、然而天草表へ及行由、加藤主計頭相談、無越」度様ニ可申付候、次五嶋・平戸八幡者共、高麗之儀被聞召届候、猶浅野弾正少弼可申候、」以上、」 (天正十七年)十二月五日 小西攝津守(行長)とのへ

※(　)は編者注、　」は改行をそれぞれ示している。

○フロイス『日本史』9　西九州篇Ⅰ(中央公論社、1979年)

No.	章・頁	内容
1	20・307	<前略>…天草の諸領域は、長さが十四里、幅は所によっては五、四里、またはニ里である。領内に三十五の村落と集落と四つの城があり、かの殿の主な居宅は河内浦という地にあり、殿には四人の息子と二人の(兄)弟がいた。…<後略>
2	20・309	<前略>…人々はさっそく彼に一寒村で崎津という港を見せ、同時にその港の上の山も見せた。殿が言ったように、そこは、商品や船舶や商人の安全をはかるため、一城を築き得るところであった。修道士は、その地が気に入ったことを皆に判ってもらい、上の方には水がないから、木製の大きい水槽を作って、それにいつも水を満たしておくとよいと言い、またそこに鉄でできた二門の小砲を配置させた。それはシナで製作される非常に微力な砲であった。その地がそうした目的のところに定められ、二基の水槽と二門の小砲、それに小さな矢来を囲らしたことで(一応)城の名を(有することになって)、一同大いに満足で
3	20・317	<前略>…(天草の)殿は五、六ヶ月間、大いに困窮しながら本渡の城に引き籠っていた。弟たちが自分に対して完全に優位を保っていたので、ふたたび自領に戻される希望はほとんど持てなかった。というのは、弟たちは久玉城を接収した後、激しい勢いで河内浦に突入し、たちまちいっさいを掌握してしまったからであった。だが本渡城は志岐殿の所領に近いところにあったので、(天草)殿は、これまでは不和の間柄であったとはいえ、目下、自らがひどい窮乏の状態にあるのに鑑みて、やむなく隣の老志岐殿の補助を求め、援助を乞うことにした。ただし平素、志岐殿は彼の敵であった。志岐殿は、かつて両者が幾度となく交戦した　(空白アリ)　城を代償として提供するとの条件のもとに、(天草殿)に好意と援助を約束し、(天草)殿はさっそくその城を彼に与えた。…<後略>

大権寺の石塔群について

前川清一

1　はじめに

棚底城主の菩提寺と伝えられる大権寺。その跡地と推定される場所には、以前より数多くの中世石塔の存在が知られていた。さらに、近年の発掘調査により、その数は百基を優に越えることが判明した。一カ所にある石塔数では、天草地域内では群を抜いたものである。中世石塔の少ない同地域では、誠に異例なことといえる。この背景には、有力な氏族の存在を抜きには、考えられない。

本章では、天草地域の中世石塔の現状を踏まえたうえで、大権寺の石塔群の特色を明確にするとともに、石塔群の造立された時期について検討を行ったものである。

2　天草地域の中世石塔の特徴について

天草地域の石塔調査に先鞭を付けたのは、鶴田八洲成である。昭和53年に刊行された『天草建設文化史』の中で、「天草の中世石造文化（含・近世）」（注1）として取り上げたことにより、ようやく天草地域における石造文化の概要が知られるようになった。その後、市町村史等の刊行により、新たな石造物についての発見や調査等が進展してきたところであるが、全体的に纏まった調査書等の刊行はなされていない。

平成18年には、棚底城の調査にともなう報告書『棚底城跡Ⅱ』（注2）が刊行されたが、このなかで阿蘇品保夫が「大権寺遺跡と棚底城主試論」を発表している。論旨は、全県的視点から、中世の石塔群の性格に触れた上で、大権寺の石塔群について「大権寺と棚底城主は同時代に存在し、その地理的関係と遺物の存在から、棚底城主と大権寺の石塔群の結び付きを否定できる根拠は考えられない。」としている。首肯出来ることである。

さて、天草地域と県内の中世石塔との比較をしてみると、次のような特徴が挙げられる。

（1）中世石塔の遺品が少ないこと。
（2）鎌倉期の石塔の一部に大型に類する塔が見られるが、中世石塔の多くは小型であること。
（3）銘文を刻んだものが少ないこと。
（4）県内では、15世紀後半から16世紀前半において、数多の板碑が造立されているが、天草地域ではその数が極端に少ないこと。

以上のような特徴が見られることについて、次のように推測する。

まず、（1）の中世石塔が少ないことの背景として、第一に経済力に起因するものであろう。県内では、天草地域ほどではないが、葦北地域においても中世石塔の数がやや少ない状況にある。この地域に共通していることは、耕地が少なく農業の生産性が低いことである。地形的な制約が大であろう。

第二に石工の存在の有無が問われよう。鎌倉期の石工の性格を把握するために、県内で確認された石工銘（注3）を列記すると、まず、熊本県上益城郡益城町上砥川の阿弥陀堂の寛喜2年（1232）銘層塔に、「大工聖人僧覺厳」と刻んでいる。また、同年に造られた球磨郡湯前町東方明導寺阿弥陀堂の九重石塔には、「大工兼佛師幸西」「小工榮幸」の銘がある。さらに、熊本県宇城市小川町塔本の正嘉2年（1258）石塔に「大工僧大賢」とある。このように鎌倉期においては、「大工聖人僧」「佛師」「大工僧」の銘文がみられることから、僧侶のなかに石工の技術を持った人々が存在したことを示している。

次に、南北朝期の石工銘をみてみよう。熊本県荒尾市三の宮の正平8年（1353）層塔に「大工藤原助次」とある。さらに熊本県八代市袋町医王寺の正平16年（1361）銘の石塔に「大工沙弥浄心」、同県八代市妙見町の天授7年（1381）の宝篋印塔に「彫巧禅秀比丘」と刻む。

このなかで注目すべきは、「大工藤原助次」の存在である。「藤原姓」を名乗った石工の登場は、

石工としての自立の兆候が窺われるものだ。なお、助次の作品は、福岡県大牟田を中心に北は福岡県大川市から南は熊本県熊本市にかけて９基の石塔（注４）が知られている。

南北朝期に入ると、石工として独立した人々の登場が推測されるが、一方では、僧籍に身を置き、布教者側の立場で石塔の造立を行ったことが推測される。

室町期ともなると石工の職業化が一段と進展したことが窺える。例として、玉名郡南関町西豊永の明応９年(1499)の六地蔵石幢「彫刻源次郎」、荒尾市宮内出目浄業寺の大永２年(1522)の板碑に「大工新五郎」、玉名市石貫馬場一二三橋の天正３年(1575)の架橋碑に「大工善兵衛門・孫七郎」などが挙げられる。また、一方で依然として僧籍に身を置く石工達の存在も知られている。その例としては、荒尾市原万田次郎丸の永正 15 年(1518)の六地蔵石幢に「佛師養淳」、阿蘇郡西原村河原門出の天文 13 年(1544)に板碑に「佛師聚頓」、玉名郡長洲町腹赤の板碑に「佛師周養」などがある。なお、周養の作品は、福岡県みやま町から熊本県玉名郡内にかけて９基の石塔（注５）が確認されている。

ところで、天草地域の鎌倉期に造立された石塔のなかには、次に紹介するような特筆すべきものがある。それは石塔の中心部を占める部分に、四方に梵字「キリーク」を刻んだものだ。これまでに確認できたのは、宝塔２基、五輪塔１基がある。次に列記しよう。

その１　天草市栖本町平ノ口の宝塔

天草市栖本町平ノ口の畑地に通じる道路から 10 メートルほど離れた少し小高い場所に、この宝塔がある。同所には、宝塔を中心に戦国期とみられる五輪塔がＬ字型に 10 数基並ぶ。また、宝塔前には戦国期の宝篋印塔１基がみられる。宝塔は、砂岩製で相輪を欠いているが、現高は、およそ 76 センチを測る。笠石は、永年の風化により摩耗している。塔身の四方にキリークを薬研彫するが、砂岩であるために摩耗が激しい。建立時期は、13 世紀と推測される。

その２　専勝軒跡の宝塔

天草市栖本町馬場の専勝軒跡は、天草市栖本支所西側の墓地入り口に位置する。同所には、近世の石塔が並んでいるが、その裏側の土手沿いに凝灰岩製の宝塔塔身がある。塔身の中央部に、四方にキリークが薬研彫されている。それぞれの高さは、塔身が 32 センチ、頸部が５センチ、ほぞが２センチとなっている。13 世紀後半ころの製作とみられる。なお、このようなほぞを設ける塔身の下限は、14 世紀半ころまでである。また、その１・２の所在する地域は、栖本氏の拠点と見なされる地域に当たる。

その３　下谷観音堂の五輪塔

この五輪塔は、天草市有明町上津浦下谷の観音堂境内に立っている。地元教育委員会の説明板によれば、明治のころ「東の堀」にあったものを、道路拡幅の際、現在地へ移設したものという。地輪が砂岩製、他は凝灰岩製である。このことから地輪は別物の可能性が高いが、全体的な違和感は見られない。現高は 164 センチを測る。水輪には四方にキリークが薬研彫されている。見事な塔形から 13 世紀後半と推測される。

なお、この地域は上津浦氏の拠点であり、近くには上津浦城跡がある。

これまでの調査から、四方にキリークを刻む石塔は、弁阿（聖光房弁長：応保２～暦仁元：1162～1238)やその流れを汲む一派により、布教された縁有る場所に主として確認されるものだ。なお、弁阿は、浄土宗第二祖で鎮西流の祖として知られるが、その一派の活発な布教活動は、13 世紀頃からであり、当時、九州において一大勢力を築いた。

弁阿が道場を開き拠点とした一つに、熊本県宇土市善導寺村があった。このようなこともあり、県内においても、鎮西流の四方にキリークを刻む石塔が点在するもので、現在、その集成を行っているところである。13 世紀頃と推測される石塔は、宇土市善導寺村善導寺跡は勿論のこと、宇城市小川町塔本の五輪塔、荒尾市浄業寺の宝塔（残欠）、玉名市伊倉本堂山の宝塔（残欠）など、数え上げれば枚挙にいとまがない。

これらは、僧籍にあった石工の技術を持つ僧侶が、この天草の地へ遊行、布教にともない造立

したものと推測される。平ノ口の宝塔は、砂岩製であり天草市下浦の産とみられることから、地元で調達した石材で宝塔を造ったものであろう。

さて、次に上天草市大矢野町大矢野城跡の大型五輪塔について紹介したい。現在、大矢野氏縁の石塔として、大切にされている。この五輪塔は、凝灰岩製で地輪と火輪が当初のもので、他の部分は近年の後補である。地輪と火輪の高さは、それぞれ50センチ、43センチ、幅は、64センチ、67センチを測る。なお、火輪は補修により当初の稜線が明確でないのが残念である。

ところで、この五輪塔は、上天草市教育委員会の情報では「中央五輪塔の火輪(笠部)は県立大矢野高等学校所有を、また地輪(下部)は上・馬場の二神家所有を寄贈して頂き当地に建立した。後列の五輪塔群は、元大矢野町大字中・字迫502番地から移築した。また宝塔は上・馬場上野家所有を移管したものである。」とする。

もともと、別な場所にあった石塔を現在地に移設したものだが、地輪と火輪は、形態や梵字の刻みの状況から、本来一具であった可能性もあろう。

なお、同所は『蒙古襲来絵詞』に登場する大矢野種保・種村の拠点地とみなされる地域である。残欠ではあるが、大矢野一族のものとみて差し支えなく、また、建立された時期については、薬研彫や火輪の全体的な形態等から、13世紀後半から14世紀前半と推測される。(注6)

同所には、他に14世紀とみられる宝塔塔身2基、戦国期の五輪塔数基と享禄元年銘の角柱石塔がある。先の下谷観音堂の五輪塔とともに、形態的には玉名郡玉東町西安寺の五輪塔の系統を引くものであり、僧籍に身を置き石工の技術を持った人々の活躍が推測される。

次に（2）（3）であるが、特に中世石塔に、銘文を刻んだものが少ないことについては、南北朝期以降となると天草地域の石塔数も増加しているが、銘文を刻んだものは極端に少ない状況にある。このことは、石塔を造る人々が地元に恒常的にいない状況であったと思われる。これは、小型石塔の多さと相関関係にあるように見受けられる。石工がいなければ、石塔を建立しようとした場合、他の地域から搬入することになる。運搬は、船運を利用するとしても、大型の石造物などは、運びにくいことが容易に想像できる。また、運搬しやすい塔種としては、分解できる五輪塔・宝塔・宝篋印塔・無縫塔などがあり、一方、板碑のように分解できない塔種や大型の石塔は、敬遠されることになろう。（4）の天草地域に、板碑が極端に少ない理由もこの点にあるものと推測する。

また、銘文を刻んだ石塔が少ないことは、運び入れた石塔に文字を刻む石工が恒常的にいなかったことによるのであろう。銘文が刻めない場合の手段としては、墨書することで代用される。これを証明するかのように、大権寺の石塔群を調査した結果、墨書銘のあるものを新たに4基、確認することが出来た。注意をしてみれば、まだ墨書銘が見つかる可能性が高いものであろう。

3　大権寺の石塔群とその初発について

大権寺の石塔群は、そのほとんどが残欠となっているが、なかでも、相輪の多さが目を引く。相輪を持つ塔種は、宝塔・宝篋印塔・層塔があるが、大権寺の石塔群のなかに層塔とみられる部材は、現在のところ確認できていない。

ところで、相輪の造りを大別すると相輪部の断面が円形のものと方形のものとに区分できる。石工の技術については、時代が下るに従い全国的な傾向として技術的に見劣りすることが指摘されている。相輪の形態についても同様で、手間のかかる円形のものから、加工しやすい方形のものへと次第に変化していく。需要の拡大する戦国期の後半ともなると、断面が方形に作られた相輪の割合が、円形のものより高くなっている。

石塔群のなかで、宝篋印塔の笠石や基礎石の数から見ると、塔身部の石材は異常に少ない。これは、五輪塔でも同様で、方形に作られた地輪の部材が少ない状態にある。おそらく、利用しやすい方形に整形された石塔の部材は、後世に石垣等に転用されたのであろう。今後、周辺調査等、行う必要があろう。

なお、前述のとおり石塔群は小型であり、造塔の時期は、その形態から14世紀後半から16世紀半ばころまでとみられる。

また、16世紀半ばとみられる無縫塔の残欠があり、この時期には、禅宗の寺院であった可能性もあろう。

ところで、天草地域で紀年銘を持つ石塔のうち、最古銘から５番目まで、この大権寺石塔群で確認されている。

その最古銘の石塔は、反花座を持つ基壇（地輪？）を陽刻した延文３年(1358)の石塔である。次に古い年号を持つ石造物も、同様な意匠の石塔で康安元年(1361)の銘を刻む。さらに、欠損しているが同様な形態のものに、永徳３年(1383)銘のある石塔を２基確認できる。これら４基は、いずれも北朝年号である。また、この４基の石塔は、夥しい石塔残欠のなかにあって一際、造りが立派であり、十分な存在感を示している。

しかしながら、延文３年や康安元年の頃に、はたして北朝年号を使用していたのか？との疑問が生じる。中村一紀は、「南朝方は天草氏・大矢野氏・栖本氏で、北朝方としては志岐氏と上津浦氏がいる。」（注７）とする。仮に延文３年、または康安元年の頃に、棚底城主と栖本氏は同盟関係、あるいは主従関係があったとすれば、当然ながら南朝年号である「正平」の年号を使用すべきものとみられるからだ。

しかし、ここで気を付けねばならないのは、石塔に刻まれた紀年銘が、はたして造塔時の年号であるのかどうか、検証を要することである。

そこで、石塔群のなかで、紀年銘を持つ６基の石塔銘文を拓本に採り、第96図「年号入り石塔拓図」に紹介するとともに、詳細に検討してみた。

以下、年号順に記してみる。

【延文三年塔】（以下「１号塔」）

戊

延文三年

戊

明俊禅尼

孟夏四日　　※「孟夏」とは「５月」のこと

【康安元年塔】（以下「２号塔」）

辛

康安元年

丑

道宗禅門

六月六日

【永徳三年一号塔】（以下「３号塔」）

永徳三年（欠損）

蓮恵禅門

八月彼岸廿五日

【永徳三年二号塔】（以下「４号塔」）
逆修善根

浄薫

昭陽　　※「昭陽」とは十干のうちの「癸」の異名
永徳三　　八月時（欠損）　　※「八月」に続く文字は「正」と推測される。
大渕獻　　※「大渕獻」とは十二のうちの「亥」の異名

【嘉慶二年塔】（以下「５号塔」）

嘉慶二年（欠損）

宗（欠損）

【永享十二年塔】（以下「６号塔」）
先妣浄（欠損）

禅定尼（欠損）

二十五年（欠損）

永享十二年（欠損）

六　　敬
廿四日
月　　白

赤子宮永正10年銘五輪塔（その１・２）

さて、以上のように列記してみたが、４号塔に「逆修善根」とある。これは、生前に自らの死後の冥福を願って供養を行うものである。このことから、本塔の造立は、紀年銘の永徳３年８月時正に逆修供養が執り行なわれ、造塔された事が分かる。なお、「時正」とは、彼岸の７日間を指すもので、逆修供養を行う日は、より仏菩薩との結縁があるとされる彼岸の頃に行われることが多い。

ところで、３号塔の紀年銘に永徳３年８月彼岸25日とあることから、３号塔と４号塔は、同時に建立されたことが知られる。おそらく「蓮恵禅門」と「浄薫」は夫婦であり、ともに二世安楽を願って秋の彼岸に逆修供養を行ったのであろう。

なお、一対で逆修供養塔を建立した例は、県内でも各所に見られる。ここでは、時代がやや下るが玉名郡和水町内田赤子宮の永正塔を挙げておく。（注８）この塔は、大権寺の１号塔～４号塔と同様な反花座を意匠（蓮弁の表現は省略され、円盤状を呈している）した塔形である。写真の「赤子宮永正10年銘五輪塔」を参照願いたい。銘文によれば、８月６日（おそらく彼岸）に、「孝子（子供）」が両親の逆修供養を行い、石塔の建立を行ったのである。２基ともに地上高80セン

チを測る。大権寺の１号塔から４号塔は、いずれも上部は不明であるが、赤子宮のような塔型であった可能性が大であろう。発掘された大権寺の石塔部材を含め、検討を行う必要があろう。

次に、１号塔と２号塔を見てみよう。前者は、延文３年５月４日、後者は康安元年６月６日とある。紀年銘は、いずれも命日と思われる日付けであり、追善供養による造塔と思われる。追善塔の建立については、早いものでは、死後２週間程後の造塔のものもあれば、数十年後に建立された例もある。１・２号塔の可能性としては、以下の理由から、永徳３年の建立が最も有力と思われる。

まず、書体に注目したい。「年」の表記に特徴がみられる。第一画の「ノ」のケ所が「ク」と表現されているもので、「年」の異体字が使用されている。このような特徴は、１号塔・２号塔・３号塔で確認できる。なお、４号塔には「年」の表記は無い。また、参考として５号塔・６号塔の「年」の部分を抜き出してみたが、全く書体が異なることが分かる。第97図「『年』の部分拓図」に提示したので参照願いたい。

次に、文字の刻み方についてみてみると、３号塔・４号塔の場合は、１号塔・２号塔の銘文よりもやや肉太に刻まれている。おそらく、逆修塔と追善塔との違いを表現したものであろう。通常、追善塔の文字は、死者であることを示すために墨が入れられる。これに対して逆修塔の場合は、生きていることを表現するために朱が入れられる。このような視点から先の２基をみると、紛れもなく「道宗禅門」「明俊禅尼」の文字に、墨が入れてあることが確認される。

次に、石塔の形態についてみてみたい。まず、１号塔から４号塔の４基（第96図　１号塔～４号塔）が、ほぼ同じ大きさであること、また、銘文を刻む面は、幅およそ31センチ、高さおよそ21センチを測ること。さらに、同質の凝灰岩が使用されていることや、上部の蓮華座の陽刻から、同じ石工の手になるものと推測できる。

これは、延文３年と康安元年との間に４年の開きがあるが、書体や文字及び反花座の刻み方や大きさから、この２基が一緒に造られたとみられるものだ。また、３号塔・４号塔の造立される永徳３年までの期間をみると、延文３年から数えて26年目、康安元年でも23年目となる。仮に４基の建立が同時でないとした場合でも、造立には余り時間的な開きはないものと思われる。仮に20年ほどの時間をおいた場合、同じ石工といえども同様な石材を探して同じ意匠の石塔を造ることは、至難の業であろう。中世の石塔の意匠の変化が少ないとはいえ、石工の技術者としての誇りや性から、それぞれの時代の最先端の流行を取り入れるものであり、時代を反映した意匠となる傾向が強いからである。さらに、同時に建立した同型の石塔に、紀年銘を表記する場合、あえて違った表記がなされることもよくみられるものだ。

このようなことから、永徳３年８月彼岸に「蓮恵禅門」と「浄薫」の夫妻が、自らの逆修供養を行うとともに、おそらく父「道宗禅門」と母「明俊禅尼」と推測される人の追善供養を、執り行ったのであろう。当地の領主として赴任したであろう蓮恵禅門は、逆修供養を行うに当たり、周到な計画と権威のある僧侶を多数招聘し、そのなかの一人の石工の技術を持った僧侶により銘文が刻まれたものとみられる。逆修供養後は、石工の技術を持ったいわゆる「大工僧」は、他所に移動したものとみえ、以後、銘文を刻んだものは、５年後の嘉慶２年（1388）まで、またねばならない。

なお、追善と逆修供養を同時に行った例として、玉名市伊倉本堂山の五輪塔（注９）がある。これは、建長７（1255）年11月12日に亡くなった念阿弥陀仏の生極楽を願い文応元年（1260）８月彼岸に、追善の供養塔を建てたものだ。

さらに同所には、宇佐大宮司公長逆修塔（注10）がある。宇佐大宮司公長は、自らの極楽往生を願い卒塔婆を造立している。それはまた、念阿尊霊の追善供養塔の建立の日、つまりは、文応元年８月彼岸日であり、まさに自らの逆修供養塔を建てた同じ日であった。当然、追善供養と逆修供養とを同時に行ったことが推測されよう。

大権寺の場合もこれと同様と思われ、蓮恵禅門と浄薫が、両親の追善供養と自らの逆修供養を

行ったのであろう。

では、何故に永徳３年に逆修供養を行ったのであろうか？逆修供養を行うには、当時において多額の費用を要する一大イベント（注 11）であり、単に宗教上の問題のみではなかったと思われる。大権寺の檀那である蓮恵禅門は、おそらく戦略上、重要な地域となった同地の領主的立場で赴任したものと推測される。また、先祖を敬い追善供養を行い、一族の結束と新たな土地における領主としての威厳をアピールする意味合いもあったであろう。

このような例として、玉名郡玉東町西安寺五輪塔群がある。なかでも、正嘉元年(1252)８月に建立された五輪塔は、山北相良氏の祖として知られる相良頼平の逆修供養として、造塔されたものである。五輪塔には、領主としての存在を「當寺大檀那　遠江国住人相良三郎　左右衛門入道浄信」と刻んでいることから、当地の経営に当たっていたことが推測される。（注 12）

大権寺の反花座を刻んだ４基の石塔は、永徳３年８月彼岸日に建立されたものと推測するもので、大権寺の開基年代を推し測る上でも、貴重な石塔資料といえよう。以上のことから、大権寺の開基は、永徳３年より数年を遡る程度と思われる。

では、何故に永徳の頃であるのか？歴史的背景を考えてみたい。まず、永徳元年６月に菊池本城が落城する。これ以降、南朝方は、しだいに八代方面へと拠点を移して行く時期に当たる。

これに対し北朝方は、今川了俊を筆頭に南朝方の拠点となった八代攻略に乗り出して行く。陸路を南下する場合は、北朝方の川尻氏を頼りにしても、白川左岸はやや状況が違っていた。当時、宇土半島基部は、南朝方である宇土氏の勢力下にあったことが推測される。（注 13）

このことから、海路を選択した場合、どうであろうか？了俊は、八代を攻略するに当たって、八代のさらに南方に陣取る島津氏との連携を探る一方、八代海の制海権を掌握することに腐心したものとみられる。このことは、天草方面の南朝方を味方に付ける必要があり、多くはこの時期に北朝方に組み込まれたものであろう。（注 14）

このように、同地が八代海の制海権を握る上で、にわかに要衝の地となった事によるものと、推測する。

４　まとめ

本章では、まず、天草地方の鎌倉期の石造物について、特に浄土宗鎮西派の影響を受けた石塔について触れた。また、石工の性格や存在の有無を検討するとともに、石工の不在から派生する問題として、天草における多くの石塔の持ち込みがなされたこと、その結果、必然的に運搬しやすい小型で分解可能な塔種が好まれ、運搬しにくい板碑等は敬遠されたことを述べた。さらに、石工の不在による銘文記載の手法は、石に刻むのではなく、墨書することが多くなされた可能性を挙げた。

なお、どの地域から石塔が持ち込まれたかについては、宇城地方や宇土方面の石塔との共通性がみられるものの、今後の研究にまちたい。

また、大権寺については、石塔の初発と寺の開基年代について検討を行ない、永徳３年を遡る数カ年と推測した。これは、棚底地域が八代海の制海権を押さえる戦略上の要衝地へと変化したことが大権寺の成立の背景にあるとした。

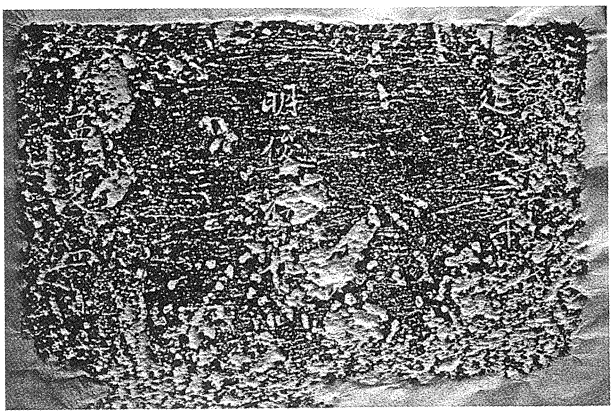
なお、南北合一後の棚底城の性格は、当然、変化している。また、大権寺についても戦国期は禅宗であった可能性があり、宗教については、今後の検討課題であろう。

注１　鶴田八洲成「天草の中世石造文化（含・近世）」『天草建設文化史』社団法人天草地区建設業協会　昭和 53 年

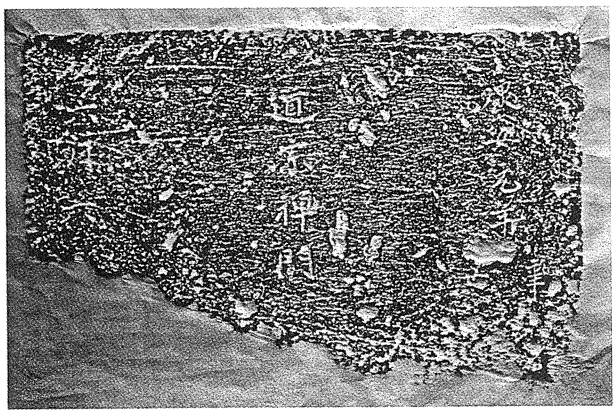
注２　阿蘇品保夫「大権寺遺跡と棚底城主試論」『棚底城跡Ⅱ』倉岳町教育委員会　平成 18 年

注３　前川清一「中世の石工」『南関町史別冊　仏神像・石造物』南関町　平成９年

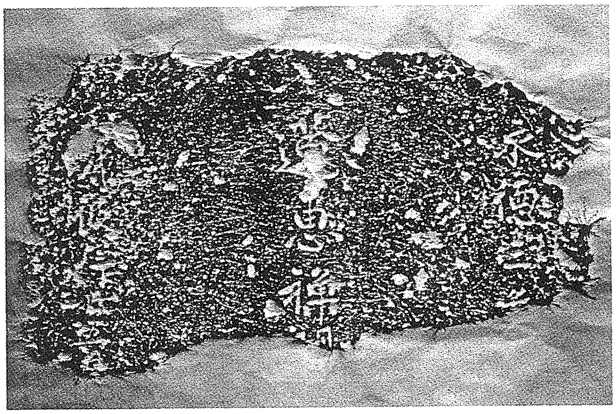
注４　前川清一「石碑曼荼羅(24)」『舫舟』舫舟の会　昭和 62 年



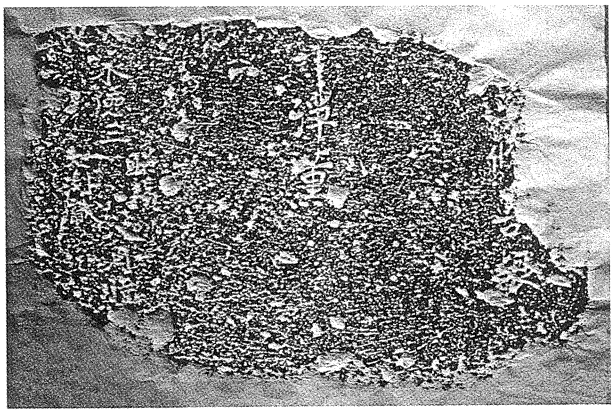
１号塔



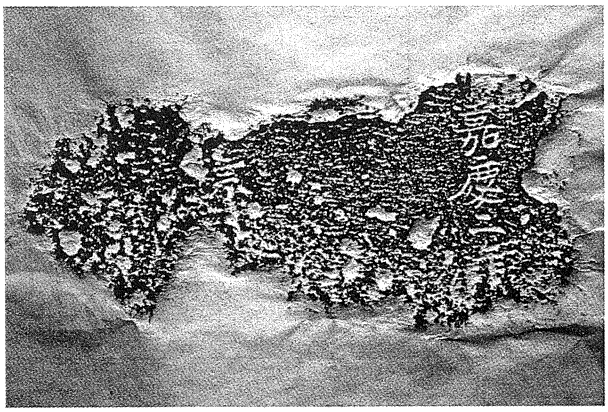
２号塔



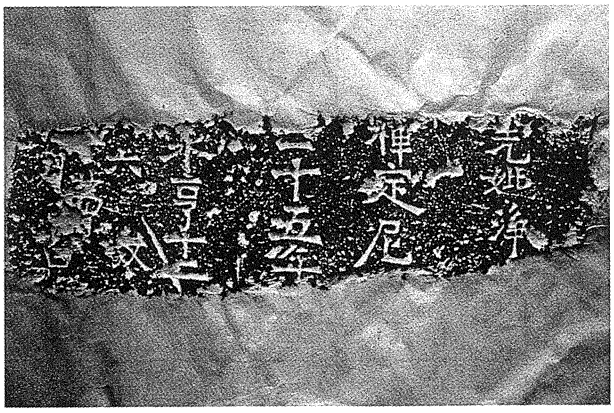
３号塔



４号塔



５号塔



６号塔

第96図　年号入り石塔拓図

注５　平木菁「楪野の石工」『南関町史別冊　仏神像・石造物』南関町　平成９年

注６　狭川真一「西安寺五輪塔群の形態的位置」『肥後国西安寺五輪塔群』玉東町教育委員会　平成19年

注７　中村一紀「南北朝の内乱と天草・大矢野」『上天草市史　大矢野町編２　中世　大矢野氏の活躍』上天草市　平成19年

注８　前川清一「石造物」『菊水町史　資料編』菊水町　平成18年

【赤子宮永正10年銘五輪塔　その１】

奉造立逆修善根功徳
壽命長遠子孫繁昌現世
安穏後生善處出離生死
頓證菩提乃至法界平等
敬
利益故也　孝子等
白
（梵字・アン）
現存道秀禅門本命元
辰福禄壽位
癸
干時永正十年　八月六日
酉

【赤子宮永正10年銘五輪塔　その２】

奉造立逆修善根功徳
壽命長遠子孫繁昌現
世安穏後生善處　出離
生死頓證菩提乃至法
界平等利益故也
敬
孝子等
白
（梵字・アン）
逆修現存妙珎禅尼
本命元辰福禄壽位
癸
干時永正十年　八月六日
酉

注９　玉名市・玉名市史編集委員会『玉名市歴史資料集成第五集　高瀬湊関係歴史資料調査報告書（三）』昭和63年

【念阿供養塔】

専修
念阿尊□□
佛本願无量
必生極樂界
建長七乙卯
十一月十二日死
今文応元年

八月時□

【宇佐大宮司公長逆修塔】

□宇佐大宮司

公長現在□時

為臨終生極樂

自造卒塔婆也

文応元年庚申

八月彼岸日

注 10　前川清一「西安寺五輪塔群の建立時期について」『肥後国西安寺五輪塔群』玉東町教育委員会　平成 19 年

注 11　水藤真「八　葬送や石塔の費用」『中世の葬送・墓制』　吉川弘文館　平成３年

注 12　工藤敬一「文献から見た山北相良氏について」『肥後国西安寺五輪塔群』玉東町教育委員会　平成 19 年

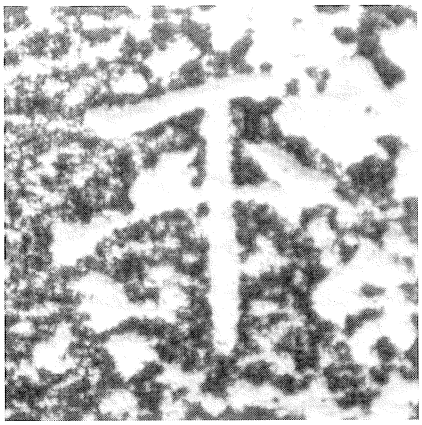
注 13　前川清一「八代市の金石文」『八代市の石造物』八代市教育委員会　平成 12 年

天授７年銘鰐口が宇土八幡宮へ奉納された。また、永徳元年銘鰐口が大隅国桑原郡筒羽野村(鹿児島県姶良郡湧水町)へ奉納された。今日、いずれも当初の位置から移動している。

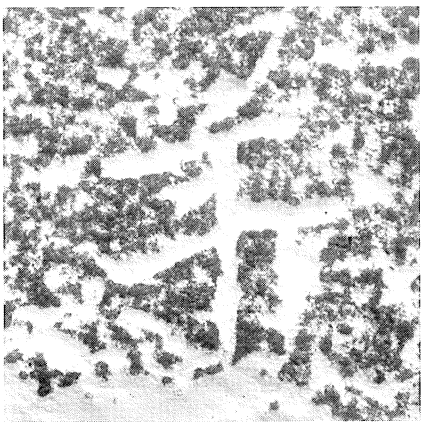
②『新宇土市史』宇土市教育委員会　平成 19 年

正平 19 年３月 15 日の紀年銘を持つ梵鐘（現在所在不明）が「宇土庄鎮守三所大明神」に寄進された記録がある。大檀那「藤原　氏女　同氏虎熊丸　少弥道光」が寄進したものだ。このなかの「少弥道光」は、宇土高俊とみられる人物である。なお、宇土市城山の近世宇土城跡から出土した正平５年８月の紀年銘を持つ五輪塔地輪には、壱岐守高俊が逆修供養のために造塔したことが刻まれている。

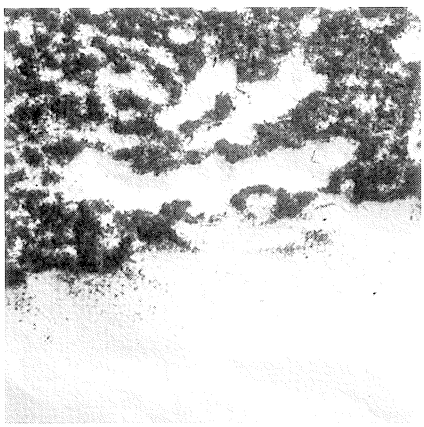
注 14　阿蘇品保夫　「大権寺遺跡と棚底城主論」『棚底城跡Ⅱ』倉岳町教育委員会　平成 18 年



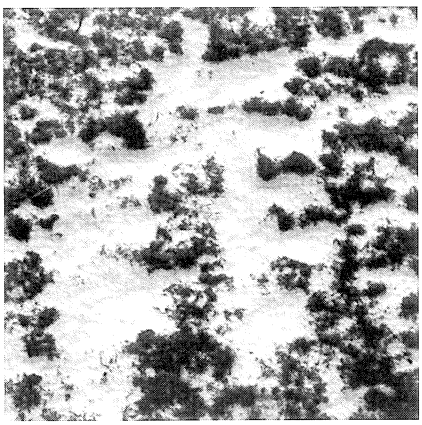
１号塔



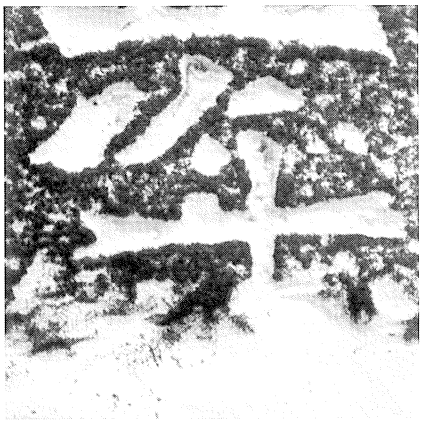
２号塔



３号塔



５号塔



６号塔

第97図　「年」の部分拓図

大権寺の石塔の紀年銘

服部英雄

大権寺石塔では

1　延文三年孟夏四日　　1358
2　康安元年辛丑六月六□　　1361
3　永徳三年（欠損）八月彼岸廿五日　　1383
4　　昭陽
　永徳三　　八月時（正）
　　大渕献　　1383
5　嘉慶二年（欠損）　　1388
6　永享十二年（欠損）　　1440

の紀年銘が確認されている。筆者に課せられたテーマは南北朝期、南朝年号の使用が多かった肥後において北朝年号を使用していることの意味を明らかにせよ、というものである。しかしこの課題は容易ではない。なぜなら前川清一氏によれば、これらはすべて永徳三年に作成されたもので、延文、康安はいずれものちに日付を遡って記されたものとされているからだ。これによれば、年号が使われていた時期、リアルタイムな時間帯に、どのような年号をかれらが使用していたのかは、実のところわからない。あとから記入された年号に北朝年号が記されていたとしても、そのことから当時の政治情勢を読み取ることはできないだろう。

銘文はこれまでの報告書では完全には読まれていなかった。今回前川清一氏の新採拓によって、読解が正確になった。文字がないとされていた場所にも干支が記されていることが明瞭になった。前川氏説のように、石材、様式の同一性から延文・康安の二人（両親）分を含め永徳に浄薫・蓮恵（夫妻）が建立したとする見解はたしかに説得的である。しかし断言しきることに、躊躇がないわけではない。もしも石塔に規格性があって同一の石工ないしは親子や弟子筋に当たる石工の作成に関わるならば、同じ大きさ、様式の石塔が造られやすかったともいえる。また墓碑形式には先祖や二親のものを踏襲する傾向、家としてのスタイルが認められる。たとえば熊本妙解寺の細川家墓所の殉死者碑は細川忠利のものと光尚のものが酷似する。ここまで似るのかと思うほどである。中尊寺金色堂の三代分の遺骸を納める須弥壇それぞれは、細部意匠は異なるけれど、全体に前代のものを踏襲したことは明らかである（註1）。

前川見解を検討しておく。個々の石塔には前川氏が強調する共通性がたしかにあるが、同時に個性もある。浄薫の碑文には永徳三年「昭陽大淵献」「八月時正」とある。昭陽は癸の異称、対になる大淵献は亥の異称であわせて癸亥(4)となる。この干支の書き方は他と比べて異質な感じがあって、つりあいがとれていない。しかしこの点は彼女が建立主体であるから、特異な表記がされたと考えれば納得はできる。時正は彼岸中日をいう。昼の長さと夜の長さが同じ日であるから、太陽暦ならばおおむね 3 月 23 日である。蓮恵碑(3)に八月二十五日とあるから、この日が時正のようだ（註2）。

浄薫蓮恵両塔が同日の建立であることは前川氏の指摘の通りであろう。蓮恵禅門は男性であるから、浄薫が女性で、二人は(おそらく)夫婦であった(姉弟、兄妹の可能性もある)。浄薫のみに逆修善根とある。逆修であることを右側に明記し、ふつうなら右に書く年号は墓碑の左側に移した。彼岸中日とする日付は浄薫も蓮恵も生存者であることを示そう。故人ならば命日を書いたように思われるからだ。もしそうだとするとなぜ生存する蓮恵に逆修と書かずに、他の死者たちと同じ形式にしたのだろうか。このこともよくわからない。永徳塔は延文・康安の二塔をどのように意識していたのだろう。

延文・康安・永徳塔相互にも差異はあるし、また永徳塔と嘉慶他の石塔にも様式上の類似性は

指摘できる。

すなわち前者については書体の差がある。永徳のものは太目の字体だが、延文・康安は細い。とくに延文文字は繊細で洗練されているが、永徳はその逆である。禅の文字が三石塔に共通するが、「しめすへん」から受ける印象はかなり異なり、「しめすへん」二画・三画は似ない。前川氏は「年」の文字の第一画・二画が「ク」となっている点から同筆とされたが、永徳塔には残画しかないので全体の印象を検討できない。ハネは少しちがうようだ。同筆ではないともいえないが、同筆だと断定もできない。年月日の書き方は延文では孟夏だが、康安では六月である。同時に同一人が作成し、統一規格にあわせたのなら六月ではなく、仲夏としたような気がする。

また右側に年号・年を書いてその下に干支を書く手法は上記四塔のうち三塔に共通していたが、ほかにも嘉慶のものや、破損して読めないが昭宝和尚のものにも共通しているので、この地域（制作石工の家）では一般的で基本形だったといえる。

二十五年間も親の墓さえ建てられない状態であったのに、いきなり四つもの大きな塔を一度に建てることができた、となると、いったい何があったのか。全くの新興勢力だったのだろうか。

わからないことが多い。もちろん石の大きさは四塔のみが卓越していて、他とは際だった差異であり、共通する。この点、前川氏指摘のとおりである。前川氏の見解が優れた斬新なものであることをふまえても、なお四つの塔のうち、延文・康安二塔が異なる時期に建てられた可能性は、100%消え去ったわけではない。父母であった可能性はあるが、文言には悲母、慈母、孝子など何も書かれていない。

以上を前提として四塔に書かれた三つの年号を検討する。

菊池氏の勢力が強い肥後は、概して南朝年号だった。大権寺にて北朝年号が使用されたことは天草には反菊池（反征西府）勢力があったことを示している（註3）。瀬野精一郎『南北朝遺文』九州編によれば、この年1358年の延文三年北朝年号使用文書は京都発給を除くと、12通である（京都発とは足利義詮発給1、正八幡宮領家3、足利尊氏発給2）。

北朝（延文三）	豊後1　肥前1　日向5　大隅5
南朝（正平十三）	筑前1　筑後1　豊前9　豊後4　肥前5　肥後6　日向3　大隅2　薩摩10

南朝年号使用者が薩摩に多いのは島津氏が南朝年号を使用したからである。豊前豊後にも多いが宇佐社や大友氏が南朝年号を使用したからである。肥後はむろん、肥前も多い。

一方大隅・日向で北朝年号を使用したものが多い。その中心は畠山直顕である。彼は足利尊氏に対立した足利直冬党であった。足利直冬はすでに九州を立ち去っていたが、なお直顕に敵対する島津氏・大友氏が南朝年号を継続して使用していた。彼らとの対立を明確にする上でも、北朝年号を使用し続けただろう。追筆のようだが武藤頼直（「大宰少弐」）も北朝年号を使用していたらしい。武藤（少弐）氏は一貫して直冬党の中心人物であった。すると南朝年号が優勢である中で、直冬党の残党は北朝年号を使用していたと想定できる。従来の対立が年号使用の差異となって現れていた。

さて肥後における直冬党といえば河尻幸俊である。この段階でも河尻氏は征西府と敵対していたと考えられる。正平十三年八月十三日征西将軍宮令旨および九月十七日菊池武光打渡状ほか（阿蘇文書・岡田文書、『南北朝遺文』4059、4067、4092、4093）に恵良惟澄の兵粮料所である肥後国守富庄半分地頭職について懐良親王御教書を発給したが、河尻七郎代官が「不避退」とある。征西府に従っていないことは明らかなので、やがて、ないしはすでに敵対していただろう。南朝年号の使用を拒否したことが想定できる。恵良惟澄申状（阿蘇文書『南北朝遺文』2835、3880）によると、七郎は河尻三河入道広覚の子息で、正平五年段階ではいったん南朝と結んでいたが、まもなく叛旗を翻したようだ。征西府に敵対する直冬党であった河尻氏は北朝年号を使用していたと考えられる。

天草・大権寺で北朝年号が使用されていたとすると、この地域はその影響下にあったと考える。河尻は水軍力を持ち中国（明）にも往き来した。この寺（城主菩提寺）、そして庇護者である城主も、河尻氏との同盟関係か支配下にあったと想定する。

つぎに康安元年についてみる。改元は三月二十九日であるが、南九州での使用は遅れる。文書の上で確認できる最初の康安年号の使用は七月の大隅正八幡宮坪付注進状である。薩摩・日向では八月末になっても延文年号を使用していた。康安元年六月六日は九州で確認できる最初の康安年号使用例となるけれども、むろん六月六日は命日、死亡した日であり、この日に墓を建立するはずはない。墓碑はもっと後に建てられた。

この一年の北朝年号（延文・康安）と南朝年号（正平十六）の使用を確認する。京都発など九州以外から発給された文書は除く。

南朝（正平）　　豊前7　豊後1　肥前13　肥後17
北朝（延文・康安）筑前1　豊前3　豊後1　肥前6　肥後1　日向10　大隅3　薩摩4　対馬3

南朝年号使用者は先の段階に比べると、範囲が縮小した感がある。肥後での北朝年号使用者は宇治惟村で、彼は終始北朝方で、益城郡を根拠として南朝方の弟惟武と対立していた。南朝勢力は局地化しつつあったので、もともと北朝年号を使用していた大権寺（反菊池勢力）での北朝年号はこの趨勢に支えられていく。

註１　紀年銘が過去帳（大権寺所有）によっていて、過去帳の記述を踏襲したとするならば、後刻の銘文であったとしても延文年号使用の意味を検討する意義はある。この可能性は、証明できないが完全に捨てることもできない。

註２　『三正綜覧』によればユリウス暦 1383 年 9 月 23 日が八月二十七日、グレゴリウス暦 1383 年 9 月 23 日が八月十八日。ユリウス暦は天文学上の太陽暦よりは遅れていて、そのため 1582 年にグレゴリウス暦に切り替わったとされている。

註３　延文三年孟夏四日とはグレゴリウス暦（現行西暦）1358 年 5 月 20 日に該当する。康安元年六月六日は 1361 年 7 月 16 日に該当する。

第Ⅶ章　総括

調査結果と考察編における各論考の成果により総括としたい。

棚底城跡は、決して大名クラスの居城にあたるような大規模山城ではなく、文献記録からも、八代日記に上津浦氏ないし栖本氏の抗争舞台として、天文 13 年から永禄３年までの限定された期間の記述が残るのみで、謎に包まれた部分が多い城郭である。しかし、発掘調査及びその後の研究により、詳らかになった事象も少なくない。

棚底城跡の年代は出土遺物から 14 世紀後半～15 世紀中頃のⅠ期、15 世紀後半～16 世紀前半のⅡ期、16 世紀中頃～後半までのⅢ期に大別される。画期毎にその特徴を考えてみる。

Ⅰ期　創建期　ベトナム青花と大権寺遺跡

Ⅰ期は棚底城創建期と考えられる。それ以前の時代、小野氏が Pre Ⅰ期とする鎌倉期の遺物も若干見られるが、青白磁合子等は空間装飾品として伝世する可能性も高く、これらの遺物から安定的に城郭が成立していたとは言い切れない。しかし、Pre Ⅰ期にあたる遺物は表 F で見る青磁 B-Ⅰ類などでⅠ郭からのみ出土していることから、城郭の前身としてⅠ郭を生活空間として利用していたともいえる。

さて、城跡の遺構として確実にⅠ期に遡るものは峻別ができておらず、Ⅰ期に属する遺物量も全体の出土量の中ではやや少なめであるが、青磁 B-Ⅱ、D 類、高台Ⅰ、Ⅱや白磁 D 類などが見られ、城内において本格的に生活が始まったことを示唆している。

Ⅰ期の遺物として特に注目されるのが、Ⅳ郭から出土したベトナム産青花碗（第 54 図-231）である。口縁部が外反し、簡略唐草文を外面の胴部、内面の口縁部に廻らすこの手の碗は、長崎県壱岐市覩城跡や同対馬市水崎遺跡での出土例から 14 世紀後半～15 世紀前半の年代が与えられている。231 はコバルトを使用した青花であるが、同文様を鉄絵で描く同器形のタイプも存在する。同種の陶磁器は、壱岐覩城跡、対馬水崎遺跡を中心に、福岡県博多遺跡・大宰府史跡、沖縄県勝連城跡など、九州の東シナ海沿岸域を中心に出土している。

ベトナム陶磁を研究している森本朝子氏によれば、14 世紀中頃～15 世紀中頃のベトナム陶磁は上記の遺跡を中心に、佐賀県唐津市佐志中通遺跡、同伊万里市河内野遺跡、長崎県平戸市平戸和蘭商館跡、鹿児島県坊津泊海岸遺跡などで１、２点確認されている（註１）。県内では、玉名市菊池川河口遺跡、天草市河内浦城跡で出土している。その分布は広島県草戸千軒遺跡や大阪府堺環濠遺跡まで広がるが、概ね東シナ海沿岸に位置している沿岸遺跡が中心となっているとみて差し支えない。水崎遺跡は小野氏の指摘のとおり、宗氏の下で貿易に携わった早田氏と関わる遺跡で、覩城は松浦党の志佐氏がその城主である。いずれも倭寇的性格が指摘される在地領主である。Ⅰ期にあたる時期は、日本では南北朝の動乱、中国では明の建国と海禁政策の発動が行われた時代である。各領主や商人による密貿易が行われた時代にあって、棚底城主も島嶼部の領主として、倭寇稼業や交易に携わった可能性を指摘でき、海洋的営利がもたらした結果として大権寺遺跡の隆盛を考えられよう。

棚底城跡の西方約 400m、大権寺古塔群と呼ばれる中世石塔の残欠集積地に、延文三年(1358)、康安元年(1361)、永徳三年(1383)、嘉慶二年(1388)の北朝年号及び永享十二年(1440)の紀年銘を持つ宝塔・宝篋印塔部材があり、棚底城Ⅰ期と並存していた。南北朝年号を持つ部材は天草ではこの大権寺古塔群のみであり、紀年銘石塔として延文三年銘は天草最古のものである。また、完存塔はないが、従来の残欠塔部品数と今回報告した大権寺遺跡確認調査により出土した部材により、宝塔及び宝篋印塔が 74 基以上、五輪塔が 81 基以上存在していた可能性があり、この数字は天草地方で最多の石塔数でもある。

大権寺地区は旧来より「棚底城の菩提寺」伝承があった。今次報告の確認調査では、明確な生活遺構が検出できなかったが、寺院に関連すると考えられる SW0102・SS01 などの遺構と遺物

が出土した。遺物は少なくしかも細片が多いが、中国産天目と白磁森田D類の出土が目立つ（第77図-52、53他）。白磁D類は小型の坏を中心としたグループで、14世紀後半から見られ、15世紀に安定的に流通する。15世紀後半には景徳鎮青花普及に伴って、同じ景徳鎮産白磁E類に交代していく。調査面積の問題もあるが、ひとまず棚底城跡では白磁D：Eの出土比率が4：106であるのに対し、大権寺遺跡では5：0であり、大権寺では14世紀後半～15世紀中頃にその盛期があるのは疑いない。

北朝年号の解釈については、永徳三年の一括建立を採る前川氏説と延文・康安年の建立を採る服部氏説を並載したが、紀年名はいずれも14世紀後半の北朝年号であり、彫出蓮華文は天草石塔随一の優品である。棚底城跡の創建は延文～永徳にかかる北朝年間と考えてよいだろう。14世紀後半から15世紀前半は貿易陶磁編年が手薄な時期であるが、出土遺物の量からは白磁D類や青磁破片の状況から15世紀寄りである。前川氏が指摘するように、石塔類は船舶で運搬された可能性が非常に高い。大権寺における石造物は、一部の地元安山岩・砂岩製を除き、熊本県で一般に産出する阿蘇溶結凝灰岩製によるものがほとんどである。天草では五和町御領で黒色凝灰岩を産出し、そこから運び込まれた石塔が存在する可能性も否定できないが、紀年銘石塔のような丁寧な造りが施された部材は、第Ⅳ章で報告したような灰色～灰白色で硬質凝灰岩の製品で、御領産ではないと考えられる。このことから、船舶による棚底への石塔輸入が日常的な風景であった。

Ⅰ期の棚底城主は具体的に特定できないが、私的な交易や海賊行為など海運を利用した活発な活動により富を得ていた領主である可能性が高く、その活動の中で、直接間接かは別にして、ベトナム青花碗を入手することができたのであろう。その経済力は同時期に城跡に隣接して営まれた大権寺石塔の質量から窺える。

城本体は、Ⅰ郭を中心にⅣ郭まではこの時期の遺物が存在しているが、青磁D類、高台Ⅰ・Ⅱや白磁D類などこの時期に普遍的な遺物はⅤ～Ⅷ郭でほとんど見られない。Ⅳ郭まで東南東へ連なっていた尾根筋が、Ⅴ郭以降は北東方向へ「く」の字状に方向を変えている。またピットの密度がⅠ～Ⅳ郭は非常に濃く、Ⅴ～Ⅷ郭ではかなり薄い。ピット数がある程度構築物の建替えを反映しているとすれば、Ⅰ～Ⅳ郭はその回数が多く、長期間に亘る生活が考えられる。Ⅰ期段階では城の縄張りがⅣ郭までで留まっており、16世紀後半の縄張りに比べて小規模であった可能性が高い。

Ⅱ期　生活盛期　多量の貿易陶磁と期末の被熱遺物

Ⅱ期においては、青花の小野C群碗・C群皿、B1群皿、白磁の森田E群皿が主体となり、属する遺物が最も多い。生活空間としてのピークである。

Ⅰ郭の中心Ⅰaにおけるピットは300を数え、その多くは、前述の通り繰り返し建替えられたことを示す建物跡柱穴であろう。掘立柱建物の耐用年数を30年程度と常識的に考えれば、Ⅰ期から構造空間を時宜に応じて変容させながら利用していたことは明らかである。一方で南側Ⅰcとする小ピット群は列状配置のまま検出されており建替えは行われていないと見える。時限的なものであったのか、床束そのものを変えずに天板部材のみを差し替えていたのかは不明であるが、舞台的な配置を持つ遺構である。Ⅱ期の豊富な貿易陶磁量からこの期に属するものであろう。この点から勘案してⅡ期Ⅰ郭には大型建物と舞台的施設があり、外交的対面空間が維持されていた可能性が考えられよう。

さて、朝倉氏館跡など幕府の権威を模した文化儀礼の影響を強く受ける守護大名の城館では、出土遺物のうちに土師質土器皿（かわらけ）の占める割合が90%以上にも及ぶ。主に酒杯として用い、汚濁する故に一度きりの使用で即廃棄し、儀礼における清浄性を演出するとされる。この土師質土器の出土量が棚底城跡では20%に満たない。儀礼酒宴時利用以外の用途として、灯明皿は勿論であるが、柱穴の鎮壇具として埋置する例もある（註2）。棚底城跡でも依存状態の良好な

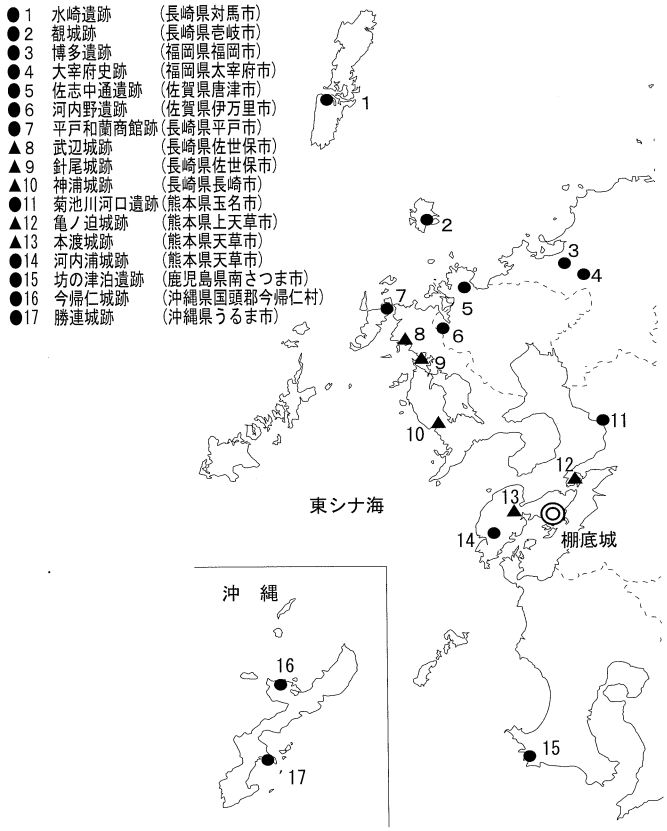
例は柱穴出土のものが多いようであり、同様の利用法も想定される。

逆に貿易陶磁の比率は全体の出土量の56%をしめるという極めて特徴的な比率である。残念ながら中世遺跡での層位的発掘調査の進んでいない熊本県では中世後期の土師質土器編年が定まっていない。また遺構面までの層が極めて薄い中世山城では一括遺構で無い限り、編年作業は困難である。このため、棚底城跡においても土師質土器の画期ごとのプロポーション及び所属時期の出土数を把握することは難しいが、Ⅱ期については全体の数値よりもさらに貿易陶磁比率が高まっていると考えるのが自然である。

県下の中世城館で出土遺物の組成比が報告されている遺跡は少ない。このため現段階での地域ごとの組成特徴比較は難しいが、本城跡のように出土遺物における貿易陶磁の割合が 50%を超える状況はおそらく肥後地方（ここでは天草を除く九州本土の肥後国）の領主レベル城館より、肥前西部の状況に近いと考えられる。これは三川城跡の調査例などから天草の他の城跡についても同様であろうと推測される。

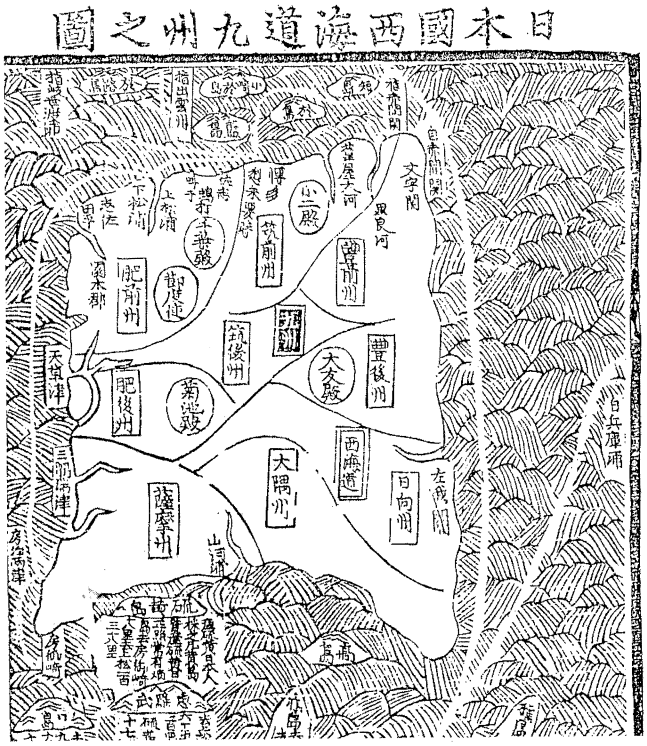
肥前西部では直谷城跡で貿易陶磁率が45.3%で松浦地域全体では概ね 40～50%、坂口館跡の 72.3%をはじめ大村湾沿岸地域では 30～70%という数値が出されている（註3）。棚底城跡の比率もこれに準じているとみてよいだろう。比較的自由に貿易陶磁を選択所望できた沿岸域の在地領主の特質を示している。

肥前地域との共通性は、陶磁器のみならず、岩盤加工の状況にも当てはまる。棚底城跡に見られるような岩盤加工の柱穴は、砂岩を加工した佐世保市武辺城跡（註4）、風化玄武岩盤の同市針尾城跡、結晶片岩の長崎市神浦城跡（旧外海町）（註5）などに見られる。平地の少ない地域における城地選定や強固な建物を作事するための工夫に起因するものであろう。武辺城跡では備前焼が、針尾城跡、神浦城跡では中国産陶磁の出土量が卓越し、



● 14世紀中頃～15世紀中頃のベトナム陶磁器出土遺跡
▲ 岩盤を加工した造りの中世城跡

第98図　関連遺跡分布図



第99図　日本国西海道九州之図

申叔舟 海東諸国紀』岩波書店
1991　P384より転載

いずれも土師質土器が少ない。国産・中国産の差異はあるが非在地産の陶磁類が多くを占める遺物の状況も類似性が認められる。天草では上天草市の亀ノ迫城跡で岩盤掘込みの２間８間建物跡が検出されている（註６）。本市で実施した本渡城跡の確認調査においても岩盤掘込みのピットが検出されており（22 年度報告予定）、沿岸部の城郭調査の進捗によって同様の事例は増加すると考えられよう。

同時代のものと断言できないが、中国産天目碗片、茶入、建水と考えられる陶器、石製風炉、茶臼など茶の湯道具が概ね過不足なく出土しており、城主の生活レベルからⅡ期に属するものである可能性が高い。県下で初めて多量に出土した碁石など、城内での豊かな生活水準を示す遺物は総じてⅡ期のものに所属すると思われる。

豊かな生活が行なわれる中で、縄張りもこの時期に拡大すると考えられる。潤沢な経済力は動員可能人員数に連動すると考えるのが自然であり、特にⅠ期に遺物が見られなかったⅤ～Ⅷ郭で、白磁Ｅ皿、青花Ｃ碗などの遺物が満遍なく出土していることからⅡ期から積極的な使用が始まったと思われる。応仁の乱以降の戦乱が頻繁となった時勢に対応するために、縄張りを東側へ進展したものと想定できよう。出土遺物の分布状況から、Ⅲ期に到達する高度な防御施設構築を除き、城地の拡張はⅡ期を中心に行われたとみたい。

Ⅱ期の中頃にあたる時期、天草の各領主は菊池氏に属していた。志岐文書に残る明応十年(1501年)の「天草一揆談合覚書」で知れるとおり、天草の国人領主は連合体として結集していたようである（註７）。

1472 年申叔舟によって編まれた『海東諸国紀』の西海道九州国之図には、肥後国統治者として「菊池殿」、その門戸にあたる港として「天草津」を記す（註８）。また、誤って薩摩に「三隅湍津」（宇城市三角）の記述を残す。当時の守護菊池為邦は「歳一、二船遣わすを約す」とあり、菊池氏は朝鮮半島との通交を行なっており、東シナ海へは天草諸島が作る水道を通る必要がある。文明十六年（1484 年）の「菊池重朝書状」に菊池氏が名和氏と相良氏の斡旋に上津浦上総介邦種を遣わしている。「邦種」は為邦よりの一字拝領と考えられ、上津浦と菊池の主従関係を示すものである（註９）。菊池氏の貿易には、なんらかの形で天草の諸豪が関わっており、棚底城跡Ⅱ期の豊富な貿易陶磁出土もこのような背景によるものであろう。

しかしこの後、菊池氏の弱体化・大友氏の肥後介入が始まり、肥後国内が混乱状態におちいる。これに連動するように天草一揆衆も、足並みが乱れ個々に争う状況に突入する。

Ⅱ期の遺物のうちに、被熱資料が多いことは小野論考にみる通りであり、特に青花 Ｂ１皿が多数をしめる。この天草争乱の当初にすでに城が火災にあったことを物語っている。文献上で棚底城が争乱の舞台となるのは八代日記に見るとおり、Ⅲ期の天文 13 年以降であるが、いわゆる饅頭心の青花Ｅ碗や漳州窯系碁笥底皿などⅢ期にあたる遺物は被熱していない。天文元年の上津浦合戦では、天草・志岐・大矢野・栖本・長島対上津浦という、ほぼ全島の領主を巻き込んだ上津浦包囲網という図式が見られる。上津浦氏は相良氏の合力をかなり頼みにしていたようで、一見孤立したかのような条件でありながら、他の領主連合との交戦に及んでいる。棚底城はこの際史料に出てこないが、相良が上津浦城に在番を派遣している戦況から鑑みても、この一件と被熱遺物との関わりは深いはずである。天文 13 年まで上津浦一族が棚底在城であったのは確実であるが、いつの時点から領有したかは明確でない。天文元年の段階で上津浦氏が元々所有していたものが焼き討ちされ、それを再奪取したものか、或いは別領主から奪い取って天文年間にわたって棚底城を領有していたかは、上津浦城や栖本城での生活水準を明確にして比較する必要があろうが、Ⅱ期に見る国人領主レベルの貿易陶磁質量と、それに対する偏重傾向からは、少なくとも島嶼に根ざした城主の性格がうかがえる。

Ⅲ期　抗争期　生活拠点から軍事拠点へ

天文 13 年(1544 年)の上津浦親類下城を契機に棚底城は栖本氏の領有となり、城とその周辺は幾度も戦場となり、永禄３年(1560 年)に相良氏のとりなしで再び上津浦氏に返還されることとなる。しかし、その後も棚底周辺での抗争は永禄９年まで継続しており、八代日記自体がこの年までの記述に留まることから、さらに抗争が続いたと考えられる。

棚底城が初めて史料上に現れ廃城になるまでのⅢ期は縄張りが最も先鋭化した時期である。鶴嶋氏の検討により、野首部の三重横堀・北斜面横堀・派生尾根の竪堀群で構成される縄張りは天草地域では異例の重厚さを誇り、特に横堀採用の城郭は上津浦領域と想定される地域に点在する様相を示すことが指摘された。また、この技術は周辺勢力の類例から永禄５～７年頃に相良氏により供与された可能性が高いことが想定された。上津浦と栖本による相克により、おそらく段階的に防御施設の強化がなされ、天文以来の上津浦・相良の協調が成立した段階で最新技術が導入され、城は現在に残る姿となったといえる。Ⅷ郭北斜面は鶴嶋氏が論及したように竪堀が施され、先端防御にも力が注がれている。

栖本・上津浦氏がそれぞれ棚底城を中心とした地域全体の支配を希求した状況は稲葉氏の論考に詳しい。城のみならず藤河椿・さかたぬき等史料に残る城周辺の施設が係争対象として八代日記上に現れることから、エリアとして棚底一帯を占有し、交通路を確保することが争点となった。Ⅲ期は地域的重要性の高揚に伴う縄張りの防御力強化が特徴となるが、同時に恒常的な生活拠点として豊富であった遺物の出土量は減少する。景徳鎮窯系の裏白青磁皿（第 38 図-31）、色絵皿片（第 63 図-295～298）、および紅皿として利用された青釉皿の細片（第 63 図-294）など小型遺物に特殊品があるが、出土量の寡少さから、おそらくⅡ期に存在した対面空間としての機能は希薄となるのであろう。棚底城跡はⅡ期とⅢ期でその性格を明らかに変じている。Ⅷ郭はⅡ期からの遺物も見られるが、出土遺物が少ない中で第 59 図-272～274 のように 16 世紀中～後半に編年される遺物が主立って出土している。Ⅴ郭以降の先端部はⅢ期における頻繁な抗争の中で、見張り所としての重要な機能を持つようになったと考えられ、Ⅷ郭で検出された２棟の小型建物跡がそのような性格を持つのであろう。

天正７年頃には天草の各領主は島津氏の幕下に入り、この頃に棚底城も廃城になったと考えられる。

比較的無名であった城郭から、ベトナム青花を始め 2000 点を超える遺物が出土し、殊に貿易陶磁が卓越する傾向は、管見の限り県下の城館ではあまり見られない特性である。同時に岩盤加工による城普請、城内に生活拠点があったと想定される点なども島嶼部城館の一例として興味深い成果が得られた。

また生活拠点の性格が強い城郭が、16 世紀前半を境に軍事的性格を強めていく変容が、遺物の低減と反比例する技巧的な縄張り形成によって明らかにされ、史料上で見られる島内の分立領主の一揆的友好関係がほころび対立抗争に変っていく時期と概ね符号することが判明した。本節で設定した城の画期毎の特質変化は、地域の政治状況に要請されたものとして認められ、天草の中世社会を解明していく上で貴重な結果といえる。

天草の中世領主は、時に一揆的紐帯を以って連合し、時には島内で抗争を繰り返し、また戦国末期にはキリシタンに改宗し、領内が数多の宗徒で溢れる状況を創出するなど極めて個性的な特色を持った在地領主層であり、歴史的に重要な位置づけがなされるべき存在である。今後は本城に相当する上津浦城跡・栖本城跡を始め周辺城郭の調査による基礎的研究を進めることが課題である。

註１　森本朝子「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」『貿易陶磁研究』№20　貿易陶磁研究会　2000
森本氏は中世日本に請来された東南アジア陶磁器を四期に分け検討を行なっており、当該時期はⅠ期と設

定されている。

註２　川内野篤他『針尾城跡　平成16年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書』佐世保市教育委員会　2005

註３　宮崎貴夫「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」『長崎県の考古学　－中・近世研究特集－』長崎県考古学会　1994

註４　久村貞男他『平成８年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　武辺城跡発掘調査報告書（第２次）』佐世保市教育委員会　1997

註５　中村和正『神浦城跡発掘調査報告書』　長崎市教育委員会　2005

註６　大田幸博「中世大矢野の城跡」『上天草市史大矢野町編２　大矢野氏の活躍』　上天草市史編纂委員会　2007

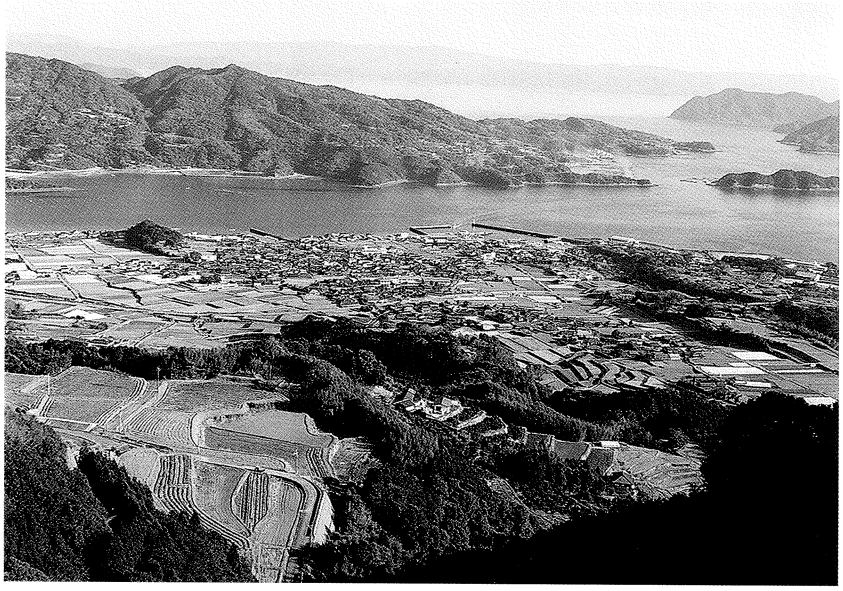
註７　このような一揆結集は、肥前松浦党が広く知られるところであり、契諾状も残っている。
佐藤和夫『海と水軍の日本史 下巻　蒙古襲来～朝鮮出兵まで』　原書房　1995
松浦党の場合は即ち一種の共和制的結束で、序列を決めず対等の立場を保持する。公私においての一味同心、揉め事についても一揆中において談合し、衆議で解決を図ることを理念としている。
覩城・佐志中通遺跡など松浦党と関わりの深い遺跡でのベトナム陶磁の出土、いくつかの史料に残る「天草一揆中」という文言やその談合形態から天草一揆衆も同様の性格を有していた可能性が強いと思われる。
五人衆が島津に従い、豊後で城番を命ぜられドン・パウロ志賀親次に包囲されたくだりは著名である。ドン・パウロはキリシタンの誼でドン・ジョアン天草久種のみを助けようとしたところ、「五名の城主は（天草において）隣同士で古い友情に結ばれており、ことにまた縁故関係もあって、ほとんど一心同体（ともいうべき）間柄だから…」と回答している。
松田毅一 川崎桃太訳『フロイス日本史８　豊後篇Ⅲ』　中央公論社　1978
すでに天草抗争が繰り広げられた後であるが、対外的に一揆的紐帯が存在していた一端を示すものと考えられよう。

註８　申叔舟（田中健夫訳注）『海東諸国紀』岩波書店　1992

註９　高野茂「後期中世社会と大矢野」『上天草市史大矢野町編２　大矢野氏の活躍』上天草市史編纂委員会　2007

写　真　図　版

棚底航空写真



倉岳から見る棚底

棚底城跡遠景(南東から)

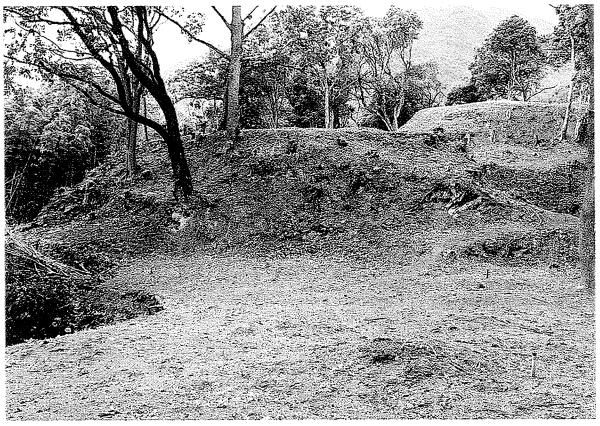
写真図版１

棚底城跡近景(南東より)

棚底城跡近景(南より)

棚底城跡近景(北西より)

写真図版２



I·Ⅱ郭切岸

Id（南東から）

西限堀切

Ⅳ郭切岸

写真図版３

三重横堀最上段土塁（Id-1）

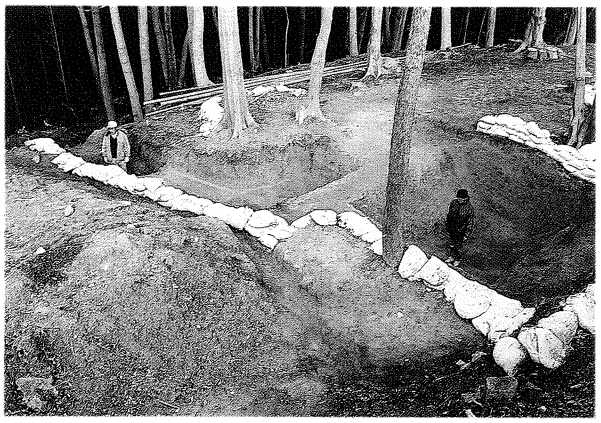
三重横堀第二段の堀・土塁
（南から）

三重横堀第二段の堀・土塁
（東から）

三重横堀第三段の堀・土塁

写真図版４

Ⅰ·Ⅱ郭航空写真（北東より）



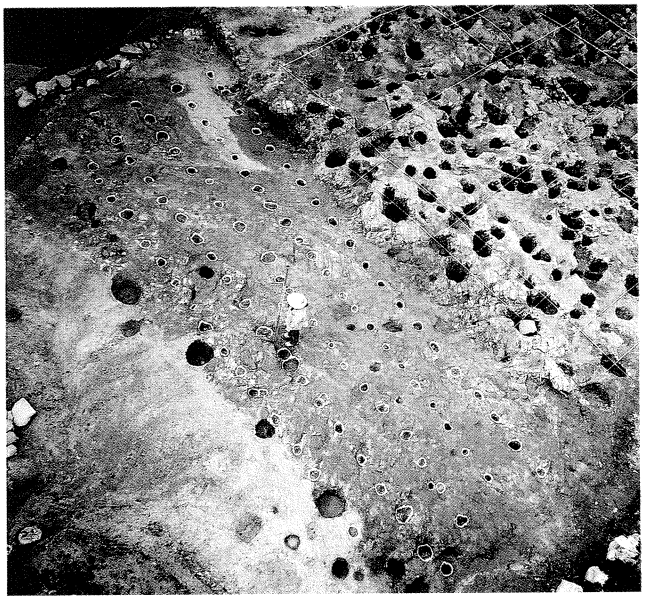
Ⅰd-Ⅰe三重横堀検出トレンチ

Ⅰd-1三重横堀検出トレンチ

写真図版５

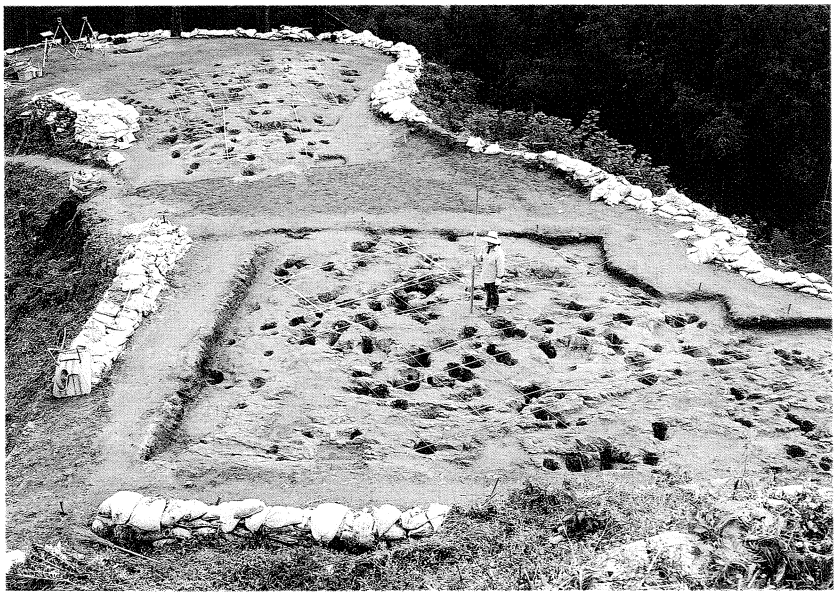
Ⅰ郭岩盤堀込柱穴群1

Ⅰ郭岩盤堀込柱穴群2

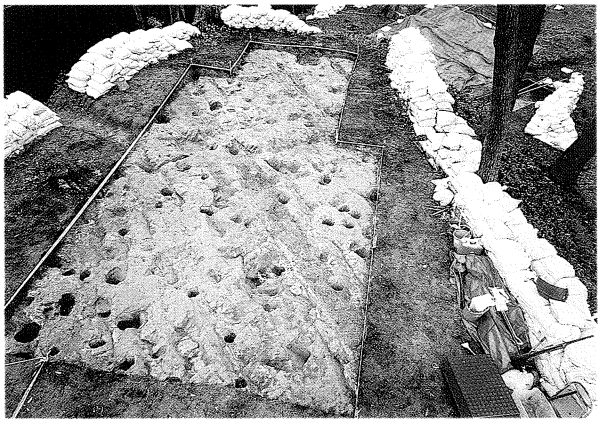


Ⅰ郭 c小ピット列群（舞台跡）

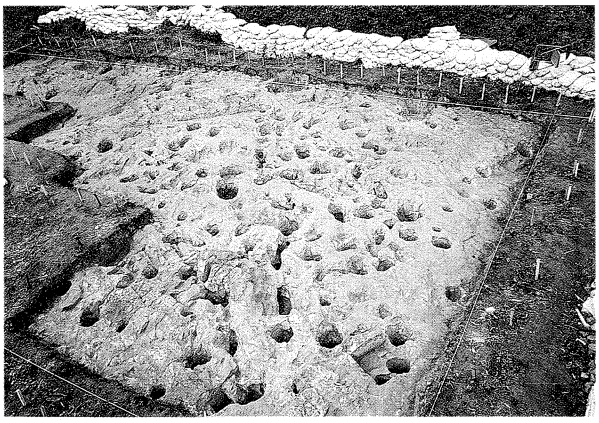
写真図版６



Ⅱ郭トレンチ



Ⅱ郭東トレンチ

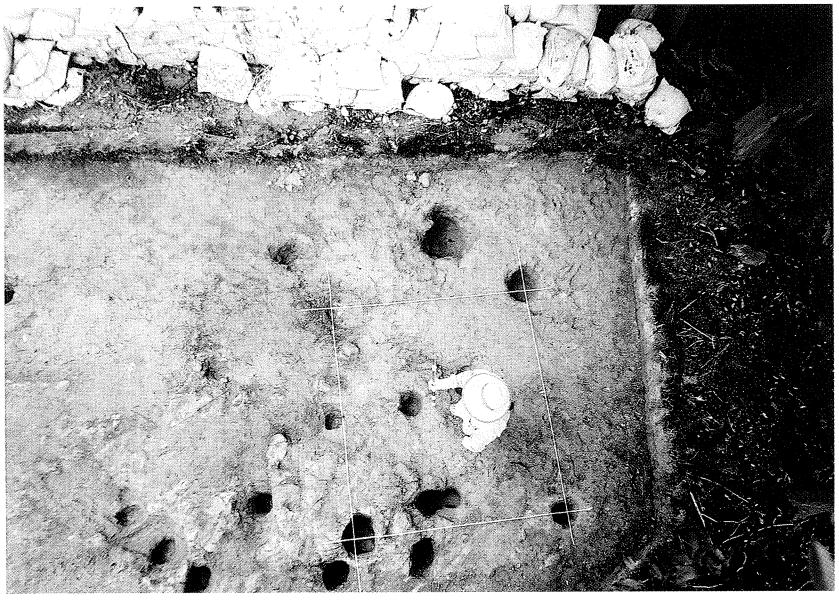


Ⅱ郭西トレンチ（南から）

写真図版７

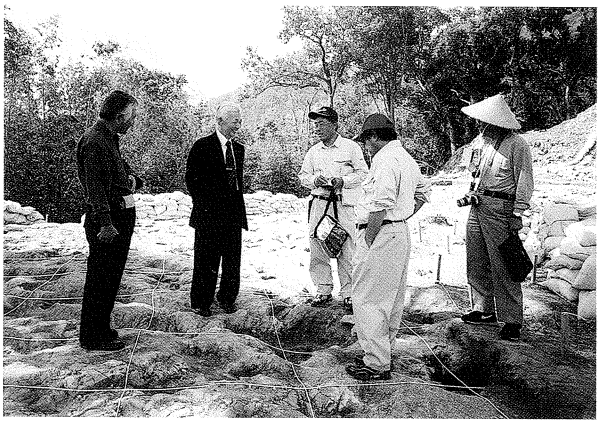
Ⅲ郭検出岩盤加工堀切

Ⅷ郭2間×2間建物跡



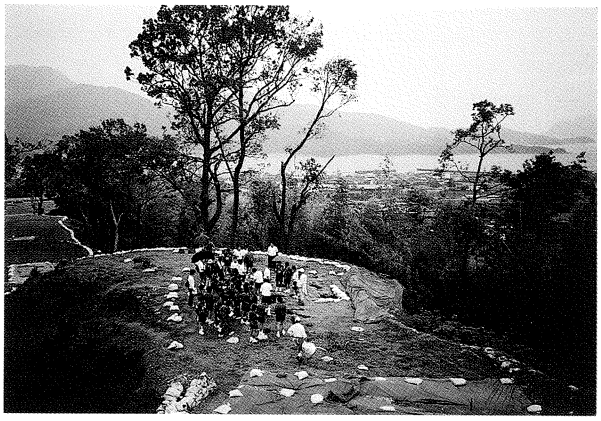
Ⅷ郭1間×1間建物跡

写真図版８

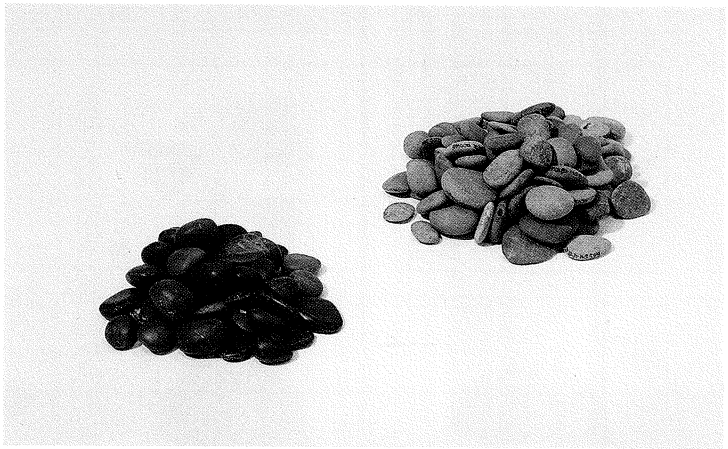


専門調査員指導風景

体験発掘風景

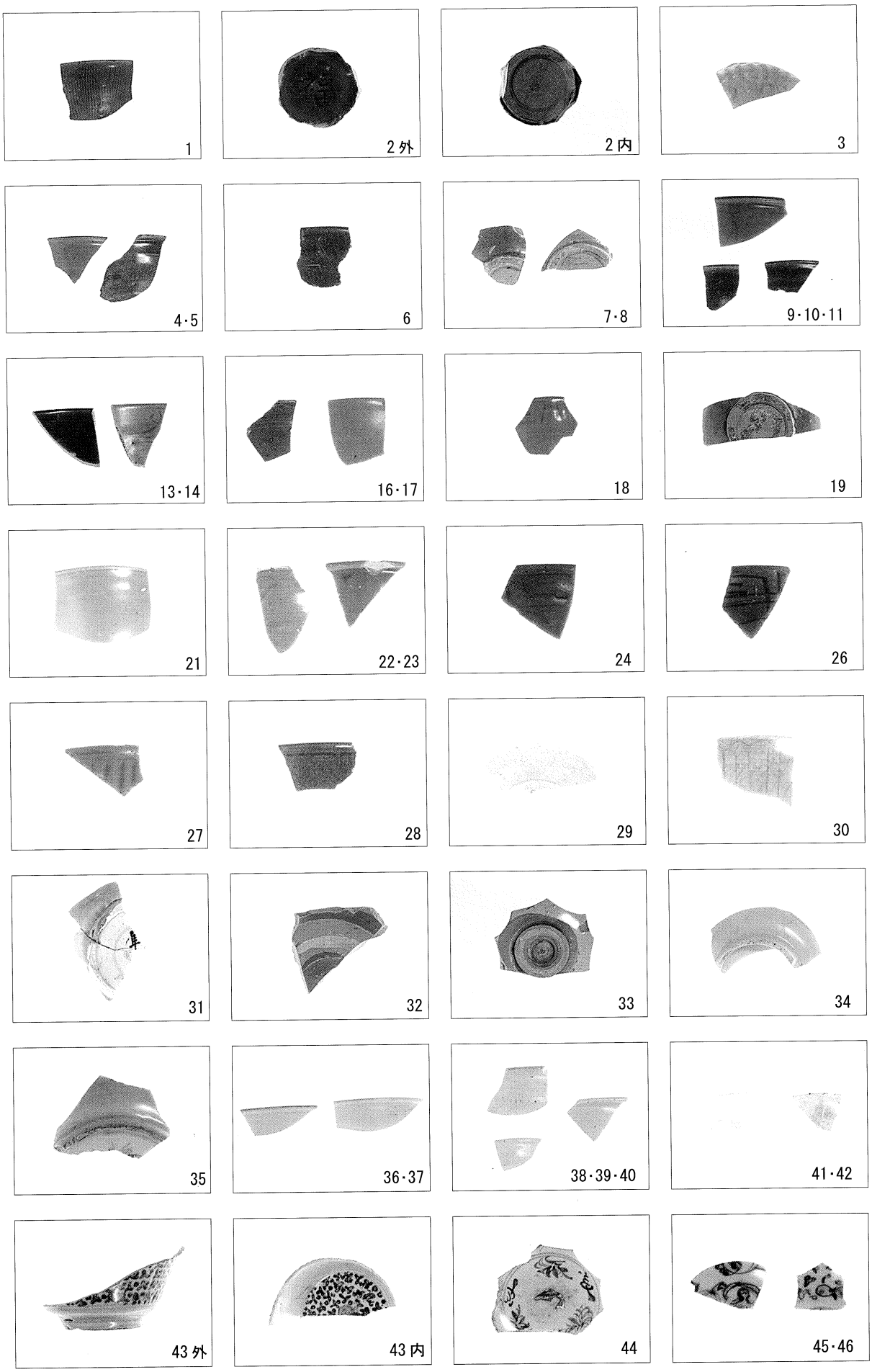


中学生校外学習風景

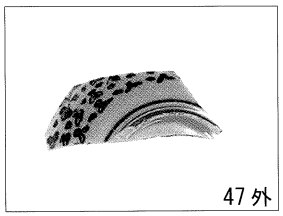


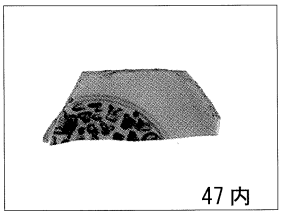
碁石（138～147他）

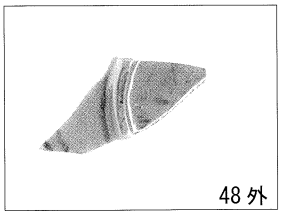
写真図版９

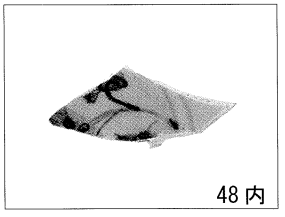


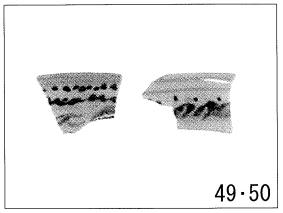
写真図版10　棚底城跡出土遺物

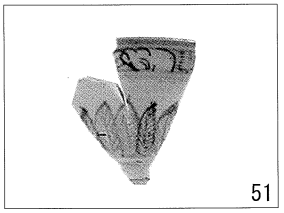

47 外

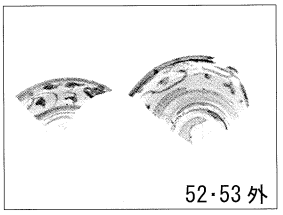

47 内

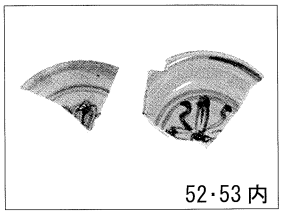

48 外

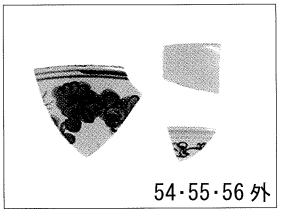

48 内

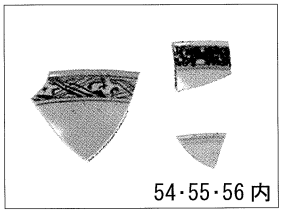

49・50

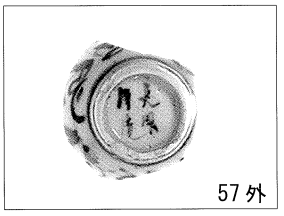

51

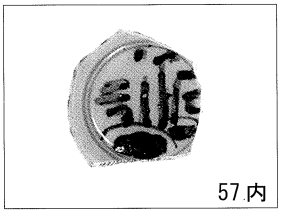

52・53 外

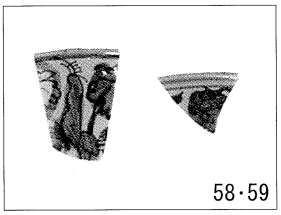

52・53 内

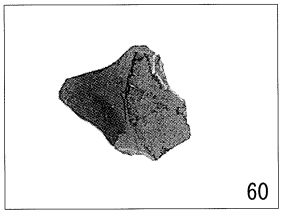

54・55・56 外

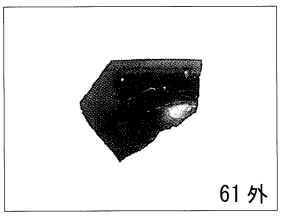

54・55・56 内

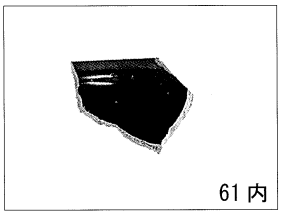

57 外

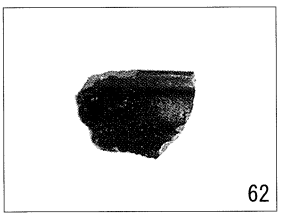

57 内

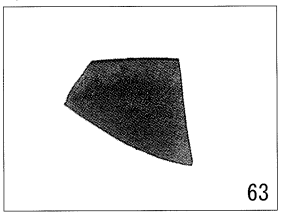

58・59

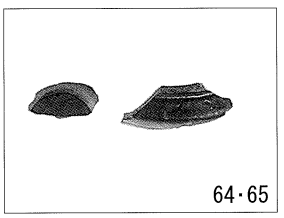

60

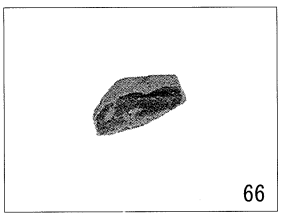

61 外

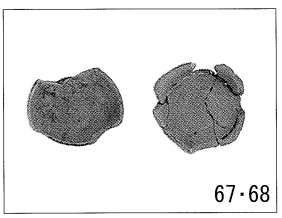

61 内

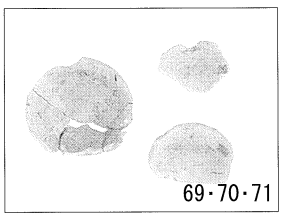

62

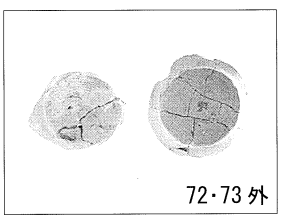

63

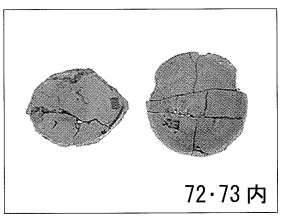

64・65

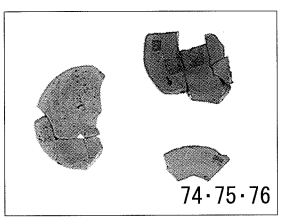

66

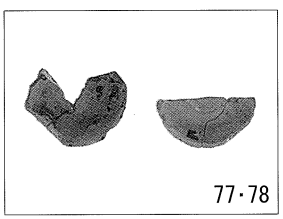

67・68

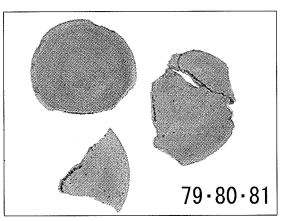

69・70・71

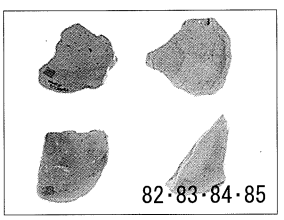

72・73 外

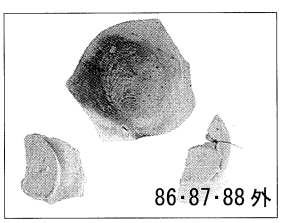

72・73 内

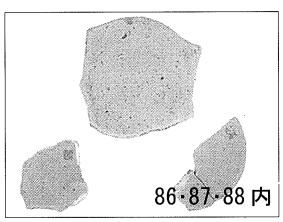

74・75・76

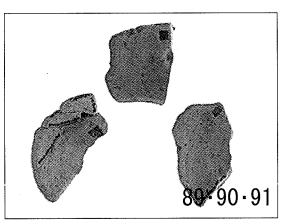

77・78

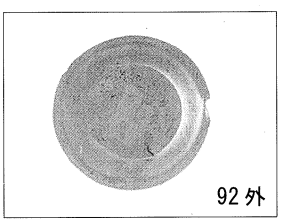

79・80・81


82・83・84・85

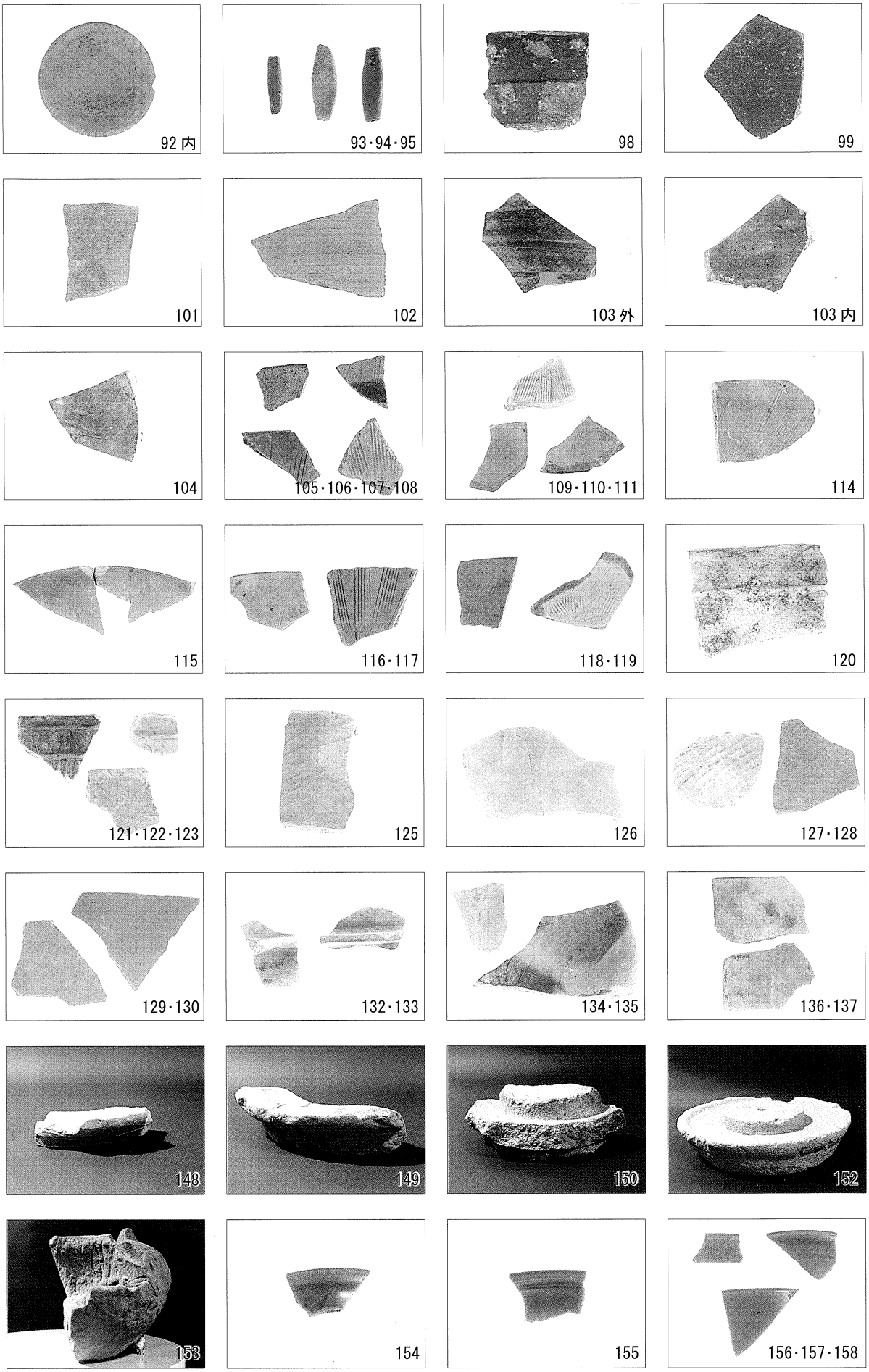

86・87・88 外


86・87・88 内

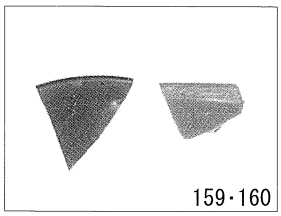

89・90・91

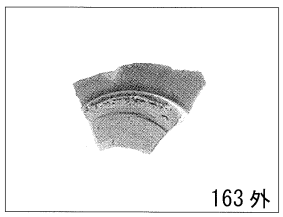

92 外

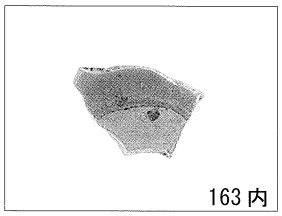
写真図版11　棚底城跡出土遺物

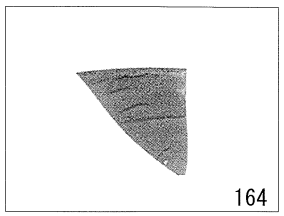


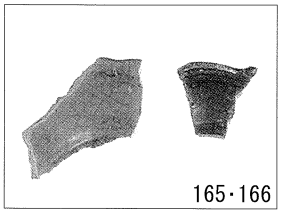
写真図版12　棚底城跡出土遺物

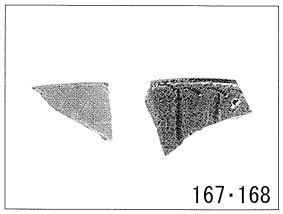

159・160

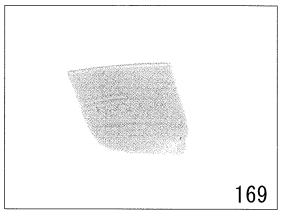

163 外

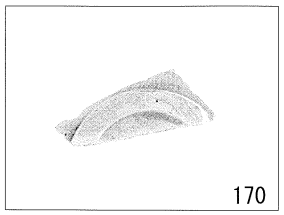

163 内

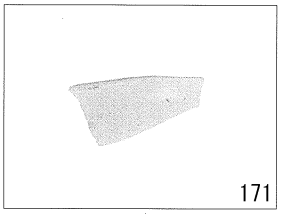

164

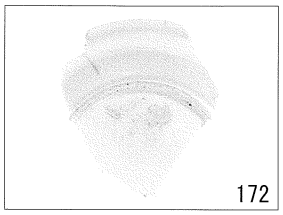

165・166

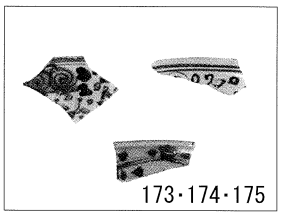

167・168

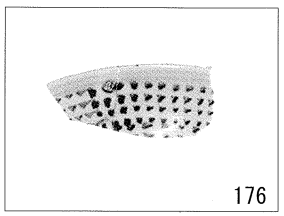

169

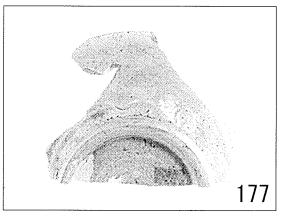

170

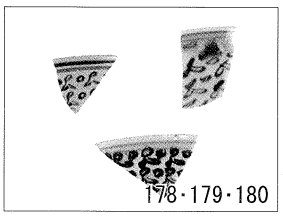

171

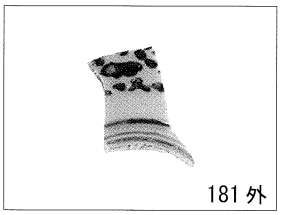

172

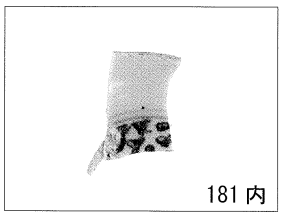

173・174・175

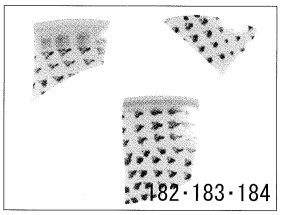

176

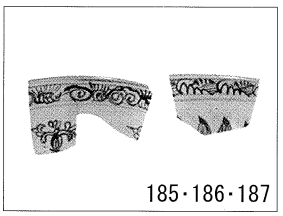

177

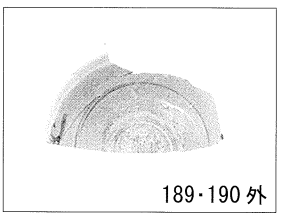

178・179・180

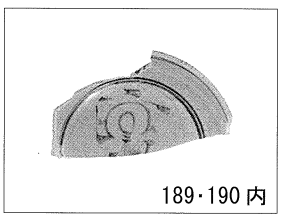

181 外

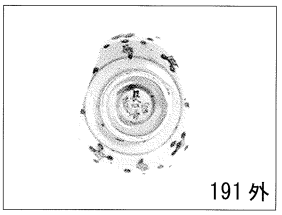

181 内

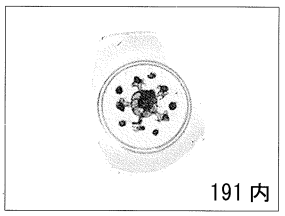

182・183・184

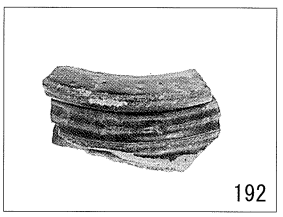

185・186・187

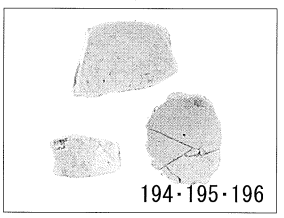

189・190 外

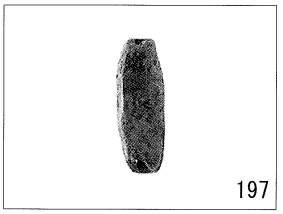

189・190 内

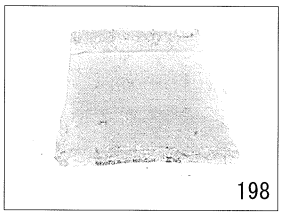

191 外

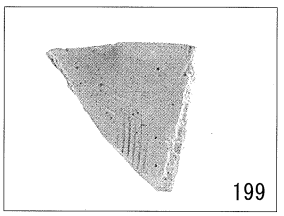

191 内

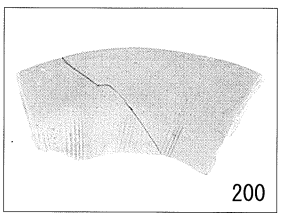

192

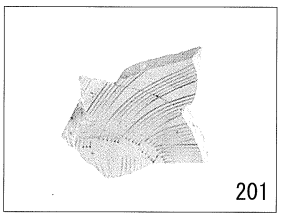

194・195・196

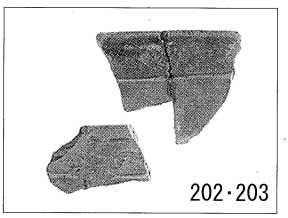

197

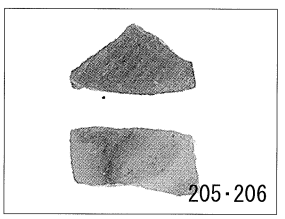

198

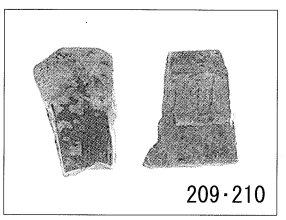

199


200

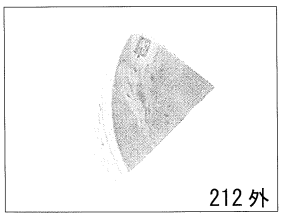

201

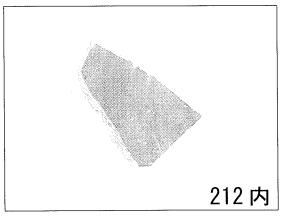

202・203

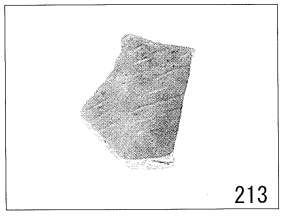

205・206

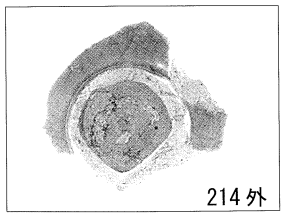

209・210

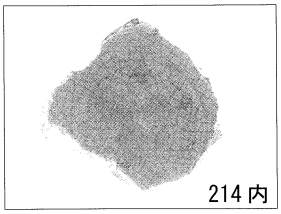
写真図版13　棚底城跡出土遺物

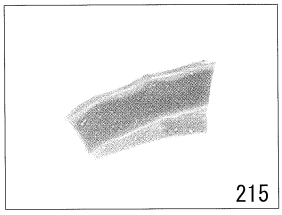

212 外

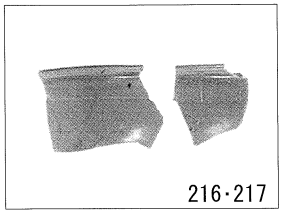

212 内

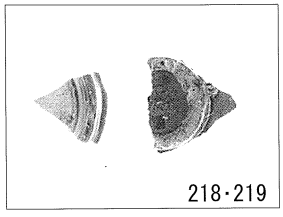

213

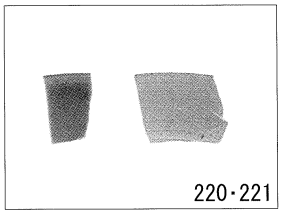

214 外

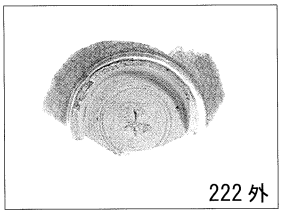

214 内

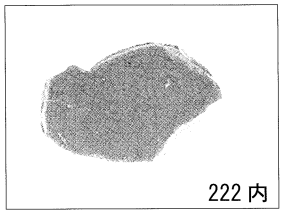

215

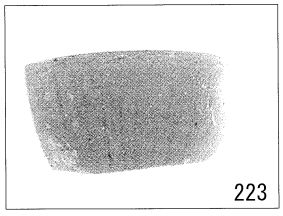

216・217

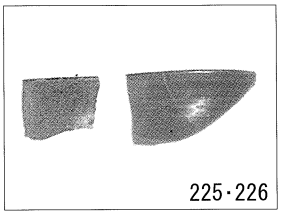

218・219

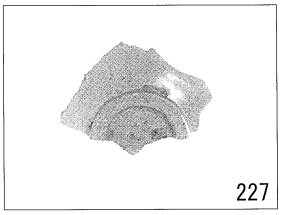

220・221

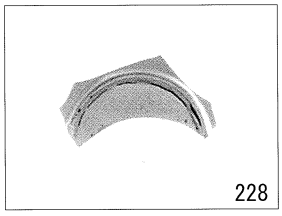

222 外

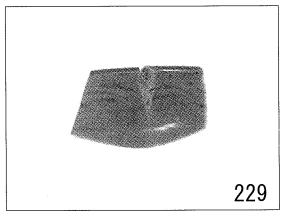

222 内

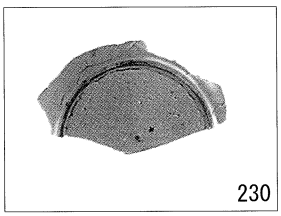

223

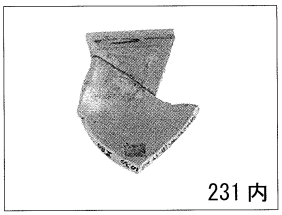

225・226

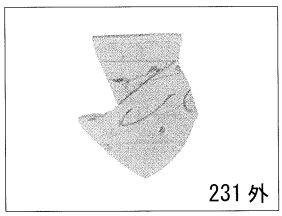

227

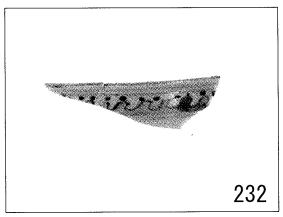

228

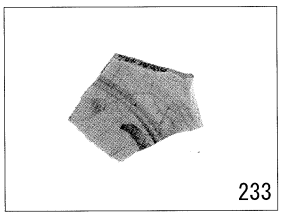

229

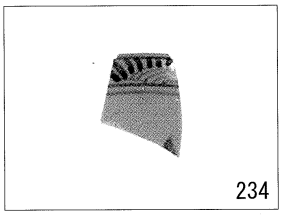

230

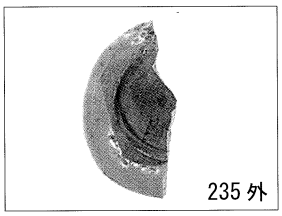

231 内

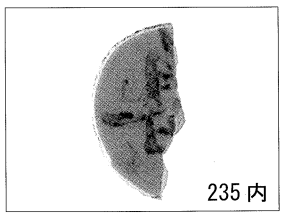

231 外

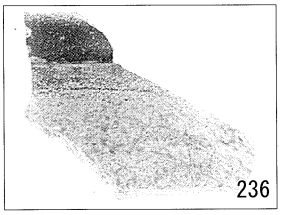

232

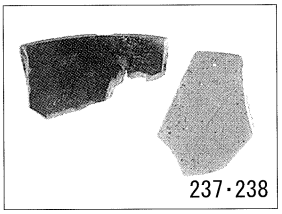

233

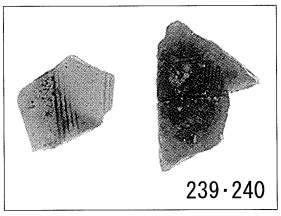

234

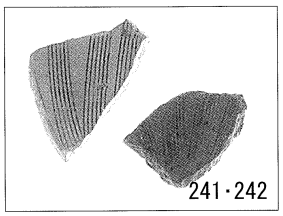

235 外

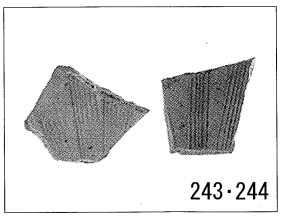

235 内

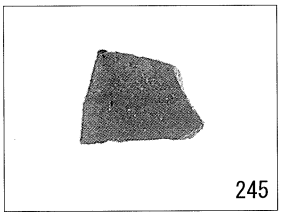

236

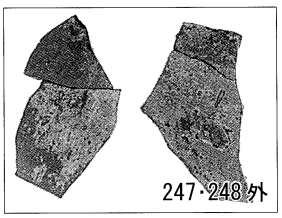

237・238

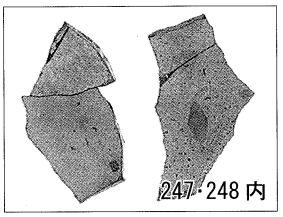

239・240


241・242

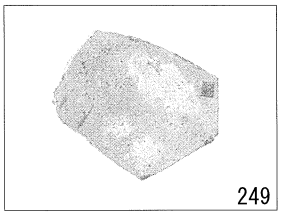

243・244

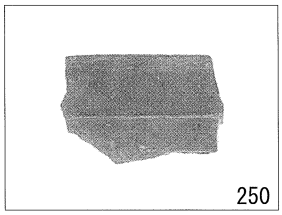

245

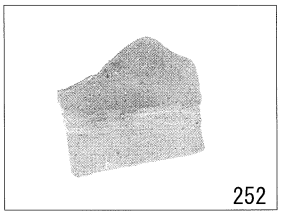

247・248 外

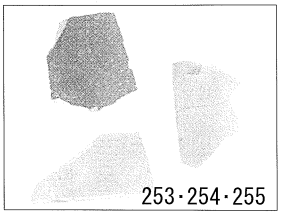

247・248 内

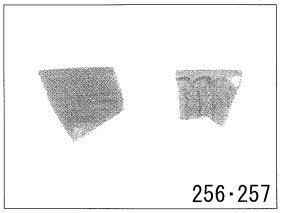
写真図版14　棚底城跡出土遺物

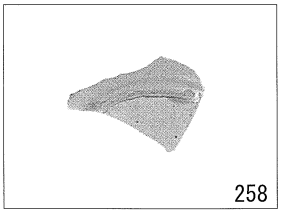

249

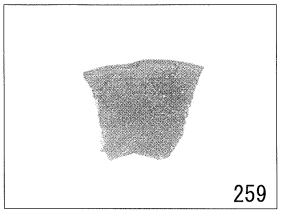

250

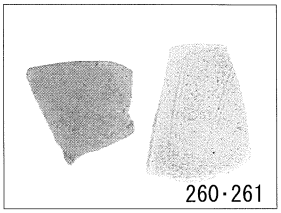

252

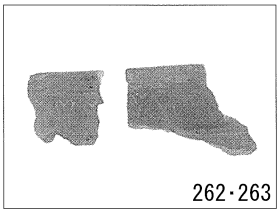

253・254・255

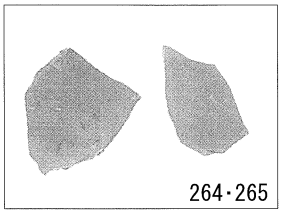

256・257

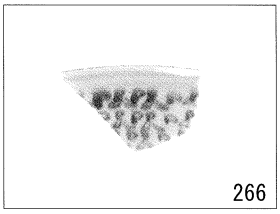

258

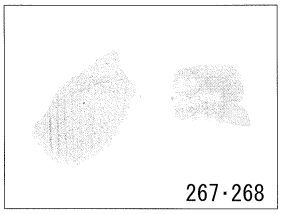

259

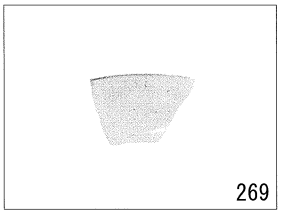

260・261

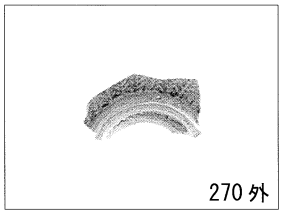

262・263

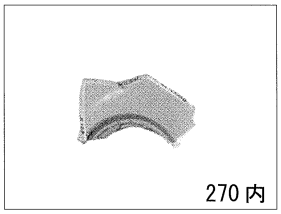

264・265

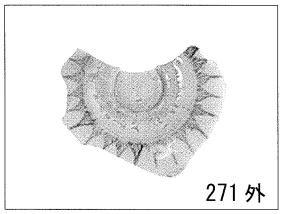

266

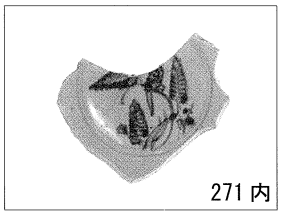

267・268

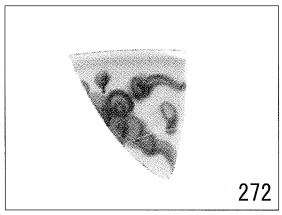

269

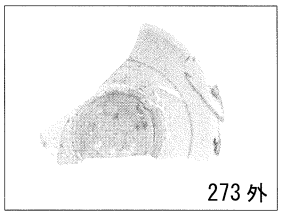

270 外

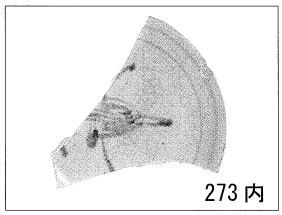

270 内

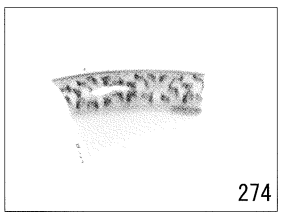

271 外

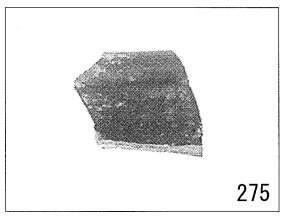

271 内

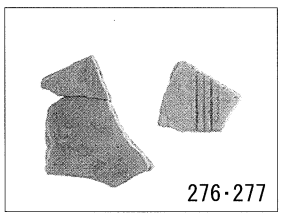

272

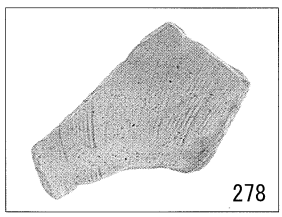

273 外

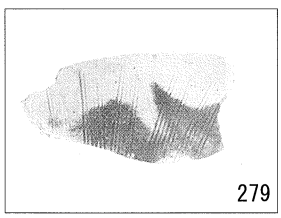

273 内

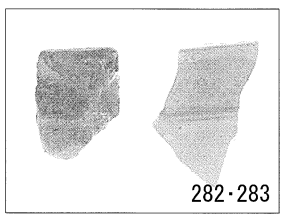

274

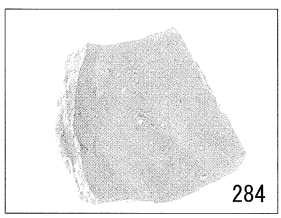

275

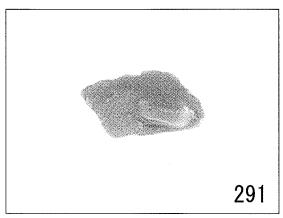

276・277

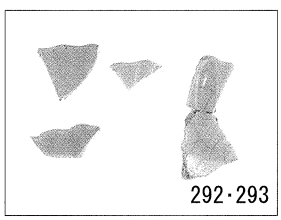

278

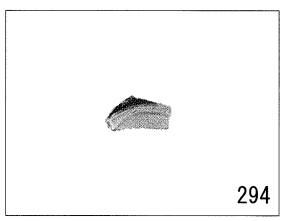

279

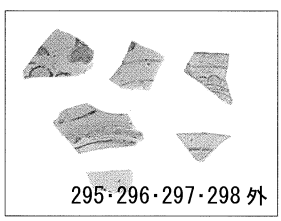

282・283

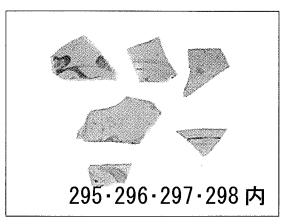

284


291


292・293

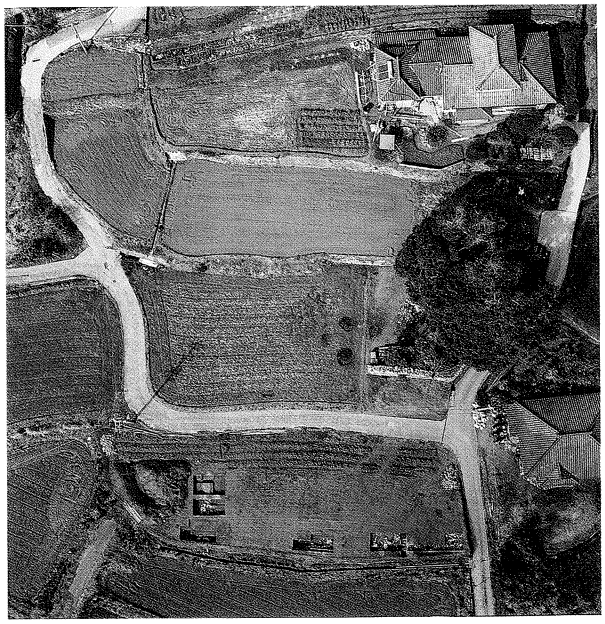

294


295・296・297・298 外


295・296・297・298 内

写真図版15　棚底城跡出土遺物

大権寺遺跡周辺航空写真



大権寺遺跡航空写真

大権寺遺跡遠景（西より）

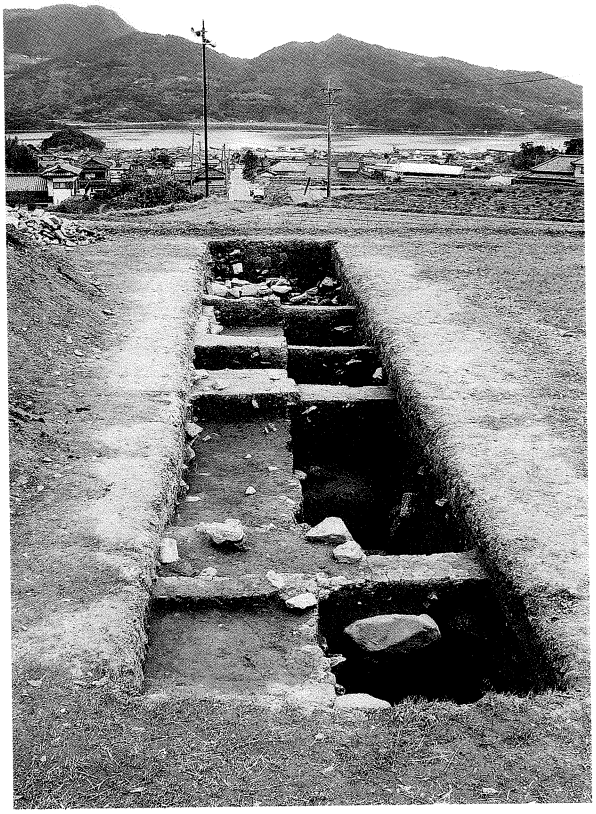
写真図版16

大権寺遺跡より見た
御所浦大道

大権寺石塔群

A1トレンチ（南東より）

写真図版17



A2トレンチ

A2トレンチ東端
土層断面

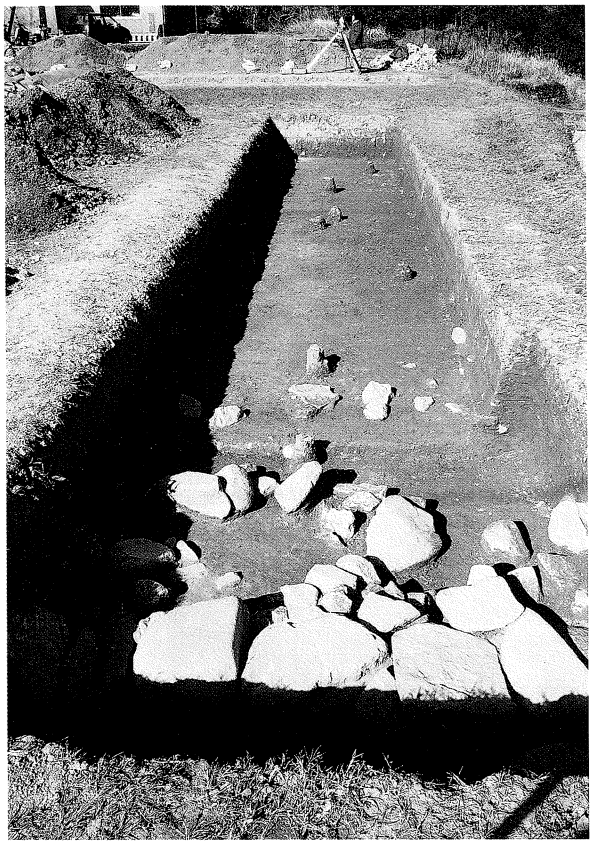
写真図版18

A2トレンチ石積背面
（北西より　SW01）

A3トレンチ（北西より）

A4トレンチ（北より）

写真図版19



A5トレンチ（北より）

A5トレンチ青磁出土状況

写真図版20

B1・B2トレンチ（南より）

B1・B3トレンチ（南より）

B4-5トレンチ（北より）

写真図版21

SS01検出状況（東より）

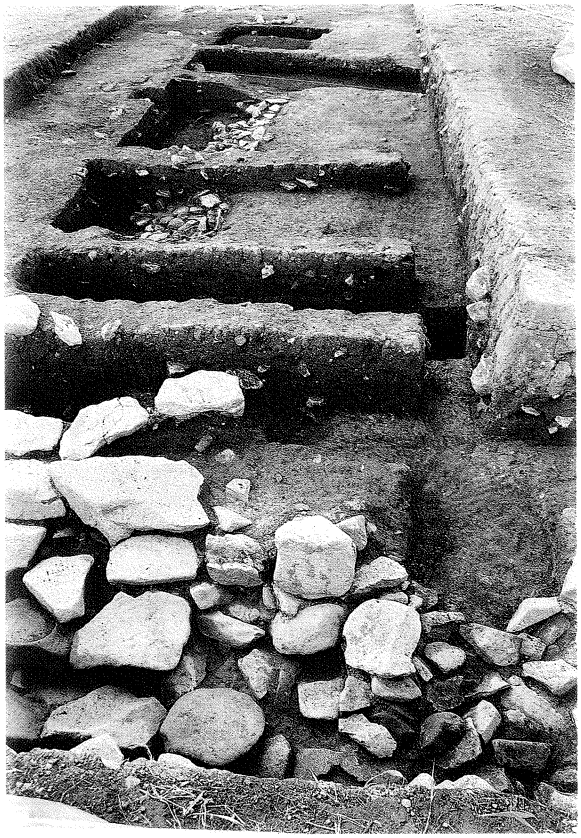
B4-5トレンチE区
（東より　SF01・SX01は未検出）

写真図版22

SW02検出状況（南より）

SW01検出状況（北より）

写真図版23

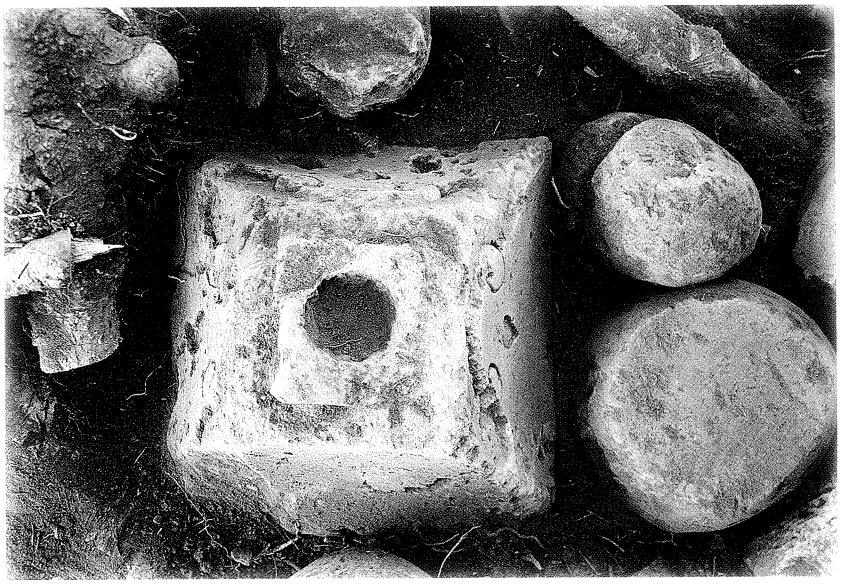


SF01・SX01検出状況（東より）

SF01・SX01検出状況
（北より）

写真図版24

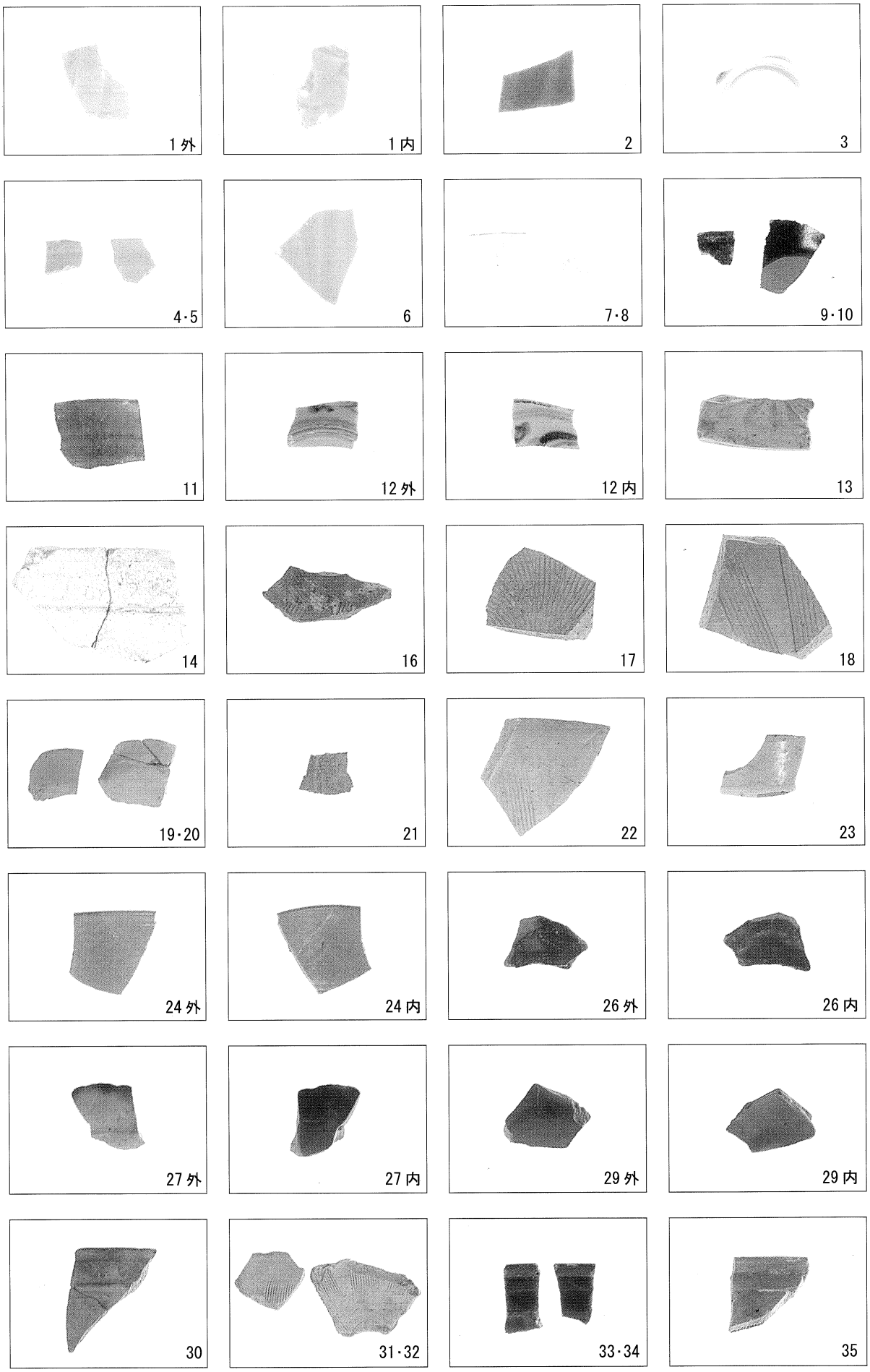
B6トレンチ石塔部材出土状況



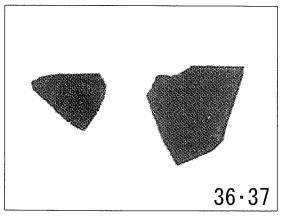
雲文猪目文宝塔笠出土状況

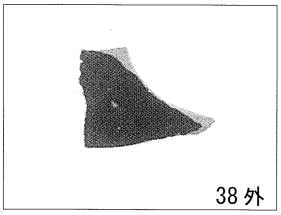
出土石塔部材

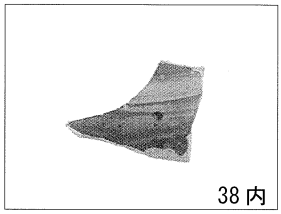
写真図版25

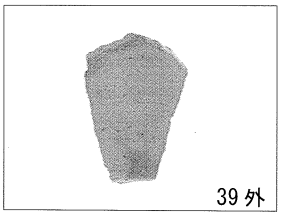


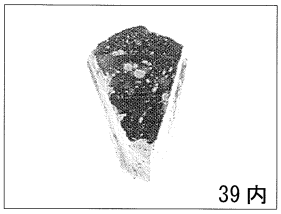
写真図版26　大権寺遺跡出土遺物

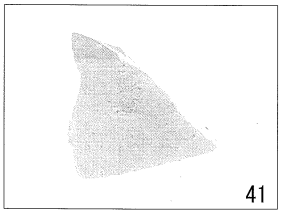

36・37

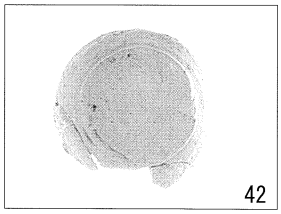

38 外

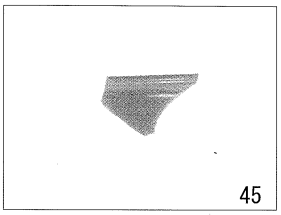

38 内

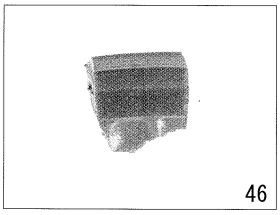

39 外

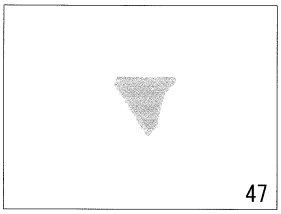

39 内

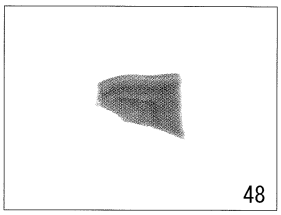

41

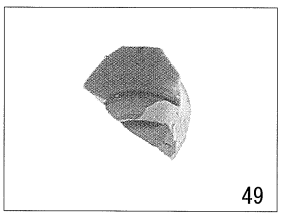

42

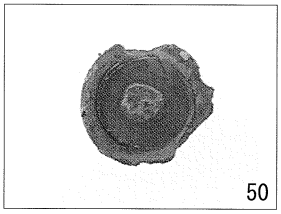

45

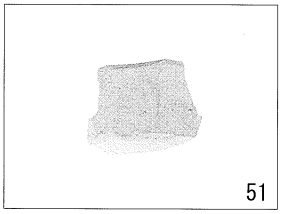

46

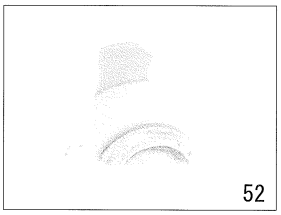

47

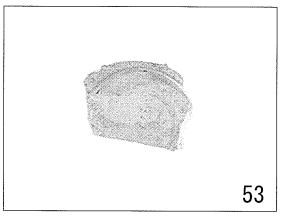

48

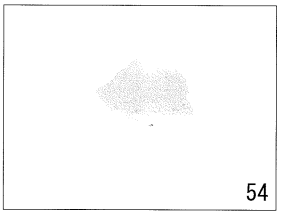

49

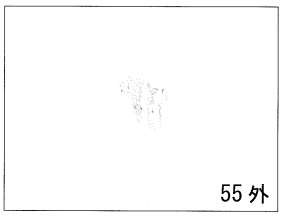

50

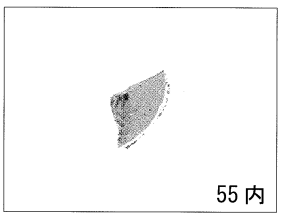

51

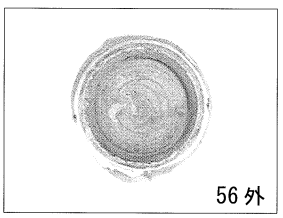

52

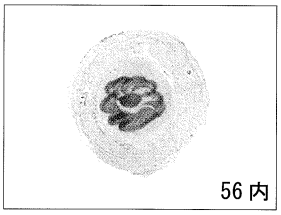

53

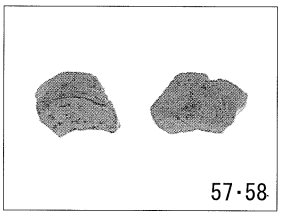

54

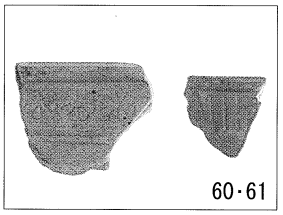

55 外

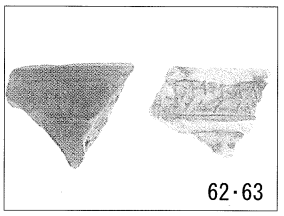

55 内

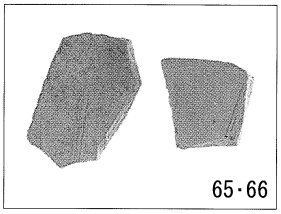

56 外

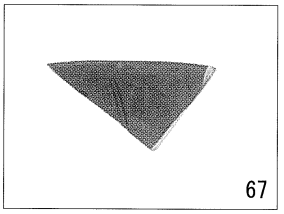

56 内

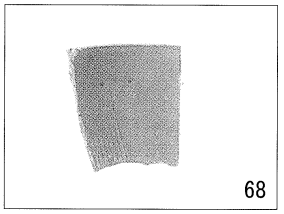

57・58

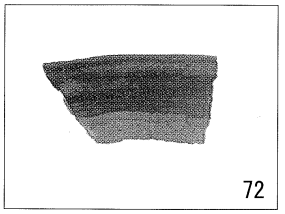

60・61

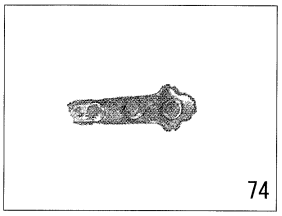

62・63

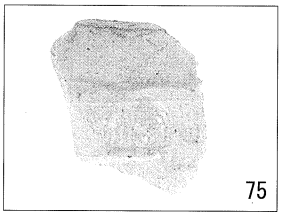

65・66

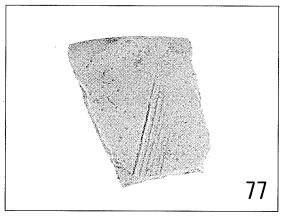

67

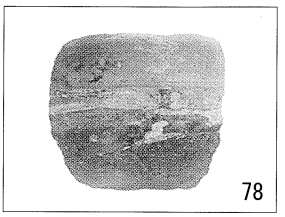

68


72


74

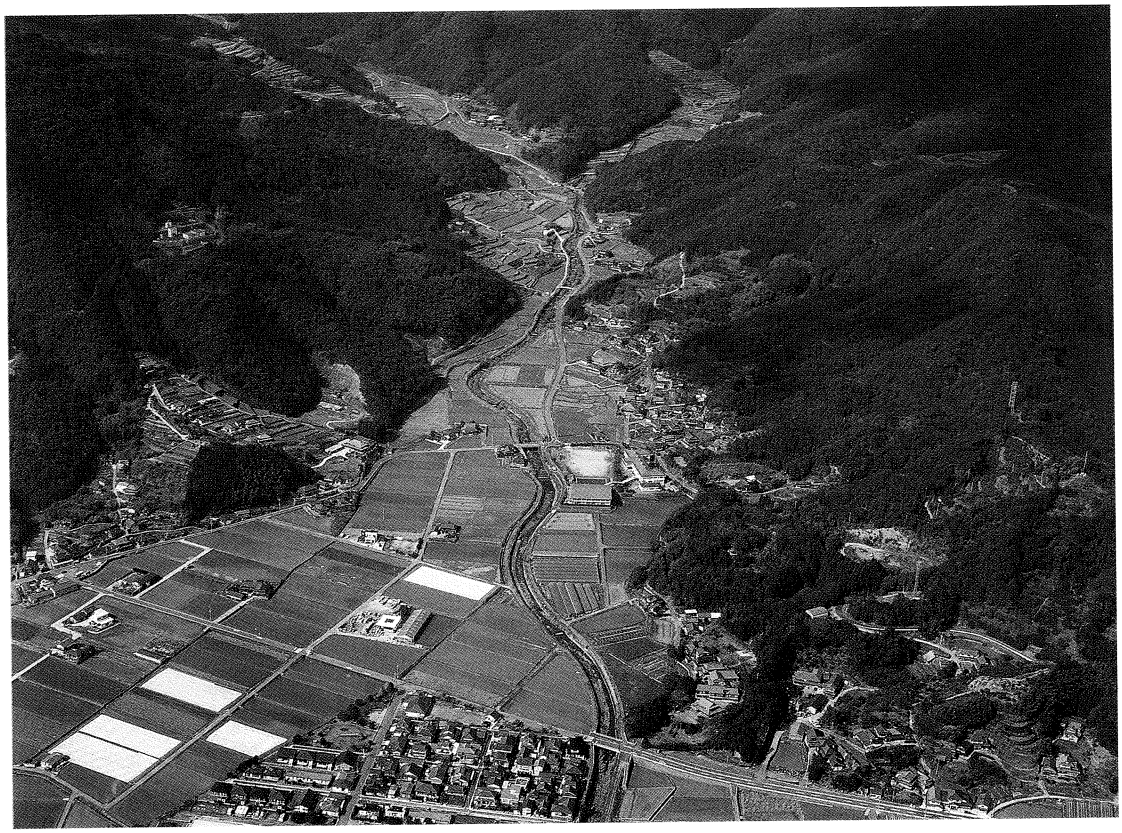

75


77


78

写真図版27　大権寺遺跡出土遺物

「城山」航空写真
（東より）



「藤河桁」航空写真
（東より）

写真図版28

報告書抄録

ふりがな	たなそこじょうあと3・おうごんじいせき
書名	棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	天草市文化財調査報告書
シリーズ号	第2集
編著者名	編著　中山　圭　　分担執筆　歳川喜三生・鶴嶋俊彦・小野正敏・稲葉継陽・前川清一・服部英雄
編集機関	天草市教育委員会
所在地	〒863－0048　熊本県天草市中村町10番8-1号
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
棚底城跡	熊本県 天草市 倉岳町 棚底字尾崎	43215	未定	32度 24分 52秒	130度 20分 2秒	2002.5.2 ～ 2006.3.24	993	学術 調査
大権寺遺跡	熊本県 天草市 倉岳町 棚底字大権寺	43215	未定	32度 24分 54秒	130度 19分 46秒	2006.12.1 ～ 2008.10.22	189	学術 調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
棚底城跡	中世城館	室町時代 ～ 戦国時代	岩盤掘込柱穴群 三重横堀 堀切・切岸	貿易陶磁(青磁・白磁・青花・ベトナム産青花・天目・施釉陶器)，土師質土器，中世須恵器，瓦質土器，石製風炉，碁石等	
大権寺遺跡	中世寺院か？	室町時代	石積状遺構 石段状遺構	貿易陶磁(青磁・白磁・天目)，土師質土器，中世須恵器，瓦質土器，金銅製金具等	
要約	棚底城跡は天草を代表する中世城館遺跡である。調査の結果，岩盤に掘り込んだ柱穴や掘切が検出され，岩盤加工の城郭であることが判明した。出土遺物も貿易陶磁器を中心として豊富に出土し，14，15世紀頃のベトナム青花碗や天目碗片，石製風炉などの茶道具遺物，大量の碁石他戦国時代の流通や生活を知るための材料を提示した。戦国期の天草に割拠していた天草五人衆と呼ばれる国人領主のうち，上津浦氏・栖本氏が争奪戦を繰り広げた城郭である。岩盤加工による城普請と土師質土器よりも貿易陶磁の出土量が優る調査結果は長崎県などの沿岸部城郭と共通し、縁辺島嶼部の中世城館として良好な例と考えられる。 本書は，以前の調査結果の再検討と周辺遺跡である大権寺遺跡の調査報告及び各分野の専門家による論考を所収し総括編調査報告書としてまとめたものである。				

棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡

天草市文化財調査報告書　第２集
2009年３月31日

発行　熊本県天草市教育委員会
天草市本渡町本戸馬場3080番地1

印刷　㈱五和印刷
天草市五和町御領12212